遊戯王GX　精霊の抱擁

ノウレッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁

【Ｎコード】
Ｎ３１６２Ｔ

【作者名】
ノウレッジ

【あらすじ】
とある二人組の転生者がいた。彼らは『遊戯王ＧＸ』の世界に転生し、そこで起きている異変を食い止めるべく、第２の人生を送る、ハズだった。

敵の手に堕ちた片割れ。
謎のヒロイン。
敵の真実。

戦いの果てに主人公は、真の平和を取り戻せるのか！

プロローグ：Ｎｏｔｈｉｎｇ（前書き）

こんにちは、ノウレッジです。
遊戯王ＧＸの作品も投稿してみました。

亀更新ですが、よろしくお願いします。
それでは、プロローグのスタートです！

プロローグ：Ｎｏｔｈｉｎｇ

暑い――――。
寒い――――。
眩しい――――。
暗い――――。
――――ここは…、どこだ……。

ＳＩＤＥ：???

死んだ。その記憶だけがしっかりと残っていた。
ならばここは、あの世か。
何も無いとも、モノに溢れているとも表現できる奇妙な世界。俺はその中で、裸とも着衣ともつかない姿で浮いている。
分かり易く、というより想像し易く言えば、虹色に輝く空間で体が輪郭線以外は光ってぼやけている、といった感じか。アニメの変身ヒロインの変身シーンでは体が光っているが、アレを思い浮かべると１番近い。

……っ!?　あいつは!?　あいつはどこだ!?
一緒に死んだはずなのに!?

自らの半身とも言える奴がいない。探しに行きたいが、右も左もどころか、上下も前後も分からない。
――――悔しい
探しに行けない。共に幸せを絶対に掴もうと誓ったのに。

「……、……」

試しに移動を試みる。何もしないよりはマシかと思ったからだ。
しかし、動かない。あるいは風景が変わらない。

……おい、神様とかいう奴。俺、何かしたか？
あいつが何かしたのか？
生まれてから不幸ばっかりを味わって来た俺達が、何故死した後も引き裂かれるという不幸を味わわなくてはいけない？
運命か？　ふざけんな。俺は、否、俺達はその言葉が大っ嫌いだ。

「どこにいるんだよ、ミヤコ……」

ポツリと呟く。誰も返す訳が無いと知りつつも。
そばに誰もいないと分かりつつも。

『こんにちは』
「！！？？」

突然、俺の目の前にヒトが現れた。
性別は不明。声は……女か？
女神像の様な姿形がするが、どちらかと言えば光がヒトの形を作っている様な感じだ。ぼんやりとした全体像以外分からない。
そして気がついた。強く発光しているのに、全く眩しく感じていない。何故だ。その能力は今は適用してないのに。

「……誰だ、あんたは？」

恐る恐る聞く。
そのヒトはニコリと笑って（光の微妙な動きで判断した）答えた。
『神、ではありませんが、そう定義するのが1番分かりやすいでしょうね』
「！？」

神、だと……。
いや落ち着け。厳密に言えば違うだろう。
1番分かりやすい、という事は、そうじゃ無いと言う事だ。

『初めまして、レイ』
「……、初めまして」

挨拶ぐらいは返しておく。礼を失してしまえば聞きたい事も聞けなくなるだろう。
だが、心は焦りに満ちていた。たった一つの聞きたい事があるからだ。

「いきなり質問、というのも無礼だとは承知しています。しかし、答えて頂きたい事があります」
『なんでしょう？』

一拍、間をおく。自身を落ち着かせるためだ。

「俺と一緒にミヤコという人が死んだはずだ。あいつは今、どこに？」

これがたった一つの不安。生きているなら俺自身を幽霊にでもしてもらう。死んでいるなら一緒にあの世で暮らす。しかし、何も分

からない以上アクションは起こせない。

『ミヤコは、既に死んでいます。そして貴方と同じ世界に救世主の1人として転生してもらう……、予定でした』

「……、どういう……、意味です？」

でした、つまり過去形という事は、現在は異なる、という事だ。

『その前に、こちらの事情をお話します。その後の方が、説明し易いですから』

こちらをご覧下さい、と神様（とりあえずこう呼ぶ事にした）はスクリーンの様なものを示した。

映し出されている、あれは……

「遊戯王……？」

『厳密に言えば、その世界です。貴方達にはこちらに転生して頂くつもりだったのです』

創作なんかでよくある転生モノか。まさか当事者になるとは思わなかった。

『世界は1つの括りが無数に集まり、そしてそのそれぞれの括りの中には無数の平行世界が存在します。』

平行世界。同じように展開されている、されど異なる世界。

自分がいる世界をAとするなら、世界Bにも俺はいる。ただし、Bの俺は嗜好や性別、考え方が違ったりする。

『そして異なる括り同士は互いに交わっています。交わりは互いの

世界にそれぞれの特徴をもたらしたり、あるいは何かしらの作品となって表れます』

なるほど。遊戯王は作品では無く、実際にある世界。それが“偶然”という形を取って作品としてこちらの世界に干渉した。そういう訳か。

「そこまでは分かった。本題に入って欲しい」

『……、実は、この平行世界は1つが欠けても他を元に修復できるという、パソコンでいうバックアップ機能のような便利な特性があります。

しかし、その反面、連鎖破壊が起きやすいという欠点があるのです』

砂で作ったアーチを思い浮かべれば分かりやすいだろう。どこか一ヶ所を壊すと、その近くも崩れたり、作りが弱ければ自身の重さで崩壊する。

『この世界の内の1つに、時代は貴方達で言う「GX」の世代で、他には無い変化があるのです。しかも、それは確実に世界が壊滅する方向へと向かっている』

「が、その世界の住人を無理に動かせば他のGXの平行世界で綻びが生じ、そこを何者かにつけ込まれる、そういう事ですか？」

『その通りです』

「だから、俺達という死んだばかりのイレギュラーを投入しようとした。不確定因子なら、他の世界では同じ形で事象は起きず、仮に起きても別の人を投入するという形で違うストーリーを展開させられる」

自分なりに仮説を立ててみたが、神様は肯定してくれた。

ほっ、と息を吐く。どうやら頭の中身は変わっていないらしい。

『不運にも命を落とされた貴方達は、正に適材でした。そのまま2人とも転生させ、歪みの修正に充てようと思ったのです』

「……だが、もう1人の死者、ミヤコの方になにかアクシデントが発生した、か？」

『はい。変化の根源は意思のあるものでした』

調べ不足でした、と神様は素直に頭を下げたが、今の俺の頭の中はそれ所じゃ無かった。

アクシデント、意思あるもの、ミヤコだけ、そして遊戯王……。

既に現状を表せる仮説が生まれていた。こういう時、自分の頭の回転力が恨めしい。

「まさか……！　ミヤコは敵の手に落ちたのか……？」

『残念ながら、その通りです』

間を開けずに言ってくれたのは優しさだと信じたい。

意志ある邪悪。

心が真っ暗になりそうなのを必死に堪え、どんな奴が黒幕なのか、時代を考慮し、考える。

パッと思い浮かぶのは“オレイカルコス”や“邪神”、“ユベル”か。時系列を考えなければ、“地縛神”や“パラドックス”、“ナンバーズ”といった所も追加できる。

世界を崩壊させる事を考えると、その中で否定できるのは、根源から断たれた“オレイカルコス”、目的が合わない“パラドックス”と“ユベル”、力の回し方が違う“ナンバーズ”だ。

「……」

黒幕である何者かは、自分を邪魔しようとする存在を敏感にキャッチし、ミヤコを奪ったのだろう。死んだのか、それとも人質か。しかし、ほぼ同時に死んだ自分はここにいる事は僥倖だった。

「……、ミヤコは取り戻せるのか？」

『あの世界ではデュエルは所謂「万能」ですから……。確実とは言えませんが、何とかなるかもしれません』

希望は0じゃないという事か。もし不可能（インポッシブル）ならば断わろうと思ったが、僅かでも望みがあるのなら……！

「分かりました、引き受けましょう」

『ありがとうございます』

あいつを俺は絶対に取り返す。それが1番の目的。世界の平和は2番だ。

あの後、神様は俺を光のゲートへと導いた。
必要な事があるらしく、物資は用意するのでこの先で力をつけて欲しい、との事。

（ミヤコ……）

きっと敵は無茶苦茶強い。何か対抗し得る力を身につけられるのはありがたい。

「待ってろよ、今助けに行くからな……！！」

静かに決意の言葉を呟き、俺はゲートをくぐった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

プロローグ：Ｎｏｔｈｉｎｇ（後書き）

いかがでしたでしょうか？
わたくしノウレッジは、オリカを随時募集しています。
どんな方からでも、如何なる内容でも大丈夫です。

次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１：炎の力』
お楽しみに！

ＳＴＯＲＹ１：炎の力（前書き）

まずは主人公、力を手に入れる為にやって来ました精霊世界。

そこで出会ったのは……！

ＳＴＯＲＹ１：炎の力

ゲートから抜け出ると、周囲を見回した。
どう見ても……
「人間の世界じゃあ、ねぇな……」

ＳＩＤＥ：黎

右を見ると夜だ。爽やかな草原が広がっている。
左を見ると昼だ。ゴツゴツした荒野が広がっている。
なんだ、ここ？
そう思ったが、その疑問はすぐに解けた。

「あれは……」

デュエルモンスターズが闊歩しているのだ。
草原に“天位の騎士”の称号を持つ『アルカナ　ナイトジョーカー』がいた。
荒野に“神に最も近い”と言われた『神獣王　バルバロス』がいた。

「デュエルモンスターズの精霊界ってヤツか？」

仮にも現代っ子。転生モノは幾つか読んだ事がある。
しかし精霊界から物語を始める転生者は、もしや俺が最初では……。

「ん…？」

向こうから誰かがやって来る。遠くに町が見えるが、そこからやって来たのだろうか？

誰かは着実にこちらへ来ている。俺が立っている場所は道でも何でもないので、ただの通行者という訳でも無さそうだ。

やがてその姿を捉えた。黒い大きなボディに頭頂で燃える炎。人型では無く、大型のトカゲやワニといった印象を受ける。

そいつはいつの間にか目の前まで来ていた。

「『ヴォルカニック・デビル』……！」

攻撃力３０００、オブライエンの主力モンスター。召喚条件があるが、場の炎属性モンスターを守ったり、相手モンスターの全滅が出来たりと、間違いなく炎系統の中でトップクラスの内の１体だ。

ヴォルカニック・デビルは、俺の前まで来ると、じっと見つめてきた。心の中を見透かされている様な感じがするが、不思議と嫌では無い。

おもむろに口を開いた。その言葉は、老練な戦士を思わせるような１つ１つに重みがあるものだった。

「……なるほど。お主があの者の言っておった“騎士”か」

「騎士？」

？

騎士を名乗った覚えは無いし、そう指摘された覚えも無いのだが。

「カハハ、言っておらんかったのか。お主の魂の型じゃよ」

「魂の……型？」

「うむ。人の魂は、それぞれ生き方や気質で形を変える。ワシのよ

うな長い期間鍛錬を積んだ者や、才能のある者がそれを見る事ができる」

つー事は、あの神様もそれが見えていて、俺を“騎士”の魂を持つ者とでも伝えたのか。名前知ってるクセに、魂見えない奴じゃ騎士って分からねぇじゃんよ。

「“騎士”は守る猛者の象徴。お主は何か守る者があり、そして、強い」

「炎属性最強クラスの貴方が何を……」

こいつを相手取ったら勝率は薄い。魔法（マジック）や罠（トラップ）を使うか、モンスター効果で対処するのが正しい方法だろう。

こすっからいけど。

「何、力だけが強さでは無い。心に決意や覚悟が無ければ、その強さはハリボテじゃよ」

「ヴォルカニック・デビル……」

“デビル”と名は付くが、こいつ凄く良い奴だ。

「強さを誤解したり、囚われたりする者は身を滅ぼす。そういう者は魂の型は“戦車”や“愚者”だったりする。なに、“騎士”のお主ならば無意識であっても履き違える事はあるまい」

「心強いです」

「ワシは老いてなお、炎の民を指揮する立場にある。しかして、その力は必然、強力となる」

どうやら炎属性モンスターのリーダーみたいなものらしい。

「そう、自分で言うのも何じゃが、ワシは強者の部類に入る。しかし、そのワシですらお主という救世主に頼らざるを得ん」

世知辛いのぉ、とヴォルカニック・デビルは切なさそうに笑った。

「炎の民を代表して頼む。どうか、この精霊の世界を、マスターの住む人間の世界を、救って頂けないか？」

そんなの、答えは決まっている。

このヒトが強いって事ぐらい、一目見て、そのオーラで分かった。それなのに俺に頼らなくてはならない状況。本当は自分で手を打ちたいのだろう。悔しさの溢れる決断だったに違いない。

そして、俺はそんなヒトを見捨てられるほど、人間を捨ててはいない。

「もちろん、引き受けましょう」

「それは、ありがたい。感謝する……」

さて、と言ってヴォルカニック・デビルは懐（多分）から何かを取り出した。

赤い光を放つ、水晶玉の様に見える。

「これは……？」

「炎の力の結晶じゃ。お主の戦い、デュエルに役立つじゃろう」

結晶は占いとかで使われるヤツが強い赤い光を放っていると考えてくれればいい。

「受け取れ。お主の思いが力に変わる」

言われるがままに俺は結晶を手に取った。
温かい力が掌から感じられた。勇気が溢れて来る気がする。

「名をもって宣誓せよ。戦いに臨む決意が、その結晶を武器へと変える……」

名。俺は今ほどこの名字に感謝した事は無かった。きっとファーストネームだけだったら、拒まれるに違いない。
すぅ、と息を吸う。煩くなく、大きな声で叫ぶ。

「我が名、遊馬崎（ゆまさき）　黎（れい）！　今ここにこの身をもって、世界の平和を守り、巨悪を打ち倒す為に戦う事を誓う！！」

結晶は赤い光となって消え、代わりに1組のデッキがそこにあった。

「結晶が、デッキに……」

「それがお主の武器じゃな。“騎士”は武器をもって戦に臨む」

パラパラとカードを確認する。ＯＣＧどころかアニメにも漫画にも出てきていないカードばかりだ。

これが、炎の力が具象化したカードという訳か……。

「ありがとうございます、『ヴォルカニック・デビル』」

「なに、礼を言うのはこちらじゃ。無関係のお主を無関係な世界を守らせる為に駆り立てた。拒まれても文句は言えんのにのぅ」

それから『ヴォルカニック・デビル』は淡い赤色のゲートを出現させた。ここから原作、もとい人間の世界へ行けるらしい。

別れ際に『ヴォルカニック・デビル』は言った。

「結晶を守る者は後7人いるという。いずれまた、こちらに来る時が来る。その時は結晶に念じるが良い。ゲートが開く」

「また来る時、か。そうだね、遊びに来る事もきっとあるだろうし、お別れの言葉は言わねぇ。じゃ、お元気で！」

軽く右手を挙げ、『ヴォルカニック・デビル』に別れを告げ、ゲートをくぐった。

さぁ、目指すは人間世界！　どの辺りから介入するのか、楽しみだ！

何よりも、アイツを見つける為にも、強くならなくちゃいけないな。

to be continued

ＳＴＯＲＹ１：炎の力（後書き）

黎「世界とアイツを救うために手に入れた炎の力。早速こいつを試す機会がやって来たぜ！」

次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ２：実技試験　試験４番、遊馬崎　黎』！

お楽しみに！

ＳＴＯＲＹ２：実技試験　試験４番、遊馬崎　黎（前書き）

黎「これが、炎の力……！」

ＳＴＯＲＹ２：実技試験　試験４番、遊馬崎　黎

ゲートをくぐる途中、試験用紙みたいな物があった。解いてみれば、遊戯王、否、デュエルモンスターズ関連のモノばかり。
ちょちょいと解いたら『４』という番号が浮かび、受験証書に変わった。

……４って、なんか不吉。個人的にすっごいイヤなんだけど、こーゆーの。
いや、オカルト云々以前に、そういう人生送って来たからね。敏感になっちゃうモンさ。特に、死に方も事故じゃないからね。

で、ゲートをくぐり終わると、人気の無い林の前にいた。

「遅刻だぁ～っ！」

っ！？　あれってＧＸ主人公の遊城　十代！？
って事は終了時刻間際！？
もう少し早くしてくれても良かったんじゃねーの！？
大急ぎで追いかける。こっちは試験会場分からんねぇんだよ！

「待ってくれ！　多分俺とお前さんは行き先同じだ！」
「えっ！？」

突然掛けられた声に驚き、足を止める十代。急いでる時は止めちゃダメだぜ？

「そっか、アンタもか！　いやー、電車が遅れるとか、参るよな！」
「まったくだよ？」

実際は違うけどね。
走りながらも会話は続く。

「俺、遊城　十代。お前は？」
「黎。遊馬崎　黎だ。よろしく」
「へへ、学園が楽しみだぜ！　お前、相当強いだろ？」
「ま、ね。地元じゃ１番強かった」

自慢じゃ無いが、連敗記録はここ数年作っていない。

「へー。でも、俺のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）デッキも強いぜ？」
「ふ、俺の炎のデッキもまた然り、だ」
「く～、マジで楽しみになって来たぜ！」
「だったらまず、合格目指すんだな！」
「おう！」

そんなやりとりをしながら俺達は試験会場へ向けて走る。遅刻ーっ？

取り敢えず間に合った。
で、普通のモブ先生が相手らしい。十代は原作通りクロノス先生が相手だ。
受験番号４番、というのが功を奏したらしく、クロノス先生の怒りは買わなかったようだ。十代と同着なのに、ちょっと彼に悪い気がする。

さて、切り替えないと。モブ相手とは言え、油断は禁物だからな。

「受験番号４番、遊馬崎　黎。お願いします！」

「うむ、全力で来なさい！」

デッキからカードを5枚切る。

因みに言っておくが、『サイクロン』や『強欲な壺』といったカードも入れてある。流石にオリカだけじゃ回らなさそうなんでね。

『デュエル？？』

さぁ、行くぜ！

「俺の先行で行きます！　ドロー？」

引いたカードと手札を見る。どうやら考えておいた数十手の手の中のアレが使えそうだ。

「『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）　マグマドラゴン』を攻撃表示で召喚？」

「ファイア・スピリッツ……？」

ま、知らねえだろうな。この世に1枚しかないんだから。

『グォオォォオオオオオッ？』

雄叫びと共に真っ赤なマグマから紅の龍が飛び出す。

一応言っておくと『プロミネンス・ドラゴン』とは全く似ていないので、悪しからず。

F・S　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００

F・S　―ファイア・スピリッツ―
これが炎の結晶から生まれたカード。万物を焼き尽くす紅蓮の力。

「モンスター効果発動！　召喚に成功した時、デッキまたは手札からレベル４以下の炎属性モンスター１体を特殊召喚できる。来い、『F・S　鬼火のウィスプ』？」

続いて青白い炎を纏って仮面を被った侍装束の男が現れる。

F・S　鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　７００

「ふん、何を出すかと思えば、クズモンスターか」

ピクッ。今のはムカついたぞ？

「カードを１枚伏せて、ターンエンド」

黎：ＬＰ４０００
手札：３枚
フィールド
：F・S　マグマドラゴン（ＡＴＫ　１８００）、F・S鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　７００）

：伏せカード1枚

「私のターン、ドロー。君に良い事を教えてあげよう」
「……何でしょう」

ひっじょ～に聞きたくないが、一応返す。こういう所、甘いと自分でも思う。

「クズなザコモンスターをいくら並べても、勝てはしない。デュエルはパワーだよ！」

こいつ、初期のクロノス先生といい勝負だ……！
はっきり言って性格悪い。こんな奴に教鞭をとって欲しくない。

「まずは『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」

ゴブリン突撃部隊：ＡＴＫ　２３００

「更に『デーモンの斧』と『メテオ・ストライク』を装備！」

斧装備してんの先頭の奴だけだ……。

ゴブリン突撃部隊：ＡＴＫ　２３００→３３００

……下らねぇ。同じパワーなら『愚鈍の斧』の方がデメリットアタッカーの『ゴブリン突撃部隊』には有効だってのに。ま、貫通効果を持たせたってのもあるし、そこそこ優秀ってトコか。

簡易版『古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）』ってトコか？

「……、下らないったらありゃしない。腕前の程が知れるってんだ」

「聞こえてるぞ」

おっと、声に出てたか。

謝らないけど。

「『ゴブリン突撃部隊』で右側のモンスターを攻撃？」

右……、『鬼火のウィスプ』か。名前くらい覚えろよ。1分経ってないぞ？

「喰らえ、２７００ダメージ！」

３３００引く７００は２６００だ。計算も出来ないのか、この人は。

バイトか何かか？

突撃部隊がウィスプに向けて進軍し、そのまま取り囲む。タコ殴りにでもするつもりなのか？　エグイな。

そのまま斧や金棒を振り下ろそうとした瞬間、青い炎が球体状にウィスプを包み込み、バリアの様に攻撃を防いだ。

「『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されず、ダメージも発生しない」

「なにっ！？」

へっ、見てろよ……。その高慢チキな鼻っ柱、圧し折ってやる！

「モンスター効果は更に続く！　守備表示のウィスプが攻撃を受けた時、コイツを攻撃表示にし、ダメージステップ終了時に相手の場のモンスターの表示形式を2体まで変更できる！　もっとも、『ゴブリン突撃部隊』には無意味だけどな」

攻撃後に自分で守備表示になっちゃうからね。

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＡＴＫ　８００
ゴブリン突撃部隊：ＤＥＦ　０

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（効果モンスター）（オリジナル）
星2
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　７００
≪効果≫
このカードは攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されず、またその時いかなるダメージも発生しない。
守備表示のこのカードが戦闘を行った時、このカードを攻撃表示に変える事で、相手フィールド上のモンスターの表示形式を2体まで変更できる。

「くっ、リバースカードを1枚セットし、ターンを終了する……」

試験管？：ＬＰ　４０００
手札：２枚
フィールド
：ゴブリン突撃部隊（ＤＥＦ　０）
：デーモンの斧、メテオ・ストライク（魔法・ゴブリン突撃部隊に装備）、伏せカード１枚

「俺のターン、ドロー！」

お！　これならこのターンで終わらせる事ができるな！
じゃ、早速……

「このターンで終わらせる！」
「何ぃ!?　だが、そうはいかんぞ！　永続罠（トラップ）『最終突撃命令』を発動？　場の全てのモンスターは永続的に攻撃表示になる！」

最終突撃命令

【永続罠】
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、
表示形式は変更できない。

ゴブリン突撃部隊：ＡＴＫ　３３００
Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００
Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＡＴＫ　７００

「はっはっは、どうだ、このターンでまだ終わらせられると言うのかね？」

……こいつの高笑い、すんごいムカつく。

「下らねえ」
「ああ　ぇ！？」
「……デメリットアタッカーを出した時点で想定される行動はいくつかある。そいつは１番分かりやすく、少しでもデュエルモンスターズをかじっていれば打てる作戦だ」

守備表示を封じ、デメリットを消す。初心者でも簡単に使えるお得な方法と言える。

「結論。あんたは強くない」

相手の返事は聞かない。なにかギャーギャー騒いでるが、気にし

ない。

「『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』を召喚？」

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　１５００

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン
星４
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１２００
≪効果≫
１ターンに１度、相手フィールド上の魔法・罠カードを１枚破壊できる。この時、相手プレイヤーに３００ポイントのダメージを与える。

巨大なバズーカを背負った鎧兵が現れる。見た目は『ターレット・ウォリアー』に似ている。

「はっ、そんなザコになにが出来る！」

「うるせぇ、黙ってろ！　『バーナーズ・キャノン』の特殊効果発動？　１ターンに１度、相手の場の魔法・罠（マジック・トラップ）カードを１枚破壊でき、更に相手に３００ポイントのダメージを与える！　“バーニング・ショット”？　対象はリバースカードだ？」

肩に装着された2丁のバズーカから白い焔が噴き出し、リバースカードを焼き払った。伏せカードは『聖なるバリア―ミラーフォース―』。危ない危ない。メジャーなカードの中でも特に強力な奴だ。

「ぐぅっ！」

試験管？：ＬＰ　４０００→３７００

「続いて魔法カード『融合』を発動！　『鬼火のウィスプ』と『バーナーズ・キャノン』を融合！」

侍装束の男と鎧兵が時空の渦に飲み込まれ、消失する。渦は光を発し、そして光の中から新たなる戦士が現れた。

「融合召喚？　焼き斬れ『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』？？」

『ハァァァァアッ、ハアッ？』

白銀の鎧を身に纏い、赤い炎を具象化したようなマントを羽織る騎士。兜から覗く紅の瞳には強い意志が宿っている。

Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）　ブレイジング・ナイト
星９
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　２９００／ＤＥＦ　２７００

≪融合・効果≫
「F・S」と名のつくモンスター×2
このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力と守備力の合計値の半分をダメージとして相手に与える。

F・S　ブレイジング・ナイト：ATK　2900

「な、何かと思えば、ゴブリン突撃部隊より弱「フィールド魔法発動」何ぃっ!?」
「『スピリッツ・ワールド』？　「S（スピリッツ）」と名のつくモンスターがバトルを行う時、その表示形式の数値が相手の表示形式の数値より低いなら、その数値は1000ポイントアップする!」

スピリッツ・ワールド
【フィールド魔法】
「S」と名のつくモンスターがバトルを行う時、相手モンスターの表示形式の数値が自分のモンスターの表示形式の数値よりも低い場合、自分のモンスターのその表示形式の数値はダメージステップ中のみ1000ポイントアップする。

平たく言えば、『摩天楼―スカイ・スクレーパー―』の上位互換。
相手の表示形式もこっちの表示形式も一切関係無く発動できる優れ物だ。

「『ブレイジング・ナイト』で『ゴブリン突撃部隊』を攻撃？」

Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００→３９００

「空破炎撃斬（くうはえんげきざん）？」
『ぜ、ぇえええええ、やぁっ？？』

紅蓮の炎を纏った剣が一閃、突撃部隊を3人とも斬り裂いた。どうでもいいけど、何で逐一爆発するのかねぇ？

「ぐあああああっ！」

試験管？：ＬＰ　３７００→３１００

「そして『ブレイジング・ナイト』のモンスター効果！　破壊した相手モンスターの攻撃力と守備力の合計値の半分のダメージを与える！　“ファイア・フォース”？」
「のうぁぁぁぁぁぁあっ！？」

試験管？：ＬＰ　３１００→１４５０

「そして『マグマドラゴン』でダイレクトアタック！“ボルカニック・ブレス”？」
「ぎゃあああああああああっ？」

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００

試験管？：ＬＰ　１４５０→０

黎：ＷＩＮ
試験管？：ＬＯＳＥ

リアルだな、ソリッドヴィジョン。なんか熱いし。
さて、決して俺はＤＳじゃ無いが、意趣返しだ。

「１つ、良い事を教えましょう、試験管？殿？」
「……何だ」

５Ｄ’ｓの主人公、不動　遊星の言葉を引用してみた。遊星、ちょっと借りるぜ？

「この世の中には、役に立たないカードなんて無い。クズだなんだと貶す心こそがザコの証明だ」
「なっ！？」
「んじゃ、ありがとうございました」

文句つく前に退散。ま、これで十分に合格圏内だろ。
さて、行くか。デュエルアカデミアに。

to be continued

ＳＴＯＲＹ２：実技試験　試験４番、遊馬崎　黎（後書き）

黎「当然合格した俺は何故かレッド寮。動きやすいから良いけど。そしてそこに万丈目一派が絡んできた！」

？？？「あいつらといたってロクな事にならないよ！」

黎「次回、遊戯王ＧＸ精霊の抱擁　『ＳＴＯＲＹ３：深夜の戦い』」

？？？「次回もお楽しみに！　ヒロインも登場するよ！」

黎「バラスな！」

ＳＴＯＲＹ３：深夜の戦い（前書き）

さて、見事に試験官をノーダメワンキルした主人公。
今回は原作キャラとの邂逅です。
それではＳＴＯＲＹ３のスタート！

ＳＴＯＲＹ３：深夜の戦い

ＳＩＤＥ：黎

実技試験が終了した。ざわつく会場の言葉に耳を傾けると、俺と十代の話題で持ち切りだった。哀れ、三沢。筆記１位でラーイエロートップの実力だというのに。

俺と十代はそれぞれ『クロノス先生を倒した１１０番』、『ノーダメージで１キルした４番』という風に呼ばれているらしい。

「おーい！」

「！？」

十代に気付かれた！？　馬鹿な！？　どうして気付けるんだ！？

ってしまった！　電磁波が……！

そうと思った時はもう遅かった。応急措置はしたが、後から来た２人の内１人に感付かれた。

「君、４番君だろ？」

「……よく分かったな。俺がここに隠れているって」

「……誰かいるんスか？」

「君には見えないのかい、１１９番君？」

それぞれ原作キャラの十代、俺を挟んで翔、三沢だ。

二人には見つかっているらしいので、諦めて俺は姿を現した。

「うわっ！？　人がいきなり出て来た！？」

わめく翔は無視。

「何か用かい、１番、十代、１１９番」
「俺は１番じゃない。三沢　大地だよ」
「ぼ、僕は丸藤　翔ッス」
「そっか。俺は４番こと、遊馬崎　黎。合格したらよろしく」

自己紹介は大切。

「で、何か用かい？」
「１１０番、いや十代が君の事を褒めていたからな。１番君が褒めるんだ、相当な腕前だと思って接触してみた。それに、あのカード達も気になるしな」

Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）の事か？　と問うと三沢は肯定した。

「いったいどこで手に入れたんだ？　君が使ったカードは『融合』以外、見た事も聞いた事も無いぞ？」
「……、それに関しちゃ、トップシークレットだ。今はまだ明かせない」

第３期の精霊界編辺りでならバラせそうだが、今はまだ時期じゃない。
十代も『相棒（ハネクリボー）』の姿を認識できていないからね。

「そうか、残念だ」
「悪いな、三沢」
「いや、お陰で越えるべき壁が１つ増えた。寧ろ燃えてきたよ」

……どうやら姿を隠していた事は忘れてくれたらしい。良かっｔ
「ところで、どうやって姿を消してたんスか？」しまった、翔がい

たんだった。
応急処置の方を答えておくか。

「どうやってって、気配を消したんだよ」
「武術の達人みたいに？」
「そ。なれると呼吸するくらい簡単だよ。感受性が低いと見つけにくいけど、分かる人は見つけられる」

実際は違う。十代に声をかけられ、集中力が切れるまでは別の方法で隠れていた。恐らく十代は姿を消した俺の精霊のオーラか何かを感知したんだろう。それだけで声をかけるとは、恐るべし十代。

「僕は感受性低いって事ッスね……」
「まぁ、そう気落ちするなよ、翔。個人差だし、成長すれば身に着くよ、きっと」

っとと、聞く事があったんだった。十代や翔よりも三沢に聞いた方が良いだろう。

「三沢、会場のデュエルはいつから見てた？」
「ん？　最初の１５０番からだが」

原作より３０人も多いな。いいけどサ。
俺の容姿はこっちに来ても変わらなかった。ならば……

「……茶髪でロングの女の子、いなかったか？」

今更だが、俺は黒い長髪に左眼が隠れており、少々鋭い眼つきといった外見。

「この数だ、１０人はいたぞ？」

それもそうか。なら……

「その中に下の名前が“ミヤコ”って娘は？」

三沢は思案顔を作るが、残念な事に首を横に振った。

「そっか、ありがとう」

ま、１つ年下だからな、仕方ないと言えば仕方ない。

アカデミアでも情報を集めるか。

――アカデミア

結論から言うと、無論合格した。

何故かオシリスレッドだったが。まぁ、十代と絡み易いから良し

としよう。

さて、読者の方々（メタ発言は控えてね？　ｂｙ作者）は推測が完了しているとは思われるが、俺は一緒に死んだ“ミヤコ”という女を探している。ちなみに彼女では無いし、妻でも無い。妹でも姉でもない。母でも叔母でも違うし、伯母（字の違いに注意）でも双子でも無いぞ？　無論、娘や孫娘でも、祖母でも無い。

失敬、話が逸れた。

一緒に死んだハズのあいつはこの世界への転生前に敵に奪われた。一応はこの世界にいるらしいので、“世界が違う”なんていう悲劇は起きないようだが。

さっさと探しに行け、という人もいるだろう。だが、俺は行かない。

お話にならない云々では無く、拠点を構えた方が良いと思ったからだ。

敵は俺達を邪魔だと思ったから戦力を削ぐ為にミヤコを奪った。言い換えれば、俺達転生者は邪魔者で、対抗策としてアイツをぶつけて来る為に強奪したと考える事もできる。仮にもアイツは俺の大切な人。死んでも傷つける事なんざ出来ねえ。そういう感情を読まれている可能性もある。

俺が邪魔なら、排除せんと向こうから仕掛けて来る可能性が高い。８種類の精霊の力を揃えて完全な対抗勢力になれば、最悪、敗北の未来が敵に待っている。

封印が解け始めている、という事は敵はまだ本調子では無いという事だ。

なのに、エネルギーを消費してミヤコを奪ってまで妨害をするのなら、俺は――少なくともミヤコは、十分敵にとっての脅威という事だ。

さて、説明はこのくらいにしよう。読者に厭きられては困る（だからメタはやめろって　ｂｙ作者）。

知っての通り、十代はデュエル大好き少年。悪く言い換えればデュエルバカ。

寮に着いて荷物を整理（１人部屋でした）している途中で「デュエルしようぜ！」なんて乗り込んで来た程だ。

ここで俺は閃いた。原作ブレイクはこっちにとっても不利に働く可能性が高い。だが、俺が誘導する形で原作に沿わせれば、問題は無いだろうし、何より自分で作った状況。事態の把握は楽に出来る。

勿論、ここで言うべきはただ一つ。

「だったら、アカデミアのデュエル場にいってみないか？」

だ。

――屋内デュエル場

「おぉー、すっげぇー」
「設備も最新っぽいな」
「やろーぜ！　俺達ここの生徒だしな」

やっぱ、アニメと実際は全然違うな。ナマだと迫力とかが違う。
さて、そろそろかな？

「というワケにはいかないんだな！」
「ここはオシリスレッドのドロップアウトボーイ達が来る所じゃ無いぞ」

お、来た来た！

振り返って見れば、案の定。万丈目の取り巻き1と2だ。
ちなみに“取巻　太陽”と“慕谷　雷蔵”っていうんだってさ。

「む、何か問題でも？」
「おおアリ「クイ」だ！　って何でアリクイなんだよ！」

割り込んだのは勿論の事、俺だ。
取り巻きはゴホン、と咳払いして言い直す。

「ここはオベリスクブルー専用のデュエルフィールドだって言っただろ。　ドロップアウト共は帰れ！」

「あ、ホントだ。オベリスクの紋章がある」

む、良い出来栄えの一品だ。

「だったらさ、お前達とデュエルすりゃ良いんだよ！」

「お、グッドアイデア」

当初の目的から大分ズレてるがな。

「なにぃ！　……！　お前ら１１０番と４番！」

「万丈目さん！　１１０番と４番です！」

サンダー登場。

にしても感付くの遅かったなぁ。大分話題になっていたのに。

「で、こいつ、誰だ？」

十代、初対面に“こいつ”は止めい。

「おまっ！　万丈目さんを知らないのか！？」

「デュエルアカデミア最強で！」

「未来のデュエルキングと名高いお人だぞ！」

大言放語にも程っつーモンがあんだろうがよぉ。

呆れるっつーの。

「……おかしいなぁ」

「何が？」

十代が首を傾げた。ここは火種を撒く所かな？

「最強（デュエルキング）って事はこの学園で1番って事だろ？　この学園の1番は俺か黎の事だからさ！」
「少なくとも、コイツが学園最強と呼ばれるカイザーや、初代デュエリストキング武藤　遊戯氏に勝てるとは到底思えんがな」
「な、ぐ……」

そこでつまるな、取り巻き。万丈目が暗に彼らより弱いって事認めてるぞ？

「こんの身の程知らずがぁ「ビークワイエット」……！」

発音悪いなぁ。↑英語１０だった人

「諸君、はしゃぐな。入学試験デュエルで手抜きしたとはいえ、片やクロノス先生を負かし、片やノーダメージワンターンキルをやった奴だ」
「実力さ！」
「試験管がヘボだっただけだ」
「ほう、その実力、ここで見せてほしいものだな」
「いいぜ」
「無問題だ」

激しく火花を散らす3人。後少しでディスクを構えようと思った時だった。

「あなた達、何しているの」
「そうだよ！」

お、今度は明日香の……、

ん？

もう一人は……誰だ？

ひょっとすると、非原作（イレギュラー）キャラか？

「天上院くん、神山くん！　いやぁ、この新入り共が余りに世間知らずなんでねぇ、学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

万丈目、それでカッコつけてるつもりか？　イヤミにしか聞こえないぞ。

「そろそろ寮の歓迎会が始まる時間よ？」

「遅刻しても良いの？」

神山、という女子は当然の事ながら、オベリスクブルーだ。セミロングの赤っぽい茶髪で、白いヘアピンがアクセント。整った顔立ちで、ボーイッシュ。スタイルも良い。ああいうのを古い言葉でボンキュッボン、っていう……

エロ親父か、俺は。

万丈目達が退散した後、明日香ともう一人の娘が接触してきた。

「あなた達、万丈目くん達の挑発に乗らない事ね」

「ロクでも奴らだし、ロクな事にならないよ」

どうやら明日香とコンビらしい。ジュンコともえ、立ち位置食われたな。

ちなみに翔は傍らで2人の魅力にメロメロになりかけている。

「忠告ありがとう。俺は遊馬崎　黎」

「天上院　明日香よ。明日香で良いわ」

「神山　フィオ。わたしもフィオで良いよ？」

良く見ると、フィオの目は青っぽい。ハーフか。

「十代、俺達も歓迎会始まるぞ？」

「お、ホントだ」

とと、そうだ。仮に彼女がイレギュラーならば、何か連絡手段を持っていた方が良い。

「ここで会ったのも、何かの縁。俺の連絡先を渡しとく。相談でも雑談でも、気軽に掛けてほしい」

そう言ってＰＤＡの番号を渡す。生徒手帳を兼ねた携帯電話みたいな感じだ。

「ふふ、面白いわね、あなた。普通は会ってすぐの人とアドレスの交換はしないわよ」
「変わっているとは思っているが、面白いという自覚は無いな」
「うーん、どっちかって言うと、ズレてる？」
「そう来たか」

自己紹介と雑談もそこそこに、俺達は寮へと戻って行った。
メザシは好きだよ？
泥や木の根よりも美味しいし。

――――寮　２２：００

俺は今、寮の裏手で猛烈に呆れている。
何故かって？　それは目の前に精霊がいるからだ。
いや、いる事自体に問題は無いんだよ？

「多すぎだろ、こりゃ……」

数が半端では無いのだ。ざっと数えて５０は軽くオーバーする。

『そんな事言ってもな、ダンナ。全部に精霊宿っちまったんだから仕方ネェじゃんかよ』

ちなみにこれは『鬼火のウィスプ』だ。なんか江戸っ子。

「それは分かったから、一度に出て来んなよ？　少なくとも部屋には入りきらねぇから」

『あいよ！　皆にも伝えておくぜぃ』

オベリスクブルーの部屋にも入りきるかどうか……。

それにこの数が後に８倍になるかと思うと、ちょっと気が重い。

リーダーみたいなモン決めておくか？

Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　？

「ん、メッセージだ」

恐らく、中身はアレだな。デュエル場への呼び出し。

……、番号教えてないんだが？

ＰＤＡを開くと、意外にも送り主は万丈目ではなく、取り巻きの片割れだった。

『やぁ、ドロップアウト。互いのベストカードを賭けたアンティルールでデュエルだ。場所は例のデュエルフィールド。時間は今晩０時。勇気があるなら来るんだな』

ビンゴ！

やっぱ原作知識があると良いな。
なんて考えていると、十代が飛び出して来た。素早く指を鳴らして精霊達の姿を消させる。

「黎！　ＰＤＡにメッセージが！」
「お前も来たか！　当然行くんだろ？」
「ああ！」

ま、あいつら鼻っ柱、圧し折ってやりますか。

十代が意気揚々とリングへ方向転換した隙に、２人の精霊が俺に囁いた。

『ダンナ、行くのか？』
『校則とやらに違反しますぞ？』

『鬼火のウィスプ』に続いて『マグマドラゴン』が言う。今の所、まともに会話ができたのはこいつらと『バーナーズ・キャノン』だけだ。どうやら実戦で召喚する必要があるらしい。

「行くさ。ミヤコの事も聞きたいしな」

知ってるとは思えないが、どっかにヒントぐらい転がっているだろう。そんな淡い希望ぐらい持っても許されないか？

『なら、なんも言わねぇぜ』
『主殿の御意のままに』

さぁて、実戦投入第二段を始めようか！

――デュエルリング

「よく来たな！　１１０番！　４番！」
「逃げなかった事は褒めてやる！」

こいつら、ウザ！
最初から自分達が勝つと信じて、己の負けるヴィジョンすら浮かべないタイプの人間だ。

「へへっ、デュエルと聞いちゃ来ない理由は無いぜ！」
「逃げたと思われるのは癪だしな」

熱血に自信に満ち溢れる十代と、冷静に自信たっぷりの俺。その相反するも恐れを微塵も抱いていない姿にカチンと来たのか、万丈目は取り巻きと一緒に頬をヒクヒクさせている。

「万丈目さん！　４番はオレがやります！」
「いいだろう！　遊城　十代はオレがやる！　そいつは勝手にしろ！」

４番て、名前知られてないのな。十代はそこそこ有名なのに。

十代はリングに、俺はその脇でデュエルする事にした。もう既に万丈目が『リボーン・ゾンビ』を召喚している。

『デュエル？』

黎：ＬＰ４０００
取り巻き：ＬＰ４０００

「俺のターン、ドロー！」

勢い良くカードを引く。行くぜ……！

「あなた達、何してるの！」

「校則違反にも程があるよ！」

っとと、明日香とフィオの登場だ。

「明日香！　フィオ！」

「きっ貴様！　何故天上院くんと神山くんを呼び捨てにする！」

「2人がそう呼んで欲しいつったから」

ギリギリと万丈目アンド取り巻きが睨みつけて来るが、気に留めない。男の嫉妬は醜いぜ？

取り敢えず、二人に向き直る。

「案ずるな。俺も十代も負けやしないさ」

「そういう問題じゃないよ！」

「見つかったらどうなるか、分かっているの！？」

「分かってる。が、問題無い。俺のＰＤＡにはこいつの呼び出しメッセージが入っている。何かあればそれで言い逃れをするさ」

そう言って俺はＰＤＡを取り出し、例のメールを再生する。

『やあ、ドロップアウト。互いのベストカードを賭けたアンティルールでデュエルだ。場所は……』

Ｐｉ

「な？」

「抜け目の無い人……」
「呆れるべきか、褒めるべきか……」
堪忍してな。自分を守る術ぐらい持たなきゃいかん生活をしてきたんだよ。
俺がカードを引いてしまったので、取り巻きはターンが回って来るのを待っている。あそこじゃ俺のやっている事は見え辛いし聞こえ辛い。ラッキーな距離だね、デュエルって。
じゃあ気ィ取り戻して……！
「俺は『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）　鬼火のウィスプ』を守備表示で召喚」
Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　７００
仮面をつけた侍装束の男がフィールドに腕を組んで降り立つ。周りには青白い火の玉が踊っている。
ライフは４０００だけど、表側守備表示で出せるってのは良いね、コレ。
「カードを１枚伏せ、ターンエンドだ」
黎：ＬＰ４０００
手札：４枚
フィールド

：Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　７００）
：伏せカード１枚

「オレのターン、ドロー！」

取り巻きは引いたカードを見るとニヤリと笑った。
因みに俺には取巻と慕谷の区別はついてない。だから今戦っているメガネはどっちなのかは知らないので、悪しからず。
つーかポーカーフェイスを知らんのかね、こいつは。

「カードを１枚セット！　更に魔法（マジック）カード『二重召喚（デュアルサモン）』！　これでオレはこのターン２回通常召喚ができる！　オレは『不屈闘士レイレイ』と『忍犬（にんけん）ワンダードッグ』を召喚！」

不屈闘士レイレイ（効果モンスター）
星４
地属性／獣戦士族
ＡＴＫ　２３００／ＤＥＦ　０
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。
次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

忍犬ワンダードッグ（通常モンスター）
星４
風属性／獣戦士族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１０００
忍術を極めた犬忍者。厳しい修行により、擬人化の忍術を使う事が可能となった。

不屈闘士レイレイ：ＡＴＫ　２３００
忍犬ワンダードッグ：ＡＴＫ　１８００

ほう、腐ってもオベリスクブルーか。『ウィスプ』は攻撃力１９００オーバーのモンスターとの戦闘では破壊されないしダメージも受けない。
だからワンダードッグを召喚した。同じバニラモンスターでも『サファイアドラゴン』や『ジェネティック・ワーウルフ』といったモンスターの方が攻撃力は高いのに。
バカだと思っていたが、最低限の実力はあるようだな。

「その仮面の能力は知っているぞ！　『ワンダードッグ』との戦闘では効果は発揮されないだろう！　行け、『忍犬ワンダードッグ』で攻撃！」

ドロン！　と煙と共に『ワンダードッグ』が消え、次の瞬間には『ウィスプ』の目の前にいた。そのまま拳を振り下ろし、破壊しようとする。

そうはさせるか！

「リバースカードオープン！　『突進』！　攻撃表示モンスター１体の攻撃力をエンドフェイズまで７００ポイントアップさせる？」

突進
【速攻魔法】
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力はエンドフェイズ時まで７００ポイントアップする。

こいつは『フィールド上のモンスター』が対象なので、相手にも発動できる。『冥府の使者　ゴーズ』や『あまのじゃくの呪い』とコンボで組み合わせられるカードだ。

忍犬ワンダードッグ・ＡＴＫ　１８００→２５００

勢いが増した『ワンダードッグ』の拳は、突如出現した青い炎のバリアによって弾かれた。

『助かったぜ、ダンナ！』
「（無問題だ！）更に『鬼火のウィスプ』のもう１つのモンスター

効果を忘れるなよ!?　お前のモンスターは2体共守備表示になる！」

『ウィスプ』が立ち上がると、手から青白い火の玉を飛ばし、相手モンスターに当てた。炎に包まれた『ワンダードッグ』と『レイレイ』は自分の身を守るように守備の体勢に変わった。

忍犬ワンダードッグ：ＤＥＦ　１０００
不屈闘士レイレイ：ＤＥＦ　０
Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＡＴＫ　８００

「なぁっ!?」

計算が狂ったっつー顔してんな。アホが。相手を見下しすぎなんだよ。

……そういや、この世界じゃ相手がエンド宣言をしてなくても頃合いを見計らって自分のターンにできたな。いやはや、好都合だねぇ。

取り巻き：ＬＰ　４０００
手札：2枚
フィールド
：忍犬ワンダードッグ（ＤＥＦ　１０００）、不屈闘士レイレイ（ＤＥＦ　０）
：伏せカード1枚

「俺のターン！」

一気に押し込むぜ！

「『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』を召喚！」

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（効果モンスター・オリジナル）
星４
炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１５００
このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキまたは手札よりレベル４以下の炎属性モンスターを１体特殊召喚できる。

『参りますぞ！』

「モンスター効果で、来い！　『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』？」

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　１５００

「『バーナーズ・キャノン』のモンスター効果発動！　１ターンに１度、相手の場の魔法・罠カードを１枚破壊し、相手に３００ポイントのダメージを与える！　“バーニング・ショット”？」

両肩に背負ったバズーカから白炎が噴き出し、リバースカードを焼き払う。『魔法の筒（マジック・シリンダー）』か。危ねえ。

「ぐ、熱ちちちちっ！」

取り巻き：ＬＰ　４０００→３７００

「『ウィスプ』で『不屈闘士レイレイ』を、『バーナーズ・キャノン』で『忍犬ワンダードッグ』を攻撃！　“青色の炎弾”？　“バーナーズ・バズーカ”？」

『ウィスプ』は特大の青い火の玉を、『バーナーズ・キャノン』はバズーカから赤い炎を撃ち出し、相手モンスターを焼き払った。

「『マグマドラゴン』でダイレクトアタック！　“ボルカニック・ブレス”？」

『カァッ！』

「熱うっ！？」

取り巻き：ＬＰ　３７００→１９００

「リバースカードを1枚セットし、ターン終了だ」

黎：ＬＰ　４０００
手札：３枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＡＴＫ　８００）、Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（ＡＴＫ　１８００）、Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン（ＡＴＫ　１５００）
：伏せカード１枚

「すごい、オベリスクブルーを一方的に圧してる……！」

端っこの方でフィオが驚愕に満ちた声を発した。こいつが弱いだけだっつの。

どうやらこの取り巻きクンはオベリスクブルーの中でも下の方の実力らしい。強い方を押し付ける形になってすまんね、十代。万丈目は上の方の実力者だ。

「感動しそうだよ……（もしかしたら、キミは……なのかな？）」

？　しまったな、聴覚を強化しておくんだった。『キミは』の後何て言ったんだ？

「オレのターン、ドロー！」

ちら、と十代の方を見ると、『E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマン』で万丈目の『地獄戦士（ヘルソルジャー）』を破壊したタイミングだった。

あ、剣が飛んで十代に刺さった（？）。アイツの能力にはビックリだもんな。初めて相手した時、危うく負けかけたからなぁ、俺。

ま、『アマゾネスの剣士』の方が能力的に上だけどね。

明日香は翔くんと一緒に十代の方のデュエルを見ている。こっちは無視？　それとも後でフィオと情報交換？

「どっちを向いているんだ、ドロップアウト！　魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！　手札を1枚墓地に送り、相手の場のモンスターを全て破壊する！」

！？　しまった！？　俺もデュエル中だった！

ライトニング・ボルテックス
【通常魔法】
手札を1枚捨てて発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

黄金色の雷が降り注ぎ、俺の場のモンスターは全滅した。

注意力散漫だったな。ま、注意してたらどうにか出来たワケでも

無いんだが。

「続いて魔法カード『命削りの宝札』発動！　５ターン後に手札を全て墓地に送る代わりに、手札が５枚になるようにデッキからカードをドロー！」

！　奴の手札は０だ！　５枚補充って事はアニメ的な流れで考えれば反撃が来る！

「『ジェネティック・ワーウルフ』を攻撃表示で召喚！」

『グワォオオオオオオオオオオンッ！』

ジェネティック・ワーウルフ：ＡＴＫ　２０００

攻撃力２０００！　『パンサーウォリアー』と違ってバニラモンスターだからデメリットが無い。一撃入るだけで半分削られる！

ジェネティック・ワーウルフ（通常モンスター）
星４
地属性／獣戦士族
ＡＴＫ　２０００／ＤＥＦ　１００
遺伝子操作により強化された人狼。
本来の優しき心は完全に破壊され、闘う事でしか生きる事ができない体になってしまった。
その破壊力は計り知れない。

漆黒の豹戦士　パンサーウォリアー（効果モンスター）
星４
属性／獣戦士族
ＡＴＫ　２０００／ＤＥＦ１６００
このカードは、自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースしなければ攻撃宣言する事ができない。

「魔法カード『ダブルアタック』発動！　手札の『エメラルド・ドラゴン』を墓地に送り、『エメラルドドラゴン』のレベル未満のモンスター１体は２回攻撃が出来る！」

ダブルアタック
【通常魔法】
自分の手札からモンスターカード１枚を墓地に捨てる。
捨てたモンスターよりもレベルが低いモンスター１体を自分フィールド上から選択する。
選択したモンスター１体はこのターン２回攻撃をする事ができる。

エメラルド・ドラゴン（通常モンスター）
星６
風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２４００／ＤＥＦ　１４００
エメラルドを喰らうドラゴン。
その美しい姿にひかれて命を落とす者は後を絶たない。

エメラルドドラゴン：☆６
ジェネティック・ワーウルフ：☆４

げ、マジ！？　これ入ったら俺の負けっすか！！？

「攻撃だ！　“ツイン・パワー・スクラッチ”？」

轟！　と唸りを上げ、鋭い爪が俺を襲う。
は、冗談！　一発でライフ０にされてたまるか！

「伏せカード発動！　カウンター罠（トラップ）『攻撃の無力化』？　攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させる！」

攻撃の無力化
【カウンター罠】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

罠（トラップ）カードの発動と同時に薄緑のバリアが発生し、『ジェネティック・ワーウルフ』の攻撃を防いだ。
あっぶねぇ……。

「チッ、ターンエンド！」

取り巻き：ＬＰ　１９００
手札：３枚
フィールド
：ジェネティック・ワーウルフ（ＡＴＫ　２０００）
：魔法・罠無し

「俺のターン！　ドロー！」

ったく、思ったよりやるな。
ま、このターンで終わりだけどな！

「黎、頑張れ！」

「おう！」

フィオの応援が届く。つーか遅い。どっちか勝つ方を応援するみたいな事すんな。

「「（（ギリギリギリギリ……！））」」

取り巻き1と2、歯軋りやめな。歯に悪いぞ？

お、『スパークマン』を『フレイム・ウィングマン』が倒した。

あ、万丈目への効果ダメージで左手から雷放った。そういえば、『フレイム・ウィングマン』が左手使うの、これが最初で最後だったな。

さて、『異次元トンネル―ミラーゲート―』を使ったって事は次の万丈目のターンで終わりだな。俺も終わらせよっと。

「終わらせるぞ！『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃表示で召喚！」

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００

両肩に嵌めている炎の歯車が印象的な男が光と共に現れる。

「魔法装備カード『レッド・シンボル』を『ヴォルカニック・ギア・ガイ』に装備！　こいつは『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）』と名のつくモンスター専用の装備魔法。攻守が１０００ポイントアップし、装備モンスターが破壊される時、こいつを墓地に送れば破壊を無効化できる優れ物だ」

F・S　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００→２９００／ＤＥＦ１０００→２０００

「さあこれでラストだ！　『ヴォルカニック・ギア・ガイ』で『ジェネティック・ワーウルフ』を攻撃！　“スピン・ファイア・キック”？」

回し蹴りの姿勢を取り、高速回転を始めた『ヴォルカニック・ギア・ガイ』。やがてその回転は紅蓮の炎を伴って赤色となり、『ジェネティック・ワーウルフ』を蹴り飛ばした。

「『ジェネティック・ワーウルフ』撃破？」

「ぐわっ！」

取り巻き：ＬＰ１９００→１０００

「『ヴォルカニック・ギア・ガイ』のモンスター効果は2種類ある。相手モンスターを戦闘破壊した時、そのモンスターが攻撃表示なら、元々の攻撃力の半分をダメージとして与える！　２０００の半分は１０００、ちょうどアンタのライフポイントと同じだ！」

「ぬぁあああああああああっ！」

取り巻き：ＬＰ１０００→０

黎：ＷＩＮ

取り巻き：ＬＯＳＥ

「すごい！　黎が勝った！」

ピョンピョンと飛ぶフィオ。ボーイッシュだが少々子供っぽい一面があるようだ。

「なあ、アンタ」

万丈目が『リビングデッドの呼び声』を使っていた。時間が無いな。

「クッ、アンティルールだ。これを受け取れ」

そう言って取り巻きはカードを1枚取り出した。が、俺はそれを断る。

「いや、恐らく俺のデッキコンセプトに合わない。その代わり1つ質問がある」

「……何だ」

情けと見られたのかも知れないが、そんな事は知らない。悔しかったら今度は勝てば良い。

人の下に付くんじゃ無く、自分の力で強くなって、な。

「ミヤコって女を知ってるか？　恐らく茶髪のロングなんだが」

「……いや、知らん」

期待はしてなかったが、落ち込むな、流石に。

「大変！　ガードマンが来るわ！　時間外の使用がばれたら危険よ！」

「クッ、行くぞお前達？　どうやらコイツがクロノス教諭に勝ったのはマグレだったらしいな！」

「はい万丈目さん！」

「覚えてろよ、次はオレが勝つ！」

ドタドタと万城目&取り巻きズが退散する。つーかガードマンが来るっつってんのに、騒ぐんじゃねぇよ。

「十代、俺達も危険だ。撤収するぞ！」

「いーやーだーっ！　俺はアイツと決着をつけるんだぁ！」

「ええい、ワガママ言うな！　肝心の相手はもういねぇんだよ！」

「でもよぉっ」

チッ、埒が明かん！　仕方ねぇ！

掌を十代の脇腹に当てる。そしてそのまま充電して……。

「ゴメン、十代？」

……

バヂィッ！

という派手な音を立てて、十代は崩れ落ちた。

そのまま担いで走る。

「逃げるぞ！」

「分かったわ」

「ハイッス！」

そしてそのままガードマンの目をやり過ごし、校舎の外への逃走に成功した。

to be continued

ＳＴＯＲＹ３：深夜の戦い（後書き）

黎「上手く脱出した俺達。そこで俺はふと、あのカードの事が気になった」
フィオ「黎、すごいねキミは……！」

黎「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ４：十代の勝率』」
フィオ「説明の回だね」
黎「早く色んな人に聞きに行きたい……」

ＳＴＯＲＹ４：十代の勝率（前書き）

黎「校舎の外に出た俺達。十代は次に引くのは『死者蘇生』だったな。ここはちょいと正してやるか。」

十代の勝利を否定する作品が多いので、こちらでは勝利を肯定してみました。

では、スタートです！

ＳＴＯＲＹ４：十代の勝率

ＳＩＤＥ：黎

上手く屋外に脱出した俺達。外に出て一息ついているタイミングで十代が目を覚ました。

その後は原作通り。明日香の言葉に大した事無いと答えた十代。

十代が次に、つまり自分のターンで引くはずだったカード『死者蘇生』。自分または相手の墓地からモンスター1体を特殊召喚する魔法カード。

「へへっ！　こいつで『フレイム・ウィングマン』を復活させれば俺の勝ちだったぜ」

十代が誇らしげに宣言する。

「ふふっ、不思議な人ね」

「流石アニキッス！」

「強いんだね、十代は」

万丈目の場には貫通能力を持つレベル５モンスター『地獄将軍（ヘルジェネラル）メフィスト』がいた。確かに攻撃表示モンスターを倒せば実質ダイレクトアタックの『フレイム・ウィングマン』を出せれば、残りライフ１５００の万丈目では耐えられなかっただろう。

しかし……

「あー、盛り上がってるトコ悪いんだが……」
「何だ？」
「『フレイム・ウィングマン』に限らず、『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）』の融合モンスターは融合召喚以外での特殊召喚は出来ないんじゃなかったっけか？」
「え！？」

殆どの融合Ｅ・ＨＥＲＯ共通の効果。それは融合召喚以外の特殊召喚が出来ないという事。基本的に融合Ｅ・ＨＥＲＯは強力な効果を持つ（マッドボールマンは除く）。墓地からホイホイ蘇生されてはバランス崩壊するのだろう。

「ホントだ……。融合以外じゃ召喚出来ないのか……」
「じゃあ、アニキは負けてたって事ッスか？」

翔が落胆したように言う。が、俺はそうは思えない。

「いや、そうとも限らない。十代、『死者蘇生』の次のカードをめくってみろ」
「おう」

引いたカードは……『強欲な壺』。２枚のカードを引けるドローソースだ。

「もう２枚引いてみてくれ」
「えーと、『戦士の生還』と『ミラクル・フュージョン』だ」

！　なんと！　そこでその組み合わせを引き当てるか。

「……『死者蘇生』で『クレイマン』を守備表示で復活させれば十

二分に勝てただろうな。いや、むしろ勝っていた可能性の方が高い」
「どういう事ッスか？」
ちょっと説明が長くなりそうだな、こりゃ。
「万丈目のミスも絡んでるが、『戦士の生還』で『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン』を選択するんだ。すると、『フレイム・ウィングマン』は融合モンスターだからエク……いや融合デッキに戻る。ｋこれで、『ミラクル・フュージョン』で墓地の『フェザーマン』と『バーストレディ』を除外融合する形で『フレイム・ウィングマン』を出せるんだ」
『戦士の生還』は墓地の戦士族モンスター１体を手札に戻すカード。ただし融合モンスターは融合デッキに戻る。
『ミラクル・フュージョン』は場と墓地のＥ・ＨＥＲＯを融合させるカード。
つまり、再び『フレイム・ウィングマン』を召喚できる、という事だ。
「なるほど……」
「万丈目くんのミスってのは？」
そっちは簡単だぞ、明日香。お前が分からないとは思えんのだが？
「『地獄戦士（ヘルソルジャー）』は受けたダメージを相手にも与えるカード。つまり、引き分けにだって持ち込めるカードだ」
ま、万丈目はプライドが高いから、引き分けは許さないとか、その辺も絡んでるかもな。

「十代のライフは５５０だった。対し万丈目は１５００。『地獄戦士』の攻撃力は１２００だ。ここまで言えば分かるよな、オベリスクブルーの女王様？」

ちょっとイヤミっぽく言う。

案の定明日香はムッとしたが、理解したのか納得顔になった。

「攻撃力２７００未満のモンスターで攻撃したら十代は負けていた？」

「そう。１７５０未満なんて数値のモンスターを出せば次のターンの反撃でアウトの可能性が高い。逆に攻撃力１７５０から２７００未満なら反射ダメージでこれもまたアウト」

『地獄戦士』は自分より相手の方がライフが少ない時、驚異的な壁モンスターになる。『原子ホタル』や『ユベル』と同じように相手の足止めに使える有効なモンスターだ。

「万丈目のミスってのはここまで言えば分かるとは思うが、『地獄戦士』を場に残さなかった事。だけじゃなく、攻撃力１８００の『地獄将軍　メフィスト』なんて中途半端なモンスターを出したのも失敗だったね」

レベル５、６なら補助無しで最大攻撃力２６００のモンスターが出せる。ダメなら別のモンスターを壁用に増やしても良い。

「まぁ、そんな奴の行動が、十代の勝ちを俺に確信させたんだが」

「え、え、え？」

翔も十代もチンプンカンプンっつー顔だな。明日香とフィオも良く分からないと言った感じだ。

まあ、俺は大学で心理学を専攻してたから分かるんだけどね。

「たった攻撃力１８００のモンスターを態々召喚したって事は、万丈目の手札にはレベル４以下のモンスターがいなかったって事だよ」

「「「？」」」

「分かんないかな？　普通にレベル４モンスターを出せば次のターン、『地獄戦士』と一緒に上級モンスターを呼び出す素材に出来た」

ダメージが怖ければ守備表示で出すか、最悪『地獄戦士』で引き分けにすれば良い。

「なのに『リビングデッドの呼び声』を使ってまで『メフィスト』を出したって事はつまり……」

「そっか、『地獄将軍　メフィスト』しか召喚出来なかったんだ！」

十代、ご名答。

「恐らく万丈目の手札は上級モンスターと魔法、罠カードで占められていた。レベル７以上のモンスターには２体のリリ……、もとい生け贄が必要。場ががら空きの万丈目には出来ない」

そう、推測に過ぎないが、恐らくあの状態で手札の中で出せる唯一のモンスターが『メフィスト』だったのだろう。

「レベル５か６で１８００ってのは非常に心許無い数値。にも関わらず出さなくてはいけなかったと考えれば、万丈目は次のターンになっても蘇生された『クレイマン』を破壊出来なかっただろうね。後はさっきのコンボを決めれば十代の勝ちだ」

『おぉ～！』

『地獄戦士』を残すといった妥協案を呑まなかったアイツは、上級モンスターの召喚を1ターン待つという事は出来なかった。
結果、『メフィスト』という中途半端なモンスターを出さざるを得なかったんだ。

同じ攻撃力で貫通持ちなら『マッド・デーモン』がいる。俺的にはあっちの方がオススメかな（この時代にあるかどうかは知らんが）。

『クレイマン』の守備力は２０００ジャスト。１８００の『メフィスト』じゃ倒せないし、装備カードを使ってもモンスターをもう1体出すか、攻撃力を２５５０以上にしなくちゃいけない。
なんにせよ、容易く出来るモンじゃ無い。
俺の知っている限りでは“ヘル”と名のつくモンスターで『クレイマン』を倒せるのは『炎獄魔神　ヘルバーナー』ぐらいか。それでも攻撃力２０００以上のモンスターのリリースが必要なので、有り得ない。

「結局、何が言いたかったんスか？」

翔、一応説明はしたぞ？　十代も明日香もフィオも理解してるっつーのに。

「要は、俺は多分勝っていたって事さ」
「ま、必ずじゃないがね」

得意気に言う十代に釘を刺しておく。

「万丈目がモンスター破壊のカードを引き当てたり、『はたき落とし』を伏せてたりしたら、結局はお前の負けだったぞ？」

「えぇー……！　負けてたのか……？」

ガックリと肩を落とす十代。

躁鬱の激しいやっちゃな。可能性の話だっつーの。

「気落ちすんな、十代。例え負けても次勝てば良い、だろ？」

「……、そうだな！」

「今回は決着はつかなかったけど、次、きっと近い内にまたデュエルする機会はあるって。そん時に勝ちゃ良いだけさ」

「ああ！」

ニカッ、と十代は笑った。

第３期終了時、そして第４期にはクールというかニヒルな感じになるので、この陽気な十代は今の内にしか見られない。そういう意味でも仲良くしておいて損はないだろう。

こうしてこの後、明日香とフィオを途中まで送り届け、俺達も寮へと帰って行った。

流石に、ちっと眠いかな。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ４：十代の勝率（後書き）

黎「あれから数日。なんだか翔が気持ち悪い」

フィオ「覗きだぁ！」

黎「ああ、呼び出しの件か。次はブルー女子が相手か。ちっとは楽しませてくれよ！？」

フィオ「吠え面かかせてやるよ！　次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ５：偽ラブレター事件』！　お楽しみに！」

黎「マジで覗いてねぇよな、アイツ？　俺が原作介入した影響でその辺り歪んで無い事を祈る……」

ＳＴＯＲＹ５：偽ラブレター事件（前書き）

黎「偽ラブレター事件か」

そう、翔くんが覗きをするっていうアレ。

黎「未遂だけどな」

……、違うってツッコミが欲しかったんだがな。

まあ兎も角、ＳＴＯＲＹ５です。

黎「そして、話の終わりの方でとうとう敵が動き出す！」

では、スタート！

ＳＴＯＲＹ５：偽ラブレター事件

ＳＩＤＥ：黎

十代から翔の様子がおかしい、と相談を受けた。
なるほど確かに。言われてみれば昼過ぎから翔が気持ち悪い。というか、奇行が目立つ。
ほら、今だって体育の時間ですっ転んだのにニヤニヤしている。

ハッキリ言おう。キモイ。

「翔、大丈夫か？」
「黎くん、すみませんねぇ、僕だけこんな幸せを享受しちゃって♪」

♪じゃねぇよ、♪じゃ。

あ、もしかして偽ラブレター事件？　時期的にも間違ってないし。
ふむ、カマかけてみっか。

「ラブレターでももらったか」
「（ブフゥッ！）なななんなななああああなななあああああ！？」

驚きすぎだバカ。「はい、そうです」って言ってるみたいなモンだぞ？

「ま、幸せは幸せの内に噛み締めとけ（後でマジメに不幸が襲いか

かって来るから）。幸せだと思ってるウチが華だぜ？」
「ん～？　嫉妬スか？」

殴っていいか、コイツ。
つーかヒトのアドバイスを『嫉妬』の一言で片づけるな。

「ふっふふふ～ん♪　あはははは～♪」

絶賛トリップ中で翔はどこかへ行ってしまった。トリップしすぎると痛い目見た時の落胆やダメージ大きいぞ（作者体験談です）。

……？　今妙なテロップが流れたような……？

「黎、どうだった？」
「十代、スマン。現実世界に引き戻せんかった」

いやまあ、半日もすりゃ強制的に現実を知るんだがな。
ふっふっふ、現実の厳しさを思い知れ。

「黎、顔が怖いぞ」

おっと、邪悪な心を持って翔を現実世界に連れ戻そうと思ってたら、いつの間にか顔まで邪悪になっていたか。

「っと、三沢か。何時からそこに？」
「今さっきだ」

通称『空気』『スリースワンプアース』などの異名を持つ（持たれている）三沢。この頃から空気っぽい…。
一応勘づけるように感覚の幅を広げてはいるんだが、イマイチ反

応が悪い。

むぅ、精度落ちたかな？

「で、バスケ、どうだった？」

「俺と三沢のコンビで圧勝だったぜ！」

「十代が俺の計算通りの動きをしてくれたから、こちらも動きやすかったよ」

体育の授業でレッドとイエローの混成バスケ。十代は運動神経は良いが単純らしい。

俺？　一回戦敗退。はは、笑えないか。

「何言ってんだよ、お前一人で３０点以上入れたじゃないか！」

「しかも内２６点がダンクシュート。君はＭＶＰに選ばれても文句は無い」

……、チームの所為でしたか。

まぁ、俺の運動神経に、というか身体の機能についていくのは普通の人間には無理だから仕方ないか。

――――その日の夜

「黎、大変だ！　ＰＤＡのメッセージで翔が攫われたって！」
「……ソイツぁ穏やかな話じゃねぇな」

なーんてね、原作知ってるから演技ですよ～？
ま、原作云々言ったら何起こるか分かんないし、黙ってるケドね。
行き方と行き帰りのボート漕ぎぐらいはやってやろうか。

「で、何で俺んトコに【Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　！】っとワリィ。メッセージだ」

なんだ？　俺もお呼び出し？
人物像は出てなかったが、声はどっかで聞いた事があった。

『やぁ、遊馬崎　黎くん。君の友人はコチラでアズかっている。返してほしければ女子寮まで来るんだな、ハハハハハハハハッ！　ゲホッゴホッ！』

Ｐｉ

……。言いたい事が2つある。

「友人の名前挙げろ、行き辛くさせてるから」

名前を挙げてくれないと、罠だという猜疑心が強くなる。ここは名前を挙げるのが正解だ。中々のバカだぞ、送り主は。

「後モザイク機能使え。無理してノド枯らすようなマネすんな」

どういう訳だかこのＰＤＡ兼生徒手帳（逆かな？）、メッセージの送信時にモザイク、というか非通知設定にした時、砂嵐の画像と音声変化を送る事が出来る。使わない、という事は……。

「えーと、送り主は……『神山　フィオ』。あいつか……」

非通知にすればモザイクは必ずついて来る。こいつ、機能を熟知してない？

「ふぃ、フィオがこんな事したのか！？」

「1枚噛んでる、が正しいだろう。俺には名前明かしてお前には明かさないってのは変だからな」

で、呼び出されたので、二人して女子寮に行く事になった。

あとフィオが意外とヌけてる事も分かった。

――湖上

「いた。あそこだ」

湖畔に停めてあったボートを漕いで女子寮へと向かう。そして湖に面した入口で女子を複数名、そして縛られた翔を確認。

「翔を返せ！」

「早っ！」

岸に飛び降りるなり十代は女子に向かって叫ぶ。せめて事情を聞くとかねぇのか。

「来たわね、十代、黎。そういう訳にもいかないわ」

「俺の友人が何かしたのか？」

明日香なら冷静だし、こいつはそもそも十代の実力が知りたいが故にこの事態を利用したからな、虚偽は混ぜんだろう。

ちなみに答えは違う奴から返って来た。

「こいつ、女子寮のお風呂を覗いたのよ！」

ジュンコ（茶髪の方。覚えにくかったら黒桃、純粋なお茶、で覚えると意外と忘れない）が叫ぶ。

「覗いてないッス！　僕は手紙で呼び出され「ちと黙ってろ、翔」黎くん！？」

「事情は署で、もとい後で聞く」

「明らかに僕が犯人前提ッスよねぇ！？」

「何を言う。お前が覗いたなんて事、信じてるに決まってるじゃな

いか」
「やっぱ犯人扱いッス！」
「違う。お前の身の潔白を疑ってるだけさ」
「同じッスよぉおおおおおおおおおおおおおお？？？」
ま、このバカ弄るのはこの辺にしとくか。仮にも被害者だからな。
「手紙ってのは？」
「これよ」
明日香が手紙を手渡して来た。本当は差出人を知っているが、あえて知らないフリをしとこう。
「きったねぇ字。しかも十代宛て。翔、まず疑え。っつーかヒトの手紙に勝手に応対すんな。バチが当たったんだよ」
「あうう……」
「ま、こんなんで呼び出せるのは恋愛事に疎い奴かそのバカぐらいだな」
こういうのを“連木で腹を切る”と言う。要は到底不可能、という事だ。
ちなみに勿論恋愛事に疎い奴ってのは十代の事だ。
「で、そいつが覗いたか否かはさて置き」
「いや置いとかないでッス」
「（無視！）わざわざ呼び出したんだ、要件は？」
そこで俺はチラリとフィオを見やる。さっきから一言も喋っていない。逆に何かを腹の内に持っていそうだ。
と、俺の視線に気付いたフィオ。ボーイッシュな感じも湯上りだ

と色気に変わる（俺今何言った!?）。

「デュエルでどうかしら？　２連勝でこの子は解放。１敗でもしたら……」

「通報？」

「そ、そんな不平等な！」

「キミを無条件で突き出しても良いんだけど？」

「ヒィッ？」

フィオの言葉には刺があったようにも思えたが……。諦めろ、翔。分が悪い。

罠ではあるが、お前を弁護できる材料がその手紙１つじゃ弱い。ここは要件を呑むしか無いんだよ。

にしても……。

「フィオ、そんなゲテモノを見るような眼で見てやるな。美人さんが台無しだぜ？」

「だ、誰が美人よ!?」

「文脈で分かれ、お前っきゃいねぇよ」

「（ボンッ！）う、うるしゃひっ！　相手の戦力を削ぐ作戦か!?」

いや、可愛い系の女の子だってのは正直な感想なんだけど……？翔が僕の弁護～とか言ってるけど、無視。女子が肢体を見られてないという保証は無いから君のジャッジは保留だ。

「わわわわわ、わたし、が相手っ、すっる！　いいいいいいい、良いよね、あすきゃっ！」

「少し落ち着きなさい。カミカミじゃないの」

「落ち着け、どもりまくりだぞ？」

褒められ慣れて無いらしいな、コイツ。顔が『美人』の一言で真っ赤になるヤツなんて早々いねぇぞ？

「じゃあ、十代の相手は私ね」
「おう、来い明日香！」
「手加減無しだ、フィオ」
「ぜ、全力で叩き潰してやる！」

「“ボルティック・サンダー”？」
「きゃあああああああああ！」

明日香：ＬＰ　０

こちら、十代ＶＳ明日香。原作と何１つ違わず十代が勝利を収めた。

「ガッチャ！　楽しいデュエルだったぜ！」
「やった、まず一勝ッス！」

翔、喜びすぎ。しかしお前さっきから思ってたんだが……。

「人身売買されてるみてぇ……」
「ヒドイッス！？」

あ、声に出てたか。

「く、ぅ……」
「明日香様！」
「明日香さん！」
「明日香！」

お～、見事に煙が上がってるね。どっかにいるクロノス先生も同じ目に合ってんだろうな。

「許さない……！　わたしが相手だ！　明日香の敵は討たせてもらうよ！」
「フィオ……、私死んでないわよ……？」
フィオが本気の怒りを表す様にディスクを構える。ジュンコともえも苛立ちの視線を向けて来た。
あのね、キミ達……。

「こっちも真剣勝負、手加減を期待する方が間違っている」
『う……』
「第一、レッドがブルーに勝つとか生意気とか思ってないか？　レッドがブルーに勝ってはいけないなんてルールはねぇし、そもそも女子は全員ブルーだろうが。明日香は本物の実力があるが、マジにブルーに匹敵するだけの実力者は何人いる？」
「わたし達が弱いって言うの！？」
「アンタねぇ……っ！」

っとと、言葉選びをミスったか。

「違う。ブルーだレッドだの階級に囚われて勝ち負けに拘り過ぎなんだ。レッド相手にも全力出せ。明日香は手を抜いていなかったが負けた。先の戦いの二の舞になりたくなかったら手加減するな」
「……っ、分かってる！」

ま、安い挑発はこの位でいいか。

「さってと、俺達も始めようぜ、フィオ？」
「死んでも負けてやるもんか！」

いや、命は大切にね？　一回死んだお兄さんからの忠告だよ？

『デュエル！』

「俺の先攻！　ドロー！」

お、このカードか！　遊びで入れたんだがな……。まいっか！

「リバースカードを1枚セット！　更に『F・S（ファイアスピリッツ）　マグマドラゴン』を召喚、攻撃表示！」

『先方、参る！』

F・S　マグマドラゴン：ATK　1800

「モンスター効果発動。このカードのあらゆる召喚に成功した時、デッキか手札からレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる。来い、『F・S　ヴォルカニック・ギア・ガイ』？」

『行くっぜぇ！』

F・S　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK　1900

「へえ、1ターン目でモンスターを2体並べるとはね」

「見るだけである程度は相手の強さが分かるモンだ。アンタは手ェ抜いたら速攻やられそうだからな。ターン終了」

黎：ＬＰ　４０００
手札：３枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（ＡＴＫ　１８００）、Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（ＡＴＫ　１９００）
：伏せカード１枚

「わたしのターン、ドロー！」

さて、あのシャイガールはどんなデッキかな？　態々俺の後にしたんだから、何かそれをメリットとするカードがある、のかな？

「永続魔法『神の居城－ヴァルハラ』を発動！　このカードは１ターンに１度、わたしの場にモンスターが存在しない時、手札の天使族モンスターを特殊召喚できる」

！　ヴァルハラって事は、天使デッキか！？
どっちだ！？　パーミッション！？　それとも重量（ヘビー）ビートダウン！？

「出でよ『光神機（ライトニングギアごうりゅう）－轟龍』？」

光神機－轟龍：ＡＴＫ　２９００

ビートダウンか！　しかもあいつは貫通持ちの妥協召喚モンスター！

光神機－轟龍（効果モンスター）
星８
光属性／天使族
ＡＴＫ　２９００／ＤＥＦ　１８００
このカードは生け贄１体で召喚する事ができる。
この方法で召喚した場合、このカードはエンドフェイズ時に墓地へ送られる。
また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「巧いな。『轟龍』に召喚制限は無い。『ヴァルハラ』との組み合わせであっという間にフィールドの制圧ができる」
「それはどうも。続いて『勝利の導き手フレイヤ』を通常召喚！」
『行っくよぉ～！』

勝利の導き手フレイヤ：ＡＴＫ　１００

勝利の導き手フレイヤ（効果モンスター）
星１
光属性／天使族
ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　１００
自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、
このカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。

お、精霊か？

「モンスター効果発動！　『フレイヤ』が場にいる限り、わたしの場の天使族モンスターは攻撃力と守備力が４００ポイントアップする！」
「そ、そんなのズルいッスよぉ！」

翔、ズルくも何とも無いからな？　んな事言ったら十代の『スカイスクレーパー』はもっとズルいから。

光神機－轟龍：ＡＴＫ　２９００→３３００
勝利の導き手フレイヤ：ＡＴＫ　１００→５００

「そして永続魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動。わたし

の場にレベル1の天使族モンスターがいる時、1ターンに1度手札から天使族モンスターを特殊召喚できる。『The Splendid VENUS』を特殊召喚？」

コート・オブ・ジャスティス
【永続魔法】
自分フィールド上にレベル1の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。
「コート・オブ・ジャスティス」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

The Splendid VENUS：ATK 2800→3200

おーおー。1ターン目からよくもまあそんなに手札に揃ったモンだよ。お兄さん感心しちゃうぜ？
ってバカやってる場合じゃねえ！　『Venus』の効果はパワーダウンじゃねぇの！

「『The Splendid VENUS』の効果発動！　このカードが場にある限り、全ての天使族以外のモンスターの攻守は500下がる！」

F・S　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００→１３００
F・S　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００→１４００

Ｔｈｅ　Ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ（効果モンスター）
星８
光属性／天使族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　２４００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントダウンする。
また、自分がコントロールする魔法・罠カードの発動と効果は無効化されない。

うわっちゃー。全発喰らったら1キルじゃねぇの。ホントにビックリだよ、お嬢ちゃん。

「総攻撃でお終い。呆気なかったね」

確かに。『轟龍』と『ＶＥＮＵＳ』の攻撃力の合計は６５００だ。俺のモンスターの攻撃力の合計値２７００から差し引けば３８００のダメージ。ここに攻撃力５００の『フレイヤ』の直接攻撃が通ればフィニッシュ。確かに呆気ない。

「ザマァミロ、ですわ。オシリスレッドが生意気なのですわ」

「明日香様の敵を討てるし、覗きは突き出せるし、結果オーライね」
「だから覗いてないってばぁ～」
明日香のボートでジュンコともえがしたり顔をしている。翔が何か言った気がするが、無視。今はそれどころじゃ無い。
「まずは『轟龍』で『マグマドラゴン』を攻撃！」
「くっ！」
黎：ＬＰ　４０００→２０００
「そして『ＶＥＮＵＳ』で『ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃！『ホーリー・フェザー・シャワー』？」
飛び上がった『ＶＥＮＵＳ』が目映い光を発したかと思うと、無数の羽を弾丸の如く撃ち出してきた。
「ばいばい、黎くん」
にこっ、と笑って手を振るフィオ。
確かにこれが通っちゃ、後はダイレクトアタックだけだが……。
悪いけど、そうホイホイやられちゃいけねぇんだよ！
「罠（トラップ）発動、『ガード・ディザーブ』！　１度だけ俺の場の『Ｓ（スピリッツ）』と名のついたモンスターを対象にした戦闘とカード効果を無効にする！」
ヴィーン、と薄緑のバリアが現れ、羽の弾丸を弾き飛ばした。

これは『ヒーローバリア』の『S（スピリッツ）』用上位互換バージョン。戦闘以外も防いでくれるスゥーパァーなカードだ。

……コーラが飲みたくなってきたな。

「さてどうする？『フレイヤ』の攻撃は残ってるが？」

ニヤッ、と笑ってやる。こうやって挑発って事を示してやらなくっちゃ『オシリスレッドは計算もできないの？』とでも言われかねない。

「……、カードを1枚伏せ、ターンエンド」

フィオ：ＬＰ　４０００
手札：０枚
フィールド
：光神機－轟龍（ＡＴＫ　３３００）、Ｔｈｅ　Ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ（ＡＴＫ　３２００）、勝利の導き手フレイヤ（ＡＴＫ　５００）
：伏せカード1枚、神の居城－ヴァルハラ（永続魔法）、コート・オブ・ジャスティス（永続魔法）

「防ぐだなんて、生意気」

「まだ言うか……」

だから格下の寮の奴に敗北を強要すんなって。

「俺のターン！」

引いたカードは……、お、これが来たか。

「黎くん！　せめて『フレイヤ』だけでも倒して、ちょっとでも場を有利に……」

「悪いが翔。それは不可能だ」

「な、何でッスか！？」

「意地悪で言ってるワケじゃ無い。『フレイヤ』は自陣に『フレイヤ』以外の天使族がいる時、戦闘対象にはされない能力がある。『ＶＥＮＵＳ』と『轟龍』をどけないと攻撃は届かない」

「そ、そんなぁ！」

これが『フレイヤ』の恐ろしいロック効果だ。ああやって天使族モンスターを強化し、自身はそのモンスターに守ってもらう。“切り込みロック”や“ヴァルキリアロック”よりずっと手強い。低い攻守は殆ど問題にならないある意味恐ろしいモンスターだ。

「黎くん、もうムリッスよぉ……。僕の事はいいからサレンダーしてほしいッス……」

はぁ。翔よ、何を弱気になっているんだ。まぁ、初期の翔は未成熟な奴だから仕方ないけどさ。

後俺も負けたら被害受けるみたいな言い方すんなや。

「翔、確かにフィールドはフィオが有利だ。だが、それがどうした？」

「え？」
「フィオや十代みたいな高速で上級モンスターを展開する奴は必ずぶち当たる壁がある」
「壁？」
「手札不足だよ」
そう、フィオはさっきのターンで手札を全て使い切った。伏せカードはあるが、『ミラーフォース』でも無い限り、脅威にはなり難い。
十代は不足しがちな手札を、持ち前の引きの強さで補っている。果たしてフィオにその強さがあるかな？
「それに、十代だってフェイバリットカードの『フレイム・ウィングマン』を破壊されたが、諦めなかった。まだまだ俺には手が残っているっつーのに、サレンダーなんざぁ……、できっかよ！」
叩きつけるようにディスクにモンスターをセットする。まずは高速展開の基盤を崩す！
「『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』を攻撃表示で召喚？」
『でぇりゃあああっ！』
Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　１５００→１０００
「『バーナーズ・キャノン』のモンスター効果を発動！　『コート・オブ・ジャスティス』を破壊し、お前に３００ポイントのダメージを与える！　“バーニング・シュート”？」
「くあっ！」

両肩の砲身から白い炎が噴き出すと、フィオの場の永続魔法を焼き払った。

フィオ：ＬＰ　４０００→３７００

「『死者蘇生』で墓地の『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』を蘇生！　今ここに蘇れ！」
『再び参りますぞ！』

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００→１３００

「『マグマドラゴン』の効果はいかなる召喚方法にも適応される。俺はデッキから『Ｆ・Ｓ　バーンクロス』を特殊召喚」

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（効果モンスター）（オリジナル）
星４
炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１５００
このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキまたは手札よりレベル４以下の炎属性モンスターを１体特殊召喚できる。

F・S　バーンクロス（効果モンスター）（オリジナル）
星4
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　１０００／ＤＥＦ　２０００
１ターンに１度、この効果を発動する前の相手のターンにこのカードのコントローラーが受けたダメージ以下の攻撃力の炎属性モンスターを１体、デッキまたは手札から特殊召喚できる。

出現するのは巨大な十字架、では無く、十字架を背負った男だ。

F・S　バーンクロス：ＤＥＦ　２０００→１５００

「カードを1枚伏せて、フィールド魔法『スピリッツ・ワールド』を発動」

そういやまだ『スピリッツ・ワールド』の描写が無かったな。
俺とフィオを対角線に置くように円、というか魔法陣が展開。そのラインからは優しい、淡い緑色の光が放たれている。蛍のようにポワポワと上空に上っていく光は幻想的と言うべきだろう。

「迎撃準備完了！　ターンエンド」

黎：ＬＰ　２０００
手札：０枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（ＡＴＫ　１４００）、Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（ＡＴＫ　１３００）、Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン（ＡＴＫ　１０００）、Ｆ・Ｓ　バーンクロス（ＤＥＦ　１５００）
：伏せカード１枚、スピリッツ・ワールド（フィールド魔法）

「わたしのターン、ドロー。ふん、何が迎撃準備だ。逆転できるものならやってみなよ！」
「おう、来いや！」
「『轟龍』で『バーナーズ・キャノン』を攻撃！　止めだぁ！」
「そう上手く行くかな！　『スピリッツ・ワールド』の効果発動！　『Ｓ』と名のつくモンスターが自身の表示形式の数値より高い数値の表示形式の敵とバトルする時、その数値は１０００ポイントアップする！」

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　１０００→２０００

ポゥ、と浮かんで飛んでは消えていた光の粒子が『バーナーズ・キャノン』の身体に纏われる。

「それでもこっちの方が攻撃力は上だぁ！」

「ならオマケも持って行け！　永続罠『スキルドレイン』？」
「な！？」
「あれは！？」

赤いカードがゴウゴウ唸りを上げて辺りの光を吸い込んでいる。
多分あれが各々の効果だ。どういう仕組みなのかね、コレ？

「な、なんスか、あのカードは！？」

驚愕の翔に答えたのは、意外にも十代だった。
後で聞いた所、昔の知り合いに使われ、散々悩まされたらしい。

「あれは……、フィールドのモンスターの効果を封じるカードだ！」
「ピンポン！　これで、パワーアップとダウンは無効になる！」
「あー、そうきたか……！」

おう、こうきたぜ？

スキルドレイン
【永続罠】
１０００ライフポイントを払って発動する。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化
される。

黎：ＬＰ　２０００→１０００

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　２５００→３５００（１５００→２５００）
Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００
Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００
Ｆ・Ｓ　バーンクロス：ＤＥＦ　２０００

光神機－轟龍：ＡＴＫ　３３００→２９００
Ｔｈｅ　Ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ：ＡＴＫ　３２００→２８００
勝利の導き手フレイヤ：ＡＴＫ　５００→１００

『轟龍』から放たれた光は『バーナーズ・キャノン』を焼き払う。
しかし、その攻撃は反射し、逆に光の龍を破壊した。

フィオ：ＬＰ　３７００→３３００

「くっ！」
「さあ、どうするよ。『ＶＥＮＵＳ』と『フレイヤ』の行動が残ってるぜ？」
「『フレイヤ』と『ＶＥＮＵＳ』を守備表示に変更！　そして『死者蘇生』で『轟龍』を復活させ、ターンエンドだ……！」

光神機－轟龍：ＤＥＦ　１８００

フィオ：ＬＰ　３７００
手札：０枚
フィールド
：Ｔｈｅ　Ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ（ＤＥＦ　２４００）、勝利の導き手フレイヤ（ＤＥＦ　１００）、光神機―轟龍（ＤＥＦ　１８００）
：伏せカード１枚

「ドロー！　……、は、は、はははあっはははははははは！」
「！？　気でも狂ったか！？」
「ははははは……、悪ぃ悪ぃ。俺のドロー力も、捨てたモンじゃねぇと思って、な」

この局面（手札０枚）でこいつとか、どんな運だっつの。丁度が欲しかったとは言え、ね。

「魔法カード『天よりの宝札』を発動！　お互いのプレイヤーは、手札が６枚になるようにデッキからカードをドローする？」
「ここで最強のドローソース！？」

分かってるとは思うけど、こいつは原作効果だ。つーか、ＯＣＧ効果弱体化し過ぎだろう。ｗｉｋｉにも『ここまでの弱体化を誰が予想できただろうか』とか書いてあったし。

「魔法カード『守備封じ』を発動！　『轟龍』を攻撃表示にする！」
「う！」

轟龍：ＤＥＦ　１８００→ＡＴＫ　２９００

さて、ここまで伏せカードを使わなかったワケだが、あれは攻撃反応なのか？　『スキルドレイン』に使わなかったからフリーチェーンでは無いとは思うが。
厄介なのは『ミラーフォース』や『魔法の筒』だ。戦局が一発で引っ繰り返る。かと言ってドローしたのは除去系じゃ無い。
『バーナーズ・キャノン』の効果は使え無いし……。突っ込むしかないか？
ん？　いやこの手があったか。

「俺は『バーンクロス』を攻撃表示にし、『Ｆ・Ｓ　ボム・ボム・レゲエ』を召喚！」
『ヒャッハァ！』

ハイテンションに飛び出して来たのは、レゲエの衣装を着た顔に模様のある少年だ。首にはマンガで出てきそうな爆弾の小さな奴を数珠繋ぎにしたようなネックレスがある。

Ｆ・Ｓ　バーンクロス：ＡＴＫ　１０００
Ｆ・Ｓ　ボム・ボム・レゲエ：ＡＴＫ　４００

「俺は更に装備カード『ビッグバン・シュート』を『マグマドラゴン』に装備！　攻撃力を４００ポイントアップさせ、貫通能力を付与させる！」
『力が、溢れてくる……！　少しでも気を抜けば……、この力は危険だな』

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００→２２００

恐らくは『ビッグバン・シュート』破壊時の除外効果の事だろう。
あいつの伏せカードがこいつを破壊するタイプのカードじゃない事を祈る。

ビッグバン・シュート
【装備魔法】
装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

「さあ、このデュエルもフィナーレだ！　『マグマドラゴン』で『

Ｔｈｅ　Ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃！　喰らえ、“ボルカニック・ブレス”」
『女子相手とはいえ容赦はせん！　カァッ！』

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　２２００↓３２００
Ｔｈｅ　Ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ：ＤＥＦ　２４００

「させない！　リバースカードオープン！　『聖なるバリアーミラーフォース－』？　相手モンスターの攻撃時、その攻撃は相手の全ての攻撃表示モンスターに反射する！」

聖なるバリアーミラーフォース－
【通常罠】
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

『マグマドラゴン』の吐いた紅蓮の息吹は白いバリアによって弾かれた。そのまま拡散し、俺の場のモンスターに命中しようとする。
が、その反射した息吹は掻き消え、弾かれていた焔がバリアを貫通して『ＶＥＮＵＳ』を破壊した。

フィオ：ＬＰ　３３００→２５００

「な、どうして『ミラーフォース』が……、っ！？」
「気がついたようだな」

フィオの場の表側表示になっていた『ミラーフォース』はあっちこっちが焼けて穴が開いている。

『イェ～イ！　バンバン行くぜェ！』
「（オッケー！　ナイスだぜ、レゲエ！）」

これをやったのは『ボム・ボム・レゲエ』だ。どこからか取り出した爆弾をポイポイと『ミラーフォース』に投げつけている。

「『レゲエ』は手札の炎属性モンスターを１体墓地に送る事で、１ターンに２度まで相手の発動した魔法・罠の発動を無効にして破壊できる」
「で、でも『スキルドレイン』の効果で無効にできないはず！」

チッチッチッ、と俺は指を振る。

「生憎、『ボム・ボム・レゲエ』の効果で墓地に送った『Ｆ・Ｓエターナル・ランプ』の効果だ。
墓地のコイツを除外することで、除外したターンのみ、俺の場のモンスターは永続魔法、永続罠の効果を受けない。
『スキルドレイン』の方が先に出ていたがこれは手札や墓地の効果は無効にできないし、コストを止める事もできない」
「う、ぐぅ……！」

Ｆ・Ｓ　ボム・ボム・レゲエ（効果モンスター）（オリジナル）
星１
炎属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　３００
手札の炎属性モンスターを１体墓地に送る。魔法・罠・効果モンスターの効果を１ターンに２度まで無効にできる。

「まだ終わってねぇぜ？　行け『レゲエ』！　『フレイヤ』を攻撃！　“ボムシュート・ラッシュ”？」
『それそれドッカーン！　オ・イ・ラは爆弾魔ぁ！』
『きゃあああっ！』
「頼むぞ『ヴォルカニック・ギア・ガイ』！　『轟龍』に攻撃！　“スピン・ファイア・キック”？」
『でいやぁ！』

炎を纏った回し蹴りが『轟龍』の首に決まるのと同時に、『轟龍』の光を纏った拳がカウンターの容量で『ヴォルカニック・ギア・ガイ』に決まった。

「済まない、『ヴォルカニック・ギア・ガイ』。お前を捨て駒みたいに使っちまって」
『構わねえよ。捨て駒ぐれえお安い御用だ』
「恩に着る」
「何ゴチャゴチャ言ってるんだい？　わたしの場にはモンスターは

いなくなったけど、ダメージは無いんだよ？　『バーンクロス』じゃライフを削り切れない。次のターンに手札の蘇生カードを使えば、わたしにもまだ勝ち目はあるよ」

「いや、終わりさ。『ヴォルカニック・ギア・ガイ』のモンスター効果！　このカードがバトルを行い、相手に与えた戦闘ダメージが１０００ポイント未満の時、相手は自分の手札１枚につき４００ポイントのダメージを受ける！」

「なんだって！？」

フィオの手札は『天よりの宝札』の効果で６枚。あのドローソースがこんな形で役立つとは、この場面まで予想しなかったぜ。

フィオの手札が赤色に光ると、その光はフィオに纏わりついた。あれがダメージの元なのだろう。

フィオ：ＬＰ　２５００→１００

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（効果モンスター）（オリジナル）

星４

炎属性／戦士族

ＡＴＫ　１９００／ＤＥＦ　１２００

このカードがバトルを行い、相手に与えたダメージが１０００ポイント未満の時、相手プレイヤーは自分の手札１枚につき４００ポイントのダメージを受ける。また、このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、そのモンスターの表示形式によって以下の効果を得る。

●攻撃表示なら、破壊した相手モンスターの元々の攻撃力の半分の

数値分のダメージを与える。
●守備表示なら、相手の守備力をこのカードの攻撃力が上回った分だけ相手プレイヤーにダメージを与える。

「止めだ！　『バーンクロス』でダイレクトアタック！　“クリムゾンタックル”？」
「うわあああああああっ！」

フィオ：ＬＰ　１００→０

ビー、という音と共にフィオのライフゲージが底を尽きた。悪いね。
まあ手加減はしてないからね。その辺妥協できないし、負けられないってトコ理解しといてね？

黎：ＷＩＮ
フィオ：ＬＯＳＥ

「――約束通り、翔くんは返すよ」
「むくれんな。可愛い顔が歪むぜ？」
「う、うっさい！」

こいつ面白いなぁ。Ｓじゃないのにイジめたくなってくる。危ないなぁ。

「じゃ、お気をつけて。油断したトコをこのバカみたいなのが狙ってるかもしれませんぜ？」
「黎くんヒドイッス！？」
「そうね、気をつけるわ」

今、俺達はボートを漕いでそれぞれの寮に帰ろうとしている。
どうでも良いけど湖の上でボートに立ちながらデュエルする意味ってあったのかな？

「ああ、そうだ。そこのレディ４人？」
「はは、変な呼び方するね。わたし達の事？」
「ん。“ミヤコ”って女の子、知らないか？　多分ブラウンの長髪なんだが」

思案顔の４人。だが、芳しい答えは返ってこなかった。

「残念ながら」
「知りませんわ」
「ゴメン、あたしも」
「ごめんなさいね」
「……そっか。いや、気にしないでくれ」

ここも収穫無し、か。今まで色んな人達に聞いて来たけど、何一つ有力な情報は得られてない。流石にちょっと意気消沈だ。

「キミの恋人？」
「ん？　いや違う」

いきなり踏み込んで来たねフィオ。
……何で微妙そうな顔してんだいジュンコともえ。明日香もかい。

「ならどうして探してるんだい？」
「……、たった一人の、家族だから。それじゃ答えにならないか？」

「ゴメン。踏み込んじゃったね」
「いや、そんな深刻な家庭状況じゃ無いさ。俺とあいつが、ただ単に親を親と認めてないだけだ」

もっと微妙な顔すんなオメェら。
あ、おい十代と翔！　お前らまでなんだその我が侭っ子を見るような目は！
ええい、さっさと帰るぞ！

「ほら撤収だ！　早くしないと、いくら大徳寺先生でも看過してくれないぞ」
「お～う」「了解ッス～」
「テメェら漕がせるぞ！」

なんてやりとりをしながら、もちろん手を振る事も忘れずに俺達は湖を後にした。
これにて、偽ラブレター事件は閉幕！

ＳＩＤＥ：フィオ

なんなんだよ、アイツ。わたしの事を可愛いとか。
冗談じゃないよ。わたしのどこが可愛いのさ。こんな蓮っ葉で男勝りなヤツなんて。

「フィオ、どうしたの？」
「え、いや何でも無いよ！」

そう、何でも無い。何でも無い筈なのに、どうしてこんなに顔が熱いのさ！

誰か教えてよ！

SIDE：？？？

あっはっははっはははああっははっははははははあっはははっはははは！

みぃいいいっけた！

あはははははあっははははははっはははああはははあっはああはあはは！

to be continued

ＳＴＯＲＹ５：偽ラブレター事件（後書き）

黎「湖上での戦いが終わり数日後、月に１回の試験が始まる」

フィオ「じ、実技で頑張るから！」

黎「……、素直に誰かに教えてもらえ」

そして次回、とうとう彼女が登場！　アイツとの関係も明らかに！

黎・フィオ「「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ６：月一試験一序・雷ＶＳ炎』！　お楽しみに！」」

彼女の正体にがっかりしないで下さいね？

黎「俺には保証できん」

ＳＴＯＲＹ６：月一試験一序・炎ＶＳ雷（前書き）

今回とうとう黎が探していた少女、ミヤコが登場！

黎「しかし、それは望んでいた再会では無かった！」

月一試験もお楽しみに！　それでは新たなる展開の予兆編、スタート！

フィオ「そんなサブタイトルだっけ！？」

ＳＴＯＲＹ６：月一試験一序・炎ＶＳ雷

ＳＩＤＥ：無し

今、オシリスレッドの一室で試験勉強が行われている。メンバーは４人。部屋の持ち主でＧＸ主人公の十代、一番の成長株の翔、コアラみたいな感じの隼人、そして隣室の黎だ。

といっても、まともに勉強しているのは隼人と黎だけだ。

なんでも隼人は、流石にテストの最低ラインはクリアしないと、留年している身だからいつ退学になるのか分からないという。

「ま、理由は何でもいいさ。テストは勉強する理由まで問わないからな」

「教えてくれてありがとうなんだな。オレ、頭あんまし良くないから、大助かりなんだな」

「お安い御用だ」

黎は転生前の高校では学年次席の頭脳の持ち主で、更に大学も国立にストレートで合格した大学３年生。高校１年生の勉強はもう復習程度でしかない。

で、十代と翔が何をしているのかと言えば……。

「ぐが～、すこ～。ぐが～、すこ～」

「神様……。どうか、どうか僕に奇跡を！」

「……、お前ら真面目にやる気無ぇだろ！」

十代はベッドで爆睡。翔はひたすら魔法カード『死者蘇生』に向けて祈りを捧げていた。

十代は実技で少なくとも留年・退学は無いとして、翔は1分でも多く勉強をした方が良いのではないかと黎は思った。

ピン！　と黎は1つ面白い事を閃いた。

「翔、翔？」

「何スか、僕は今忙しいんス！」

「（祈りに時間を割くなよ……）この10枚のカードの内からどれか1枚引いてみな。運勢を占ってやる」

「やる！」

神頼みなのだから占いにも頼りたいのだろう。思いっきり喰い付いて来た。

バッ、とデュエルモンスターズの10枚のカードを手札に持つ形で広げる。

「んんんんんんんん……、コレ！」

少々悩み、そして手にしたカードは……。

『降格処分』

「ぎゃあっ！」

翔は泡を吹いてぶっ倒れた。

「そんなショックか……」

「翔、大丈夫かぁ？」

因みに残ったカードは……

『天使の施し』

『奇跡の降臨』

『奈落の落とし穴』

『強烈なはたき落とし』

『終焉の王デミス』

『あまのじゃくの呪い』

『ヘイト・バスター』

『門前払い』
『墓場からの呼び声』
５分の４の確率で酷い結果だったのは秘密である。

ＳＩＤＥ：黎

「はい、そこまでなのニャー」

月一試験は大きく分けて筆記と実技がある。筆記は主要五教科。つまり国・数・英・社・理だ。
俺と十代は遅れて来た。勿論、トメさんを手伝ったからだ。因みに俺と十代は隣同士（翔は俺の反対側）なので、せめて名前と１問目くらいは記しておくように忠告しておいた。

『レアカードォオオオオオオオオオオオオオオオ！』↑翔の他、多数の生徒達
「張り切ってんなぁ、翔のヤツ」
「すか～」↑十代
「また寝てるし……」

そう、今日はレアカードが入荷される日。多くの生徒が入荷されるレアカードを求めて購買部へ殺到する。
行かないのは無駄である事を知っている俺、そもそも興味の無いフィオ、デッキの事を信頼している十代と明日香、デッキのバランスが崩れるのを恐れた大地（エアーマン）ぐらいだ。

……？　大地の所に何か変なテロップが流れたような？

ま、いっか。気のせいっしょ！

「十代、起きろ。購買にお昼買いに行くんだろ？」
「んご？　う、あぁ～。そだっけ」

半分寝てんな、コイツ。
トボトボと帰って来た翔を引き連れて購買へ行くと、トメさんが俺達用にパックを残しておいてくれた。ラッキー！

中身は……、む。ポピュラーだが良いカードだ！
大抵のデッキには合うし、投入しても問題無い。さっそくデッキに差すか！

――試験会場

実技試験。十代は万丈目とのデュエルに『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』で止めを刺して見事に勝利した。

いいなぁ、『進化する翼』。コストはデカイが強いからなー。

で、俺が呼ばれて会場に下りて来ました。すでに着いていた筋肉質な相手の服は青色でした。

「で、十代と同じ理由だとは思いますが一応聞いときます。何故レッドの俺が、ブルーの生徒と戦わなくちゃいけないんですか？」

「もちろん、実力が同じ生徒ォが、オシリスレッドにいないからなのーネ。だかーら、オベリスクブルーの生徒ォとデュエルするのーネ」

「……、分かりました」

ま、どうせレッドの中でも実力のある奴を叩こうとかいう魂胆なだろうけど。

誇張とか、そういうのでも何でもなく俺は強い。というか、この学園の生徒達ってポーカーフェイス下手過ぎ。

罠張ってるのバレバレだし、ブラフだってモロ分かり。正直、ヘタなイエローやブルーに余裕で勝てるくらいだ。

「遅ぇぞ、後輩でドロップアウトの分際で。オレ様はここで5分近く待ったぞ」

悪かったな。俺が呼ばれたのは1分前なんだよ。文句なら呼び出した人あたりに言ってくれ。

「ところで、ドロップアウト。おめぇ珍しいカード持ってんだってな」

「ん、まあ」

「寄越せ。今すぐにだ」

……、コイツ頭大丈夫か？

「んだとゴラァ！」
「あ、声に出てたか。まあ、こんな筋肉ゴリラもどきに謝る言葉なんて持ち合わせて無いがな」

いやはや、すみませんねぇ。いきなり寄越せだなんて言われて驚いちゃいまして。

「……多分、思ってる事と喋ってる事が逆になってるのーネ」
「あれ？」

ま、いっか。こんな頭悪そうなヤツに差し出すカードなんざねぇし。

「こんの、クソがぁあああああああぁぁぁあああああああああああああっ！」
「おーおー、怒るとよりゴリラっぽい」
「コロスッ！」

殴りかかって来たが、ヒョイと避けて逆方向に流す。

「やーい筋肉ダルマー。殴る事しか脳にねぇのかー」
「ガガガガッガアアアアアアアアアアッ！」

こんだけ挑発すりゃ十分かな。

「ほらほら、実技っつても、デュエルでしょうがー。殴る蹴るじゃ成績決まんないぜー？」
「コロスッ！」

おー、コエ。なんか人間として色々大切なモン失ってるっぽい。

「早くデュエル始めるのーネ……」

「こりゃ失礼しました。この類人猿がキレて殴りかかって来たモンでね」

「＃％±“％¶‘＆◎）＞Ｇ＊（■＝※～§―£＜＊％！」

いや人の言語喋れ。何言ってるか分かんねえよ。

「ほいじゃ、始めるぞ」

「待て。ちょっとこっち来い」

先生が下がり、ディスクを展開した所で、ゴリラが俺を呼び止めた。

ちっ、もう冷めてやがる。

「何さ」

「アンティルールだ。オレ様が勝ったらそのデッキ丸ごと寄越しやがれ」

「……アンティは校則違反でしょうが」

「知るか。だったら譲れ」

コイツの頭が本気で心配になってきた。奪うのはダメだからといって勝ったら譲る形で相手に差し出せというのか。そんなのカツアゲと同じだろうが。チクられたら終わりだぜ？

大徳寺先生、鮎川先生、鮫島校長と、エリート意識無く生徒に接する教師は結構いるんだぞ？

ん、待てよ。いいチャンスだ。

「いいでしょう。ならばそっちも何か賭けてもらいましょう」
「意味の無ぇ仮定だな。オレ様が負けるとでも思ってるのか、テメェ」
「賭けるモノ決めないんなら俺もデッキを賭ける訳にはいかない。お互いが賭けるモン決めて初めて賭けは成立するもんだ。そんな事も分からないのなら、アンタはエリートの素質がまるで無いというこったな」
「チッ！　なら俺はこれをくれてやる！」

そういうと、男が出したのは『隠された魔導書』や『龍炎剣の使い手』といったこちらでは中々手に入らないカード達だった。

隠された魔導書
【罠カード】
自分のターンでのみ発動可能。自分の墓地の魔法カード2枚を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

龍炎剣の使い手（効果モンスター）
星4
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１２００
自分フィールド上に「龍炎剣の使い手」以外のモンスターが召喚された時、そのモンスターのレベルを1つ上げ、このカードの攻撃力をエンドフェイズ時まで３００ポイントアップする事ができる。

つーか、少なくとも『龍炎剣の使い手』は未来のカードなのでは？　レベルがどうこう書いてあるし。

「いいでしょう。それで手を打ちましょう」
「へっ、後悔すんなよ？」

『デュエル！』

「先攻はくれてやる。精々足掻いて見せろ、ドロップアウト！」
「アンタこそ、ピエロにならないようにな！　ドロー！」

さて、当たり前だが相手はどんなデッキか分からない。先攻は意外と不利なパターンでもある。
ならここは安全に防衛策を張るべし。

「『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』を守備表示で召喚！　リバースカードを１枚伏せて、ターン終了！」

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　７００

黎：ＬＰ　４０００
手札：４枚

フィールド
：Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　７００）
：伏せカード１枚

「オレ様のターン、ドロー！」

さてどう来る？

「はっ、防御固めるだけたぁな、随分と臆病者だぜ！　オレは『コストダウン』を発動！　手札の『雷電娘々（らいでんにゃんにゃん）』を墓地に送って、手札の『充電池メン』をレベル３にし、召喚！」

充電池メン：☆５→３／ＡＴＫ　１８００

！　雷デッキか！

コストダウン
【通常魔法】
手札を１枚捨てる。
自分の手札にある全てのモンスターカードのレベルを、発動ターンのエンドフェイズまで２つ下げる。

充電池メン（効果モンスター）
星５
光属性／雷族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１２００
このカードの召喚に成功した時、自分の手札またはデッキから「充電池メン」以外の「電池メン」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に表側表示で存在する雷族モンスターの数×３００ポイントアップする。

「こいつのモンスター効果を発動！　手札から『電池メン一単三型』を特殊召喚！」
『はっ！』

電池メン一単三型：ＡＴＫ　０

っ！　『電池』シリーズのスーパーアタッカー！　こいつは【雷デッキ】より【電池デッキ】と考えた方が良さそうだな。

「……次は『地獄の暴走召喚』か？」
「おうよ！　『地獄の暴走召喚』発動！　俺は『電池メン一単三型』を２体追加！」

「俺のモンスターはデッキに1体しかいない。特殊召喚はできない」
「そうか、残念だったなぁ！」

電池メン－単三型：ＡＴＫ　０
電池メン－単三型：ＡＴＫ　０

「1ターンでここまで並べるとはね。しかも『単三型』は自身の効果でパワーアップする」
「その通り。『単三型』はオレ様のフィールド上の同じ表示形式の『単三型』の数だけその表示形式の数字が１０００上がる。
つまりオレ様の場の『単三型』はこうなる！」

電池メン－単三型：ＡＴＫ　０→３０００
電池メン－単三型：ＡＴＫ　０→３０００
電池メン－単三型：ＡＴＫ　０→３０００

電池メン－単三型（効果モンスター）
星３
光属性／雷族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
自分フィールド上の「電池メン－単三型」が全て攻撃表示だった場合、「電池メン－単三型」１体につきこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
自分フィールド上の「電池メン－単三型」が全て守備表示だった場合、「電池メン－単三型」１体につきこのカードの守備力は１０００ポイントアップする。

地獄の暴走召喚
【速攻魔法】
相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力１５００以下のモンスター１体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。
その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。
相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

電池メン一単三型の体が赤く光り、巨大化する。『５Ｄ，ｓ』の『占い魔女』でもこんな感じだったなあ（カーリーさんがアルカディア・ムーヴメントに潜入した時のヤツ）。

「そして『充電池メン』はオレ様の場の『電池メン』と名のつくモンスター×３００ポイント攻撃力と守備力がアップする！」

充電池メン：ＡＴＫ　１８００↓３０００／ＤＥＦ　１２００↓２４００

「さあ1キル達成だ！　死ね、“テトラ・プラズマ・キャノン”？」

４体の電池型モンスターが頭上に電気の塊を作成。それを1つに纏めると、巨大なビームにして射出した。

「生憎、デュエルはパワーだけじゃ勝てない。リバースカードオープン！」

発動するのは、さっきのパックに入っていたあのカード。さあ、思いやりの力を見るがいい！

「『聖なるバリアー ミラーフォース ー』？」

「なんだと！？」

雷の如きビームは半透明のシールドにぶち当たると、４つに分かれ、それぞれの電池型モンスターに跳ね返った。

「はい全滅。せっかく苦労したのに残念でした」

「まだだぁ！　『闇からの奇襲』を発動！　このターン墓地に送られたモンスターを復活させてもう1度バトルフェイズを行う！」

げ、未ＯＣＧカード！？

闇からの奇襲（未ＯＣＧカード）

【魔法カード】

発動ターンに破壊されたモンスターをフィールドに特殊召喚し、プレイヤーはエンドフェイズにもう一度バトルフェイズを行う。

電池メン－単三型：ＡＴＫ　０→３０００
電池メン－単三型：ＡＴＫ　０→３０００
電池メン－単三型：ＡＴＫ　０→３０００
充電池メン：ＡＴＫ　１８００→３０００

ウワーオ。なんてこったー！
なんてな！　俺に主人公補正かかってるの知らねぇだろ（誰も知れない）！

「『充電池メン』で攻撃！　『バッテリー・キャノン』？」
「『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』は攻撃力１９００以上のモンスターとのバトルでは破壊されず、ダメージも発生しない！」

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（効果モンスター）（オリジナル）
星２
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　７００
≪効果≫
このカードは攻撃力１９００以上のモンスターとのバトルでは破壊されず、いかなるダメージも発生しない。守備表示のこのカードがバトルを行った時、このカードを攻撃表示に変える事で、相手フィールド上のモンスターの表示形式を２体まで変更できる。

「更にモンスター効果発動！　『ウィスプ』を攻撃表示にし、相手モンスターの表示形式を2対まで変更できる！　俺は『電池メン一単三型』1体と『充電池メン』の表示形式を逆にする！　“リバース・ブルーフレア”？」

ウィスプが手から飛ばした青白い炎は、2体の電池を包み込み、熱さにやられたのか、『電池メン単三型』は守備表示に変わった。

「表示形式が変更された事で、『単三型』の能力値が変化する」

電池メン一単三型：ＡＴＫ　３０００→０
電池メン一単三型：ＡＴＫ　３０００→０
電池メン一単三型：ＡＴＫ　３０００→ＤＥＦ　０
充電池メン：ＤＥＦ　２４００

「『ウィスプ』は攻撃力１９００以上のモンスターとのバトルでは破壊されないし、ダメージも発生しない。残ったモンスターでは何もできないが、どうする？」

「……、ターンエンドだ！」

ゴリラブルー：ＬＰ　４０００
手札：０枚
フィールド
：電池メン一単三型（ＡＴＫ　０・ＡＴＫ　０・ＤＥＦ　０）、充

電池メン（ＤＥＦ　２４００）
：伏せカード無し

「俺のターン、ドロー！」

お、パックのカード2枚目だ。

「速攻魔法『皆既日食の書』を発動！　場の全てのモンスターはリバース状態になる！」
「しまった！」

どんな強力な効果持ちでも、裏側表示で満足にそれを発揮できるモンスターは意外と少ない。
『電池メン』はその類では無いので、裏側表示なら、ただの能力値の低いバニラモンスターと変わり映えしなくなる。

皆既日食の書
【速攻魔法】
フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て裏側守備表示にする。
このターンのエンドフェイズ時に相手フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備表示にし、その枚数分だけ相手はデッキからカードをドローする。

「俺は『F・S　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃表示で召喚！　そして『太陽の書』を発動！　『ウィスプ』を表側表示にする！」

太陽の書
【通常魔法】
裏側表示でフィールド上に存在するモンスター1体を表側攻撃表示にする。

「バトル！　『ウィスプ』と『ヴォルカニック・ギア・ガイ』でセットされた『単三型』を攻撃！　喰らえ、“青色の炎弾”、“スピン・ファイア・キック”？」
『黒焦げになりな！』
『消し飛べぇ！』

F・S　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK　1900

伏せられていた電池型モンスターは青い炎と火炎の蹴りで焼かれ、吹き飛んだ。毎度のことながら、なんか熱いのは気のせいだろうか。

「『電池メン一単三型』撃破！　更に『ヴォルカニック・ギア・ガ

イ』のモンスター効果発動！　相手の守備表示モンスターを破壊した時、貫通ダメージを与える！」
「なんだとぉ！？　あっ、づぁあああああっ！」

ゴリラブルー：ＬＰ　４０００→２１００

「１枚カードを伏せて、ターンエンド。エンドフェイズに、アンタは裏側表示になったカードを全て表にし、その枚数分カードをドローする」

電池メン一単三型：ＡＴＫ　０→１０００
充電池メン：ＡＴＫ　１８０００→２４００

この場合は『充電池メン』と『電池メン一単三型』が１体ずつ、計２体いるので、２枚ドローする。

「ちっ、ドローだ」

黎：ＬＰ　４０００
手札：２枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＡＴＫ　８００）、Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（ＡＴＫ　１９００）

：伏せカード1枚

「く、このぉ。ドロップアウトの分際で……！　ドロー！」

さて、『単三型』を2体破壊したのは失敗だったかな？　残ったモンスターで反撃されたたら2体ともやられちまうなぁ。

まあ、『充電池メン』狙っても『ヴォルカニック・ギア・ガイ』は破壊されたし、あんまし変わんないかな？

実際相手は戦局が思い通りに進まなくて歯噛みしている。

「カードを1枚セットする。オラお返しだ！　喰らえ、2体のモンスターの攻撃！　“ダブル・エレクトリック・ショック”？」

「伏せカードの警戒ぐらいしろっての！　『ブルー・オン・ブルー』を発動！　お前の2体のモンスターはお互いを攻撃しあう！」

「なぁにぃっ!?」

あ、なんか聞いた事あるリアクション。お餅が突きたくなってきたなぁ。“男は黙って！”てヤツ。

ブルー・オン・ブルー（未ＯＣＧカード）

【通常罠】

相手フィールド上にモンスターが2体以上存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上の攻撃モンスター以外の表側攻撃表示モンスター1体を選択する。

選択したモンスターと攻撃モンスターを戦闘を行いダメージ計算を行う。

ズドドォォオン！

はい、自爆。またガラ空きだね。
ダメージ計算もついているからタチ悪いんだよね、これ。

ゴリラブルー：ＬＰ　２１００→７００

「ぐっ、魔法カード『治療の神ーディアン・ケト』と『ご隠居の猛毒薬』を発動！　俺のライフをそれぞれ１０００ポイント、１２００ポイント回復してターンエンドだ！」

治療の神　ディアン・ケト
【通常魔法】
自分は１０００ライフポイント回復する。

ご隠居の猛毒薬

【速攻魔法】
以下の効果から1つを選択して発動する。
●自分は１２００ライフポイント回復する。
●相手ライフに８００ポイントダメージを与える。

ゴリラブルー：ＬＰ　７００→２９００

ゴリラブルー：ＬＰ　２９００
手札：０枚
フィールド
：モンスター無し
：伏せカード１枚

というかコイツ何なのさ？　先日の万丈目の取り巻きの奴の方がまだ強かったんだけど？　クロノス先生が刺客として送って来たワケだから、少しは腕が立つと思ったんだけど……。とんだ期待ハズレだな。

「ドロー。魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを２枚ドロー」

へぇ、こいつが来たか。

「おっと、伏せカードの『スケープ・ゴート』を発動！　羊トークンを４体特殊召喚！」

『メエー』

あ、ちょっと可愛い。

関係ないけど、スケープとエスケープって語源同じかな？

つーかそれ以前に少なくともダメージステップ時に発動するべきでは無いだろうか？　そうすれば少しは戦況がまともになりそうなんだが。

（これでこのターンは大丈夫だろう。貫通ダメージを受けても）

「貫通ダメージを受けてもライフが残る、か？　甘いな」

「なにぃ！？」

「『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』を召喚！」

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００

モンスターの数に悩んだ時はコイツです。援軍を呼ぶのに最適！

『お、夕餉（ゆうげ）は羊の丸焼きか？』

違うから。

それ以前に食えんのか、アレ！？

「モンスター効果で、デッキから『Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール』

を特殊召喚！」
『行っくよー！』

Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール：ＡＴＫ　３００

出現するのはボンボンを持ったフレアスカートを履いたチアリーダー風の女の子。多分“炎のフレアと、スカートの“ヒダ”を表すフレアが掛かっているんだろう。

『おおーっ』

おいこら、喰い付くな男子。女子に白い目で見られてっぞ？
まあ可愛いとは思うけどサ。
ちなみにこの子の能力は『勝利の導き手フレイヤ』とおおよそ同じ。

「『フレア・チアガール』のモンスター効果を発動！　俺のフィールド上の『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）』と名のつくモンスターは攻撃力と守備力が５００ポイントアップする！」
「は、はぁあああああああ！？」
『フレフレッみんな、頑張れ頑張れみんな、オー！』

多分あのゴリラブルーを始め、殆どの人には見えてないとは思うが、『フレア・チアガール』は今、手持ちのボンボンを使って皆の応援をしている。リズム良く踊り、こっちまで力が湧いてきそうだ（スカートの下にはちゃんとスパッツを履いてます。そういう意味では無いですよ？）。

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００→２４００
Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＡＴＫ　８００→１３００
Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００→２３００
Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール：ＡＴＫ　３００→８００

「俺は魔法カード『融合』を発動！　手札の『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』と場の『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を融合！　融合召喚！　燃え上がれ、『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』？」

『てえぃ、やあっ！』

入試試験以来の再来、銀色の鎧を身に纏った騎士が降臨。炎を具象化した模様が雄々しさを連想させる。

Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００

「バトル！　モンスター全員で羊トークンに総攻撃！
“青色の炎弾”？
“ボルカニック・ブレス”？
“チアリング・スパーキング”？
“空破炎撃斬”？」

俺の掛け声の共に青い火の玉、灼熱の息吹、火花の弾丸、業火の剣が次々と羊に決まる。ゴウゴウと火の手が上がり、羊は一匹残らず消し炭になった。

「そしてリバースカード、オープン！　速攻魔法『融合解除』？
『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』の融合を解除し、現れろ『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』、『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』？」
『はぁっ！』
『てやぁっ！』

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　１５００
Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００

「さて問題。俺の場には攻撃力１５００と１９００のモンスター。アンタはこの攻撃を受けると、ライフはどうなる？」
「ぜ、ゼロ……」
「王手（せいかい）。“バーナーズ・バズーカ”？　“スピン・ファイア・キック”？」

まず、『バーナーズ・キャノン』の肩のバズーカ砲から白い炎が噴き出た。羊トークンを焼いたら骨も残らなさそうだ。

「ぢっ、あっちゃあああああああああっ！」

ゴリラブルー：ＬＰ　２９００→１４００

そして再び灼熱の回転キックが決まり、ブルーを蹴り飛ばす。かと思いきや、炸裂した瞬間爆発した。
毎度毎度、逐一爆発するねぇ、アクション薄そうなモンスターが

やられる時とか、すごい威力の技が炸裂した時とか。

「ぎゃあああああああああっ」

ゴリラブルー：ＬＰ　１４００→０

黎：ＷＩＮ
ゴリラブルー：ＬＯＳＥ

はい、俺の勝ち。

――――デュエル終了後

「すっげぇな、黎！　ブルーにノーダメージで勝ったぞ！」

リングを降りると、十代が駆け寄って来た。

「はは、マグレだよ。十代だって。残りライフ１０００の万丈目を、丁度攻撃力１０００で削りきるとか、あのピンチを魔法カード１枚で覆すとか、凄過ぎだろう」

「ははは、二人ともバケモノッス……」

ちなみに十代の隣で空笑いしている翔はギリ勝ちだったらしい。テストも途中で寝ちゃたし、ま、今回は昇級は諦めな。

「うむ、また１つ『Ｆ・Ｓ』への見聞が広まったよ」

「お疲れ様、二人とも。ブルーに勝つなんて凄いわね」

「これなら二人のイエローへの昇級は間違い無いんだな」

「ふふ、キミの強さには惚れそうだよ」

少し遅れて大地と明日香、隼人にフィオもやって来た。そんな凄いかな？　ノーダメに拘らなければ、伏せカードを警戒しないアイツなんて、結構容易く倒せるぞ？

「ま、カードはもらったし？　得るモンは大きかったよ」

そう。この時はそう思っていた。月一試験が終わって、帰って、明日からまた学園生活の再開（リスタート）。

それで終わりだと思っていた。

その予想は、この後１８０度どころか、５４０度引っ繰り返される事となった。

ブゥンという音と共に、巨大なモニターに鮫島校長が映った。

『皆さん、お疲れ様でした』

昇級のお話かな？　十代は多分断るだろうし、俺もそのつもりだけど。

『さて、カードを最後まで信じ続けて見事勝利した遊城　十代くん、そして鮮やかなタクティスで上級生のブルーをノーダメージで倒した遊馬崎　黎くん。君達のラーイエローへの昇格を認めたいと思います』

『おめでとう』

『おめでとう！』

「昇格、か。十代はどうする？」

「俺？　俺は……、いいかな。オシリスレッドの方が落ち着くし」

「同感。鮫島校長！」

スピーカーかなんかで声は拾っているとは思うが、一応声は張り上げる。観客の皆さんにも聞こえるようにね。

「済みませんが！　俺も十代も！　昇格はお断りさせて頂きます！」

『なんですと！？』

『えええええええええええええっ！？』

ま、驚くだろうな。観客も騒めいているし。

適当な理由を作った方が良いかな？

「俺達は！　まだ！　全然強くありません！　今日勝ったのだって！　きっと運の要素が！　強く入ってます！　だから！　もっと強くなって！　昇格に相応しい実力を！　身につけるまで！　レッドで！　修行を積みます！」

少々嫌味っぽいが、理由としては十分だろう。俺はまだ十代の傍を離れるワケにはいかない。原作に関わっていく身である以上、十代が中核となるのだから、離れればそれだけ情報不足で動けなくなる。共に行動しないと危ない。

『……分かりました。そういう事でしたら、今回の昇格は見送らせて頂きます』

ふう、普通はいないだろうな、昇級を蹴る奴なんて。

取り敢えず、次の原作に備えて色々準備しなくちゃな。

なんて考えていた時だった。

ドガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！

うわあああああああああああああああああああああああ！

キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

突如、会場の方で悲鳴と爆発が起きた。

「な、何だ一体！？」

すぐに俺は視覚を鋭くし、爆発箇所をチェックした。

幸い、重傷を負った人はいないらしく、悲鳴も爆発に驚いただけらしい。

「人……？」

煙の中に一人、誰かがいる。煙が邪魔で巧く見えないが、小柄で髪が長い。

やがてその何者かは煙の中から姿を現した。

「……！？　お、い……、嘘、だろ…っ？」

出てきたのは1人の少女。茶色のロングは腰まで伸びている。

フィオも同じ茶髪だが、彼女は赤っぽいのに対し、こちらは黒っぽい。ハーフか日本人かの違いだろう。

解りやすく言えば、フィオの髪はレンガ、煙の中から出て来た少女は腐葉土の色と考えれば、同じ茶色でも違いが分かるだろう。

少女はゆっくりと顔を上げた。その顔は、若干の俺と同じく変化があったが、見間違いようが無かった。

「ミ……、ヤコ……！」

そう、俺が探していた少女、ミヤコ、遊馬崎（ゆまさき）　都（みやこ）だ。
久々の再会。だが、素直に喜べなかった

「（ニタァ（・・・）……）」

彼女の笑い方が凄く気にかかったからだ。
何故？　何故そんな笑みを浮かべる？
何がお前に起こった？

『な、なんだねキミはっ！？』

焦りを浮かべた鮫島校長は誰何の問いを投げかける。
やはり、都はニタニタと笑っている。

「ふふふ……？　あたし……？　あたしはねぇ、ユマサキ　ミヤコお……」

『ゆ、ユマサキ!?　遊馬崎って、あのさっきの昇格蹴った奴と同じ!?』

『え、い、妹さんか何か!?』

「黎、あいつなんなんだよ!?　お前と同じ名字だぞ!?」

「キミに何か関係があるの!?」

十代とフィオが投げかけて来た質問に対し、俺は静かに答えた。

「ああ。あいつは俺の、

義妹だ」

to be continued

ＳＴＯＲＹ６：月一試験一序・炎ＶＳ雷（後書き）

黎「久々に再会した俺と都。ところがそれは最悪の再会だった」

フィオ「黎、死ぬなぁあああぁっ！」

黎「俺は、この程度では、死なん！」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ７：月一試験一次・爆炎の義兄と暗黒の義妹』！　お楽しみに！」

黎・フィオ『取られた！？』

次回、遊馬崎義兄妹の隠された能力が明らかになります。
怒涛の新展開への予兆を見逃すな！

ＳＴＯＲＹ７：月一試験一次・爆炎の義兄と暗黒の義妹（前書き）

今回はリアルファイト！　そして若干の鬱要素もあり。

フィオ「しかも（義理だけど）兄妹で！」

黎「何が、お前の身に起こったんだ……！」

黎と都の隠された身体能力、そして過去バナの伏線も！　では、スタート！

ＳＴＯＲＹ７：月一試験一次・爆炎の義兄と暗黒の義妹

ＳＩＤＥ：無し

義妹。
その言葉は会場の全員に聞こえた。

『義妹！？　義理の妹！？』
『なんだそのギャルゲーもどきの設定！？』
『というか、あの爆発、何やったのあの子！？』

当然、リングの上から降りていた黎のそばにいた皆、十代、翔、隼人、大地、フィオ、明日香にも聞こえている。

「れ、黎！　確かお前妹はいないって！」
「義妹はいないとは言っていない」
「いやそうだけどさ！」

屁理屈だ。妹と義妹の差は、精々血縁関係程度。妹とおおよそ変わりは無い。
なのに黎は言わなかった。その理由は彼が『妹』と『義妹』を同一視していない点に尽きる。

「ひさしぶり、とでも言うべきか、我が愛すべき義妹（いもうと）よ」

「くふふふ……」

皮肉も込めた黎の挨拶を聞き、都はただただ不気味な笑いを浮かべているだけだった。

「変わったな、お前は。前は礼儀正しい良い子で、そんな変な笑い方はしていないかった」

「くふふふ……。お義兄(にい)ちゃん、ヒトは変わるモノだよ」

「変わりすぎだ」

傍から見れば微笑ましい義兄妹の遣り取りに……、見えない。原因は都から上がる黒い何かだ。

霧や靄の様に見えるし、オーラの様にも見える。

「……、敵の手に堕ちたと聞いたが、その辺どうなんだ?」

「ははははっ！　堕ちたぁ？　あっはははははははははははっ！」

黎の質問に突如大声を上げて都は笑う。嗤う。嘲笑う。

「確かにぃ、そっちから見れば“堕ちた”なんだろうけど。あたしからすれば“昇った”とでも言えるんだよ、お義兄ちゃん?」

「……」

“昇った”？

“堕ちた”と対をなす言葉のつもりなのだろうか？

ゆらあ、と都が黎の方へと歩く。黎も静かに都に歩み寄る。

二人は対面する形で向かい合い、立ち会う。

ニィ、と都が笑う。

ムッ、と黎が表情を消す。
向かい合い、沈黙し、そしてその静寂を破ったのは黎だった。

「俺に用か、都？」
「うん、えっとねぇ」

「死んで？」

次の瞬間、真っ黒な剣が黎の心臓を貫通し、黎の鮮血が飛び散った。

ＳＩＤＥ：フィオ

「え……？」

わたしは最初、それを認識できなかった。

黎の胸部を黒い剣が貫通している事とか、パタパタと血が滴り落ちている事とか。

つまり黎が死んだ事を頭が認めなかった。

「あ、ああ、あああああああああああああああああああああああああああっ！」

でも、時間と共に黎の死は脳の隅々まで染み渡った。つい１分前まで生きていた友人はもういない。

命を落としてしまった。

死んでしまった。

「れ、黎！　れぇえええええええええええい！」

「黎！」

『うわあああああああああああ、殺人だぁあああああ！』

騒ぎ始めた周りの声も耳に入らない。ただただ、仲の良かった男子が死んだ。それが頭の中を支配し、リアクションが取れない。

「あ、か、は……っ！」

「フィオ！？　しっかりして！」

苦しい。呼吸が上手くできない。混乱は呼吸器官にまで影響を及ぼしているらしい。

「フィオ！？　どうした！？」

「神山くん！」

「フィオが、フィオが呼吸が上手くいかない所為で窒息しそうなの？」

遊城くんや三沢くんが何かを言ってる。明日香が何かを叫んでいる。

でも聞こえない。何を言っているのか理解できない。

ひょっとしたらわたしは黎の事が好きだったのかも知れない。自分でも分からない程の淡い恋心を持っていたのかも知れない。

でも、確かめられない。彼はもう死んでしまったのだから。

「酷い事をするな、都」

え？

我が耳を、きっとわたしを含む誰もが疑ったハズだ。

死んだ人が、元気な時と変わらない声で喋っているんだから。

ＳＩＤＥ：無し

「俺じゃなかったら死んでいたぜ？」

「お義兄ちゃんだからヤッたんだけど？」

胸部を剣で串刺しにされた黎は、しかし、ピンピンしていた。

ダークシグナーの様な黒い眼からは本意が読み取れない。

「……、義兄ちゃん前に言ったよな。無意味に人を傷つけるような娘（コ）になるな、って」

「くふふ……。だから『死んで』って言ったんだけど？　ほら理由がある」

これも屁理屈だ。

少なくとも出会い頭に『死んで』の一言で胸に刃をぶっ刺す理由にはならない。

「……吸収できない。鉄じゃないのか」

「あはは！　当ったり～！　邪神様の力で作り上げた魔剣だよ？」

邪神『様』。都がそう言ったのを黎は聞き逃さなかった。

「なるほど」

だから“昇った”か。

邪神に対する信仰でも植えつけられたのだろう。機会は幾らでもあった。黎が転生してから既に一ヶ月少々。十分な時間だ。

（そしてコイツは、それだけの長い間、俺がいない空間で敵の手中にいたってワケか）

ギジュリ……。黎胸から剣を引っこ抜き、放り投げながら自分を責めた。

ピチャッ、と少量の血が滴り落ち、剣は黒い霧に変わって消えた。もっと早く動けば良かった。或いはまだ転生し切っていないタイミングで邪神の所へあの神様に送ってもらえば……。

ギリリ、と歯を軋ませる。だが、手遅れだ。

「シナリオは最善と最悪を考える。それがお義兄ちゃんの考え方だったよね」

で、これはどう？

解ってる癖に、都は尋ねた。これが最善なハズが無いのに。

黎の目に血が集まる。怒りの証拠だ。

「最悪だよ……！」

黎はそう言いながら半歩右に動いた。一刹那後に心臓があった場所を黒い槍が通過した。

そのまま左腕を振り降ろし、金属音を出して槍を叩き壊した。

「そっか、にひひ……。じゃ、改めて死んで、お義兄ちゃん？」

「組み手で1度でもお前が勝った事あったか、義妹？」

嘲る様子も無く、淡々と黎は聞く。

その問いに都はチッチッチッ、と指を振る。

「組み手じゃなくて殺し合いだよ」

「上等。バトルスタートだ」

今は戦うしかない。今のこの少女は自分の知っている遊馬崎　都ではない。別の何者かだ。

殴ってでも目を覚まさせてやるしかない。どの道、コイツは殺しても死なない奴だ。多少本気を出しても大丈夫だろう。なんだったら心臓や脳を抉り出して直に電流を流して元に戻しても良い。

「行くよ、お義兄ちゃん？」

「今のお前に義兄（あに）と呼ばれたくは無いな、都」

都の振った剣を、黎は左手で受け止めた。

ガギン！　金属音が鳴り響き、黎の振り降ろした右手を都は黒い盾で受け止める。

一旦距離を跳んで取り、二人は走って離した距離を詰め合った。

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

「はあああああああああああああっ！」

黎の蹴りと右の拳が、都の黒い双剣の刃と交差し、ぶつかり合った。

ガッギィィィィイイイイイイイイインッ！

ＳＩＤＥ：十代

俺達は今信じられないモノを見ている。
突然爆発が起きたと思ったら女の子が出て来て、しかもその子は黎の義理の妹さんだったんだ。
更にその義妹さんに心臓を貫かれたハズの黎がピンピンしていて、いきなり喧嘩が始まっちまったんだ。
まだまだ信じられない事は続いてるぜ？　黎の体がいきなり真っ黒くなったり、火を吹いたり、義妹さんの剣を素手で受け止めたりしてるんだ。
なんだか、黎が人間じゃ無く見えてきた……。
こういうのは多分、三沢や明日香、フィオに聞けば詳しい事が分かると思うんで聞いてみる事にした。
あ、そうそう。フィオは黎が生きてるって分かったら息が元に戻ったぜ？

「み、三沢、明日香、フィオ？」
「悪いが十代。俺にもこの状態は説明できない……」
「というかアノ２人は何者なの？　明らかに人間じゃ無い動きをしてるわよ……？」
「わ、わたし夢でも見てるの……？」

確かに。主にその動きは黎がやってるんだけど……。空中で方向転換したり、踵でリングにヒビ入れたりとか、人間技じゃ無いよな……？

「黎くん、キミは一体何者なんスか……？」
「オレ、自分の常識が疑わしくなってきたんだな」
『クリクリ～！』

そんな中、俺の相棒、『ハネクリボー』だけは義妹さんを見て唸っていた。まるであの義妹さんが危険だって言ってるみてぇだ。

「相棒……？」
『クリクリーッ！』

何を言ってるのかは分からねぇ。でも、威嚇してる。
相棒、あの子はそんなに危ないなのか……？
今この時は相棒の言葉が人間の言葉じゃ無い事を残念に思った。

ＳＩＤＥ：黎

「“スキャッター・ダーク”！」
「かぁっ！」

都の掌から吹き出した闇を、俺は炎を吐いて相殺する。

「“ナイトメア・パンチ”！」
「おっと！」

炎の壁を突っ切って撃ち出された拳型の闇は全身をタングステンで覆ってガード。

「“ブラック・シザー”！」
「遅い！」

続いて生み出された巨大な黒いハサミを跳躍で躱す。

「はっ！」
「がっ！？」

そして懐に潜り込み、肘打ちで肋骨を圧し折る。
バキバキ、と折れる感触はあるが、その中にシュワシュワ、という炭酸のような音が聞こえた。
随分と早くなってるな。

「どうした。こんなんで俺を殺せるとでも思ったか？」

はっ、と嘲る。
実際さっきから都の攻撃は初撃の不意打ち以外ダメージになっていない。

「うーん、やっぱりタングステン合金を相手するのは骨が折れるね」
「当然だ。戦車装甲にも使われる超合金だぞ？」

重金属タングステンは、重量や硬度という点に於いて鉄やチタンよりも勝る。放射線を防ぐ為の防護服にもこの金属が使われているぐらい原子密度が高いのだ。

さて、あの黒いヤツの正体が何なのかは分からないが、分かった事が幾つかある。
まず、あれは壊れる上に鉛程度の硬さしかない。しかも展性も延

性も無いから拳で簡単に叩き壊せる。
次に、一定時間が経つと自壊する。長い事この世界に存在はできないらしい。
それから形は不定形。変形に時間は少々必要だが、形に囚われてしまうと足元を掬われる。
最後に、アレは都の手を離れると壊れる。

ここまでは俺が有利に進めて来た。
だが、これで終わる程、あいつは甘くない。絶対に何か策を持っているハズだ。
そして、それは的中した。

「うーん、それじゃ次の手を使うよ」

やっぱりまだ何かあったか！

ばっ！　と都が掌を俺に向け、そして観客席に向けた。
まさか！？

「はぁっ！」
「テメェッ！」

思った通り、濃い黒い霧が観客席に向けて吹き出された。
席にはまだ人が残っている。怖いもの見たさなのだろうけど、それがあいつにとって有利に働いたか……！

『うわあああっ！』
『キャアアッ！』
「させねぇ！」

急いで跳躍して霧の前に立ち塞がり、髪を伸ばして四方八方に広げる。巨大な円盤状にすると、髪を金属に置き換えて硬化したワイヤーに。安定も伸ばしたワイヤーで確保。

！？　タングステンが足らない！　だったら俺の体はチタンでガードを……。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！

「ぐ、ぁああ……っ！」

「あひゃっ、一撃入ったぁ！」

幸い、攻撃の後逸は防げた。ただ、今の一撃で左手が吹き飛ばされた。

……、あそこか。

「れ、黎……！　腕が……！」

フィオか。大丈夫、心配いらない。

キレイに跳んだ自分の腕を傷口に押し当てて言う。

「直ぐに付く」

ジジジ、と血管、骨、筋肉の繊維を元々くっついていた組織同士で繋いでやる。
我ながら人間じゃないと思いつつも、同時に仕方がないとも思う。生きる為にこの身体が手に入れた防衛手段だ。否定してもしょうがない。
最後に皮膚を蛋白質の糸で縫合してやり、修復完了。この間、2秒。

「黎、キミは一体、何者なんだ……！？」
「それ以前に人間なの……！？」

大地に明日香が尋ねる。
それに関しちゃ、もう答えはこの身体を手に入れた5歳の時から用意してある。

「一応人間だよ。ただ、かなりヒトの範疇から外れているがな」

ゾゾゾ、と掌からチタン合金の刀を取り出す。

「ははは っ！」

都が放った弓矢を叩き落とす。アイツから黒いアレが離れてから自壊するまでにはタイムラグがある。その隙を狙って放ったか。

「“ダークネス・ブロウ”！」
「火力最大！」

さっきとは比べ物にならない程の闇は最大まで威力を上げた炎を吐いて受ける。
業火が闇を照らし、消し去った。

『に、人間なのか……？』
『バケモンだ……』
『あいつと同じ教室だったのか……』

陰口を叩かれるのも慣れたモンだ。俺はな。
でも都は慣れてない。陰口を叩かれた時、よく俺を頼って来た。
心の優しいアイツは人一倍親切で、人一倍傷付き易かった。
そしてそのアイツは、いつしか陰口に敏感になっていた。

「バケモン……？　あはははははっ！　そうだよぉ？
どう？　どう!?　この能力！　あたしもお義兄ちゃんも、人間だけど人間じゃない！　それを証明するこの疎ましい能力はどうだって聞いてるんだけどぉ、観客さんっ？？？」
『ひっ！』

力を手にしたアイツは陰口を叩き、自分を化物扱いする奴を徹底的に憎んだ。アイツは博愛主義者じゃ無いから、自分を疎むヤツにまで向ける優しさは無い。
ギラリとダークシグナーの様な黒い眼で観客席を睨みつける。
怯えて何人かが逃げ出そうとしている。それを俺は声を拡散・増幅して止めた。

「逃げるな！」
『!?』

驚いて皆が止まる。危険から逃げるなとか言われても困るだろうが、こっちにとってはそっちの方が好都合だ。

「逃げたら守りきれない！　傷一つつけさせないから逃げるな！」

ざわ、皆が騒めき止まる。
良し、足が止まればそれで解決だ。

「ここまでされると、俺も本気で行かざるを得ない。ガチで行くぞ都」

あれで本気じゃなかったのか。そんな声が聞こえた。

「ははぁっ！　じゃあ守ってみ「前口上を言う暇があるのか」なぼ、あっ！？」

いい加減、アイツの高笑いに虫唾が走っていたトコロだ。そろそろ口を塞いでやっても良いだろう。
高く蹴り上げ、顎を蹴り砕く。そのまま返す刀ならぬ踵で頭蓋骨を陥没させる。

「ぜぇいやぁっ！」
「はぁっ！」

観客席に向けられた黒い霧は、手を下に向けさせてアイツ自身を反動で吹き飛ばさせる。ロケットの要領だ。
そのまま髪を鎖に変え、先端に刺付き鉄球を拵える。
完成したモーニングスターを投げ、空中で身動きの取れないアイツを撃墜した。

「次からは翼も用意するんだな」

鎖を鉄球を髪に戻しながら吐き捨てる。ま、無傷じゃないし、頭に直撃したから多少は動けないだろう。

「黎」

タイミングを見計らっていたのか、リングの陰から十代達がやって来た。そんな近くに隠れていたのか。危ないじゃん。

能力の説明を強いられると思うので、こっちから説明してやる。

「これはバイオ・フィードバック現象。身体の隅々まで俺の意思で操る力だ」

「な、なんでそんな事出来るんスか……？」

「ま、小さい頃に山に1年程捨てられてね。生きる為に身体が進化したんだろ」

彼らが息を呑む音が聞こえる。ヘビーだったか？

俺の能力はＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのＣＰ９のクマドリの生命帰還をイメージすると近いだろう。というかあれのパワーアップ版だ。

髪の毛、骨、血管、神経、生体電流と俺の体内で操れないものは無い。金属を口にすればそれですら自身の身体の一部として扱える。刀の精製、組織を金属に置き換える、体内の不要な可燃物質の燃焼は金属粉を混ぜるとやり易い。

少ない栄養の温存や、凶悪な野生動物から身を守る為に必要だった技術。体温を保つのにも、出血を瞬時に止めるのにも役に立ってくれた。

「では、お前の義妹も……？」

「いや、アイツは自動再生。幼い頃に何度も殺されかけた所為で傷の治りが異常に早いんだ」

再び息を呑む音が聞こえた。やっぱりヘビーだったか？

あっちは化物語の暦くんや忍ちゃんを連想すると良い。

あいつは幾度も幾度も殴られ、蹴られ、斬られた。火傷を負い、凍傷を負い、裂傷を負った。されど、死にかけても医者には連れて行かれなかった。無限に傷付き続ける地獄を生き残る為には、傷の治りを早くするしかなかったのだ。

「とにかく、俺達義兄弟は、一般人の範疇からかなり外れた体を持っていると考えてくれれば良いよ」

「はは……、信じきれねぇ……」

十代、気持ちは分かるよ。

「“オクテット・オブ・ダークランス”！」

「！？」

背後から黒い槍が８本飛んで来た。咄嗟に髪を延長させて掴み、更に金属化させて槍を握り潰す。

髪の延長は炭素を二酸化炭素から取って補充すれば良いし、金属だったら経口摂取で体内に大量に保存してある（だから俺の体重は４００キロを超える）。

ゆらり、と立ち上がった都に大きなダメージは見られない。

「くひひ……」

「ノーダメか。流石に焦るぞ？」

軽く言ってるように聞こえるだろうけど、内心は本当に焦ってる。今まで何度か都との組み手はやって来たが、その治癒の速度は遅い。骨折を治すのに一晩かかる、と言えば分かるだろうか（それでも充分に早いが）。

だが、今は確実に骨を折った感触があっても、次の瞬間には既に完治している。あの炭酸みたいなシュワシュワ音は、傷や骨折を治

療する時の音だ。
　再生がいつまで続くのか分からない以上、長期戦になれば体力（なんて言うけど、これが尽きるのは筋肉の損傷がこれ以上は危険だという信号が発されるだけ。メーターみたいなモノじゃ無い）までも回復するアイツに分がある。
　お互い、怪我を治すにも、新たに武器を作るのにも、能力を使用するのにも栄養、というかカロリー（エネルギー）が要る。
　しかしアイツは邪神の力を得ている。それがエネルギー源になっていると考えれば、底を尽きるのは俺の方が遥かに早いハズだ。

　短期決戦に持ち込むしかない。だが出来るのか？　アイツを傷つける事を未だ俺は心のどこかで躊躇している。だから連続で攻撃を浴びせられないし、心臓や脳を斬る事もできない。
　チッ。守るとかカッコイイ事言っちまったが、避難してもらうべきか？
　せめてアイツみたいに何か精霊の力が使えればな……。

　その時、精霊界で出会い、力を貸してくれた『ヴォルカニック・デビル』の言っていた事を思い出した。

『炎の力の結晶じゃ。お主の戦い、デュエルに役立つじゃろう』

ハッ、と気付いた。腰のベルトのデッキホルダーからデッキを取り出す。

『ダンナ。気付いたか』

デッキを携えた俺の傍に『鬼火のウィスプ』が半透明になって現れた。その後から続々と『F・S』達が現れる。

『ヴォルカニック・デビル殿からの言伝である。「力の扱いには気をつけよ」』

『マグマドラゴン』が唸り声を上げて威嚇しながら忠告を入れる。

『ひゃっはあ！　ま、マスターが命ずるなら何でもやるけどね！』

『それがワタシ達の役目です！』

ハイテンションな『レゲエ』と『チアガール』が構える。

『邪神とか言ったか？　奴を潰す為におれ等はいるんだ、力ァ貸すぜ？』

肩のバズーカの照準を合わせつつ『バーナーズ・キャノン』が言う。

『精霊の底力、思い知らせてやりましょう』

『叩っ斬ってやる……！』

臨戦態勢に入った『ヴォルカニック・ギア・ガイ』と『ブレイジング・ナイト』が不敵に笑う。

『……。いざ参る』

寡黙ながらも『バーンクロス』が決意を示す。
続々と続く精霊達がコクリと頷く。

「皆の炎よ、今俺に力を……！」

デッキは再びあの宝玉へと戻り、俺の中へと潜り込んで行った。
不快感は無く、力が体の底から湧き上がって来る。
俺の周りを紅蓮の焔が渦巻く。それに合わせて炎を具象化した模様が俺の素肌に浮かんだ。
はは、厨二病臭さも、ここまで来るとなんか逆に格好良いな。

「さあここからが本番だ！」

ダッ、と駆ける。足の裏で小爆発を起こして推進力を生み出し、2歩で間合いを詰め切る。
都はすぐに反応するが、それでももう手遅れだ。

「うっ！」
「遅い！」

ガッ、と燃える右ストレートを打ち込み、続いて炎の左ローキックを放つ。間髪入れずに炎を零距離で吐いて追撃を入れる。

「く、かぁ……！」

都は全身を炎で包まれ、片膝をついた。

火傷の治りが想像以上に遅い。恐らくは精霊の力だからなのだろう。

「はっ！」

チリッ、と火の粉を放つ。それは都に触れると、爆発を起こした。

「うわ、アァアアアアアアアアッ！」

炎の力を最大限に圧縮した攻撃。とあるマンガに出て来た小さいが大爆発する炎の玉をイメージしてみたが、成功したみたいだな。

「止めだ！」

業火を纏った拳で殴って止めを刺す。邪神の心は、まあ、精霊になんとかしてもらおう。策が無いなら誰かを精霊界へ送って調べてもらうのも良いかも知れない。

そう思った時だった。

「痛い、痛いよぉ……、お義兄ちゃぁん……」

後数センチの所でパンチを止めてしまった。
心の隅にあった『義妹を攻撃している』という後ろめたさが、俺に一瞬の隙を作ってしまった。

「くひひ……、甘いなぁ！　“カオス・ビッグバン”！」

甘い。確かに甘い。
心を鬼にして都を殴っていたのに、結局は躊躇って止まってしまった。

黒い竜巻。それが俺の印象だった。俺を取り囲んだ闇は俺を中心に回転し、その間俺は目に見えない闇のエネルギーのダメージを受け続けた。

「ぐぁあああああああああああああああああああああああっ？？」

竜巻が終わると、俺は地に倒れ伏した。

『うあああああっ、遊馬崎ィ！』

『おい、ヤベェぞ！』

『アタシ達を守ってくれるヒトいなくなっちゃったよ！』

『レェイ！　起きろ！　起きるんだぁ！』

『黎（くん）！』

呼びかけてくれている声も聞こえたが、身体がもう動かない。ぐっ、ダメージをあの一発で限界まで一気に蓄積したというのか……！？

「あは、ははははははっ！　非情になりきれなかったねぇ！」

【　　】

その時俺は都の高笑いの奥で何かが聞こえた気がした。

違う、聞こえている！　これは……！

「それじゃ、会場ごと吹っ飛ばして終わりにしよっか」

【　　】

アイツのセリフに重なって聞こえて来るこれは……！

「じゃ～ね～？　“ヘルズ・ライトニング”！」

【　　】

なるほど。そういう事か！

俺の納得の一瞬後、黒い雷が会場を蹂躙せんと四方八方に撃ち出された。

SIDE：フィオ

「黎！　レェエエエエエイッ！」
「フィオ、危険よ！　ここにいたら危ないわ！」

でも黎が！　黎がぁ！
明日香の忠告を聞かず、わたしは叫び続けた。
そんな中、わたしの心境に1つの変化があったのを自覚した。
憎い。例え彼の義妹でもアイツが憎い。
わたしの心に憎悪の炎がメラメラと燃えていた。
義兄妹じゃ無いの！？　お義兄さんは君を探す為にあっちこっちに探しに行っていたんだよ！？　人に聞き、休む暇無く島中を歩き回り、何一つ手掛かりが無いって落ち込んでいたんだよ！？　それなのにどうして君は平気な顔してそれを踏み躙る事ができるの！？

「レェイ！　起きろ！　起きるんだぁ！」
『黎（くん）！』

必死に離れた所から呼びかけてもピクリとも動かない。くっ！
そして、歯噛みするわたし達を嘲笑うかのように義妹さんの手から黒い雷が放たれた。

「来い！　わたしは逃げない！」
「フィオ、危ねぇ！」
「逃げてぇ！」

嫌だ！
黎が死ぬんだったら、わたしも死ぬ！
黒い雷を受けて、黎と一緒に死ぬんだぁ！

突如現れた赤い炎の壁が、雷を全て防ぎ切った。

「え？」

「早死にはするモンじゃ無いぜ、フィオ？」

なんと、黎が炎を発して壁を作っていた。
黎！？　死んでなかったのか！？
「勝手に殺すな。ま、悪かったよ。身体の修復は畑違いなんでね、時間喰った」
そして、キッ、と義妹さんの方に向き直り、静かにこう言った。
「キーワードは『イグニッション』」
次の瞬間、義妹さんは大きく爆発した。

ド、ガァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ？？

「あ、があぁあああああああっ！？」

え、え？
見てみると、黎の掌から何かコードの様な物が伸びていた。あれも自力、というかバイオ何とかで作ったんだろうか？
「俺の制御下にあるワイヤーを地下を経由してお前の足元に配置した。起爆するぜ、それ？」
なるほど、確かに義妹さんがいた所から細いワイヤーが顔を覗か

せている。爆発したのはアレか。
ともあれ、義妹さんは立ち上がるのに苦労している。傷の治りが何故か遅くなっているみたいだ。

「決着はついたな」

スタスタと黎が歩み寄る。

「この勝負は俺の勝ちだ。色々とさせてもらうぞ？」

色々の中身が気になるけれど、取り敢えずまあ、一件落着かな。
ス、と黎が都さんを連れて行こうと手を伸ばした。

「申し訳無いが、それはこちらが許可できない」

伸ばした手は蹴り飛ばされ、黎は地面に叩き付けられた。

ＳＩＤＥ：無し

「が、あ……！？」

突如の乱入者に、黎は地を舐めた。

乱入者は黒い服を着用し、黒いマントを羽織り……、要するに黒尽くめの男だった。

テンガロンハットの所為で表情は読めないが、不気味な感覚だけは伝わって来た。

「姫、今の内に帰還なさって下さい」

「く、分かった」

【　　】

黎としてはそれは避けたい事だった。

次いつ会えるのか分からず、或いは二度と会えないというのに、袂を分かってしまうのは永遠のさよならに等しいとも言える。

ダン！　と起き上がる。右腕に爆炎を宿し、自爆覚悟の突進を仕掛ける。

自分の体は耐火性の緊急のコーティングを施す。都はどんな致命傷でも簡単に治してしまうので考える必要は無い。つまりこの一撃が決まれば大ダメージを受けるのは黒い男だけだ。

「おおぉおおおおおおおおおおおおおおっ！」

「はっ！」

だが、その一撃は、脆くも崩れ去った。

黒い男の右手が正面から黎の正拳突きを受け止めた。本来なら起こる筈の大爆発も起きず、メラメラと灯っていた赤い焔がどんどん勢いを失っていく。

「炎では私には勝てない。消えなさい、不適合なる義兄よ」

右手を乱暴に放ると、男は黒い刀を2本携え、X字状に黎を斬りつけた。

ザシュッ！　ズシャッ！

血飛沫が派手に飛び散り、黎は膝をついた。

「さ、お早めに」

「うん」

【　】

血を流しながらも顔を向ける。その時瞳が映し出した光景は、黒い穴に都が入って行く所だった。

他の皆はあの超人決戦に巻き込まれたくないのか、全く動かない。

【　　！　　、　　！　　！　　、　　！】

「ぐぼ、がぁ……。チッキ、ショウ……！」

口からもダクダクと血を流し、あの声を聞きながら、黎は動かない身体に必死で鞭を打った。しかし、努力も空しく、起き上がると同時に都は黒い穴と共に消えてしまった。

（み、やこ……。こんなダメな義兄ちゃんで、ゴメンな……。お前を、助けてやれなかった……！）

ヒューヒューとおかしな呼吸をしながら、人から外れた義兄は、ただただ義妹の消えた方向を見つめていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ７：月一試験一次・爆炎の義兄と暗黒の義妹（後書き）

黎「決死の戦いも空しく、俺は都を取り返す事ができなかった」

フィオ「それ以前に黎！　傷が酷いよ！」

黎「気合い（と能力）で治る！　この野郎、都をどこにやった！」

黒男「ふふふ、姫の場所に行きたければ私にデュエルで勝ちなさい！」

黎「上等だ！　次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ８：月一試験一中・絶体絶命、フィールド魔法『集中豪雨地帯』』！　お楽しみに！」

フィオ「黎、頑張って……！」

ＳＴＯＲＹ８：月一試験一中・絶体絶命、フィールド魔法『集中豪雨地帯』（前編）

亜空間から出現した謎の黒い男。

黎「誰であろうと、勝つ！　絶対勝つ！」

フィオ「油断しちゃダメだからね、黎」

黎「分かっている。化物をナメるなよ……！」

化物ＶＳ人外！　スタートです！

ＳＴＯＲＹ８：月一試験一中・絶体絶命、フィールド魔法『集中豪雨地帯』

ＳＩＤＥ：無し

ぜえぜえと荒い息を吐きながら、ふらつく足で立つ黎。その視線の先には黒服の男が立っている。

ギッ、と黎は男を睨みつけた。傷だらけで流血している筈なのに、その気迫は消えていない。

「はぁ……、はぁ……、俺の、義妹（いもうと）を、どこにやった……っ！」

黒い男は全く意に介さず答える。

「私たちの城に帰還いたしました。今や姫はあなたの義妹という立場より私たちの主の元にいらっしゃる事を望んでおられるのですよ」

ククク、と嘲笑う。黎の気迫が会場を揺るがす動の力なら、この男の存在は如何なる物事にも動じない静の存在。力押しは通じないだろう。

「しかし、いずれ私たちの主が完全に目覚めれば、姫は用済みとして廃棄されるでしょう。姫はあくまで主が復活するまでの仮の器なのですよ」

「テメェ……っ！」

「無論、廃棄された者の行方など知った事ではありません。死か、或いは想像もつかない事になるでしょうね」

しかし、と男は続ける。

「主は罪の象徴である邪神。より多くの罪を求められております」

「……罪を生み出す人間を減らすと、弱る、か？」

「その通り。１人２人減った所でどうという事はありませんが、それでも源は１つでも多く確保しておきたいところです」

そして絶望も必要なのです、とも続けた。

絶望？　と黎が問うと男が答える。

「主に限らず、意思を持ちし邪神は人の心の闇、つまりネガティヴな部分を力の源といたします。ほら、一生懸命頑張ったのに義妹を救えなかった義兄なんて、絶望の力が凄そうでしょう？」

「……はっ、お笑い種にもならねぇぜ」

「ククク、まあそう仰らずに。私はチャンスを差し上げましょうと申しておるのです」

「チャンスだと？」

「ええ。どうです、デュエルで勝てば貴方を主の城に案内し、更に姫を解放できる機会を差し上げましょう。そして貴方が負けても何も要求しませんよ？」

尤も、ただのデュエルではありませんがね。ポツリと呟いたのを黎は聞き逃さなかった。

だが、敢えてスルーをする。深く突っ込む気力はまだ戻ってないし、怖気づいたと思われたく無かったからだ。

「良いだろう。そのデュエル、受けて立つ！」

ガシン！　とディスクが展開する。デッキを引き抜いて念入りに

シャッフルし、互いにセットする。
　そうだ、と男は何かを閃いた。右手を高く上げると、淡い光が飛び散り、黎と都との戦いによって壊れたリングや壁が修復されていく。

「サービスですよ。壊れたままではこちらの気分が悪いですから。ちなみにこれはあらゆるモノに対して無害です」
「……、一応礼は言っておく。半分は俺が壊したからな。ありがとう」
「いえいえ」

　ニヤリ、と男は笑った。

「こうまでされて負けたら、貴方は立つ瀬が無いでしょう？　また1つ追い詰められましたね」
「……」

　黎はこれ以上話す事に危険を感じ、言葉を発するのを止めた。この男は先刻から自分の絶対勝利を前提として話している。
　この男に絶対の自信があるからなのか、或いはこちらを挑発する為にやっているのかは分からないが、怒りにまみれてしまえば冷静な判断力を失い、さっきのゴリラブルーの様に敗北するだろう。
　勝てば手掛かり、負ければ何も無い。ならば勝たなくてはならないだろう。
　義妹を取り戻すために、そして精霊界と人間界を狙う邪神を撃ち破るために、ここで敗北を喫する訳にはいかない。
　身体の修復がおおよそ終了したのを感じ、気合いを入れ直す。

「“騎士”の魂、遊馬崎　黎。世界を守る為に、全力で参る！」
「七つの大罪の内が一つ、“傲慢”のプライド。いざ勝負！」

名乗りを上げ、ディスクを展開させてスイッチを入れる。

『デュエル！』

ＳＩＤＥ：明日香

何だか大変な事になっちゃったみたいね。
黎の義妹の登場。義兄妹の身体の秘密。邪神。七つの大罪。
いろんな事が一度に起きて流石の私も頭の整理が追いつかないわ。

「三沢くん、この状況……」
「天上院くん、言いたい事は分かるんだが……。済まない、正直俺も理解するだけで精一杯なんだ。まだ、説明出来る程理解はしていない」

そう。三沢くんでも出来ないのなら、十代やフィオに求めても無駄でしょうね。十代は筆記テストじゃ無くて実技での成績に物を言わせている訳だし、フィオの頭はぶっちゃけると悪いから。どのくらいかっていうと……、そうね試験場号、十代が１１０番ならフィオは１０９番かしら？

「……明日香、今何か失礼な事考えなかった？」
「気のせいよ」

さらっと言っておく。

余計な事考えてる場合じゃなかったわね。あのプライドという男を黎のデュエルが始まる。実力は未知数だけど、相当強いって事は伝わって来るわ。

黎、頑張って！

ＳＩＤＥ：黎

「俺のターン、ドロー！」

ぶっ倒す！　俺の全力で！

もう少しだけ待っててくれ都！　義兄ちゃんが今行くから！

「『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）　マグマドラゴン』を召喚！　そしてモンスター効果発動！　如何なる召喚においても、『マグマドラゴン』が場に出た時、デッキか手札からレベル４以下の炎属性モンスターを１体特殊召喚できる！

俺はデッキの『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を選択！」

『参りますぞ！』

『汚名返上だ！』

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００

「魔法カード『融合』を発動！　手札の『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』と『Ｆ・Ｓ　バーンクロス』を融合！　融合召喚！　斬り開け『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』？」

『我が刃の錆にしてくれる！』

Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００

融合

【通常魔法】

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「まだまだぁっ！　フィールド魔法『スピリッツ・ワールド』を発動！」

フィールド中に淡い光が溢れ始めた。これで例え相手が強力なアタッカーを出して来たとしても、１０００ポイントのパワーアップができる。

ワンキルの心配は無いだろう。

「１枚カードを伏せて、ターンエンド！」

黎：ＬＰ　４０００
手札：０枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（ＡＴＫ　１８００）、Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（ＡＴＫ　１９００）、Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト（ＡＴＫ　２９００）
：伏せカード１枚、スピリッツ・ワールド（フィールド魔法）

さあ、かかって来い！

「私のターンです、ドロー」

ＳＩＤＥ：十代

観客席の十代だ（誰に説明してるんだ、俺は？）。
すっげえな、黎は。１ターンでモンスターを３体も揃えやがった！
とまあ、少し前の俺だったら何も考えずにはしゃぎまくったんだけど……。湖でのあのデュエルの時に黎が言ったあの言葉、アレが

気に掛かっている。

“手札不足”

そう、黎は今のターンで手札を全て使い切った。三沢に聞いたんだけど、ハンドアドバンテージってのは今後の展開に重要なんだってさ。

俺は気にしないかな。いざって時にはちゃんとデッキが応えてくれるから、手札不足にはあんまり悩んだ事は無い。

でも、黎が今相手している男、プライドとかいう奴は俺でも分かるくらいにヤバイ奴だ。

「アニキ……、黎くん、勝つッスよね……？」

「あ、ああ……（こういう時はビシッと言うモンだろ！？　俺のバカ！）」

翔が不安そうな顔で聞いてくる。当たり前だろ、と答えられない自分をちょっと責める。

「……、相手の出方次第だな。次のターンにフィールドを一掃されたら逆に不利になる」

「厳しいわね。普通の人間相手なら黎は負けないでしょうけど……」

「相手は多分、人間でも普通の相手でも無い」

三沢の状況判断、明日香の推測、フィオの結論が俺の不安を加速させる。

油断するなよ、黎。

ＳＩＤＥ：無し

「私のターンです、ドロー！」

プライドがカードを引く。引いたカードを見て、彼はニヤリと不気味な笑いを浮かべた。

「どうやら、私のこのターンでこのデュエルの勝者は決まってしまったようですね」

「何だと……！？」

キーカードを引いた。その事をデュエリストの直感で感知した黎は声を上げる。

思わず伏せカードに手をかけ、思い留める。このタイミングで使うカードでは無いからだ。

「……、やれるモンならやってみろよ」

精一杯の虚勢を張り、挑発する黎。

その挑発に乗ると乗らずとに関わらず、プライドは既に、発動するカード、そしてそのカードの発動後の手順、更にはこのターンに黎が受けるダメージの計算、その全て脳内で確定させていた。

「では、行きますよ？　私はフィールド魔法『集中豪雨地帯』を発動させます！」

ザァアアアアアァアアアアアアアアアアッ！

突如としてリングの上空に雨雲が発生し、凄まじいまでの降水量の雨が降り注いで来た。地面にあった魔法陣は、雨粒が当たった個所から消えていき、やがて足元が水浸しになるのと同時に消え失せた。

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００→９００
Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００→９５０
Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００→１４５０

「これは……！？」

雨が黎の場のモンスターに当たっていくにつれ、彼らの体からどんどんエネルギーが奪われていく。赤い光がしぼんでいき、炎の戦士達は辛そうに顔を歪めている。

『ち、力が入らぬ……！』
『何だってんだ、こりゃぁ……！』
『ぬうぅ……！』

「『集中豪雨地帯』は場の全ての炎属性モンスターの攻撃力、及び守備力を半分にします。更に手札の水属性モンスターのレベルを１つ下げます。

私はこの効果で『ジェノサイドキングサーモン』を攻撃表示で召喚します」

ジェノサイドキングサーモン（通常モンスター）
星５
水属性／魚族
ＡＴＫ　２４００／ＤＥＦ　１０００
暗黒海の主として恐れられている巨大なシャケ。
その卵は暗黒界一の美味として知られている。

ジェノサイドキングサーモン：☆５→４

「まだまだありますよ？　『集中豪雨地帯』は私の場の水属性モンスターの攻撃力と守備力を２００ポイントアップさせます」

ジェノサイドキングサーモン：ＡＴＫ　２４００→２６００／ＤＥＦ　１０００→１２００

「ちぃ……、要は『アトランティス』に対炎属性のメタ能力を付与したカードか……！」
「まあ、効果はまだもう１つありますがね。

では行きますよ。『ジェノサイドキングサーモン』で『Ｆ・Ｓマグマドラゴン』を攻撃！　喰らいなさい！」

ゴゥッ！　と巨大な鮭が突進を仕掛ける。『マグマドラゴン』は然したる抵抗も出来ずに吹き飛ばされた。

「ぐっ！」

ゴブリ……！　と黎の口元から赤い鉄の味の液体が流れ出た。

「血……、闇のゲームか！」

「正解です。ただのデュエルでは無い、と申したでしょう？」

黎：ＬＰ　４０００→２２００

ザワザワと観客席から騒めきが上がる。人がソリッドヴィジョンで血を流した。しかも闇のゲームという怪しい単語とセットで。それでも生徒も教師も逃げ出さない。

何故か。理由は恐いもの見たさだろう。

黎は口の端から流れ出る血を指で拭うと、真剣な表情でプライドに向き合った。しかし、その内心は非常に焦っている、というのを本人とプライド、そしてフィオ達は理解していた。

当然だ。手札を全て注ぎ込んでボードアドバンテージを稼いだのに、こうも易々と逆転されてしまったのだ。今、デュエルに主要な三つのアドバンテージは全てプライドが握っている。

（……結構マズいか）

チロリ、と舌舐めずりをして黎はディスクを構え直した。

ＳＩＤＥ：黎

初っ端から飛ばし過ぎたか。１ターン目だから攻撃はできないってのは解り切っていたのに、心のどこかにあった逸る心が表面化したか。

「リバースカードを２枚セット！　ターンエンドです」

プライド：ＬＰ　４０００
手札：２枚
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）
：伏せカード２枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……、逆転の一手！

「『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』を守備表示で召喚！」
『むん！』

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＤＥＦ　１２００→６００

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン（効果モンスター）（オリジナル）
星４
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１２００
１ターンに１度、相手フィールド上の魔法・罠カードを１枚破壊できる。この時、相手プレイヤーに３００ポイントのダメージを与える。

「フィールド魔法が邪魔だ！　『バーナーズ・キャノン』のモンスター効果で破壊させてもらう！　“バーニング・ショット”？」
『ターゲット・ロック・オン？　ファイア？』

白炎がバズーカから噴き出す。上空へ向けて放たれたそれは、雲に直撃すると、雨雲は瞬時に霧散した。

プライド：ＬＰ　４０００→３７００

「ふ、ふふふふ……」
「っ、何かあるみたいだな、その笑いは」
必殺のフィールド魔法が消滅し、俺の場のモンスターは全てその能力値が元に戻った。しかしプライドはダメージを受けたというのに、薄気味悪い笑みを浮かべている。
その理由はすぐに分かった。
「!?」

ザァアアアアアアァァアアアアアアアアアアアッ？

「雨が、止んでない！？」

破壊したハズのフィールド魔法が、再び場に効力を発揮していた。

「ふふふ、申したでしょう？　『集中豪雨地帯』には後１つ効果が

あるってね」
「バカな……、破壊されない効果なら、ダメージも発生しない……。一体何なんだ！」

『バーナーズ・キャノン』のバーンダメージは「相手のカードを破壊した時」にしか発生しない。カード効果で破壊されないのなら、ダメージを受けるのはおかしい。

「破壊はされましたよ。しかし、『集中豪雨地帯』は破壊された時、デッキから同名カードをサーチし、発動させる効果があるのです」
「なんだと！？」

なんつー効果だ……。最低限後2回は破壊しないと、この鬱陶しい雨からは解放されないのか……！

集中豪雨地帯（オリジナル）
【フィールド魔法】
このカード名は「海」として扱う。
自分の手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが1つ少なくなる。
自分フィールド上の水属性モンスターは攻撃力と守備力が２００ポイントアップする。
このカードが墓地に送られた時、デッキに存在する「集中豪雨地帯」を発動させる事ができる。

「場の全てのモンスターを守備表示にし、ターンエンド！」

黎：ＬＰ　２２００
手札：０枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン（ＤＥＦ　６００）、Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（ＤＥＦ　６００）、Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト（ＤＥＦ　１３５０）
：伏せカード１枚

くっ、マズイ状況だ。万が一の警戒で『バーナーズ・キャノン』を守備表示で出したのは正解だったぜ。お陰で戦闘ダメージは無いだろう。貫通ダメージは恐いが。

「私のターン、ドロー」

またレベルを下げた形での召喚が来る。す、と腕を交差させ、来るべき衝撃に備えた。

「出て来なさい、『暗黒大要塞鮫』」
『グガァアアアアアァッ！』

出現するのは、背中に要塞を背負った巨大なシャチ。その効果は

単発では使えないが、もし伏せているカードの内、どちらかがアレなら話は変わって来る。

暗黒大要塞鯱：☆５→４／ＡＴＫ　２１００→２３００／ＤＥＦ１２００→１４００

「そして罠カード『魔の海域レベル３』を発動します」
「やはり、伏せてあったか……！」

魔の海域レベル３（アニメオリジナル）
【通常罠】
フィールド上に「海」が表側表示で存在する場合に発動する事が出来る。
レベルの合計が３になるように手札から水属性モンスターを特殊召喚できる。

「私は『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』を特殊召喚！」

『暗黒大要塞鯱』の能力はあの２体がいないと使えない。いってみれば『暗黒大要塞鯱』は銃身で残る２体が弾丸だ。

暗黒大要塞鯱（効果モンスター）
星５
水属性／海竜族
ＡＴＫ　２１００／ＤＥＦ　１２００
自分フィールド上の「魚雷魚」１体を生け贄に捧げる事で、フィールド上のモンスター１体を破壊する。
自分フィールド上の「砲弾ヤリ貝」１体を生け贄に捧げる事で、フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する。

魚雷魚（効果モンスター）
星３
水属性／魚族
ＡＴＫ　１０００／ＤＥＦ　１０００
「海」がフィールド上に存在する限り、このカードは魔法の効果を受けない。

砲弾ヤリ貝（効果モンスター）
星２
水属性／水族
ＡＴＫ　１０００／ＤＥＦ　１０００
「海」がフィールド上に存在する限り、このカードは魔法の効果を受けない。

魚雷魚：☆3→2／ＡＴＫ　１０００

砲弾ヤリ貝：☆2→1／ＡＴＫ　１０００

アニメでアナシス（海の底にアカデミア作ろうとして、潜水艦で十代攫った奴）がやったのと同じ戦法か……ッ！

「『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』を生け贄に貴方の場のモンスターと魔法・罠カードを1枚ずつ破壊します。私は伏せカードと『バーナーズ・キャノン』を選択」

「その効果にチェーンさせてもらう！　『ガード・ディザーブ』！　1度だけ『S（スピリッツ）』と名のついたモンスターを対象にした戦闘かカード効果を無効にする！」

ガード・ディザーブ（オリジナル）

【通常罠】

自分フィールド上に存在する「S」と名のついたモンスターを対象とする戦闘、または魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。

『暗黒大要塞鯱』が撃ち出した『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』は、薄緑色のバリアにて弾かれる。
仕組みは『魚雷魚』は『ガード・ディザーブ』で防御し、『砲弾ヤリ貝』は不発。コストとして払ったカードやモンスターは、その効果が不発しても戻ってこない。覚えておこう（誰に言ってるんだ、俺は？）。
それとコストは効果では無いので、『禁じられた聖杯』や『スキルドレイン』で無効化出来ない事も要チェックだ（だから誰に言ってるんだ？）。

「では、『暗黒大要塞鯱』で『Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン』を、『ジェノサイドキングサーモン』で『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃！」
「くっ！」

シャチの背中の砲台の集中砲火、そして巨大なシャケの突進が俺のモンスターを軽々と粉砕する。
完全にナメてやがる。攻守の最も高い『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』を場に残しやがった。
因みに『ナメる』は古語の“甘く見る”という意味の『なめし』が語源だ（誰に言ってるんだって……？）

「ターンエンドです。さあ、貴方のターンですよ？」
「言われなくても……、解っている！」

プライド：ＬＰ　３７００

手札：1枚
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）、暗黒大要塞鯱（ＡＴＫ　２３００）
：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺の、タァーン！」

気合い一閃、カードを引き抜く。引いたカードは……ドローソース！

「魔法カード『火炎の魅力』を発動！　デッキから3枚ドローし、そこから炎属性モンスター1体を墓地に送る！　ただし、この時炎属性モンスターを送らなかった場合、手札を全てゲームから除外する！」

これは賭けだ。俺のこのデッキは殆どが炎属性。だが、『ネクロ・ガードナー』などの汎用性の高い奴も入っているし、魔法や罠だけしか来ない場合も考えられる。
何も来なければ俺の負け。さあ、デッキよ、答えてくれ！

「1枚目！」

モンスターカード『フェイク・ガードナー』か！

「2枚目！」

魔法カード『強欲な火山口（かざんこう）』！　次で最後だ。

「頼むぞ……、３枚目！」

引いたカードは……『Ｆ・Ｓ』！

「『火炎の魅力』の効果で手札の炎属性モンスターを墓地へ送る！
そして今送った『Ｆ・Ｓ　バック・ドラフトマン』の効果を発動！
このカードが手札かデッキから墓地に送られた時、手札に加えるかライフを回復できる！　俺は１つ目の効果を選択！　ＣＯＭＥ（カム）ＢＡＣＫ（バック）、『バック・ドラフトマン』！」

火炎の魅力（オリジナル）
【通常魔法】
自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札の炎属性モンスター1体を墓地に送る。
手札に炎属性モンスターがない場合、手札を全てゲームから除外する。

Ｆ・Ｓ　バック・ドラフトマン（効果モンスター）（オリジナル）
星3
炎属性／炎族
ＡＴＫ　１３００／ＤＥＦ　１３００
このカードがデッキまたは手札から墓地に送られた時、以下の効果

から1つを選択して発動する。「F・S　バック・ドラフトマン」の効果はデュエル中2回まで使用できる。
●このカードを手札に加える。
●ライフポイントを500ポイント回復する。

「そして、手札に戻った『バック・ドラフトマン』をデッキに戻してシャッフルし、『強欲な火山口』を発動！　ドロー！」

強欲な火山口（オリジナル）
【通常魔法】
手札の炎属性モンスターを1体デッキに戻して発動する。デッキからカードを2枚ドローする。

不思議だ。状況は明らかに俺が不利だというのに、俺の心は静まっている。アイツに勝てると思っている。
そうだ、冷静になれ。落ち着いてプレイングすれば、勝機は見逃さない！

「速攻魔法『融合解除』を発動！　『F・S　ブレイジング・ナイト』の融合を解除し、墓地の『F・S　鬼火のウィスプ』と『F・S　バーンクロス』を特殊召喚！」

『壁は任せな、ダンナ！』
『行くぞ！』

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　８００→４００
Ｆ・Ｓ　バーンクロス：ＤＥＦ　２０００→１０００

「そしてモンスターを１体セット！　ターンを終了する」

黎：ＬＰ　２２００
手札：２枚（内１枚は『天使の施し』）
フィールド
：Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　４００）、Ｆ・Ｓ　バーンクロス（ＤＥＦ　１０００）、セットモンスター１体
：魔法・罠無し

「ふふふ、私のターン」

っさあ、来い！　この布陣は簡単には破れないぞ！

「成程、確かに『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊もダメージもありません。ですが、これはいかがでしょう？　罠カード『サルベージ』を発動！　効果

で『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』を手札に加えます」

チッ、また来る！

サルベージ
【通常魔法】
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を手札に加える。

「そして『魚雷魚』を召喚！」

魚雷魚：ＤＥＦ　１０００

「今召喚した『魚雷魚』を生け贄に『暗黒大要塞鯱』の効果を発動。『鬼火のウィスプ』を破壊します！」

放たれた魚雷は『ウィスプ』に直撃した。大爆発を巻き起こし、『ウィスプ』は一瞬で吹き飛んだ。

「くっ！」
「そして『バーンクロス』とセットモンスターに攻撃！」
『グガァアアッ！』

『ギジャァァアッ！』

再び集中砲火と突進。俺の場にいたモンスターはたった1ターンで全滅した。

「……（キッ！）」

「ターンエンドです」

プライド：ＬＰ　３７００
手札：3枚（内1枚は『砲弾ヤリ貝』）
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）、暗黒大要塞鯱（ＡＴＫ　２３００）
：集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！」

問題はあいつの手札の中の『砲弾ヤリ貝』だ。カードを伏せてもアレの前じゃ行動が制限されてしまう。使いどころを奴に握られているのと同じだ。

ここはとりあえず……。

「魔法カード『天使の施し』を発動。デッキからカードを3枚ドローし、手札2枚を墓地に送る」

引いたカードは『ネクロ・ガードナー』、『大木炭（だいもくたんインパチ）18』、『F・S　バック・ドラフトマン』。意外と早く帰って来たね、『バック・ドラフトマン』。
取り敢えずこれとこれを送って……、と。

「今墓地に送った『バック・ドラフトマン』の効果発動。ライフを500回復する」

黎：LP　2200→2700

「モンスターとリバースカードをセットし、ターンエンド」

黎：LP　2700
手札：1枚
フィールド
：セットモンスター1体
：伏せカード1枚

「ふふ、万策尽きましたか？　私のターン」
「万策尽きたかどうかは、お前の眼で確かめろ」
「そうさせていただきますよ。『ギガ・ガガギゴ』を召喚！」

『ギガァアアアッ！』

ギガ・ガガギゴ：☆５→４／ＡＴＫ　２４５０→２６５０／ＤＥＦ１５００→１７００

現れたのは、『コザッキー』によって改造を施されたトカゲ。防腐処理の施してある金属の鎧を着こんでいる、らしい。

「『暗黒大要塞鯱』で裏守備モンスターを攻撃、そして2体のモンスターでダイレクトアタックです」

巨大なシャチが三度背中の砲台を傾ける。そうはさせない！

「罠（トラップ）発動！　『次元幽閉』！　『暗黒大要塞鯱』をゲームから除外する！」

攻撃力の低い『暗黒大要塞鯱』で砲撃して来る事は分かっていた。コイツを除外してしまえば、奴の手札に残った『砲弾ヤリ貝』はただのザコに成り下がる！

セットモンスターの前の時空が歪んで砲撃を呑み込み、やがて集中砲火ごと『暗黒大要塞鯱』を呑み込んだ。

次元幽閉
【通常罠】
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「くっ、ならば『ジェノサイドキングサーモン』、やりなさい！」
『グジョアアアアアアアッ！』
「墓地の『ネクロ・ガードナー』をゲームから除外して、その戦闘を無効化させる！」

ネクロ・ガードナー
星3
闇属性／戦士族
ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　１３００
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

半透明の黒い鎧武者が現れると、巨大シャケの突進を受け止めた。
『ネクロ・ガードナー』はフィールドに出すと攻撃を2回ガードできるが、意表を突けない。出さずに捨てると攻撃を1回しかガードできないが、意表を突ける。少々悩ましい効果だ。

「ちょこざいですね……！　ならば『ギガ・ガガギゴ』！　“パワード・クラッシャー”！」

グォン！　と振られた爪がセットモンスターを斬り裂く。細長いバルーンを持った道化師が破壊された。

「いつまでもそんな小細工が通用すると思うなよ……！　１枚カードを伏せて、ターンエンドです！」

プライド：ＬＰ　３７００
手札：手札２枚（内１枚は『砲弾ヤリ貝』）
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）、ギガ・ガガギゴ（ＡＴＫ　２６５０）
：伏せカード１枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

……？　プライドの言葉が一瞬だけ乱暴になった？
どういう……、まさか！

「俺のターン、ドロー！」

ＳＩＤＥ：大地

――観客席

今現在、科学では証明できないような不思議な出来事が勃発している。

まず、どこからか黎の義妹さんが現れた。そのまま超人大戦を二人はおっ始め、決着が着いたと思ったら、黒服の男、プライドが乱入し、義妹さんをどこかへと連れて行った。

そしてデュエルに勝てば義妹さんを解放するという条件で黎とデュエルをやっているんだが、このデュエルも普通では無い。

闇のゲーム、というそうだ。近くにいた大徳寺先生が昔少しだけかじった事があるらしいが、デュエルのダメージが現実となり、敗者にはとんでもないペナルティが科せられるらしい。

現に、黎は先の攻撃で吐血した。すぐ止まったが、彼の異質な身体でなければ致命傷だっただろう。

そして現在に至る。

「防戦一方だな……」

十代が苦々しく言う。それは俺も同感だ。俺の炎のデッキでもあのフィールド魔法相手では歯が立たない。

だが、アレで終わるとは思えない。

「三沢くん、あのプライドという男、さっき言葉使いが変わらなかった？」

（ポ／／／）天上院くん。それは俺も思っていた。

「仮説でしかないが……」

一応前置きをしておく。何の証拠も無い推理は妄想と同じだと、かのシャーロック・ホームズも言っていたからな。

「あの男は名前の通り、プライドが高い、或いは傲慢な男なのではないかと思う」

「確かに、言葉は丁寧だけどどこかで負けるワケが無いと思ってる節はありそうね」

恐らく想像以上に黎が粘っているから焦りが募り始めているのだろう。焦りはストレスを呼び、結果、冷静さを失う。つまり本性が見え始める、という事だ。

頑張れよ、黎。防戦から攻撃に転じるタイミングを誤るなよ……！

SIDE：黎

ストレスが溜まってきているのか。恐らくあの言葉使いこそが奴の本性。

なら、タイミングを見計らって攻撃に転じれば、奴の戦術を挫ける！　タイミングを見誤るなよ、俺！

手札は2枚。ちなみにさっきの『次元幽閉』はトメさんからもらったパックの中身だ。良い事はしておくもんだね。

「魔法カード『強欲な壺』！　デッキからカードを2枚ドロー！」

引いたカードは『カップ・オブ・エース』と『逆転の明札』。そ

して手札のこのモンスターを使うと……。
行ける！

「魔法カード『カップ・オブ・エース』を発動。コイントスを1度行い、表なら俺が、裏ならお前がカードを2枚ドローする。コイントス！」

ここで、ズルとは分かっていながらも、俺は視覚神経に働きかける。動体視力を底上げし、どのタイミングで手を被せれば裏になるかを判断する。

「裏！　従ってアンタがドローだ！」
「ふふふ、残念でしたね」
『あちゃぁ～、ディスアドだ～！』
『フン、所詮は奴の実力などこの程度だ』

ちなみに今のは前が誰か。後が万丈目。
もしもし？　運をそうホイホイ掌中に収められたら苦労はありませんよ、万丈目さん？

「そうでも無いぜ？　アンタのドローにチェーンして手札の『F・S　サニーハットキティ』の2番目の効果を発動！　コイツを墓地に送って、手札の通常罠を発動する！」
「手札から罠カードですと！？」
「俺は『逆転の明札』を発動！　相手がドローフェイズ以外でドローした時、俺の手札の枚数が相手と同じになるようにカードをドローする！」

カップ・オブ・エース
【通常魔法】
コイントスを1回行い、表が出た場合は自分のデッキからカードを2枚ドローし、裏が出た場合は相手はデッキからカードを2枚ドローする。

逆転の明札（アニメオリジナル）
【通常罠】
相手がドローフェイズ以外にカードを手札に加えた時、自分の手札が相手の手札と同じ枚数になるようにドローする。

F・S　サニーハットキティ（効果モンスター）（オリジナル）
星4
炎属性／獣戦士族
ＡＴＫ　２０００／ＤＥＦ　９００
デュエル中1度だけ墓地に存在するこのカードを手札に加える事ができる。
このカードを手札から墓地に送る事で以下の効果を得る。「F・S　サニーハットキティ」の効果はデュエル中1回しか使えない。
●自分のターンに墓地に送った場合、手札から通常罠カードを1枚発動できる。
●相手のターンに墓地に送った場合、このカードと墓地に存在するレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる。

半透明の麦わら帽子を被ったネコミミ少女が手札の罠カードを手に取り、出現する。半透明の姿が消えると、残された罠カードは正常に発動していた。

「アンタの手札は4枚。対して俺は1枚。従って3枚のカードをデッキからドロー！」

「まさか、ディスアドバンテージを見越していたとは……」

これで手札は補充できた。

さあ、反撃開始だ！

待ってろよ、都。もうちょっとで助けに行けるからな！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ８：月一試験一中・絶体絶命、フィールド魔法『集中豪雨地帯』（後

黎「必死に反撃をするも、雨の中、俺の戦法は殆ど通じない！」

そして、１枚のカードが巡り、黎の反撃が開始する！

フィオ「でもその反撃も続かなかった！」

黎「冗、談、じゃねぇ……っ！　こんな、トコ、で、死ぬもんかぁ……！」

フィオ「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ９：月一試験一終・反撃封殺。黎、万事休す』！」

都「次回もお楽しみに！」

黎・フィオ「またシメを！？」

＜おまけ劇場＞

都「ところで作者さん、いつになったらあたしの出番は回ってくるのかな？」↑黒い笑顔

いや、あの、もう出て……

都「あんな邪神の手駒状態なんて認められるワケが無いんだよぉ！」

逃げろぉーっ！　続きまっす！

ＳＴＯＲＹ９：月一試験一終・反撃封殺。黎、万事休す（前書き）

今回、追い詰められた黎は最終手段に乗り込む！

黎「こんなトコで、負けちゃいけねぇんだ！」

フィオ「これが、黎の、力……！」

デュエルは佳境に！　スタート！

ＳＴＯＲＹ９：月一試験一終・反撃封殺。黎、万事休す

ＳＩＤＥ：黎

黎：ＬＰ　２７００
手札：４枚
フィールド
：モンスター無し
：魔法・罠無し

プライド：ＬＰ　３７００
手札：手札４枚（内１枚は『砲弾ヤリ貝』）
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）、ギガ・ガガギゴ（ＡＴＫ　２６５０）
：伏せカード１枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

俺の義妹、都を攫った邪神の手先（と思われる）、プライドとデュエルを行っている俺。奴のフィールド魔法『集中豪雨地帯』は非常に厄介。デッキのほぼ全てのモンスターが炎属性である俺は、あ

のカード1枚で戦略の大半を潰されてしまう。
だが、デュエルはモンスターだけで制するに非ず、だ。モンスターが駄目なら別の方面から攻め込めば良い！

「魔法カード『火炎査問』を発動！　俺は墓地から炎属性モンスターを1体で特殊召喚し、相手はそれよりレベルが2つまで高いモンスターを手札か墓地より特殊召喚できる。俺は『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』を特殊召喚！
ちなみに、この効果ではモンスター効果は無効化され、守備表示にする事もできない」
『はあっ！』

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：☆2／ＡＴＫ　８００→４００

「ならば私は墓地の『魚雷魚』を選択！」

魚雷魚：☆3→2／ＡＴＫ　１０００

来た来た。レベル2より2つまでレベルが高い奴はレベル4。そして恐らく奴のデッキにはレベル4なんて素直なレベルのモンスターはいない。『集中豪雨地帯』の効果で上級モンスターの召喚の手間を省くのがプライドのデッキのコンセプトのハズだ。

手札の枚数は、奴は4枚。この後も高速で上級モンスターを展開していくなら、1枚でも枚数は多い方が良い。

だから俺はプライドが召喚するのは『魚雷魚』だという事を読んでいた。水属性専用ドローソース『強欲なウツボ』の存在を考えると、手札の『砲弾ヤリ貝』は取って置くだろうからな。

強欲なウツボ
【通常魔法】
自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

火炎査問（オリジナル）
【通常魔法】
自分の墓地に存在する炎属性モンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する。
相手は相手の墓地または手札に存在する特殊召喚したモンスターのレベル＋2までのモンスターを1体攻撃表示で特殊召喚できる。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、表示形式の変更もできない。

「『鬼火のウィスプ』を生け贄に（すまない『ウィスプ』）……」
『良いって事よ、その代わり、負けんなよ？』
「（ああ！）『Ｆ・Ｓ　フレア・デーモン』を召喚！」

Ｆ・Ｓ　フレア・デーモン：ＡＴＫ　２４００→１２００

『ゴァアアアアアアッ！』
「む、だが、その程度、次のターンで破壊し、ダイレクトアタックに？げれば！」
「甘い！　『フレア・デーモン』は生け贄素材に『Ｆ・Ｓ』と名のついたモンスターを使用した場合、そのモンスターを特殊召喚できる！」
「なんですと！？」

赤い炎を背負う悪魔が地面に向けて火を吹くと、その炎はやがて形を成し『鬼火のウィスプ』となった。

『復活！』

鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　８００→４００

「バトル！　『Ｆ・Ｓ　フレア・デーモン』で『魚雷魚』を攻撃！
喰らえ“デヴィルズ・ヒート”？」
『ゴァアアアア、ガァッ！』

『フレア・デーモン』は背中の翼を羽ばたかせて熱風を起こすと、

『魚雷魚』を吹き飛ばした。

「むぐぅ……、づ熱ぁあああああっ！」

プライド：ＬＰ　３７００→３５００

「まだまだ『フレア・デーモン』の効果は続く！　こいつが相手モンスターを破壊した時、墓地のカードを１枚、このターンに召喚・発動できない事を条件に手札に加える！」

俺が加えるのは『強欲な壺』だ。ドローソースはあって困る物じゃ無いだろう（物語の方針上、デッキの残り枚数は考えてません）。

Ｆ・Ｓ　フレア・デーモン（効果モンスター）（オリジナル）
星６
ＡＴＫ　２４００／ＤＥＦ　１３００
炎属性／悪魔族
このカードが「Ｆ・Ｓ」と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚された時、リリース素材となったモンスターを特殊召喚できる。
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分の墓地に存在するカードを１枚手札に加える事ができる。
この効果で加えたカードは、加えたターンに場に出す事はできない。

「ターンエンドだ！」

黎：ＬＰ　２７００
手札：２枚（内１枚は『強欲な壺』）
フィールド
：Ｆ・Ｓ　フレア・デーモン（ＡＴＫ　１２００）、Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　４００）
：魔法・罠無し

『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』は攻撃力１９００のモンスターとのバトルでは破壊されないし、戦闘ダメージを始め、貫通ダメージや効果ダメージも受け付けない優秀な壁モンスターだ。容易くこの防御壁は突破できないだろう。

「私のターン！」

――観客席

「なんとか持ち直したッスね、黎くん」
「ああ、だがあの防壁も突破されるのは時間の問題だろう」

翔の胸を撫で下ろすような言葉に同意しつつも、大地が油断ならないと釘を刺す。正論だぜ、大地?

「黎……、頑張って！」

分かってるよ、フィオ。ここが踏ん張り所だからな。

――――デュエルリング

「私は『強欲なウツボ』を発動！　手札の『砲弾ヤリ貝』と2枚目の『魚雷魚』をデッキに戻してシャッフルし、カードを3枚ドローします！」

やはり、手札にあったか、『強欲なウツボ』！
どんなカードが飛び出すんだ!?　何が来るんだ!?

カードを3枚手札に加えたプライドはニヤリ、と笑った。
この守りの陣を突破できるカードを引いたのか!?

「私は『伝説のフィッシャーマン』を召喚します！」

!?　しまった、攻撃力１９００以下のモンスター！

伝説のフィッシャーマン：☆５↓４／ＡＴＫ　１８５０／ＤＥＦ１６００

伝説のフィッシャーマン
星５
水属性／戦士族
ＡＴＫ　１８５０／ＤＥＦ　１６００
フィールド上に「海」が表側表示で存在する限り、このカードは魔法の効果を受けず、相手モンスターはこのカードを攻撃対象にする事はできない。

「さて、ここで総攻撃を仕掛ければ私の勝ちです。覚悟は宜しいですかな？」
「ッ、ぐ！」
「まずは『伝説のフィッシャーマン』で『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』を攻撃です！」

鮫（？）に乗った男が手にした銛（もり）を投擲する。『ウィスプ』が炎のバリアを展開するよりも早くその攻撃が『ウィスプ』の身体を貫通した。

『ぐあああっ（済まねェ、ダンナ！）！』
「『ウィスプ』！」
「『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』撃破！　続いて『ジェノサイドキングサーモン』で『Ｆ・Ｓ　フレア・デーモン』を攻撃！」
「ぐあっ！」

巨大なシャケが突進を仕掛ける。本家（ジェノサイドキングデーモン）を超える攻撃を喰らい、追

い打ちとばかりに鋭い牙が悪魔を噛み砕く。成す術無く『フレア・デーモン』は破壊され、爆発。その衝撃が強力な突風となって俺を吹き飛ばした。

黎：ＬＰ　２７００→１３００

「グボッ！？」

壁に叩きつけられ、口の中に鉄の味が広がる。体内を探ってみると、成程、内臓が幾つか、今の衝撃で破裂している。

破裂という言葉で風船を思い浮かべるかも知れないが、別にあんな派手に飛び散る訳では無く、穴が衝撃で空けば充分に破裂だ。

『マズイ！　ダイレクトアタックが通ったら負けだ！』

『黎！』

『キバれぇ！』

『頑張れェ！』

グッ、頭も打ったか……？　グラグラするぜ……！

「止めです。『ギガ・ガガギゴ』で直接攻撃。死になさい、“騎士”の魂よ！」

『グガァアアアッ！』

鋭い爪が俺を斬り裂かんと振り上げられ、トカゲもどきが突進して来る。喰らえば、体はザックリと斬られるだろう。

だがな、プライド。

俺は都を取り戻すまで、死んでも死にきれないんだよ！

「ぼ、墓地の『フェイク・ガードナー』の、モンスター効果！　プレイヤーがダイレクトアタックを受ける時、墓地からこのカードを、特殊召喚できる！」

墓地から白い光を発せられ、フィールドに細長いバルーンを持った道化師が現れる。

フェイク・ガードナー：ＤＥＦ　２０００

「攻撃対象をそのモンスターに変更です」

『グジョォオオオオオッ！』

鋭い爪の一撃で、道化師は斬り刻まれた。

再び爆風が俺を襲う。

フェイク・ガードナー（アニメオリジナル）（効果モンスター）

星４

地属性／戦士族

ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　２０００

このカードが自分の墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃時に自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚されたこのカードが破壊された場合、ゲームから除外される。

「ぐっ……！　！　ごぶぐぁっ……！」

ぐ……、マジィかも。出血が止まらない。肉体は俺の制御下にある筈なのにコントロールが効かない。それだけ弱ってる証拠か。うぐ……っ！

「しぶといですが……、身体の方は限界ですかな？」
「ホザけ、アホンダラがぁ……！　まだまだ俺は、負けてねぇよ！」
「そうですか。では死ぬまで傷つき続けなさい。リバースカードを1枚伏せ、ターン終了です」

プライド：ＬＰ　３５００
手札：３枚
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）、ギガ・ガガギゴ（ＡＴＫ　２６５０）、伝説のフィッシャーマン（ＡＴＫ　１８５０）
：伏せカード２枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺の、ターン……「黎！　もう止めるんだ！」……、フィオ？」

デッキトップに手をかけ、次のカードを引こうとした矢先、フィ

オがストップをかけてきた。

「もう、止めて……！　キミの体はもうボロボロだ！　これ以上続けてたら本気で死んでしまう！　お願いだから……、もう、デュエルを、止めて……ッ！」

その言葉は涙と共に紡がれた。本気で俺を心配してくれている。とても嬉しい。この異形の能力の所為で俺達義兄妹は人々から忌み嫌われていた。話しかけようとする物好きも殆どいなかった。故にこうして心配してくれる人なんて誰もいなかった。

ボロボロと零れる涙は演技じゃない。悲痛な声は偽物じゃない。でも、だからこそ、止める訳にはいかない。

「……、ドロー！」

「黎！」

「俺を、信じろ……ッ！」

でも俺は、ただそのくらいしか言えなくて。

だから背中で語る。俺は大丈夫だって！

「俺は、モンスターをセット……！　リバースカードをセットして、ターンエンド……」

黎：ＬＰ　１３００

手札：１枚（『強欲な壺』）

フィールド

：セットモンスター1体
：伏せカード1枚

「ふふ、は、はははははっ！　今度こそ成す術無しですか！　行きますよ、ドロー！　私は魔法カード『浮上』を発動。墓地のレベル3以下の魚族・海竜族・水族モンスターを1体、表側守備表示で特殊召喚します。
出でよ、『魚雷魚』！」

魚雷魚：ＤＥＦ　１０００

わざわざモンスターを特殊召還したって事は、来る！　上級モンスターが！

「そして今特殊召喚した『魚雷魚』を生け贄に捧げ、『海龍一ダイダロス』を生け贄召喚！」

――――ッ！　よりにもよってフィールドを一掃するモンスター！？
アレを防ぐ為の手段はいくらでもあるが、今の俺には無い！

海龍一ダイダロス（効果モンスター）
星7

水属性／海竜族
ＡＴＫ　２６００／ＤＥＦ　１５００
自分フィールド上に存在する「海」を墓地に送る事で、このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する。

「ふふふ、さて、このモンスターと我がフィールド魔法『集中豪雨地帯』の相性、分かりますよね？」
「……『ダイダロス』の能力は、フィールド魔法にまで影響する。それを見越して『マインフィールド』なんかを場に出しておくモンだ。だが……」

そう、『集中豪雨地帯』は『海』としても扱い、その破壊は自分のカードでも相手のカードでも発動する。

「そう。私のデッキにはもう１枚『集中豪雨地帯』が眠っています。つまり、こちらの痛手は少なくて済むのです」

マインフィールド（効果モンスター）
星４
地属性／機械族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１５００
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがフィールド上から離れた時、自分の墓地に存在するフィールド魔法カード１枚を手札に戻す事ができる。

「ふふふ、さて、お別れです。この状況では、その効果も不必要でしょう。せめて、あの世であなたの義妹と再会する事を願うんですね。

『ギガ・ガガギゴ』でセットモンスターを攻撃！」

「ううっ！」

爪が四度煌く。盾を持った男が斬り裂かれた。

「『海龍一ダイダロス』、ダイレクトアタック！　止めです“リヴァイア・ストリーム”？」

東洋の龍の口から発せられた怒涛の水流が押し寄せる。流されれば粉砕骨折では済まないだろう。

だが、幕引きにはまだ早いぜ？

ジャック・アトラス曰く『主役のセリフ無しに舞台の幕は下りない。そして主役はこのオレ（ジャック・アトラス）だ！』（不要な部分はカッコで括らせて貰いました）。

「リバースカード、オープン！　速攻魔法『異次元からの埋葬』！　除外された、モンスターを、3体まで墓地に戻せる！　今我が元に、『ネクロ・ガードナー』、『フェイク・ガードナー』！」

異次元からの埋葬

【速攻魔法】
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

「『ネクロ・ガードナー』のモンスター効果で、その戦闘を無効にする……っ！」

２度も悪いな、『ネクロ・ガードナー』。
再び黒い武者が現れ、激流を防ぐ。

「『ジェノサイドキングサーモン』！　これなら例え『フェイク・ガードナー』を出しても『伝説のフィッシャーマン』の攻撃で止めが刺せます！」

確かに、『フェイク・ガードナー』の守備力は２０００だ。『フィッシャーマン』では破壊出来ないが、『ジェノサイドキングサーモン』で突破すればフィニッシュの一撃が通る。

「蘇れ、『フェイク・ガードナー』！」
「叩き潰しなさい、『ジェノサイドキングサーモン』！」
『へっへぇ～！』
『グジャァアアアッ！』

再び現れた道化師。手にしたバルーンを膨らませて攻撃を受ける緩衝材にしようとする。

ジェノサイドキングサーモン：ＡＴＫ　２６００
フェイク・ガードナー：ＤＥＦ　２０００

『駄目だ！　突破される！』
『危ない、黎！』
『レェイ！』

心配無用だぜ！　さっきアイツ自らがこの状況を突破できるカードをくれたからな！

「墓地の『シールド・ウォリアー』のモンスター効果、発動！　墓地のこのカードをゲームから除外し、モンスターの戦闘破壊を、無効にする！」

シールド・ウォリアー（効果モンスター）
星３
地属性／戦士族
ＡＴＫ　８００／ＤＥＦ　１６００
戦闘ダメージ計算時、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。
自分フィールド上に存在するモンスターはその戦闘では破壊されない。

コイツは『ギガ・ガガギゴ』であいつがこのターン最初に攻撃して破壊したモンスター。止めを刺す機会を自分で潰す事になるとは皮肉だな、プライド。

盾を持った戦士が道化師の前に半透明の姿で現れ、巨大なシャケの突進を受け止めた。

うーむ、流石主人公の使うモンスターズ。優秀な連中ばっかりだ。

「はぁ……、はぁ……、どうする……？　残った『伝説のフィッシャーマン』じゃあ、『フェイク・ガードナー』は、倒せないが？」

「……ッ、本っ当にどこまでもしぶとい男だなぁ！　ターンエンド！」

プライド：ＬＰ　３５００
手札：２枚
フィールド
：ジェノサイドキングサーモン（ＡＴＫ　２６００）、ギガ・ガガギゴ（ＡＴＫ　２６５０）、海龍－ダイダロス（ＡＴＫ　２８００）、伝説のフィッシャーマン（ＡＴＫ　１８５０）
：伏せカード３枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「お、れの、ターン……」

デッキのカードに手をかけ、そこで俺の視界はグルリと回った。
倒れた、と気がついたのは痛みを認識した時だった。
チクショウ……。ダメージが通らなくてもモンスターが破壊された時の衝撃が身体に堪え始めているのか……！
ググ、と身体を無理矢理起こす。ここで無茶しなくていつ無茶するんだ！

「黎！　どうしてなんだ！」

フィオが後ろから叫び声をあげた。

「妹っていっても義理なんだろう!?　血は繋がってないんだろう!?　どうしてそこまでボロボロになってまで助けようとするんだ!?

それともキミにとっては命よりも彼女が大事なのか!?　笑ってキミや皆を傷つけたあの娘の事が！　自分の命も大切にする余裕が無い程なのか！　ねぇ！」

……量は少ないが、口どころか体中から出血しているのが分かる。恐らく今の俺は血ダルマだ。今倒れた事も相まって見ればきっと、俺がもう戦えない程傷ついているように見えるんだろう。そしてそれは、正しい。

いくら身体を修復しても、出血やダメージからは逃れられない。ましてや闇のゲーム。物理的なダメージから免れる事はできないし、今の俺のダメージの総量は常人なら死んでいてもおかしくないくらいだ。

「ドロー……！」
「黎！　聞いてよ！」
「聞いているっ！」

フィオに負けないくらい声を張り上げて、俺も言う。これは、俺にとっては譲れない一線だから。

「今、無茶しなくて、いつするんだ……！　それに、血が繋がってるとか、繋がってないとか、んなモン、関係、無ェんだよッ！　人が、誰かを助けるのに『助けたいから』以外の、理由が要るのか！」

「！」

「そうじゃなくとも……、例え、義理であって、も、兄や姉が、弟や妹を助けるのは、先に生まれた者として、当たり前の事だろ！」

喉が裂け、血が出るのを感じる。やはり修復が間に合っていない。でも、止めない。アイツが、フィオが俺の事をどう思っているのかは知らない。都が俺をどう思っているのかも知らない。だが、そんな事俺にとってはどうでもいい。あの日の誓いを破る事は自分が許さない。

「それに、同じ血は繋がっていないが、同じ血なら通っている！」

「え！？」

「魔法カード『強欲な壺』を、発動！　デッキからカードを2枚、ドローするッ！　う、ごぶぐッ？？」

ビシャッ！　と血を吐く。体内での血の精製が追いつかない。材料も足りなくなって来ている。

知った事か！

「続いて、『貪欲な壺』を発、動ッ！　墓地のモンスターを、5体選択してデッキに戻し、シャッフル。その後、カードを2枚、ドロー！

俺は、墓地の『鬼火のウィスプ』、『マグマドラゴン』、『バーナーズ・キャノン』、『バーンクロス』、『フレア・チアガール』を、選択、っ！」

強欲な壺
【通常魔法】
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

貪欲な壺
【通常魔法】
自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

これで4枚のカードを補充できた。『貪欲な壺』は墓地からの再生を放棄するが、モンスターを再利用できるという利点も兼ね備える。デッキのコンセプトによって使われるか否かが分かれるカードだ。

「……」

俺は引いた４枚のカードを静かに見つめる。
１つ１つが光のラインで繋がり、勝利への方程式を構成する。

『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』
『Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム』
『炎の大津波』
『威嚇する咆哮』

問題は『グリル・ゴーレム』だ。効果では無い。その種類だ。

Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム（チューナー）（効果モンスター）
星３
ＡＴＫ　１３００／ＤＥＦ　１１００
炎属性／岩石族
このカードをシンクロ素材にしたシンクロ召喚に成功した時、墓地のカードを１枚手札に加える事ができる。

そう『チューナー』だ。あの炎の力はどういう仕組みか、シンクロモンスターも、エクシーズモンスターも入っていた。まあ存在だけなら、少なくとも５０００年前の時点で『地縛神』と『スターダスト・ドラゴン』達シンクロモンスターが戦っていたんだから不思議では無いだろうけど。

しかし、シンクロモンスターとエクシーズモンスターは未来の力。
こんな大観衆の元で使っていいものなのか。
いや、迷っている暇は無いな。『グリル・ゴーレム』はシンクロ素材にしないと効果を発揮できない。それに、今やるべきなのはプライドを倒す事。なら、躊躇ってはいけない！
修復がなんとか形を成して来たしな！

（推奨ＢＧＭ：遊星のテーマ）

「俺は、チューナーモンスター『Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム』を召喚！」
『ゴゴォッ！』

グリル・ゴーレム：ＤＥＦ　１１００→５５０

「『チューナー』！？　何ですかそれは！？」
『ち、チューナーって、聞いた事ねぇぞ！？』
『何なのかしら、アレ？』

「続いて速攻魔法『炎の大津波』を、発動！　このカードは、自分の場の、炎属性モンスターの攻撃力の合計が、相手のモンスターの攻撃力の合計を下回る時、手札の『Ｆ・Ｓ』を１体特殊召喚し、相手の場の炎属性以外のモンスター１体を、破壊する！　俺は、『海

龍一ダイダロス』を、選択ッ！」
「クッ！　ならば私はリバースカードの『リビングデッドの呼び声』で『ダイダロス』を蘇生します！」

炎の大津波（オリジナル）
【速攻魔法】
自分フィールド上の炎属性モンスターの攻撃力の合計が、相手フィールド上の炎属性以外のモンスターの攻撃力の合計を下回っている時発動可能。
相手フィールド上の炎属性以外のモンスター1体を破壊し、手札の炎属性モンスターを1体特殊召喚する。
相手フィールド上に炎属性モンスターが存在する場合、このカードは発動できない。

紅蓮の巨壁が押し寄せ、瞬時に『ダイダロス』を呑み込み、焼き尽くした。しかし、光と共に復活を果たされる。
チッ、できればこれでフィールドを制圧したかったんだが……。

「そして『F・S　マグマドラゴン』を特殊召喚、する！　更に、効果で、『バーナーズ・キャノン』を、特殊、召喚ッ！」
『まだまだ現役じゃ！』
『終わって、無い……』

さあ、これで役者は揃った。

まずは厄介なフィールド魔法を潰す！

「『バーナーズ・キャノン』のモンスター、効果、発動！　１ターンに１度、相手の魔法か、罠を１枚、破壊して、３００ダメージを与える！　“バーニング・ショット”？」

『喰らえィ！』

「対象は『集中豪雨地帯』！」

肩のバズーカが白い炎を吹く。この光景の説明も飽きてきたな。

プライド：ＬＰ　３５００→３２００

「ま、学ばない方ですね！　デッキから同名カードをサーチして発動！」

「だが、ダメージは通る上に、もう同名カードは、無いッ！」

「！？　しまった！？」

墓地のカードをサーチするカードは『隠された魔導書』や『転生の予言』がある。だが、どちらも罠カードであり、決して使い勝手は最高であるとは言い難い。

そしてサーチを封じる事で、『海龍一ダイダロス』は迂闊に効果を使えなくなった。

隠された魔導書

【通常罠】

このカードは自分のターンのみ発動する事ができる。
自分の墓地に存在する魔法カード2枚を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

転生の予言
【通常罠】
墓地に存在するカードを2枚を選択して発動する。
選択したカードを持ち主のデッキに戻す。

「さあ、ＬＡＤＩＥＳ　ＡＮＤ　ＧＥＮＴＬＥＭＥＮ　！！！　特別にこの召喚を見せてやる！　目ェ見開いて見逃すなよぉ！」
『（ザワザワザワ……！）』

おードヨめいてるドヨめいてる。
ちなみにこのディスクに有効なのは夜中に試して実証済みだ！

「レベル4の『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』に、レベル3の『Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム』を、チューニング！」
『チューニング？』
『何だそりゃ！？』

光輝いた『グリル・ゴーレム』が3つの星となって虚空へ登り、そして3つのエメラルドグリーンのリングとなって並ぶ。そしてその中へと『マグマドラゴン』が飛び込み、輪郭線と4つの星を残し

て姿を消し、やがて星だけになる。

「な、何が起こっている！？」

『何だコレ！　すっげぇワクワクする！』

『これは……』

『黎、キミはやっぱり……！』

「燃え盛る焔、水面を斬り裂く剣とならん！　希望が溢れる明日となれ！

シンクロ召喚？？」

キュピィイイイイイイイン！

「灰塵に帰せ！　『Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ』？」

『ハァッ！』

『おぉおおおおおおおおおっ！』

Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ：ＡＴＫ　２８００

光と共に飛び出した騎士は銀ではなく美しい青の軽い鎧を装着していた。鋭く長い剣を持ち、頑丈な盾を持たずに両手で剣を構えている。

「これが、未来の召喚方法の内の１つ、シンクロ召喚だ！」

「で、ですが、そのモンスターも炎属性なのでしょう！　ならば『集中豪雨地帯』の影響で攻守が半減します！」
「いや。生憎と『バーニング・ブレードガイ』は相手のコントロールする魔法・罠カードの効果を受け付けない！」
「何ですと！？」
「そして『グリル・ゴーレム』をシンクロ素材にしたシンクロ召喚に成功した時、墓地のカードを１枚、手札に加える！」

Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ（シンクロ・効果モンスター）
（オリジナル）
星７
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　１７００
「Ｆ・Ｓ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。

「厄介な……（しかし『ダイダロス』で場を一掃すれば問題はありません）」
「まだ終わってない！　さあ、２つ目の未来の召喚を見せてやる！」
「何ですと（しまった！　さっき奴は『１つ目の召喚』と……）！」

『まだあるんですの！？』
『凄い……、彼って何者！？』

「俺はレベル４の『フェイク・ガードナー』とレベル４の『バーナーズ・キャノン』を、オーバーレイ！」
『オーバーレイ！？　今度は何が起こる！？』
『ワクワクが止まらないぜ！』

オレンジと赤色の光と化した『フェイク・ガードナー』と『バーナーズ・キャノン』が１つに混ざり、銀河の様な渦を構成する。

「２体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

渦の中心から光が発せられ、眩い光が辺りを包む。その中に何者かがいるのが、光越しに分かる。

「エクシーズ召喚！」

ギュオォオオオオオオン！

「現れろ！　『Ｆ・Ｓ　ヒート・スティンガー』？」

『ハァッ、テリャァッ！』

『オォオオオオオオオオオオッ！』

Ｆ・Ｓ　ヒート・スティンガー：ＡＴＫ　２２００→１１００

光の中から手の指の間に赤い針を持った上裸の男が現れる。筋肉質な体にボロボロの長ズボンを穿いている。

「俺は『ヒート・スティンガー』のモンスター効果発動！　このカードは1ターンに1度、自身のオーバーレイ・ユニットを1つ墓地に送る事で、2体までの相手モンスターの攻撃力を８００ポイント下げ、効果を無効にする！」

「お、おーば……？」

「エクシーズ素材となったモンスターは墓地には送られず、エクシーズモンスターの下に置かれる。コイツを使って効果を発揮するのさ」

俺が墓地に送るのは『フェイク・ガードナー』だ。自身の効果での蘇生がリセットされたので、ゲームからは除外されない。そもそも『フェイク・ガードナー』の除外は破壊された時だけだからね。

F・S　ヒート・スティンガー（エクシーズモンスター）（オリジナル）
ランク4
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　２２００／ＤＥＦ　２０００
「F・S」のレベル4モンスター×レベル4モンスター
1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を墓地に送る事で、エンドフェイズまで2体までの相手モンスターの攻撃力を８００ポイントダウンさせる事ができる。対象となったモンスターの効果はエンドフェイズまで無効となる。

F・S　ヒート・スティンガー：ＯＲＵ／２→１

「対象は『海龍一ダイダロス』と『伝説のフィッシャーマン』だ！
“ファイア・ニードル”？」
『我が灼熱の棘、その身を以て味わうが良い！』

『ヒート・スティンガー』の針が紅の焔に包まれる。その針を投擲すると、刺さったモンスターが燃え始めた。

海龍一ダイダロス：ＡＴＫ　２８００→２０００
伝説のフィッシャーマン：ＡＴＫ　１８５０→１０５０

「む、効果を無効にされては『フィッシャーマン』も攻撃の対象にされてしまう！」
「そういう事だ！　行け！　『バーニング・ブレードガイ』で『海龍一ダイダロス』を攻撃だ！　“フレイム・スラッシャー”？」
『よくも好き勝手やってくれたな！』

煉獄を宿し、巨大な炎を上げる剣を掲げ、一気に突進する『バーニング・ブレードガイ』。『海龍一ダイダロス』は水流を吐き応戦しようとするがヒラリと躱し、正中線で真っ二つに斬り裂いた。斬られたその断面から炎が吹き出し、『ダイダロス』を火ダルマにして焼き尽くす。
巨大な海ヘビもどきは真っ黒な消し炭になり、消滅した。

「ぐわあっ！　ってか熱ッ！　アヂャ、アヂヂヂヂッ！」

プライド：ＬＰ　３２００→２４００

「続けて『ヒート・スティンガー』で『伝説のフィッシャーマン』を攻撃！　“熱針撃（ねっしんげき）”？」

『たっぷり礼をしてやるぜ！』

『ヒート・スティンガー』の持っていた針の内１本が太い炎の槍となり、投擲される。『伝説のフィッシャーマン』は回避しようとするが間に合わず、胸元をザックリと貫通した。

途端に全身が灼熱の業火に包まれ、大爆発を引き起こした。

「うぐあっ！　だ、熱いィッ！」

プライド：ＬＰ　２４００→２３５０

「更に『グリル・ゴーレム』の効果で手札に加えた魔法カード『強欲な壺』を発動！　これでカードを２枚ドローする！

……リバースカードを２枚セットし、ターンエンドだ」

黎：ＬＰ　１３００

手札：２枚

フィールド

：Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ（ＡＴＫ　２８００）、Ｆ・Ｓ　ヒート・スティンガー（ＡＴＫ　１１００）

：伏せカード2枚

勿論伏せた内の1枚は『威嚇する咆哮』。これで次のターンまでの身の安全を確保するつもりだ。

（BGM終了）

これで巻き返せる。そう思っていた。

「私のターン……ッ！　く、ククク……、ク、ククカカカカカカカカァッ！」
「！？」

何だ？　トチ狂ったか？
いや、違う。多分、キレたんだ。来る！

「カカカカァッ！　手を抜いて甘いプレイングをしていたのが間違いだった！　最初か全力で行けば良かったんだ！」
「何をするつもりかは分からないが、『威嚇する咆哮』を発動！
このターンのバトルフェイズをスキップさせる！」
「させるかぁ！　その発動の前に罠カード『フィッシャーチャージ』を発動しておいた！　私の場の魚族モンスター1体を生け贄にフィールド上のカード1枚を破壊し、場のカードを1枚破壊ィ！　『サーモン』をコストに私が選ぶのは当然『威嚇する咆哮』だぁ！」

しまった！　効果発動の前のタイミングで潰されちゃ攻撃を止められない！

威嚇する咆哮
【通常罠】
このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

フィッシャーチャージ
【通常罠】
自分フィールド上に存在する魚族モンスター1体をリリースして発動する。
フィールド上のカード1枚を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

まずったな。メインフェイズ1の終わりかバトルフェイズの頭で使うべきだったんだ！　フリーチェーンのカードだから自在に使えるけど、あっちもフリーチェーンのカードを伏せていたとはね……。
クソッ！　攻撃が来る！

「更に私は『ギガ・ガガギゴ』を生け贄に『超古深海王（ちょうこしんかいおう）シーラカンス』を召喚！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ！

『ギガ・ガガギゴ』が幻影の如く消えると、地面にヒビが入り、そこからブルーグレーの特徴的な魚が、地面を這うように現れる。

姿を現したそいつは、空中に泳いでいるかのようにフワリと浮き上がった。

そういえばシーラカンスは古代、１度陸に上がった事のある魚だったな。あの特徴的なヒレの形はその時足の代わりに使用していたものの名残らしい。

だが、そんな学術的考察より、特筆すべきなのは……

「デカイ……」

そう、その大きさだ。『王』と名のつくだけあり、サイズが尋常ではない。

しかもこのモンスターは水属性デッキのエースといっても過言ではない。

こりゃあ……、ヤベェか……？

超古深海王シーラカンス（効果モンスター）
星7
水属性／魚族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　２２００
手札を１枚捨てる。
１ターンに１度だけ、デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができず、効果は無効化される。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になった場合、自分フィールド上の魚族モンスター1体を生け贄に捧げる事でその効果を無効にし破壊する。

超古深海王シーラカンス：ＡＴＫ　２８００→３０００

『攻撃力３０００！？』

観客が驚く。この世界じゃ３０００でもデカい方か。元の世界じゃ1万オーバーなんてのも結構あったんだが……。
奴の手札は今2枚。止められない！

「私は『超古深海王シーラカンス』のモンスター効果を発動！　1ターンに1度、手札を1枚墓地に送り、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する！　尤も、この効果で特殊召喚されたモンスターの効果と攻撃は封じられるがな。
いでよ、『オイスターマイスター』、『レインボーフィッシュ』？」
『ウ〝ォオオオオオオオオオオオオオオオオオッ？？』
『グォオオオオッ！』
『ギシャァアアッ！』

オイスターマイスター：☆3→2／ＡＴＫ　１６００→１８００／

ＤＥＦ　２００→４００
レインボーフィッシュ：☆４→３／ＡＴＫ　１８００→２０００／ＤＥＦ　８００→１０００

牡蠣（かき）の怪人と虹色の魚が、『シーラカンス』の咆哮に合わせて、どこからか流れてきた水流の中から出現する。
クソッ！　攻撃力が２０００程度のモンスターでも、今はとんでもない強敵だ……！　しかも『オイスターマイスター』は場にトークンを残す誘発効果持ち。『超古深海王シーラカンス』との相性がバッチリのモンスターだ。

オイスターマイスター（効果モンスター）
星３
水属性／魚族
ＡＴＫ　１６００／ＤＥＦ　２００
このカードが戦闘によって破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、「オイスタートークン」（魚族・水・星１・攻／守０）１体を特殊召喚する。

レインボーフィッシュ（通常モンスター）
星４
水属性／魚族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　８００

世にも珍しい七色の魚。捕まえるのはかなり難しい。

「さあ、覚悟は良いか？」

「………………クッ！」

４体のモンスターは動けないが、『シーラカンス』は動ける！
攻撃力３０００で１１００の『ヒート・スティンガー』を狙われたら１９００の超過ダメージでアウトだ！

「『超古深海魚シーラカンス』で『ヒート・スティンガー』を攻撃ィ！　必殺、“ディープ・アクア・ブラスター”ァァァァアアアアアアアアアアアッ？？」

『ウ゛ォアァアアアァアアアッ？？？』

『超古深海魚シーラカンス』が口から深い青色の激流を吐き出す。最早それは柱と表現しても良いかも知れない程の太さと勢い。喰らえば『ヒート・スティンガー』ごと吹っ飛ばされて壁にメリ込むだろう。

ダメージを喰らわない為にも、残ったカードを発動したいが、無効にされる可能性もある。残ったカードが『サイクロン』の類なら有り得る話だ。が、止めなければ死ぬ。頼む、上手く行ってくれ！

「罠（トラップ）発動！　『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にして、カードを１枚ドロー！」

サイクロン
【速攻魔法】
フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

ガード・ブロック
【通常罠】
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

『ヒート・スティンガー』が水流に押し流され、しかし俺に直撃しかけたそれは白く光るバリアで防がれた。だが衝突と同時にヒビが入ったのだからあの吐き出した水の威力は凄まじいものだったのだろう。

「っと、危ない……！」
「危機を脱したと思うのか？」
「何！？」
「『超古深海魚シーラカンス』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、私は手札の速攻魔法『深海の超水圧』を発動！
このカードは私のレベル5以上の魚族モンスターが戦闘で相手モ

ンスターを破壊した時に発動する！　そのカード以外の私の魚族モンスターの戦闘を放棄し、その数だけ、相手の手札、場、墓地のカードをゲームから除外する！

私が指定するのは手札２枚、場の『Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ』、墓地の『フェイク・ガードナー』！」

緑のカードが発動した。バトルフェイズ中でも発動できる速効魔法。そのイラストには『シーラカンス』を筆頭とした数々の大型の水棲モンスターがペシャンコにひしゃげている姿があった。

「だが、『バーニング・ブレードガイ』は相手のコントロールする魔法・罠カードの影響を受けない！」

「残念ながら、『深海の超水圧』が発動した時、全てのカード効果は無効となるのだよ！」

「何だと！？」

『深海の超水圧』のイラストから並々ならぬ量の水流が流れ出て来る。『バーニング・ブレードガイ』は剣を斜めに構えて持ち堪えるが、やがてその水量に負けて押し流された。

更にその激流は止まる事無く俺に襲いかかった。

「そして除外したカード１枚につき相手に３００ポイントのダメージを与える！」

「うぐわ、あああああああああっ！」

深海の超水圧（オリジナル）

【速攻魔法】

自分フィールド上のレベル5以上の魚族モンスターが相手フィールド上のモンスターを戦闘で破壊した時に発動できる。
発動ターンに戦闘を行っていない自分の場の魚族モンスターは戦闘を行えず、行えない魚族モンスターと同じ数だけ相手の手札、場、墓地のカードをゲームから除外する。
除外したカード1枚につき、相手に300ポイントのダメージを与える。
この効果が発動した時、相手の魔法・罠・効果モンスターの効果は無効となる。

黎：ＬＰ　１３００→１００

激流が俺をリングから押し出す。咄嗟に金属化した腕を交差して衝撃を和らげようとするが、努力も空しく威力は致命傷の域を脱さない。場外へと吹き飛ばした水流はそのまま壁に俺を叩きつけ、圧縮でもするかの如く止まない。

「おご……、ぐぶ……ッ！　がっ！」

壁にヒビが入って身体がめり込む。ミシミシと腕が軋む。それでも水流は増水した川の様に止まらない。
更にとんでもない事が聞こえた。

「パワーアップだ」

プライドのその指示と共に水の柱は更に勢いを増し、太く、強く

なった。
そして、体の内側でベギッ、という嫌な音が聞こえた。
「うぐがば、ァ……ッ！」
身体のあちこちから血が凄い勢いで噴き出したのを感じ、俺の意識はそこで真っ黒な世界に落ちて行った。

SIDE：無し

ピチャ、ピチャ、と水滴の落ちる音以外、何の音もしない、静まり返った会場。
黎は、ヒビ割れた壁の前に俯せに倒れていた。焦点の合わない虚ろな瞳は、何も映していない。
激流は1分あまり続いた。深海の水圧を語るその強さは重機ですらひしゃげる程。無論、人間が耐えきれる訳が無い。
黎は人間の姿を保っているが、辺りの血の池となり、彼の皮膚は裂け、骨が覗いている部分もある。意識は無いだろう。死んでいるかも知れない。
「ふふふ……」
プライドが見下したような瞳で遠くに俯せで倒れている黎を見る。
「デュエル続行不能につき、私の勝ちで宜しいですかな？」

そう言った後、首を横に振った。

「ああ、もう聞こえてませんか。ははは……」

シン、と静まり返った会場に、その言葉は無情に響き渡った。

to be continued

ＳＴＯＲＹ９：月一試験ー終・反撃封殺。黎、万事休す（後書き）

善戦空しく、物理的なダメージで倒れてしまった黎。
そしてそれでも尚立ち上がろうとする！

フィオ「ダメだ！　これ以上は本当に死んでしまう！」

黎「セーフティラインなら、既に割っている！」

戦いを選ぶ黎は、負ける事を尚も拒む！

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１０：月一試験ー了・諸刃の爆撃
』！」

黎「お楽しみに！」

＜おまけ劇場！＞

黎「別に俺は万能じゃ無い。その辺り勘違いしないでくれ」

フィオ「へぇ。例えば？」

黎「そうだね。まず空を飛べない。宇宙空間で生存する事もできないし、エネルギーが不足すれば自重に耐え切れなくなり、動けなくなる」

フィオ「意外。不可能な事は無いと思ってた」

黎「まあ、その気になれば性別・年齢・肌の色は変えられる、なんて特技はある。電磁波を発して姿を透明にする事もできる。気配も消せばまず気付かれない」

フィオ「まさか、この間の覗きの時、翔くんだけじゃ無くキミも……」

黎「いなかったから。平常心無しで姿は消せない」

フィオ「てことは、覗きをしても平気な精神構造……」

黎「矛盾してる事言ってるの、気づいてるか？」

ＳＴＯＲＹ１０：月一試験一了・諸刃の爆撃（前書き）

敵の攻撃の前に倒れてしまった黎。何とか立ち上がるも、既に満足にドローも出来ない体だった。

しかし、その時、救いの手が差し伸べられる。

黎「みん、な……！」

長きに渡ったプライド戦、決着！　それでは、スタートです！

ＳＴＯＲＹ１０：月一試験一了・諸刃の爆撃

ＳＩＤＥ：無し

リングではプライドが黎を嘲笑っている。フィールドの端で俯せに倒れ、ドクドクと血を流している黎の瞳には光が差し込んでいない。腕からは赤い血が塗ってある白い骨が覗く。

観客達は茫然としている。デュエルで人が死ぬ。その事実を受け止めきれず、脳がフリーズしているのだろうか。

「黎、黎！　死んじゃダメだ！　レェエエエイッ！」

「起きろ！　起きてくれェ！」

「黎くん、目を開けて下さいッス！」

「死ぬなぁ黎！　こんなトコで死んだら、オレよりカッコ悪いゾ！」

「天上院くん、担架を！」

「分かったわ！　黎、死んだら許さないからね！」

その傍らで必死に黎を揺り起こすフィオ達。しかし、反応は無い。完全に意識を失い、或いは死んでいるかも知れない。

それでも少女達は懸命に少年に呼び掛けた。彼が生きている事を信じ、再び瞳に光が差すその瞬間を求めて。

そして果たして、その努力は結ばれた。

「ぐ、ぉお、お……っ！」

「これはこれは……。よもや生きていて、デュエル続行の意思まであるとは……！」

ガクガクと痙攣する腕で産まれ立ての小鹿の様に必死に立ち上がる黎。誰が見ても痛々しいその姿で、血を吐きながらも立ち上がる。

少しでも負担を軽くする為、軽金属で血管や皮膚を治し、重金属を鉄球にして地に放る。

なけなしの体力を掻き集め、鉛の如く重い左腕を持ち上げる。

「れ、黎！　もうデュエルは止めよう！　これ以上は本気で死んじゃう！　早く、早く治療を……！」

フィオのその言葉に、黎は黙って首を横に振った。

「ど、どうしてさ！？　命が危険なんだよ！？」

「セーフティ、ライン、なら……、既に、割っている……。次、意識、を、手放した、時が、俺の、最期だ……」

「そんな！」

愕然とした表情をするフィオ達。

「プライ、ド……！　俺は、まだ、死んで、無い……！　決着、を、つけるぞ……！」

「はっ！　その体で何ができる！　私の場には『超古深海魚シーラカンス』がいる！　『集中豪雨地帯』もあれば壁モンスターもいる！　貴様のライフは１００フラット、対し私は２０００以上残っている！　足掻けるモノならば足掻いてみろ！
　第一何故そこまでする！　所詮は義理の妹、命を賭ける義理があるのか！？」

「……、血が、繋がってる事が、そんなに、偉い、のか…？
　俺達は、絶対、に、幸せ、に、なる、って、誓ったんだ……！
あいつ、が、不幸、な、まま、死んで、しまうなら……、俺は、幸福も、命も、いらねぇ……っ！」

「……ターン終了！」

プライド：ＬＰ　２３５０
手札：０枚
フィールド
：超古深海魚シーラカンス（ＡＴＫ　３０００）、レインボーフィッシュ（ＡＴＫ　２０００）×２、オイスターマイスター（ＡＴＫ　１８００）×２
：集中豪雨地帯（フィールド魔法）

SIDE：黎

……、都。悪い。
どうやら俺は、ここまでらしい。ゴメンな。
助けに行くとか誓っておいて、こんな情けないカタチで死んでしまう。
世界は、どこまで行っても、俺達の事が嫌いなのか、な。

「はぁ、はぁ……、俺、の」

グルン！
視界が暗転しかける。飛びかけた意識を辛うじて引き留める。
まだ、死ねない！　せめて、アイツだけでも、倒す！
俺の為に、都の為に、精霊界の為に、友の為に。そして、フィオの為に！
ははっ、何時の間にかアイツの存在がでっかくなってやんの。

「黎。戦うんだね」
「ああ」

フィオの短い問い掛けに、俺は静かに答えた。
……？　どこかで聞いた事ある声のような気がするような……、しないような？

グイ、と右肩が持ち上がる。フィオが肩を貸してくれているのか。
だけじゃ無い。体のあちこちが十代達の手によって支えられている。
お前ら……。

「お、重いね、キミ……」
「平時で、４００キロ、今でも、１００キロは、超える……」
「体の内側に、金属でも、仕込んでるのかい……？」
「ああ」
重いはずだよ、とボソリとこぼす。悪いな。
『頑張れぇ！　遊馬崎ぃ！』
『負けるなぁ！』
『義妹（いもうと）さんを取り返して！』
へへ……。皆の応援が、心地良いなぁ……。
「行く、ぞ。これが、俺、の、俺達の、ラストターン……ッ！」
『ドロー！』
自然と、皆と呼吸が合った。
最期（誤字に非ず）に引いたカード、それは……。

「魔法カード、発動……！　『天よりの宝札』……！」
「こ、このタイミングで最強のドローソース！？」
「化物を、ナメるなよ……！」
ははっ、壊れカードも、自分が引き当てると頼もしいな。

天よりの宝札（アニメ・漫画効果）
【通常魔法】
互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く。

俺もプライドも手札は零。引くカードは6枚。さあ、勝負だ！

へへっ、ありがとよ。

「俺は、『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）　ボム・ボム・レゲエ』を、召、喚……っ！」

『やってやる！』

Ｆ・Ｓ　ボム・ボム・レゲエ：ＡＴＫ　４００→２００

「一気に、終わらせて、やる……！　速攻、魔法……、『焼夷弾（しょういだん）』を、発動……っ！

場の『Ｆ・Ｓ』１体を、ゲーム、から、除外して、互いのプレイヤーは、手札と場のカードを、全て、捨てる……」

『ひゃっはあ！　一世一代の、このドでかい花火を受けてみろぉ？』

「ぬ！　これでは……、『シーラカンス』の効果が使えない！？」

そう、この効果は『全ての手札と場のカード』という不特定のカードを対象に選ぶ魔法カード。『シーラカンス』は自分を対象にするカード効果しか無効にできない為、その効果は使えない。

だけじゃ無いぜ？　こいつには追加効果がある。

とある、諸刃の効果が、ね。

「……そして、自分が、送ったカード、１枚に、つき……、３００ポイント、の、ダメージを、受ける……！」

「な！？」

「俺は、手札、４枚、だから……、１２００ダメージ……！」

「わ、私はモンスター５体、フィールド魔法に手札６枚……、計１２枚で……、３６００ダメージだとぉ！！？」

『レゲエ』が光になって消え、その光が上空に舞う。
そして光は無数の爆弾に変わると、俺達の元へと降り注いだ。

ヒュルルルルルルルルルルル…………………！

髪の毛を伸ばして俺を支えてくれている皆を自分ごと包み込む。
落下地点は『レゲエ』が調整してくれているので、観客席に被害が及ぶ事は無いだろう。

「おお、髪の毛のシェルターか」
「チタンは、燃え、にくい、からな……。髪の、毛の、芯に、コイツを、通して、やれば、容易く、燃え、たりは、しねぇ、よ」

ドドドドドドドドドドドドドドドドッガァアアアアアアアアアアアアアアアァンッ！

次々と爆弾が投下され、着弾・起爆する。こちら側のカードだからか、それともプレイヤーに対する戦闘ダメージでは無いからかは分からないが、リングの方には被害は無い。
まあ、ガードの為に展開している髪の毛の防壁にはダメージがあるみたいだがな。
て事は、プライドはキッチリダメージを受けているんだろう。

そして、デュエルディスクが、デュエル終了の合図のブザーを鳴らす。

黎：ＬＰ　１００↓０
プライド：ＬＰ　２３５０↓０

黎：ＤＲＡＷ
プライド：ＤＲＡＷ

当然、引き分けという形で。

「明日香さん、十代くん、手伝って！」
「「はい！」」

ぐっ、どうやら世界は、俺の事を見捨てた訳じゃねぇらしいな。

「くくく……、まさか、引き分けとは言え、私のライフポイントが尽きるとはね」
「引き分けの時の条件、つけて、いなかったな」

現在、鮎川先生が持って来た大量の輸血パックと点滴を体中に刺し、俺は何とか一命を取り留めている。普通に喋るくらいはできるが、横になっていないと正直辛い。フィオや十代の介抱も必要だ。
ついでに言うと、全身点滴や輸血パックの針だらけ。今ならハリネズミとでも呼べるかも知れない。
ククク、とプライドは黒煙を体中から上げながら笑う。

「一応、メタを組んだこのデッキ相手にあそこまでやれたのだ、姫に会わせる事は出来ないが、ヒントくらいはくれてやるさ」

「ヒント……？」
「そうだ。我らが邪神様復活の手順だ！」
ゲタゲタと笑いそうな雰囲気を醸し出し、プライドはその鋭い眼を大きく見開いて俺達を睨む。
「我らが邪神様は姫の体を依り代に闇の力を取り込む！
人の身で耐えられるギリギリまで闇の力を蓄え、依り代の肉体が崩壊し次第自身で吸収の作業に取り掛かる！
つまり、お姿を現した時、貴様の大切な義妹はこの世には既に存在していないのだよ！」
「闇……」
「肉体がどれほど頑丈でも、闇は更にその上を行く！　葬式も挙げられぬ体になるとは、不憫だなぁ！」
「……、止められるんだな？」
「ほう、何故そう思う？」
「勘だ。それに、邪神が力を蓄えきる前に都を取り戻して邪神を引っぺがせば、都は無事、だろう？」
「ふふふ……。正解だ」
ニタァ、とプライドは笑う。まるで絶好の獲物を見つけたかのように。
少なくとも、好敵手や邪魔者を見る目ではない。
「私を含め、七つの大罪は文字通り7人いる。我らの役目は、邪神様の護衛。
その7人が闇のゲームで敗北し、命を落とせば邪神様をお守りする者が不在となり、邪神様自らが戦いの場に赴きなさる。そこで更に闇のゲームに勝利すれば、或いは、な」

要は不確定、という事か。
一口に闇のゲームと言っても、その中身は様々。肉体的にダメージを与えるものや、ダメージと同時に体が闇に喰われていくもの、敗北した後の罰ゲーム。色々だ。

もし、敗者の精神を破壊するものならば、都に勝利し邪神の人格を破壊できたならば、まだ希望はある。
だが、闇のゲームを展開するのは恐らく敵側。多少でも知能があれば、負けた時のデメリットを考えれば、敵がその類を仕掛けてくるとは考え辛い。

「まあ、せいぜい足掻き、絶望を糧として我らに喰われるのだな。はははははは！」

クルリ、とプライドは背を向ける。
また来る。そう言い残して、奴の姿は消えた。

「都、ゴメンな……。義兄（にい）ちゃん、助けてやれなかった……！　ゴメンな、本当にゴメンな……っ！」

静寂を帯びた会場で、俺の静かな懺悔の泣き声が響き渡った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ１０：月一試験一了・諸刃の爆撃（後書き）

なんとか引き分けに持ち込んだ黎。しかし、実力不足を痛感せざるを得なかった。

黎「化物の限界か……」

タイタンとの出会いの中で改めて知った己の実力。そしてとある連中が彼に忍び寄る！

フィオ「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１１：痛感する力不足』！　お楽しみに！」

都「折角の出番が取られちゃったよ！」

＜おーまーけっ！＞

黎「今回は性についてのお話しをする」

都「保健体育じゃ無いんだ」

フィオ「ベッド・イン？」

黎「ちゃうわ、エロ娘！」

都「経験者がそれを言うのもどうかと思うけどね」

フィオ「え……？」

都「ちなみに、あたしの体に傷は残らないけど、出産の時に逐一修復する事を回避する為に破瓜は治らないみたいだよ」

フィオ「な……！？」

黎・都「「それではまた次回！」」

フィオ（この二人の関係って……、近親相姦！？）

ＳＴＯＲＹ１１：痛感する力不足（前書き）

辛うじて一命を取り留めた黎。そんな彼の考えを変えるパラダイムシフトが発生した。

黎「では、スタートだ。今回と次回はデュエルが無しだと」

フィオ「ケチだねぇ」

ＳＴＯＲＹ１１：痛感する力不足

ＳＩＤＥ：黎

「だから、このデッキの特徴を活かしたいのなら、もう少しモンスターを抜いて……」

現在、俺は医務室のベッドの上で上半身を起こして、一人のイエロー生のデッキ構築の相談を受けている。

プライドとの戦いの後、俺は医務室のベッドの１つを丸々一晩占拠。４００キロの体重をよく支えられた物だと感心したが、髪の毛がベッドの淵から垂れ下がっていた。最後の爆撃の時に金属を髪の毛に集中したので、こうして髪だけベッドに乗せなければベッドに壊れる程の負担はかけないという訳か、と納得したのは余談だ。

あの戦いの後、このアカデミアを去ろうかと本気で考えた。何故かって？

当然だろう？　こんな人間じゃ無い化物を仮にも教育機関においておく訳にもいかないでしょうが。教師は生徒の安全を図る以上、俺みたいなモンスターを排除する風に考えるのが普通だし、生徒だって人間じゃ無い奴と仲良くしたり、机を並べたりするのは嫌だろうしな。

でも、なんつーか、ここの奴らは一風変わってるな。俺と義妹（都）の悲劇を知ると、キッパリ俺に味方する奴と敵視する奴に分かれた。

レッド、イエロー、ブルーと階級に関わらず、更には教師陣まで肩を持ってくれている。

はっきり言って、とても嬉しい。転生前はこの力は片鱗でも見せると気味悪がられ、街中も自由に闊歩できなかった。冗談でも作り話でも無く、研究機関の手が伸びて来た事もあったな。

「止め！　『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』でダイレクトアタック！」

もちろん、デュエルの相手も頼まれる。シンクロとエクシーズはこの時代に無いからね、もの珍しさかな。

「チクショー、負けたぁあああああああっ！」

「おんのれ、バケモンがぁアアアアアアアアッ！」

デュエル挑むのは俺を嫌っている奴の方が多いけどね。あーあー地団太踏みまくっちゃって。

負けたからってどうこうなるってモンじゃあ無いと思うけどなぁ、俺も相手も。

……、勝者の言い訳、かな？

「ぬぅううう、バレてしまってぇは、仕方が無いいいいいっ！逃げるのみだぁ！」

今？　タイタンと十代のデュエルの途中。で、イカサマがばれてタイタンが逃亡図るトコ。十代、そして原作と違って俺も排除の対象らしい。

目的は十代を止める事。逃亡を許せばタイタンが闇に飲まれる事も無いだろう。

うん、若本ボイス？　俺は好きだけど今は関係無いよ。

「待てぇ！」

「待つのはお前だ、十代」

追い駆けようと走り始めた十代の肩を掴む。

「な、何でだよ、黎！」

「深追いする必要は無い。明日香は無事だし、お前の『フェザーマン』はあいつが走り出した時に地面に落ちた。

追い駆けても得なんざ無い。ここは明日香をつれてこの廃寮から撤収しよう。見つかると面倒だ」

「……、分かったよ」

良し、タイタンもこれで安全だろう。セブンスターズに代わりに誰かが入るだろうが、それならそいつを倒せば良い。十代と俺（主人公タッグ）で、な。

そう思った時だった。

ゴウッ！

『！？』

眩いばかりの光が部屋中に満ち溢れ、ウジャド眼が発生した。

何！？　何故だ！　何故、闇の世界への扉が開く！

「のわぁあああああああああああっ！」

「うわぁあああああああああああっ！」

って、考えている場合じゃ無い！　十代とタイタンが闇の世界に引きずり込まれちまった！

「「十代！」」

「アニキ！」

しょうがない、プラン２に変更だ！

「どりゃあああああああああああああああっ！」

ファイト一発、俺も闇の中に飛び込んだ。

「な、何だこいつら！？」

飛び込んだ場面、それはあの『ダブルコストン』みたいな黒い奴らで周囲が埋め尽くされている所だった。

ダブルコストン（効果モンスター）
星4
闇属性／アンデット族

ＡＴＫ　１７００／ＤＥＦ　１６５０
闇属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。

「十代！　どけぇ、『ダブルコストン』もどき共がぁあああっ！」
「黎！」

素早く体にあの炎の力を流し込み変身すると、赤色の炎でウネウネ動く何かを焼き払った。ついでにタイタンの口の中に入ろうとしていたヤツも焼く。

「うあぢぃゃあああああああああああああああっ！」
「我慢しろ、大の大人が！」

このくらいは自業自得なので、勘弁願うぜ？

「黎！」
「遊馬崎　黎ぃ！」
「何してんだ！　さっさとデュエルの続きをやりな！　多分こいつらはイカサマの闇のゲームに対して怒っているんだ！　だったらデュエルが終われば、少なくともどっちかは解放される！　負けた方は俺がどうにかする！　早く続きを！」

こいつらが襲って来る理由はどちらかと言うと、闇のゲームの研究の残滓みたいなものがデュエルに反応して出て来たんだと思うんだが……、今は説明している暇が無ぇ！

「う、分かった！」

「“パワー・エッジ・アタック”？」

「ぬぉおおおおおおおっ！」

タイタン：ＬＰ　０

十代のＥ・ＨＥＲＯの最上級アタッカー『エッジマン』のブレードにより、タイタンの『スカル・デーモン』を戦闘破壊。その貫通能力でフィニッシャーとなり、デュエルが終了した。

途端、グネグネグネと黒いアレ（ゴキに非ず　ｂｙ黎）がタイタン目掛けて動き出し、十代の後ろに光る出口が発生した。

「十代、その出口から脱出を！」

「黎は！？」

「あのイカサマ師を助ける！」

十代をゲートの方へ押し遣ると、俺はタイタンの方に走る。

「く、来るなぁ！　来るなぁあああぁっ！」

尻餅をついたタイタンは必死に黒いアレを払っているが、ジワジワと包囲網は狭まっていく。

悪いが、黒いの。そいつをテメェらのエサにする訳にゃあいかねぇんだよ！

「そこまでだ、ってな！　喰らえ、“爆牙滅龍拳（ばくがめつりゅうけん）”？」

グワッ！　と焔の拳を振るい、紅蓮の炎で作った拳であの黒いのを殴り飛ばす。技名が無いのも寂しいので、ちょっとした遊び心でつけてみたんだが、これはハマりそうだな。

「お、おう？　助けてくれたの、かぁ？」

「後にしてくれ！　今は脱出が先決だ！」
「分ぁかったぁっ！」

タイタンを強引に引っ張り起こし、『ダブルコストン』もどきを炎で牽制しつつ、やや小さくなったゲートへ向かう。
その時だった。

『グビョォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』
「「！？」」

俺とタイタンの間に黒いのが集まり、デッカイ『ダブルコストン』もどきになった。テメェらはドラ○エのスライ○か！　そんであのデッカイのはキング○ライムなのか！

「っとと、ツッコミ入れてる場合じゃ無えな。タイタン、先に脱出してくれ！」
「お、お前はどうするのだぁ」
「後から行くよ！　はぁっ！」

腕から炎を噴出し、デカイ黒い奴の注意を引き付ける。
タイタンがゲートから脱出するのを見届けると、俺は右に跳び込み前転の要領で身を投げた。
だが、このデカイのは俺をターゲットと見定め、口からヘドロみたいな黒い塊を吐き出して来た。

「おっと危なっ！　こんの……、ラァッ！」

咄嗟に踵からジェットのように炎を噴出して回避する。そしてそのまま炎の槍を投擲。しかし、効果が薄い。
怯まずに連続して炎を噴出。隙を見てはゲートに近づくが、デカ

イのもモゾモゾと動いて進行方向を邪魔してくる。
……どうやらコイツは俺を外に逃がしたくないらしいな。上等！
だが倒す必要は無し、逃げるのみだ！

『黎！　もう出口が！』
『黎くん！』
『黎ぃ！』

十代達の悲痛な悲鳴に光の扉を見れば、半ば閉じかけている。急がないと！

「“火炎旋襲（かえんせんしゅう）”？」

素早く二本の刀を生み出し、炎を纏わせて縦回転で跳び上がりながら斬りつける。
そのまま勢いを利用してゲートの前に着地する。

『ジョォオオオオオオオオオオッ！』
「な！？　うわぁぁっ！？」

しかしあの黒キ〇グスライムはいつの間にか生やしていた腕を使って俺を殴り飛ばした。幸いにも咄嗟のガードが間に合ったが、また出口から離れてしまった。
こうしている間にも見る見るゲートが小さくなっていく。

「クソッ、タレがぁあああああああああっ！」

このままチンタラしてたら二度とこの世界から出られなくなっちまう！
かくなる上は特攻！　もうあのブラックキングス〇イムをぶち抜

いてでも突っ切って脱出してやる！
と、思ったんだが……。

バチバチバチバチ……、シュン。

「げ、時間切れ！？」

そう、この変身はウル◯ラマンみたいなタイムリミットがついているのだ。やっべぇ！

『ノグルァアアアアアアアアッ！』
「うっげげぇっ！」

マジですか！？　ここでゲームセット！？
ギャー！　あわー！　ｇｉｏｅｓｊｏｉｇＪｖｍｏ３ｉ４ｑｔｕ９０ｑ３４－ｐｋｇＪ）ＹＹ＃ＫＱ）ＥＷ＃（＆（，＆＝＃”～×％！？　↑パニック

「レェイ！」
『クリクリィ～！』

じゅ、十代！？

突然十代がパートナーのハネクリボーを率いてゲートから飛び出して来た。大きくなっても怖いらしく、ビッグ『ダブルコストン』もどきは十代とハネクリボーに近寄れない。

「早く！　出口が無くなっちまう！」
『クリ～！』
「助かった、ありがとう十代！」

抉じ開けたらしく、また広がったゲートを俺達2人と1匹は急いでくぐり、闇の空間から脱出する事に成功した。

フー、やれやれ。どうなるかと思ったぜ……。

――明け方・廃寮前

「何故、私を助けたぁ……」

夜が明けた廃寮の前、地面に座り込んだタイタンが力無く問いかけて来た。

んん、とっても簡単な事だと思うんだがなぁ。

「何故って、誰かを助けるのに『助けたい』以外の大それた理由がいるのですか？」

「違う、私はお前達に危害を加えたいわば敵だぁ。何故『助けたい』などと思えるのだぁ！　第一、お前は危うく死にかけたでは無いかぁ！」

んー、そんな事言われたって、確固たる理由も崇高な目的もあったモンじゃ無いんだぜ？

確かに十代が助けに来てくれなかったら俺はあの闇の空間でタイタンの代わりにセブンスターズになってかもだけどサ。

「別に深い考えは無い。ただ何と無く、理屈抜きに『助けたい』と思っただけです。誰かを助ける動機なんて、そんなモンで十分でしょう？」

「……、フフフ。甘いな、アマちゃんだなぁ、遊馬崎　黎よぉ」

はは、甘い、か。

「確かに、命を捨てて誰かを助ける理由が『助けたい』だなんて、

アマちゃん以外には無いわね」
「あ、明日香……」
「というか、アニキが助けに行かなかったら黎くん危なかったんスよ！　解ってるんスか！？」
「翔……、解ってるよ」
お前ら……。
「済まない、心配懸けたらしいな。そして十代、ありがとう」
「私からも礼を言わせてくれぇ」
のそり、とタイタンが立ち上がった。カチリ、と仮面を取りポケットにしまう。
中からは中年の男の顔が出て来た。ゴツいが、表情は優しい。
「お前達のお陰で目が覚めた、ありがとう」
「タイタン……」
「お嬢さん、遊城　十代、危害を加えてしまってすまない」
意外にもしおらしくなったタイタン。いつの間にか俺達が彼のパラダイムシフトになってしまったようだ。
悪だけの悪人はおらず、善だけの善人はいない、という訳か。
ちょっと、嬉しいかな。
「こぉのサギ師のビジネスはぁ、たった今を以って終了とするぅ！」
「うん、それが良いと思います」
パンパン、と服の埃を払い、ポケットから1枚の紙を取り出した。
そしてペンを使って何かを書き加えた。

「こぉれを持って行くと良い。今回の依頼人の名前が記された請求書だぁ」
「どうも。えーっと、
『クロノス・デ・メディチ殿
今回の依頼料、給料3ヶ月分頂き仕る。次第であったが、こちらの都合により仕事は中断。以降の接触を一切断つものとする。
なお、依頼料の支払いは不要と致す。
元・闇のゲーマー　タイタン』」
『クロノス先生!?』
「クロノス先生がコレを仕組んだのか!?」

曖昧な原作知識と照らし合わせると、『元』がついていたり、『仕事は中断』なんてのが加えられている。

「ではなぁ」
「縁があれば、またどこかで!」

俺は朝靄の中を立ち去って行くタイタンに手を振った。どこかで、もっといい奴になったアイツに出会える事を信じよう。
その一方で、明日香が十代の隣で憤慨する。

「信ッじられない、あの教師!　生徒をこんな危険な目に合わせたっていうの!?」
「有り得ない話じゃ無いよ、明日香」
「え?」
「明日香が巻き込まれたのは偶然だろうが、俺や十代を狙う理由だったら分かる。
あの先生は最後まで俺の味方をする先生方に難色示してたし、元々持っていたエリート思考の所為で十代の事をあんまし良く思ってなかったみたいだしな」

皆が肩を落として黙り込む。クロノス先生に対しての印象がガラガラと崩れていってるのだろう。
やがて、十代がポツリと呟いた。

「ちょっとショックだけど……、やっぱり俺、クロノス先生を軽蔑なんてできねぇよ……」
「十代！　分かってるの！？　貴方は下手したらもっと酷い目にあっていたのかも知れないのよ！」

ふふ、お人好しの十代と真面目な明日香らしいな。
この頃から二人の間柄は比較的他の異性よりかは近かったんだな。

「まあまあ、明日香。十代は別に間違っちゃいないよ」
「黎、あなたまで！」
「信じる、信じないは人それぞれだし、或いはクロノス・デ・メディチの名を騙った偽物かも知れない。
それにこういうお人好しの十代の性格は悪い物じゃ無いさ」

それは、そうだけど……。と口籠る明日香。やれやれ、このまま言い合っていても実入りは無さそうだ。話を切り替えるのが得策だな。

「それはそうと、この写真、お前の兄さんのモンか？」
「え？
！　これは兄さんの写真！？」

懐から俺が取り出したのは茶髪の男性が写っている写真立て。ポケットには入らないのでワイヤーを生み出してお腹の部分に括り付けておきました。

「１０ＪＯＩＮ、つまり十をｔｅｎ（テン）と読めば、こいつは『天上院』と読める。埃被っていたが写真は古くはないし、顔も何処と無く似ていたから、若しかしてとは思ったんだが……。ビンゴだったな」
「黎、ありがとう……」
「写真を見つけたのは十代だよ。お礼ならアイツに、な？」
「そう、ありがとう、十代」
「良いって良いって！」

チュンチュン、と小鳥の囀りが聞こえ始めた。あらら、もう朝か。

「十代、翔、隼人。夜が明けちまった。流石にコイツを見逃してくれる程大徳寺先生は甘くないぞ。帰ろうぜ？　ではまた学校で！」
「うわっ、ヤッベェ！」
「早く帰るッスよ、アニキ、隼人くん！」
「そ、それじゃあなんだな！」

パタパタ、と帰宅する俺達。
その後ろでの会話を、俺はしっかりと聞いていた。

ＳＩＤＥ：明日香

全く、面白い男ね。
片や、子供のように無邪気で人を惹き付ける。
片や、大人の様に冷静で未知の力を持つ。

「遊城　十代に、遊馬崎　黎、か」
「明日香～！」

呼ばれて振り返ると、中等部からの友人のフィオが駆けて来た。
マリンブルーの瞳にライトブラウンの髪。そして、遊馬崎　黎に思いを寄せている子。尤も、本人は気付いて無いだろうけどね。

「どうしたのさ。一晩中帰って来て無いって聞いたけど」
「ううん、何でも無い。ちょっとトラブルに巻き込まれただけよ」
「十分何でもあるからね、それ」

そうかもね、とここは適当に誤魔化しておく。
さて、帰りましょう。今日も授業があるからね。

「寮に戻りましょう？　朝ご飯に間に合わなくなるわ」
「あ、ちょっと明日香ぁ！」

SIDE：黎

「ん、ぐぅ～……っ」

グッ、と体を伸ばす。ざっと1時間ちょっとは眠れたかな。その気になれば3、4日は眠らないで済むから、睡眠時間としては十分だ。

「はぁ……」

にしても、力不足を痛感せざるを得なかったな、アレは。

俺がもっと強かったら、或いは炎以外の別の力を持っていたら、

十代に助けてもらう事無く、自力で脱出できただろうな。
　この先、あんなラッキーが訪れる可能性は無に等しい。十代に頼りっぱじゃ原作に影響が出るだろう。そうしてその辻褄合わせや余波がこちらに来たら取り返しがつかなくなるだろう。そうなれば都を取り戻す事はますます難しくなる。テメェの弱さの所為でゲームの難易度上げるとか、笑えねぇっつの。

『ダンナ……、新しい力が欲しいのかい？』
「その通りだよ、『ウィスプ』。再びプライドがやって来た時、もう一度炎のデッキで戦って負けないという保証は無い」
『寧ろ敗北を喫しそうですミャー』
『サ、『サニーハット』よ、そんなストレートに……』
「構わないよ『ブレイジング』。次も同じデッキとは限らないが、それでも違うデッキにすれば少なくとも一方的な攻めに遭うなんて事は無さそうだしね」
『ヒャッハア、アイツの体の構成も水が多いっぽいしね』
『む、それであの爆炎の正拳が効かなかったのか』

『レゲエ』の推測に『バーナーズ・キャノン』が神妙に納得する。
……やっぱり、パワーアップだよなあ。単純に炎のデッキを強化するんだったら『ネクロ・ガードナー』みたいな別のカードを入れてやるっていう方法がある。でも、飽くまでデッキの主体が“炎”ならそれじゃ解決策にはならない。主力を抑えられたらデッキの力は格段に下がる。
　炎以外の力が必要だというのは確実だろうな。

　ところで、何か忘れているような気がするんだが……。

ゴンゴン！

『査問委員会だ！　遊馬崎　黎、そこにいるのは分かっている、大人しく出て来い！』

朝っぱらから煩い声が響き渡る。

ああ、そっか。忘れていたのはこれか。

to be continued

ＳＴＯＲＹ１１：痛感する力不足（後書き）

黎「制裁デュエルの流れになった俺達。しかし翔が自信喪失の為に逃亡してしまう」

フィオ「どうしたら……」

黎「何腑抜けた事やってやがんだ、アイツは！　次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁　ＳＴＯＲＹ１２：『シャキッとしやがれ！』！」

都「次回もお楽しみに！　最後は死守するよ～！」

黎「抜け目ねぇな……」

＜おまけでゴザル＞

黎「しかしまあ、皆順応性高いな。俺達をこうも簡単に受け入れてくれるとは」

フィオ「嬉しくない？」

都「嬉しいけど、それだと今までの人生が何だったんだって話かな」

フィオ「こう考えたらどうかな？　神様がくれたプレゼント」

黎「信仰を微塵もしてないのに、プレゼントされてもちょっと困るな」

フィオ「じゃあ、これまでの苦労が実を結んだ」

都「こんな簡単に結ばれるようなモノじゃないんだよ……」

フィオ「二人の苦労との間にできた子供！」

黎・都『ア、アホかぁ！』

フィオ（この反応……、やっぱり？）

ＳＴＯＲＹ１２：「シャキッとしやがれ！」（前書き）

廃寮から帰って来た黎達。だが、今度は査問委員会の魔の手（？）が届いた。

黎「怖くないけどな」

第１２話のスタートです！

ＳＴＯＲＹ１２：「シャキッとしやがれ！」

ＳＩＤＥ：黎

「ドアを開けろ！　さもなくば爆破すブッ！」
「き・ん・じょ・め・い・わ・く・だ・ろ・う・がっ！」

はい、皆さんこんにちは。今作の主人公の遊馬崎　黎です。１時間程の睡眠の後、こうして査問委員会の連中に押し掛けられ、『朝っぱらから煩い』の苛立ちの下に扉ごと蹴り飛ばしてやりました。モチ反省無しです。

キィキィ、と扉が悲しく鳴るが、元々ボロいので気にしない。

「今、何時だと思っている。７時前だ。まだ寝てる奴もいるんだぞ……！」
「ぐっ、スマナイ、配慮不足だった……」
「俺に謝るな。それと爆破したらしたで、その後の責任はどう取るつもりだったんだ？」
「せ、責任……？」

……、こいつら、爆発物の免許持ってんのか？　それとも爆破云々はハッタリか？

「あのなぁ、爆破したらこんな古い寮じゃあ他に影響出るだろうが。

もしも柱なんかが衝撃で折れたら？　爆破した時に扉の向こう側に誰かいたら？　壁が崩れて風が入り、大切なカードが飛んで行ったら？　そういう時、どうやって責任を取るつもりなんだ、ええ？

お・ね・え・さ・ん？

まさか身体で払うなんてベッタベタな事、言わねぇよなぁ？」

「ぐっ、ぐぐぐぐ……っ！」

良し。正論は鬱陶しいモンだが、こうやって相手を言い負かす事には役立つ。そしてこいつらは恐らくこうやって反論される事を想定していない。傲慢な連中は相手にバカにされる事を嫌い、見下される事を嫌悪する。故に相手より常に上にいようとするのだ。

ならば話は簡単。重箱の隅を楊枝で穿る様な真似は正直嫌だが、こうやって相手の足元につけ込み、上から引き摺り下ろす。

うん、我ながら意地が悪い。

「と、兎に角、連行する！」

ガチャリ、と俺の手に手錠が掛けられた。

「この手錠（ワッパ）は俺へのプレゼントかい？」

「そうだ」

にひひ、それなら遠慮なく……。

「頂きます♪」

「は？」

ガリッ！　バリバリガギガギバギョバギョムギャムギャ……。

ゴクン！

「て、手錠を、食べた……！？」

いやー。この間、都とぶつかった時に金属があっちこっち傷んじまってねぇ。修復や不足分の補充に困っていた所だったんだよ。ありがたいなぁ。

「あ、おかわり」

『無い！』

チッ、ケチな奴らだ（↑違う）。

『退学ぅ――――――――――――――――――――っ！？』

「その通り。本日未明において遊城　十代以下５名は閉鎖・立ち入り禁止となっている廃寮へ無断で侵入。よって遊城　十代、丸藤　翔、遊馬崎　黎を退学処分とする！」

「隼人と明日香は！？」

「前田　隼人～は１度留年となっているたぁめ、いつでも退学にできるという点をか～ら大目に見て反省文と一週間の謹慎処分とするの～ネ。

シニョーラ明日香は、成績優秀でオベリスクブルー、更に～は何かしらの被害に合ったという事を考慮し～て、無罪放免とするの～ネ」

チッ、エリート贔屓が。

「な、何でも言う事聞くからさぁ、チャンスくれよぉ！」

「どうか機会を！」

十代が悲鳴に近い声を上げ、俺もそれに乗る。

「む～むぅ。それで～ハ、別のペナルティを提案するの～ネ。制裁デュエルなの～ネ！」

「制裁……？」
「デュエル……？」
「ドロ……、もとい遊城　十代と丸藤　翔はタッグ、遊馬崎　黎はシングルでデュエルを行う～ノ！　勝てば学園に残り、負ければ即退学なの～ネ」
「乗った！」
「分かった！」
「対戦相手ーハ、追って連絡するの～ネ」

では、とクロノス先生が話を締め括る。
さて、デュエルにおいて相手がエンド宣言をすればこちらのターン、というのは常識であり、恐らくはどんなターン制のゲームでもそれは共通、だと思う。
そんじゃ、次は俺のターンだ。

「校長先生、宜しいでしょうか？」
「おい貴様、立場を弁えビビビビビビビッ！？」
「ちょいと黙っててくれ」

何をやったかって？　靴下とズボンの隙間の肌から細いアースを伸ばして査問委員会の女の肌に巻きつかせて電流を流したのサ。夜のリングから逃げる時に十代に使ったスタンガン代わりの掌から流した電流と同じくらいだから、人間が喰らったら気絶するぜ？

「言いたい事がいくつかあります」
「ん、む。言ってみなさい」

同時に相手を怖がらせる効果もある。俺＝正体不明の化物、という認識が皆の心の底にこびり付いている。それを利用して『要求を蹴ったら次は自分の番だ』という恐怖の感情を与えるのだ。

どんな人間も、恐怖に立ち向かう為には勇気がいる。そしてその勇気は、相手の恐怖の根源に対抗し得るだけの力量――この場合はリアルファイト――が無ければ生まれない。

「まず、生徒手帳に『廃寮は立ち入り禁止』とは書いてありますが、『入った場合は退学』とは書かれていません。従ってこの退学処分は不当であると言えます」

「むむ」

「次に、調べが速すぎます。確かに俺達は廃寮に行きました。しかし、俺達が廃寮から出たのは今朝の5時過ぎ。そして査問委員会がやって来たのは午前7時前。

明らかにたった2時間弱で全員分の証拠を揃え、こうして連行できる、という事は何者かが我々を見ていた、という事か、廃寮へと誘導したという事だと思われます。そうでなければ我々が廃寮に入って行ったのを黙って見過ごしたものと推測されます」

「むむむ」

「最後に、これを」

パサッ、と俺は懐からあの請求書を取り出す。

「クロノス先生宛てです。廃寮にて明日香に危害を加えた男が持っていた物です。彼は依頼されたと言っていました。

もし、犯人が我々を何らかの方法で廃寮へ誘導。そして査問委員会に報告したとすれば2つ目と3つ目の俺の主張に説明がつきます。

つまり、今回の一件はクロノス先生、またはクロノス先生を騙った何者かが裏で糸を引いている、と言えます」

「（まままままま、マズイの～ネ！）で、で～も、そんな都合良く行くものなの～ネ？」

ああ、動揺してる動揺してる。

それじゃ何か一枚噛んでいると言っているようなモンだぜ？

「確かに、今回は大徳寺先生が廃寮の話をしたが故に廃寮に行きました。しかし、別に何でも構わないのですよ。

大徳寺先生に誰か伝いで廃寮の話をするように頼んでも良いし、レッド寮の中に廃寮にレアカードが眠っている、という噂を流しても良い。

兎に角廃寮へと誘導し、それを確認すれば終わり。報告して俺達は連行」

「ぐ～ぬぬぬぬぬぬぬっ。結局、何が言いたいの～ネ！」

「別に。退学云々も呑んでしまった後だから何も言いようが無いです。

ただ、以降、廃寮へと入った人への処分を寛大にしてほしいのです。それと、クロノス先生かクロノス先生の名前を騙った奴にも罰を」

「分かりました」

おし、お終い。俺が卒業した後もきっとこういうバカする奴は出てくるだろうからね。先輩からのちょいとした贈りも「ちょっと待った！」……、チッ、もう目が醒めたか。

俺の行動が癇に障ったのか、それとも自分の思い通りにならなかった事に腹を立てたのか、兎に角俺が気に入らないらしく、大声で彼女は捲し立てる。

「このバケモノがっ！　貴様などデュエルを待たずして退学だ、退学！」

「お前にそんな権限あるのか？　もう俺が制裁デュエルに勝てばここに残れる事が確定している。この結論を覆したいのであるならば、大多数の教師を納得させられる理屈が必要だ。私怨以外にそれができる理由はあるのか？」

「そんなもの、お前がバケモノであるという理由で十分だ！　ここは人間様の居場所だ、怪物は怪物らしく、怪物の巣に帰れオブッ！」

……気が付いたら、俺は右腕を金属化させ、あの女の鼻っ柱をぶん殴っていた。

この後の記憶は殆ど無い。気が付いたらあの女が全身血だらけで、俺はその胸倉を掴んでいた。

「テメェは化物を怒らせるとどうなるか、分かってねぇらしいなぁ、おい！」

「ひ、が……」

「ぼ、暴力反対なの～ネ！」

「ウルセェ！」

「ヒィッ！」

「ああ、俺は化物さ。だから何だ？　化物がここデュエルアカデミアに通っちゃいけないなんて校則あったか？」

「い、ぎぃ……」

「化物だ何だって言って、元々俺は人間だったんだよ。化物だから俺が傷付いても構わないってか？　お前のその考えこそが化物と言うべきなんじゃねぇのか！？」

「あ、ぐ……」

「何とか言えよ、おい！」

「そこまでだよ、黎」

フシュー、と怒りが抜けていくのが分かった。肩を誰かに掴まれたのだと自覚するのに数秒の時を要した。

そして掴んだ人物とは……。

「フィオ……！」

そう、フィオだ。

「何故ここに？」

「事情は明日香から聞いた。真相を確かめるべくここに来たんだけれど、その様子じゃ元気そうだね」

「ん、まあな」

沈静化した俺から制裁デュエルの話を聞いたフィオは納得した様に頷いた。

「分かった。わたしも協力しよう。キミがこんな形でここを去るなんて後味悪いだろうからね」

「ありがとう」

そして俺は鮫島校長へと向き直る。唖然とした表情をしているが、俺の視線が自分に向いた事を認識すると、すぐに俺に注意を向けた。

「この女を血ダルマにした事に関してはどういたしましょう？」

「う、む。彼女の言い方にも問題があった事ですし、反省文と奉仕活動でどうでしょう」

「奉仕活動？」

反省文は兎も角として、何だそりゃ？　普通は謹慎とかじゃ無いのか？

「キミの能力を恐れている人は大勢います。そこでキミが怖い化物では無いという事を、ボランティアを通じて知ってもらうのです」

成程。部屋の中に閉じ込めても、訳の分からない能力で密かに脱

出される可能性がある。だったら、目の届く範囲で行動してもらい、尚且つ今後『化物』呼ばわりによる傷つく人を減らす算段か。

っと。そこまで邪推しなくても良いか？　どうも人の腹を探るクセがついてるな。

「それで良いのなら。ご用があれば何なりと」

その一言の後、俺とフィオは部屋を後にした。

――海岸沿いの道・昼過ぎ

「ゴメンねぇ、黎ちゃん。こんなに手伝ってもらっちゃって」
「いえ、この程度は準備運動にもなりませんよ」

早速ボランティア。第1号は俺が化物だと知っても何の変化も無く接してくれた購買のトメさん。良い人だなぁ。
トラックに荷物を乗せるのだが、如何せんダンボールの数が多く、しかももう一人の購買部員のセイコさんもいなかった為に困ってい

たらしい。
　重いヤツは少なかったし、トラックの荷台に乗せれば良かっただけなので、髪と腕に荷物を持ち、2～3回往復しただけで全部運べた。

「ご用があればまたどうぞ」
「ありがとう。はい、お駄賃」

　ニッコリ笑ってくれた。きっとこれがミス・デュエルアカデミアの由縁、笑顔の素敵な人だ。美人はいくつになっても美人、か（年上好みじゃ無いからね？）。
　おまけにお駄賃としてドローパン（余り物じゃ無いよね？）もくれた。後で食～べよっと♪

　トラックが発進したのを見届けると、俺は寮の方へと歩く。新しい力を手に入れるのならまた精霊界へと向かう事になるだろう。
　炎が強化するのか、水や風の力を手に入れる事になるのかは分からないが、人目につかない場所から行った方が良いだろうな。
　そんな事を考えていた時だった。

「レーイ！」
「十代？」

　後ろから十代が駆けて来た。何やら焦っているようだが……。

「翔を見なかったか？」
「いや」
「くっ、あいつどこ行ったんだ！？」
「落ち着け、十代。何があったか話してみろ」
「ああ、実は……」

【事情説明中】

「成程……、『パワーボンド』か」

封印された機械族専用の融合カードか。そういえばそんな事があったな。

「鍵を握るのは“カイザー”の異名を持つ男。俺も探す」

「ありがとう！」

「十代は海岸沿いをこのまま探してくれ。俺は森の中を行く」

翔の成長イベントだな。これを逃すと十代達は退学。そうなると本気でヤバい。これ以降も十代の力を借りる時が来るかも知れないし、何より主人公を失えば第３期と４期は確実にマズい。いっちょ行きますか。

ダッ、と二人して駆け出す。俺は森の中の木々を飛び移り、途中で炎の精霊達を呼び出す。

よく枝が折れないなって？　重心や跳び方にコツがあるんだよ。コツさえ掴めば体重が４００キロ程度なら大丈夫。

『ヘイ！』

『呼びましたか？』

「翔っていう水色の髪に丸眼鏡の小柄な少年を探している。島中に散開し、一緒に探してくれ！　何かあったら花火弾を上げろ！」

『了解（イエス）、主殿（マスター）！』

ヒュン、と一瞬で赤い精霊達はあちらこちらへ飛び散る。

夕方になれば多分イカダと一緒に海にいるんだが、それ以前の行動は分からない。こういう所が原作知識の不便な所だな！

――海岸・夕方

『ますたー、こっちです！』
「いた！」

発見してくれたのは『バック・ドラフトマン』。やんちゃ坊主みたいな見た目で喋り方も幼い。

「翔！」
「ッ、黎、くん……！」

岩をタンタンタン、と飛び降り、翔の近くに行く。その後ろで『バック・ドラフトマン』が信号弾を空中に放つ。直に他の皆もやって来るだろう。

「事情は十代から聞いた。が、お前は何をしているんだ、イカダなんざ作って？」
「……、分かってるクセに……」

ボソリ、と翔が呟く。ああ、その通りだよ翔。俺は分かっていてこう言っているんだ。だが、ソレはお前の口から発されなくてはいけない。黙っていては自分の中で誤魔化されてしまうからだ。

「僕は……、島を出るッス」
「何故？　十代のダッグデュエルのパートナーだろうが」
「……それは、その役目は、黎くんに譲るッス」
「？」

翔は悲しげに目を伏せる。

「僕じゃあ、アニキの足を引っ張るだけッス。だったら二人退学になるより僕だけが退学になった方が良い」

「……」

「じゃあ、アニキに宜しく伝えて欲しいッス」

イカダに翔は向き直る。上手な出来とは言えないが、近くの港や島に行くのなら十分だろう。

「止めないで下さいッスね、サヨナラだけが人生だから」

じゃあ、と手を振りイカダに乗ろうとした翔の行く手に、俺は髪の毛を伸ばし、その先端に形成したブレードを突き刺した。

ガガガガガガガッ！　と何本もの黒い剣が柵の様に立ちはだかる。

「れ、黎くん……？」

「まだ、俺は言いたい事を言ってないぞ」

そうだ、こいつは勝手な理屈を押しつけて困難から逃げようとしている。そんな好い加減な臆病者を臆病者のままで帰す訳にはいかない。

髪を元に戻しつつ俺は極力冷やかに言う。ここは心を鬼にするべきだ。

「なんだかんだ言って、結局お前は、十代を見捨てるんだな」

「な、違うッス！」

「違わない。足を引っ張らないためにとか言うが、お前がいなくな

ったら十代は2対1で戦う事になる。それこそ足手纏いだろう」
「黎くん、組んでくれないんスか……？」
「俺はもうシングルで決定している。手持ちのカードを十代とのタッグ用にしたらシングルでデッキが回らなくなる。逆にシングル用に組んだらタッグでのデッキの回り具合が悪くなるだろうな。
恐らくは黒幕のクロノス先生の事だ。ブルーの中でも1、2を争う実力者か……、或いは外から腕のある奴を連れて来るだろう。そんな奴相手に中途半端なデッキを使えば、いくら俺でも勝つ事はできん」

これは真実。今から俺の手持ちのカードで上手く戦えるデッキをもう1つ構築する事はできない。それにクロノス先生が翔の事を聞いたら済し崩し的に十代は不戦敗の可能性がある。

「他でも無い、お前の力が十代には必要なんだよ、丸藤　翔。俺でも隼人でも明日香でも無い、お前が、な」
「……ッ、弱い僕の代わりなんていくらでもいるッスよ！　でも、アニキの代わりはいないッス！　だから、アニキだけは退学になっちゃ駄目なんスよ！」

「ふざけんなッ！」

今のは怒ったぞ、翔！

「人間は機械の部品じゃねぇんだよ！　お前の、十代の友達の代わりなんざドコ探したっていねぇんだ！
第一、聞いていなかったのかっ！　お前が十代のパートナー出来んのはお前だけなんだよ！
俺がタッグに回ればシングルがヤバくなる！　決定事項の都合上、隼人も明日香もタッグを組む事はできないんだよ！」

それに、俺はさっきから考えていた事がある。

「もし、お前がこのまま島を去ったとしても、俺は十代のパートナーやらねぇし、隼人も明日香も同じだろうよ」
「で、でも……」

ああ、もう！　何時までもウジウジウジウジと！

「この分からず屋！　敗北の責任から逃げるんじゃねぇよ！　男ならシャキッとしやがれ！」
「黎の言う通りだぜ、翔」

不意に後ろから声がし、振り向くと、十代を始めとした面々が揃っていた。
む、原作より多いな。

「アニキ、隼人くん、三沢くん、明日香さん、浜口さんに枕田さん、神山さんまで……」
「皆がお前を探してくれたんだぜ、感謝しろよ？」

多分『バック・ドラフトマン』の上げた信号弾に十代か隼人か『ハネクリボー』が気付いたんだろう。『ハネクリボー』が自力で翔を見つけたのか、それとも？

翔の俯き具合が大きくなる。後ろめたいのだろうか。

「アニキ……。僕とタッグなんて止めて欲しいッス。僕が足を引っ張って負けるだけッスから。どうにか交渉して隼人くんや明日香さんと組んで、学園に残って欲しいッス」

「イヤだ！」

翔が紡いでいった自責の言葉を十代は一言でぶった斬った。

「俺のパートナーはお前だ！　他の誰でもねぇ！」

「な、何でッスか！？　何でそこまで僕に拘るんスか！？」

「お前、俺の弟分名乗るんだったら、もっと本気見せてくれよ！本気出せないでここを去るなんて悲しいぜ？」

「アニキ……」

うん、と皆も頷いてくれる。

翔の顔に光が戻り、決意の表情を新たにした。

「うん、僕頑張るッス！」

「その意気だ、翔」

そう言ったのは十代でも誰でも無かった。

「亮！」

それは丸藤　翔の兄、“カイザー”の異名を持つサイバー流の男、丸藤　亮だった。

「貴方が、カイザー亮」
「そうだ」

ピン！　と閃いた。原作にもあった気がするが、覚えてないので自分の案にしておこう。

「カイザー、十代とデュエルをしてくれませんか？」
「ほう？」
「翔に見せてあげて下さい、貴方の皇帝と呼ばせるまでのデュエルタクティスを。弟さんに欠けている何かを見せてあげて下さい」

ふっ、とカイザーが笑う。

「俺は別に構わない。そちらは？」
「俺もオッケーだぜ！　くー、学園ナンバー1とのデュエル、楽しみだなぁ！」

――波止場付近・夜

「来い！　カイザー！」
「ああ。行くぞ、『サイバー・エンド・ドラゴン』で『マッドボールマン』を攻撃！　“エターナル・エヴォリューション・バースト”？」

サイバー・エンド・ドラゴン（融合・効果モンスター）
星１０
光属性／機械族
ＡＴＫ　４０００／ＤＥＦ　２８００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

E・HERO（エレメンタルヒーロー）　マッドボールマン（融合・効果モンスター）
星6
地属性／戦士族
ＡＴＫ　１９００／ＤＥＦ　３０００
「E・HERO　バブルマン」＋「E・HERO　クレイマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

カイザーの切り札『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃が、三つ首から放たれる光線が強固なる守備力を持つ『マッドボールマン』を呑み込み、そのまま十代を襲った。

十代：ＬＰ　０

「強いな……。十代が敗れるとは……！」
「これが、学園最強……」

大地とジュンコが感心する。十代の引きは凄まじい。ピンチにな

ればなるほどそれは強くなる。
だが、カイザーはその上を行った。十代が防御を固め反撃に移る前に、彼を倒したのだ。
そして……。

「欠けていた何かは掴めたか、翔？」
「うん！」

大した男だ。この短いデュエルの中で弟に足りないものをしっかりと分からせやがった。ただ強いだけじゃ無い。タクティクスのみならずメンタルの方も強い。

「なら、デュエルの方は大丈夫だな？」
「大丈夫ッス！」

ふふっ。もう元気を取り戻したか。なら、タッグデュエルは安心だな。

「ああっ！」
『！？』

っとと、ビックリしたなぁ。
突然、十代が何かを思い出したかのように声を上げた。

「寮の夕飯の時間、間に合わなくなる！」
「確実に間に合わないと思うが」

だって真っ暗だもん。冬が近いからってこの暗さじゃあ夕飯の時間は過ぎていると思うぞ。

「ああ～、晩御飯食べ損ねてしまいましたわ……」
「そう言えばお腹空いた……」

ももえ&ジュンコもか。
ま、しゃーない。ここは一肌脱ぎますか！

「俺の部屋の台所に食材があったから、あれを使って何か振舞おう」
「黎くん、料理できるんスか！？」
「黎が！？」

……、コイツら失礼だな。

「今時、男でも料理の1つや2つできないと社会でやって行けねぇからな」
「意外なんだな……」
「黎、キミの料理って一般人でも食べられる、よ、ね……？」

……フィオ、人をゴキブリみたいに言わないでくれないか？
なまじ自分が人間じゃ無い事を自覚しているから、凄まじく傷つくんだけど。

「それとも、化物の作った食事を食うなら、一食抜いた方がマシか？　なら俺の分だけで良いかな」
『食べる、食べます、食べさせて！』
「俺も良ければ、ご相伴に預からせてくれ」

おっと三段活用。
皆、食欲には勝てないみたいだね。カイザーも相伴する事になったし。

――レッド寮食堂・夜

「ウメェ！　スッゲェ美味い！」
「い、一流シェフ並み……！」
「黎、キミは何者！？」
「あー、それ僕のッス」
「早い者勝ちなんだな！」

食材が思ったよりも買ってあったので、ちゃんと振舞えた。別に高級レストランで出るようなフレンチとかじゃ無く、普通の一般家庭料理なんだが……。

「そこまで言われると、作り甲斐があるよ。機会があればまた振舞おう」
「そ、その時は教えて下さいませっ！」
「あ、アタシも！」
「わたしも！」
「良ければ私も……！」

あらら、男を掴むには胃袋から～、とか言う諺があったが、逆もありか？　女性陣が皆喰い付いて来た。

「ふむ、俺も良ければ頼むよ」
「おっと……、大地、どっから沸いた？」
「きゃっ！　み、三沢さん、いつからそこに！？」
「今さっきだ！　ついでに言うと人をゴキブリやボウフラみたいに言うな！」

むー、この頃から空気男の片鱗が……？
因みにボウフラは漢字で書くと『子子』になる。意外と覚えやすそうだな。

こうして、俺達の夜は更けて行く。
暫く後に待つ、制裁デュエルに向けて。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ１２：「シャキッとしやがれ！」（後書き）

デッキの調整を終えていざ制裁デュエルに臨む黎、十代、翔の３人。
ところが、黎の対戦相手が急に来られなくなってしまう。

黎「代案があるんだが……」

黎の提案はとんでもない内容だった！？

フィオ「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁」

都「『ＳＴＯＲＹ１３：もっと前に進まなくてはいけないから』！
　お楽しみに！」

黎「結束して来やがった……」

＜おまけなのだ～＞

黎「どうでもいい話なんだが、俺が覗き魔だって前に言ったよな？」

フィオ「あれ、冗談なんじゃ……」

黎「というワケで電磁波の話だ。俺は体表から電磁波を発して光の進行を曲げ、後ろに通す事ができる」

フィオ「詳しくは少し前の話で」

黎「そうすると俺の後ろの光景が映る。これを応用した透明マントみたいなモンの開発が行われている、らしい」

都「らしいって……。ちなみに理論的には可能だけど実用化はハッキリ言って無理の領域らしいよ」

ＳＴＯＲＹ１３：もっと前に進まなくてはいけないから（前書き）

制裁デュエル当日。ところが黎の相手は来れなくなって……。

黎「ならば、２体１でどうだ？」

果たして門番相手に勝利する事ができるのか！

＜今回の注目カード＞

フィオ・都『な～にかな、な～にかな？　今回は、これ！』

ゴゴゴゴーレム
効果モンスター
星４／地属性／岩石族／攻１８００／守１５００
フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードは、１ターンに１度だけ戦闘では破壊されない。

フィオ「アタッカーとしても使える破壊耐性持ち！」

都「１ターンに１度、守備表示なら破壊されないんだよ」

ＳＴＯＲＹ１３：もっと前に進まなくてはいけないから

「“フォーチューン・テンペスト”ォ？」
「「ぬあああああああああああああああああっ！」」

迷宮兄弟：ＬＰ　０

迷いを振り切った翔の兄直伝の必殺カード『パワーボンド』で推参した『ユーフォロイド・ファイター』の放った光線が、戦闘破壊されない『ダーク・ガーディアン』を呑み込み、そのまま迷宮兄弟を襲った。丁度十代がカイザーと戦った時の構図を再現するかの様に。

ユーフォロイド・ファイター（融合・効果モンスター）
星１０
光属性／機械族
ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
「ユーフォロイド」＋戦士族モンスター
このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。
このカードの元々の攻撃力・守備力は、融合素材にしたモンスター２体の元々の攻撃力を合計した数値になる。

闇の守護神－ダーク・ガーディアン（アニメオリジナル）（効果モンスター）
レベル１１
闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３８００／ＤＥＦ　３５００
このカードは通常召喚できない。
「ダーク・エレメント」の効果でのみ特殊召喚する。
このカードは戦闘では破壊されない

ダーク・エレメント（アニメオリジナル）
【通常魔法】
自分の墓地に「ゲート・ガーディアン」が存在する場合に発動する事ができる。
ライフを半分支払う事で自分のデッキから「闇の守護神－ダーク・ガーディアン」を特殊召喚する。
このカードを発動する場合、このターン他のモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

あの時は戦闘破壊されないモンスターではなかったが、場のカードでは破壊できなかった。それを『パワーボンド』で融合召喚した機会族モンスターでフィニッシュとなった点は一致する。

パワーボンド
【通常魔法】
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。
発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

何にせよ翔が完全に兄の呪縛から解放されたみたいで良かった。
発破かけた身として、これで負けられると後味が悪い事この上無い。

どうでも良いが、『ユーフォロイド・ファイター』で『ユーフォロイド』の上に乗ってる奴は融合素材によって違うのだろうか？

「あ、有り得ないの～ネ！　伝説のデュエリスト～が、あんなドロップアウトボーイ～ズに負けるなん～て！」

リングの端の方では事を仕掛けたクロノス先生が混乱している。
最下位の寮の生徒に負ける事を一切想定していなかったのだろう。
ふふ、誤算だったね、クロノス先生。

「フフフ、ウチの生徒も中々強いでしょうニャ？」
「ん？　ネ～コ！？　猫嫌い～ノ、カプチ～ノ！」

その後ろから大徳寺先生が猫のファラオを連れてクロノス先生に話しかける。猫が苦手なクロノス先生は近付けられたファラオを見て更に取り乱す。

クロノス先生の誤算は３つ。

１つ目は迷宮兄弟の実力。確かにあの二人は伝説のデュエリスト、武藤　遊戯氏と城之内　克也氏とデュエルを行い追い詰めた事がある。だが、当時の二人はまだ成長途中。現在でも張り合えるかと聞かれれば、その答えはＮＯだろう。何せあの二人はペガサス・Ｊ・クロフォード氏や海馬　瀬戸氏も認める（瀬戸氏だって克也氏の最低限の実力ぐらい認めている）天性のデュエリスト。あの高みに辿り着けるのはほんの一握りだ。

２つ目は翔だ。呪縛、或いはトラウマを解消し『パワーボンド』の制限を解いた彼の心は飛躍的に進歩した。大方、翔が十代の足を引っ張るとでも思ったんだろうが、失敗だったね。フィニッシャーである翔はしっかり歩むべき道を見つけていたんだから。

３つ目は十代の引き。主人公補正とでも言うべきディスティニードローは、時にパートナーのドローにも影響を与えるのだから。翔が『シールドクラッシュ』や『ユーフォロイド』を引けたのもあれが原因だろう。

さて、長ったらしい説明はこれくらいにしよう。次は俺も番だ。俺もキッチリ勝って、皆でレッド寮に帰ろう！

と、思った時だった。

Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　？

「クロノス・デ・メディチなの～ネ」

いきなりクロノス先生の携帯電話が鳴った。何かを話し、突然クロノス先生が大声を発した。

「そ、それは困るの～ネ！　もう貴方がデュエルをする事で決まってしまったのーネ！」

『せやから悪い言うてるやろ！？　急用が入ってしもうたんや、ギャラと信頼考えたらこっち断るしか無かったんや。堪忍してぇな』

「そ、そんな事言われて～も、ペペロンチ～ノ！」

『ほな、ワイも急いでるから、また今度な！』

「え、あ、ちょっと～！」

プツッ、ツー、ツー……。

「……、ガックリンチョ」

今の声……、あの恐竜使いか？

まあ、それは兎に角として、あの恐竜くんはうっかりダブルブッキングをやってしまい、そしてこっち側の予定を蹴る事にしたのだろう。バカだなー。

クロノス先生はガックリと肩を落としている。

うーん、流石に哀れだし、俺だけ制裁無しってのもな。

ふむ、妙案が閃いた。これならきっとクロノス先生も彼らも呑んでくれるだろう。

「クロノス先生、クロノス先生」
「……何です～ノ？」
「どうやら俺の相手は来ないみたいですね」
「うっ！」

図星か。きっと『だったら俺の不戦勝』なんて言葉が続くと思っているのだろう。ふふ、甘い。俺はそんな根性捻じれた奴じゃ無いよ。

「だったら、代案があるんですが、聞いてくれますか？　多分先生の協力が必要ですから」
「聞くの～ネ。でも、不戦勝はダメなの～ネ、ペスカトーレ」
「言いませんよ。俺の代案ってのは、

俺と迷宮兄弟の2対1のデュエルを行うって事です」

ザワザワザワザワザワザワザワザワザワザワ……ッ！

俺の発案は別に耳打ちしていた訳では無いので、瞬く間に会場にそれは広がった。騒めきが辺り一帯を支配する。

『おい、正気かアイツ！？』
『調子コいてるんじゃねぇぞ！』
『な、なんて無茶な提案を……！』

「本気なの～ネ？　言っておくけれ～ど、負けたら退学なの～ネ」
「百も千も承知ですよ。少々俺の提案する変則ルールに乗ってもらうつもりですがね」
「ん～ムムム……」

暫くクロノス先生は悩んでいたが、退場しようとしていた迷宮兄弟の所へ駆け寄ると何事か話して二人を連れて戻って来た。

「その変則ルールとやらを話すの～ネ」
「簡単ですよ。まず、ライフは互いに８０００、ただし俺は単独、迷宮兄弟は共有。
次にターンは俺から回す。そして二回目の俺のターンが来るまで互いに攻撃はできない。
最後に、フィールドと墓地は共有しても構いませんが、迷宮兄弟は計１０枚まで出せる。つまり、片方がモンスターを５体出していても、もう片方も５体出せる、という訳です」
「ふむ、よ～ろしい。では、お任せします～ノ」

クロノス先生が一礼して下がると、橙と緑の拳法の道着を来た二人組が前に出る。

「はっ、とっ、はぁっ！」
「やっ、ていっ、はっ！」

そのままアクロバットな動きを披露し、シュタッ、と俺の前に線対象の形でポーズを決める。

「我ら流浪の番人、迷宮兄弟」
「先程は負けたが、今度はそうは行かぬ」
「お主に恨みは無いが、訳あって相対する」

「我らを倒さねば道は開けぬ」
「最早油断は無い！」
「覚悟は良いか！」
『いざ、勝負！』

バン！　とセリフごとにポージングを変え、ビシッ！　と宣言する。
そんな彼らに俺は一言。

「甘いな」

ダン！　と空中に高くジャンプし、体を捻る。そのまま思いつく限りの見栄えの良いアクロバティックな動きを披露した。

「相手は人外。驚かせたいならこれくらいは、な。
俺は【黒鬼の騎士】遊馬崎　黎。俺もまた恨みは無いが、ご相手致そう！」
「「むぅ！」」

ニィ、と意地悪い笑みを浮かべる。自分達の十八番（おはこ）をとられちゃ唸りもするだろう。
つーか、『油断したから負けた』とか『今度は負けない』とか、モロに三流小悪党のセリフだな……。
さて、それはさておき、改良を加えたこのデッキでの初勝負、いざ！

「いざ、尋常に勝負！」
「参る！」
「行くぞ！」

『デュエル！』

黎ＶＳ迷宮兄弟
ＬＰ　８０００　ＶＳ　ＬＰ　８０００

「先攻は俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……！

「『ゴゴゴゴーレム』を、召喚！」

『ゴゴゴ～！』

セリフとしては『ゴ・ゴ・ゴ・ゴーレム』に近い感じです。

ゴゴゴゴーレム（効果モンスター）
星４
地属性／岩石族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１５００
フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードは、１ターンに１度だけ戦闘では破壊されない。

ゴゴゴゴーレム：ＡＴＫ　１８００

「そして装備魔法『ミラクル・ギア』を装備。装備した機会族か岩石族モンスターの攻守を３００上げ、相手モンスターを戦闘破壊する度に更に３００ずつ上がって行く」

『ゴゴゴゴーレム』の背中に電子回路の走る、白く縁取られた黒い歯車が装着される。キュルキュル、歯車が回って背中に合体すると回ると、『ゴゴゴゴーレム』がプシューッ、と煙突から蒸気を上げた。装備が完了したのだろう。

ミラクル・ギア（オリジナル）
【装備魔法】
岩石族または機械族のみ装備可能。
装備モンスターの攻撃力と守備力は３００ポイントアップし、相手モンスターを戦闘で破壊するたびに攻撃力と守備力は３００ポイントアップする。
このカードを装備したモンスターが相手モンスターをバトルで破壊した時、守備表示となり、次の自分のエンドフェイズまで表示形式を変更できない。

ゴゴゴゴーレム：ＡＴＫ　１８００→２１００／ＤＥＦ　１５００

↓1800

「カードを2枚セットし、ターンエンド」

黎：LP　8000
手札：2枚
フィールド
：ゴゴゴゴーレム（ATK　2100）
：伏せカード2枚、ミラクル・ギア（装備魔法・『ゴゴゴゴーレム』に装備）

SIDE：フィオ

――観客席

「『ゴゴゴゴーレム』……？」

？　あれ、黎のデッキって確か……。

「『F・S（ファイアスピリッツ）』を主軸にした炎属性のデッキじゃ無かったっけか？」

思わず隣の明日香に聞く。
炎属性以外には『ネクロ・ガードナー』の様な精々補助系統のモンスター程度。でもあのモンスターがそれに属するとは思いにくい。炎属性にも見えないしね。

「私の記憶が正しければね。あのモンスターが黎のデッキにシナジーするとは思えないんだけど……。何であんなカードを入れたのかしら？」
「間違って入った、とか？」
「いや、ほぼ間違い無く自分の意思で入れたカードだ」

わたしの推測を否定したのは三沢くん。イエローだけれどブルーの上位に匹敵する実力の持ち主。最大の持ち味は相手のデッキを細かく分析して、確実に弱点を狙って来るという知能。そして持っているデッキも細部まで計算し尽くされた完成度の高いものだ。

「何故そう思うのかしら、三沢くん？」

明日香の問いに、三沢くんは「装備魔法だよ」と簡潔に述べた。

「黎のデュエルは何度か見た事があるが、機械族や岩石族の強力なモンスターは入っていなかった。黎のようなデュエリストが『ゴゴゴーレム』専用のカードを入れているとは考えにくい」
「黎のようなって、どういう事？」
「彼は使えるカードを粗方詰め込んだ後、そこからシナジーや連携を考えていってデッキを構築・使用する、幅広いシナジーを見込んだデッキの使い手だ。
例えば、あの『Ｆ・Ｓ』のデッキだって、炎系のモンスターを入れた後に、それを補助するカードを入れたり、プレイに無理が出ないようにカードを抜いたりしたデッキ。つまりは……」

「専用カードを入れるハズが無い？」
「ああ。ほぼ間違いなく、あのデッキはこれまで彼が使っていたものでは無く、改良を加えた、或いは全く別のデッキだ」
流石だね、三沢くん。数度彼のデュエルを見ただけでプレイスタイルやデッキの組み方を見抜くなんて。
それなら黎、君の新しいデッキの力、見せてもらうよ！

ＳＩＤＥ：黎

――――デュエルリング

「私のターン、ドロー！」

迷宮兄弟の兄がビッ、とカードを引く。
へへっ、しっかり聞こえていたぜお前達。もちろん、大地の推測は正しい。このデッキは改造と改良を加えに加えまくって、以前の面影を殆ど残さず、けれどもしっかりと俺のデュエルスタイルに合わせたものにしてある。
先日起きた時、宅配便で届いた段ボール箱に前世で使っていたカードが詰め込まれていたんだから驚いたぜ。

「私は『ヒゲアンコウ』を召喚！」

迷宮兄弟の兄が召喚したのは長い髭を生やした不気味な鮟鱇。水属性用のダブルコストモンスターだ。目が退化している様に見える

からきっと深海魚だろう。

ヒゲアンコウ：ＤＥＦ　１６００

最初の一巡目は目立った行動はできないから、本領を発揮し始めるのは二巡目になるな。

「カードを１枚伏せて、ターンエンド！」

迷宮兄弟（兄）：ＬＰ　８０００
手札：４枚
フィールド
：ヒゲアンコウ（ＤＥＦ　１６００）
：伏せカード１枚

「私のターン、ドロー！」

どうでも良いが、掛け声まで同じなんだな。

「私は『地雷蜘蛛』を召喚！　そして魔法カード『二重召喚（デュアルサモン）』を発動！　兄者、『ヒゲアンコウ』を頂くぞ」

「うむ。『ヒゲアンコウ』の効果発動！　水属性モンスターを生け

贄召喚する時、1体で2体分の生け贄素材となれる！」

ヒゲアンコウ（効果モンスター）
星4
水属性／魚族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１６００
水属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

兄の快諾と共に、迷宮弟がディスクにモンスターを出す。現れるのは、青き足の部分を担う魔神。

「出でよ『水魔神ースーガ』！」
『ゴォオオオオオオオオッ！』

水魔神ースーガ：ＡＴＫ　２４００

「申し訳無い兄者よ。兄者のモンスターを使ってしまった」
「何、お前の為なら犠牲にもなろう」
「いやいや、礼をしなくては私の気がすまぬ。
私は魔法カード『闇の指名者』を発動！　指名するのは『雷魔神ーサンガ』だ！」

「フフフ、ありがたい。勿論我がデッキにそのカードは入っている。加えさせてもらうぞ？」

闇の指名者
【通常魔法】
モンスターカード名を１つ宣言する。
宣言したカードが相手のデッキにある場合、そのカード１枚を相手の手札に加える。

一連のやり取りは十代と翔の時に見せた。どうやら二人にとってはお決まりの行動らしいが、俺にとっては至極どうでも良い。
にしても、ああいう使い方って良いのかねぇ？

「さあ、我らの連携の前に、一人で立ち向かった事を後悔するが良い！」
「カードを２枚伏せてターン終了！」

迷宮兄弟（弟）：ＬＰ　８０００
手札：１枚
フィールド
：水魔神－スーガ（ＡＴＫ　２５００）、地雷蜘蛛（ＡＴＫ　２２

００）
：伏せカード２枚

「俺のターン！」

さて、彼らの場には『スーガ』『地雷蜘蛛』の２体。どちらも弟のモンスター。兄を攻撃すればダイレクトアタックが決まる。

だが、『スーガ』がＯＣＧと異なる“攻撃を封じる”能力だったら、その攻撃は不発に終わる。かと言って今の手札では『スーガ』以上の攻撃力のモンスターを召喚する方法は無い（『スーガ』以下だったら攻撃を止められた後に倒される）し、その効果を突破できるカードも無い。

ならばここは、守備！

「俺は『シールド・ウィング』を守備表示で召喚！　『ゴゴゴゴーレム』を守備表示に変更し、ターンを終了する」

『ギヒョッ！』

シールド・ウィング（効果モンスター）
星２
風属性／鳥獣族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　９００
このカードは１ターンに２度まで、戦闘では破壊されない。

シールド・ウィング：ＤＥＦ　９００
ゴゴゴゴーレム：ＡＴＫ　２１００→ＤＥＦ　１８００

黎：ＬＰ　８０００
手札：２枚
フィールド
：ゴゴゴゴーレム（ＤＥＦ　１８００）、シールド・ウィング（ＤＥＦ　９００）
：伏せカード２枚、ミラクル・ギア（装備魔法・『ゴゴゴゴーレム』に装備）

「私のターン！　フフフ、少年よ、守備に回っても、そのモンスターでは太刀打ち出来んぞ？」
「ハン、なら試してみるが良いさ」
「良かろう！　魔法カード『生け贄人形（ドール）』を発動！　弟の『地雷蜘蛛』を生け贄に『雷魔神ーサンガ』を特殊召喚！」
『ゴグワファアアアッ！』

生け贄人形（ドール）
【通常魔法】
自分フィールド上モンスター１体を生け贄に捧げて発動する。
手札から通常召喚可能なレベル７のモンスター１体を特殊召喚する。
そのモンスターはこのターン攻撃できない。

雷魔神－サンガ：ＡＴＫ　２６００

「感謝するぞ、弟よ。お陰で『サンガ』の召喚に成功した」
「何、お安い御用だ」
「ふふふ、更に『融合』を発動！　手札の『ギガテック・ウルフ』と『キャノン・ソルジャー』を融合し『迷宮の魔戦車』を融合召喚！」

機械の狼と砲台を持った機械の戦士が時空の渦に呑み込まれ、青い装甲の赤いドリルを装備した戦車が出現した。

迷宮の魔戦車（融合モンスター）
星７
闇属性／機械族
ＡＴＫ　２４００／ＤＥＦ　２４００
「ギガテック・ウルフ」＋「キャノン・ソルジャー」

「そして『暴風小僧』を召喚！」
『へェ～イ！』

出て来たのは風属性専用のダブルコストモンスター。決して強くは無いが、アレで次に何をして来るかは想像に難くない。

暴風小僧：ＡＴＫ　１５００

成程。『サンガ』はこのターン攻撃できない。俺の場のモンスターを潰して直接攻撃は弟のターンに任す、という形か。

「行くぞ！　『暴風小僧』で『シールド・ウィング』を攻撃！」
『イェ～イ！』

突風に乗った『暴風小僧』が高く飛び上がり上空からライダーキックを決める。だが、『シールド・ウィング』は固い翼でその攻撃を受け止めた。

「何！？」
「『シールド・ウィング』は片翼で１度ずつ攻撃を受け止める事が可能。つまりコイツは２回まで攻撃に耐えられるってワケだ」
「ならば『迷宮の魔戦車』で『ゴゴゴゴーレム』を攻撃！」

ギャリギャリギャリ！　とドリルが轟音を上げて突進して来る。因みにこの形だと岩盤にドリルが突き刺さった時にマシンの方が回

転してしまう為、現実的では無いそうだ。
ならば何故こんなドリルがイメージとして先行しているかというと、これは地下を掘るドリルではなく、トンネルを掘る時に活躍するタイプのドリルであり、初期のドリルがこれだったからである。
岩盤用のドリルは“掘る”よりも“削る”事を目的としており、分厚い岩を何日もかけて削る。一方でトンネル用のドリルは無論“掘る”事が目的なので、とにかくデカい穴を空ける事が優先されるのである。

突進して来た殺人兵器を『ゴゴゴゴーレム』は身体を真っ赤に光らせて正面から受け止めた。

「またか！？」
「守備表示の『ゴゴゴゴーレム』は1ターンに1度、バトルでは破壊されないんでね」

ここで俺はハッ、と笑う。

「守備に回っても太刀打ち出来ない、だったか？　だが、太刀打ち出来なかったのはそっちの方だったな！」
「ぐ……。ターンエンド！」

迷宮兄弟（兄）：ＬＰ　８０００
手札：０枚
フィールド
：雷魔神－サンガ（ＡＴＫ　２６００）、迷宮の魔戦車（ＡＴＫ　２４００）、暴風小僧（ＡＴＫ　１５００）

：伏せカード1枚

「おのれ……私のターン！」

さてと、見栄を切ってはみたが、俺の方も反撃の手段は無いし、その上にライフも減ってない。このターン、彼がどう動くかで俺が次のターンに取るべき行動が決まる。

「兄者『暴風小僧』を使うぞ！」
「うむ、持っていけ！」

って、おい！　もう最後の奴が揃ってたのか!?
面倒だなぁ。

「『暴風小僧』は風属性モンスターを召喚する時に1体で2体分の生け贄となれる！　さあ出でよ！　『風魔神ーヒューガ』よ！」

暴風と共に最後の魔神が現れる。風を纏う丸い生物、それが最もな印象だろう。

暴風小僧（効果モンスター）
星4
風属性／天使族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１６００

風属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「更に速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動！　攻撃力が４００ポイント上がる代わりに、そのモンスターの効果はエンドフェイズまで消滅する！　対象は『シールド・ウィング』だ！」

虚空から大き目の杯が現れたかと思うと、いきなりそれは逆さまになり、中身が『シールド・ウィング』にぶちまけられた。聖杯の中身を浴びた『シールド・ウィング』は色褪せてしまい、その場にへたりこんでしまった。

ちょ、あの中身って何だったんだよ！？

禁じられた聖杯
【速攻魔法】
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は４００ポイントアップし、効果は無効化される。

シールド・ウィング：ＡＴＫ　０→４００

『ぎゅ～……』
「『シールド・ウィング』！」
「これで攻撃が通る！　行けぇ！　『ヒューガ』で『シールド・ウィング』を攻撃ィ！」

ビュウ！　と突風が巻き起こる。その圧力に耐え切れず、『シールド・ウィング』は吹き飛ばされてしまった。

「ターンエンドだ」

迷宮兄弟（弟）：ＬＰ　８０００
手札：０枚
フィールド
：風魔神ーヒューガ（ＡＴＫ　２５００）
：伏せカード２枚

「俺のターン。さて、遊びもそろそろ終わりにしようか。ここから本気で行くぜ！」
『何ぃ！？』

巡って来たカードを見て、思わずニヤける。正にこの状況に最適なカードだ。

「俺は『Ｆ・Ｓ　サニーハットキティ』を召喚！」
『行きますミャー！』

Ｆ・Ｓ　サニーハットキティ（効果モンスター）（オリジナル）
星４
炎属性／獣戦士族
ＡＴＫ　２０００／ＤＥＦ　９００
デュエル中１度だけ墓地に存在するこのカードを手札に加える事ができる。
このカードを手札から墓地に送る事で以下の効果を得る。「Ｆ・Ｓ　サニーハットキティ」の効果はデュエル中１回しか使えない。
●自分のターンに墓地に送った場合、手札から通常罠カードを１枚発動できる。
●相手のターンに墓地に送った場合、このカードと墓地に存在するレベル４以下の炎属性モンスターを１体特殊召喚できる。

勢い良く飛び出したのは麦わら帽子に猫耳の少女。黒い長髪が小麦色に焼けた肌にマッチしている。

Ｆ・Ｓ　サニーハットキティ：ＡＴＫ　２０００

「更に『カゲトカゲ』を特殊召喚！　コイツは通常召喚できないが、レベル４モンスターが場に現れた時に、手札から特殊召喚できる！」

続いて影だけの蜥蜴が現れる。フィールドにその姿を現すと、赤い目だけが宙に浮いた。

『……！』

カゲトカゲ（効果モンスター）
星４
闇属性／爬虫類族
ＡＴＫ　１１００／ＤＥＦ　１５００
このカードは通常召喚できない。
自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードはシンクロ素材とする事はできない。

カゲトカゲ：ＡＴＫ　１１００

「俺はレベル４の『サニーハットキティ』と『カゲトカゲ』をオーバーレイ！　２体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」
「「オーバーレイ！？」」

『サニーハット』が赤、『カゲトカゲ』が灰色の光となって1つの光の渦に飛び込む。生まれた銀河はやがて光を発して爆発した。

☆4＋☆4＝★4

「エクシーズ召喚！　現れろ、『F・S　ヒート・スティンガー』？」

『はぁっ！』

シュタッ！　と降り立つ上裸の戦士。針を指の間に持っている。因みに針といっても裁縫に使うようなものでは無く、もっと太いメリケンサックにでもつければ心臓や脳を貫けそうな太く長いものである。

『出たぁ、エクシーズ召喚！』

『また見れた！　また見れた！』

『カックィー！』

「『ゴゴゴゴーレム』を攻撃表示に変更！

更に『ヒート・スティンガー』の効果発動！　1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、エンドフェイズまで相手の場のモンスター2体までのモンスター効果を無効にし、攻撃力を800ポイント下げる！　行け！」

F・S　ヒート・スティンガー：ORU　2→1

俺の指示と共に炎の針が『スーガ』と『ヒューガ』に突き刺さり、

相手ごと大炎上する。

風魔神ーヒューガ：ＡＴＫ　２５００→１７００
水魔神ースーガ：ＡＴＫ　２４００→１６００

「バトル！　『ゴゴゴゴーレム』で『スーガ』を攻撃！　“ゴゴゴブロー”？」
『ゴゴ～！』

ブゥン、と重い風切り音と共に青い拳が振るわれる。しかしそれは雷の壁で防がれてしまった。

「『サンガ』の効果発動！　１回のみモンスターの攻撃を無効にする！」

バジバジッ！　と火花がスパーキングし、拳が弾かれる。だが……！

「『ヒート・スティンガー』で攻撃！　“熱針撃”？」
『テェイヤッ！』

今度は防げない。雷の防壁は１回しか使えないのだ。
炎の大槍は水の魔神に突き刺さり、『スーガ』が炎上。爆発を引き起こした。

「先制攻撃、成功ってな」
『むぅ！』

迷宮兄弟：ＬＰ　８０００→７４００

「ターンエンド！」

黎：ＬＰ　８０００
手札：０枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　ヒート・スティンガー（ＡＴＫ　２２００）、ゴゴゴゴーレム（ＡＴＫ　２１００）
：伏せカード２枚、ミラクル・ギア（装備魔法・『ゴゴゴゴーレム』に装備）

「私のターン。ほう、これは良いカードが巡って来た」

む、何が来た？　手札は全員０。今１枚引かれたから迷宮兄だけ１枚。さて、何のカードが来る事やら……。

「魔法カード『天よりの宝札』を発動！　お互いのプレイヤーは手札が６枚になるようにデッキからカードをドローする！」

成程。手札不足のこの状況には最高のカードだ。
全員これで６枚補充。あの中に『死者蘇生』や『ゲート・ガーデ

ィアン』がいてもおかしくは無い。

「伏せカードの『リビングデッドの呼び声』を発動！　私は『スーガ』を蘇生する！」

『グォオオオオオッ！』

水魔神ースーガ：ＡＴＫ　２４００

来たか！

リビングデッドの呼び声

【永続罠】

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「そして3体の魔神を生け贄に！」

「出でよ、我らが守護神！」

『ゲート・ガーディアン？』

兄弟がポーズを取り、ゴゴゴ、という重低音と共に巨大な（三魔

神が肩車しただけの）モンスターが現れる。
つーか、こんな奴が守護神って、趣味悪いなぁ。

ゲート・ガーディアン（効果モンスター）
星１１
闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３７５０／ＤＥＦ　３４００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に存在する「雷魔神－サンガ」「風魔神－ヒューガ」「水魔神－スーガ」をそれぞれ１体ずつリリースした場合に特殊召喚する事ができる。

ゲート・ガーディアン：ＡＴＫ　３７５０

大した威圧感だ。精霊の力量は攻撃力では無いというのに、俺は今、単純に攻撃力がバカ高いだけの奴に圧迫されている……。
単純な戦闘では倒し難いモンスターの登場。だというのに、俺は

「ふふふ……」

俺は

「ははははは……」

在ろう事か

「ははははははははははははははははははははははははははははははははははははっ！」

笑っていた。

『！？』

「我らが守護神の前に！」

「気でも狂ったか！」

ははは、バーカ。違うに決まってるだろ！

「ははははははははははあははははっ！　はは、悪いな。漸く現れたモンだから、嬉しくて堪らなかったんだよ」

『！！？』

笑った時に走った動揺。そして今走った動揺は確実に観客達をの心を揺らした。

「俺はよ、この間プライドって奴とデュエルしたんだ。そいつぁ俺のデッキに対するメタ組んで来てなぁ。最終的には引き分けに持ち込んだんだが、勝てなかった所為で大切な家族を取り返せなかった。まあ、実質負けだ。

だから俺は俺自身に誓ったんだ。もう誰が来ても、どんなデッキが相手でも、絶対に負けないくらい強くなろうって、守りたいモン全部守れるようになろうって、な。

『ゲート・ガーディアン』ぐらい余裕で倒せなくっちゃいけねぇんだよ！」

きっと漫画だったら背景にドン！　とかいうテロップが出ていただろう。そのくらい俺は真面目だった。

「『ゲート・ガーディアン』を倒し、あんた達に勝つ！　俺はもっと、もっと前に進まなくちゃいけないんだ、強くならなくちゃいけないんだ！」

ビシィ！　と巨大な敵を指を差して見据える。

さあ、行くぞ『ゲート・ガーディアン』！　テメェが俺が進むべき道の扉を守護するというのなら、テメェを踏み倒してでも前に進ませてもらう！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ１３：もっと前に進まなくてはいけないから（後書き）

黎「現れた『ゲート・ガーディアン』！　更に後続に『ダーク・ガーディアン』が飛び出す！」

フィオ「攻撃力３８００を相手に勝てるのかな……」

黎「任せろ！　こいつら叩き潰して、絶対に前に進む！」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１４：扉の先へ』！」

黎「俺の炎は、その程度ではかき消えねぇ！」

＜黎「お」
フィオ「まけ！」
都「あたしは！？」＞

都「そう言えばウチの駄作者、この間コラボの許可貰ったらしいよ」
黎「マジで？　でもまだ書き溜めたヤツが２０弱残ってるよな！？」
フィオ「当分先になるよね」
黎「湊クレナイ先生、ありがとうございます。こんなダメ野郎に力を貸してくれて！」
都「うー、未だ敵サイドなのが恨めしい……！　作者ぁ～！」
フィオ「薬もありがとうございます。真奈ちゃん、ケガには気をつけて」

ＳＴＯＲＹ１４：扉の先へ（前書き）

ＶＳ迷宮兄弟、完結です。

黎「この程度の連中に負ける程、弱くは無いさ」

フィオ「言うねぇ」

黎「おう、言うとも」

ではでは、スタート。オリカがチートだと思う人、今後の展開でこの程度は可愛い方だと思うようになりますから、ご安心を（！？）。

＜今回の注目カード＞

フィオ・都『な～にかな、な～にかなっ！　今回はこれ！』

速攻のかかし
効果モンスター
星１／地属性／機械族／攻　　０／守　　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

都「お義兄ちゃんのフェイバリットの１枚だよ」

フィオ「手札に1枚あると心強いね」

都「除外されないから、『ドリル・ウォリアー』とかで何回もサルベージしちゃおう！」

ＳＴＯＲＹ１４：扉の先へ

ＳＩＤＥ：黎

黎：ＬＰ　８０００
手札：６枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）ヒート・スティンガー（ＡＴＫ　２２００・ＯＲＵ：１）、ゴゴゴゴーレム（ＡＴＫ　２１００）
：伏せカード２枚、ミラクル・ギア（装備魔法・『ゴゴゴゴーレム』に装備）

迷宮兄弟（兄）：ＬＰ　７４００
手札：５枚
フィールド
：ゲート・ガーディアン（ＡＴＫ　３７５０）、迷宮の魔戦車（ＡＴＫ　２４００）
：魔法・罠無し

迷宮兄弟（弟）
手札：６枚
フィールド
：モンスター無し
：伏せカード２枚

「我らの『ゲート・ガーディアン』に勝つだと！？」
「思い上がりも甚だしい！」

逐一ポーズを決める迷宮兄弟。だが、そっくりそのまま返させてもらう。

「マジでそう思うなら、かかって来い！　計算もできないプレイングミス野郎共に負けるつもりは無い！」
「良かろう！　行けい『ゲート・ガーディアン』、『ヒート・スティンガー』を攻撃！　“魔神衝撃波”ぁ？」

掛け声と共に大量の水を巻き上げた旋風が雷を纏って放たれた。巨壁ですら粉々にされそうだが、そう簡単に通す訳にはいかない！

「罠（トラップ）発動！　『くず鉄のかかし』？　相手モンスター１体の戦闘を無効にする！」

屑鉄を寄せ集めて作った案山子が出現。青いバリアを張って巨大な竜巻を弾いた。誰が作ったんだろうね、こんな高性能なの。遊星かな、やっぱ？

くず鉄のかかし
【通常罠】
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

衝撃波が止むと同時に会場が騒めく。

『何ぃ！　防ぎ切っただとぉ！？』
『でもやっぱバカだ、オシリスレッドだ！』
『1回限りの罠で防いだぐらいでピンチが消えるワケじゃ無いものねぇ』

くくく、どうやら『くず鉄のかかし』が御不満なようで。御安心あれ奥さん（誰？）！

「だが罠は使い捨て！　次は無い！」
「それはどうかな！？　『くず鉄のかかし』は発動後、墓地には送られず、再びフィールドにセットされる！」
「何だと！？」
『い、インチキだろ！？』

インチキとは失礼な！　立派なカード効果です！

案山子はカードの絵柄の中に戻ると、パタリ、と倒れてセット状態に戻った。

「ならば『迷宮の魔戦車』で『ゴゴゴゴーレム』に攻撃ィ！」

ギャギャギャギャギャ！　とドリルが回転。『ゴゴゴゴーレム』の装甲を砕いて貫通した。

「ぐっ！」

黎：ＬＰ　８０００→７７００

「はっ、たった３００ダメージたぁな！」

「何？」

「あんたらはミスを犯した『ゲート・ガーディアン』を特殊召喚するのはメインフェイズ２、つまりバトルの後の方が良かったんだよ！」

あの状態でモンスターは『サンガ』『スーガ』『魔戦車』の３体。攻撃を仕掛けられたら俺の場はガラ空き。次の弟のターンで与えられるダメージはダイレクトアタックのものだった。

だが、彼らは『ゲート・ガーディアン』に拘った。その結果、大ダメージのチャンスを逃してしまったのだ。

「くっ、カードを１枚伏せてターンを終了する！」

迷宮兄弟（兄）：ＬＰ　７４００
手札：４枚
フィールド
：ゲート・ガーディアン（ＡＴＫ　３７５０）、迷宮の魔戦車（ＡＴＫ　２４００）
：伏せカード１枚

つっても、ダメージを受けた事に変わりは無い。ちょっと油断したか？

「兄者のエンドフェイズに速攻魔法『終焉の焔』を発動！　私のフィールドに『黒焔トークン』を２体特殊召喚！」

黒焔トークン：ＤＥＦ　０

終焉の焔（ほのお）
【速攻魔法】
このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。
自分フィールド上に「黒焔（こくえん）トークン」（悪魔族・闇・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。
このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためには

リリースできない。

「そして私のターン！　手札と場の魔法カード『生け贄人形』を２枚発動！　『黒焔トークン』２体を生け贄に手札の『水魔神ースーガ』と『風魔神ーヒューガ』を特殊召喚！」

ほう。『終焉の焔』は発動ターンにモンスターを場に出す事を封じる。だがそれは相手ターンなら話は別。自分のターンに回って来たならその制限は解除されている。

しかも魔法カードのコストだから闇属性以外のリリース素材にはできないという制約も関係が無い。

水魔神ースーガ：ＡＴＫ　２４００
風魔神ーヒューガ：ＡＴＫ　２５００

「永続罠発動！　『血の代償』！　これで５００ライフを払う度に通常召喚権を１回分得る事ができるのだ！　更に魔法カード『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを２枚ドロー！」

『ゲート・ガーディアン』は重いからな。あれで少しは軽くしようという試みなのだろう。

でも正直『ファントム・オブ・カオス』とかを使った方が良いと思う。

血の代償
【永続罠】
５００ライフポイントを払う事で、モンスター１体を通常召喚する。この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

ファントム・オブ・カオス（効果モンスター）
星４
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
自分の墓地に存在する効果モンスター１体を選択し、ゲームから除外する事ができる。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとして扱い、選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得る。この効果は１ターンに１度しか使用できない。
このモンスターの戦闘によって発生する相手プレイヤーへの戦闘ダメージは０になる。

「続いて『名推理』を発動。相手はレベルを１つ宣言し、モンスターカードが出てくるまでデッキからカードを捲る。
最初に出て来たモンスターが宣言通りのレベルなら墓地へ送られ、

異なるなら特殊召喚できる！　さあ、選べ！」
「7だ」
『早！』

左手で4、右手で3を示す。
どっかで誰かが突っ込んだが、正直これが正しい選択だと思う。
もし既に出ている魔神なら兎も角『サンガ』が出て来たら2体目の『ゲート・ガーディアン』が召喚される可能性が高い。
そうなると、デッキに仕込んだ攻略法がどこまで通じるか怪しくなって来るからな。手札のコレだけじゃ対処し切れるかも疑問だし。

名推理
【通常魔法】
相手プレイヤーはモンスターのレベルを宣言する。
通常召喚が可能なモンスターが出るまで自分のデッキからカードをめくる。
出たモンスターが宣言されたレベルと同じ場合、めくったカードを全て墓地へ送る。
違う場合、出たモンスターを特殊召喚し、残りのカードを墓地へ送る。

「では行くぞ？」

そう言ってカードが捲られて行く。

1枚目：『アヌビスの裁き』
2枚目：『壺盗み』
3枚目：『クロスソウル』
4枚目：『コストダウン』

次々と墓地に送られるカード達。
そして5枚目にモンスターカードが巡って来た。
何故見えるかって？　そんなの眼球と視神経イジって視力を鷹並みに上げたからに決まってるじゃん。

「引いたカードは『カイザー・シーホース』、レベル4だ！　従って特殊召喚！」
『はぁっ！』

っちゃ、読み間違えたか。

カイザー・シーホース（効果モンスター）
星4
光属性／海竜族
ＡＴＫ　１７００／ＤＥＦ　１６５０
光属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「そして『カイザー・シーホース』は光属性用ダブルコストモンスター！　こいつを生け贄に、出でよ『雷魔神ーサンガ』よ！」

げ、もう手札にあったのか……。こいつらも中々引き運があるな。

「ミスが何なのか話したのは失敗だったな！　３体の魔神で攻撃だぁ！」

う、確かに。弟のターンの事忘れてたな。

青い魔神、緑の魔神、黄金色の魔神が一斉に若干の時間差をつけて攻撃を放つ。

「まずは『スーガ』で攻撃！」

「済まない『ヒート・スティンガー』、その攻撃は通す！」

押し寄せる水流に『ヒート・スティンガー』が流される。

「ぐぅっ！」

黎：ＬＰ　７７００→７５００

「そして『ヒューガ』と『サンガ』でダイレクトアタック！　“風魔衝撃波”ぁ？」

『マズイ、あれを喰らったら大ダメージだ！』

『黎！』

『フハハハッ！　奴も直、終わりだぁ！』

内部に雷を孕んだ竜巻が放たれる。

大地の言う通り、これが通ったら合計で５１００ダメージ。残りライフが２４００にまで落ちる。そうなりゃこのパワーバカ共にやられちまう。
だが、そう上手く行かないのが世の中ってモンだぜ、万丈目！

「手札から『速攻のかかし』を墓地に送り、ダイレクアタックを無効化する！」

機械的な案山子が描かれたカードを墓地に送ると、半透明のゴーグルをかけた案山子がターボエンジンのジェットノズルを蒸かして攻撃の正面に立ちはだかり、バリアで風と雷を防ぐ。

速攻のかかし（効果モンスター）
星１
地属性／機械族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「この効果が発動した場合、バトルフェイズは強制終了される。『天よりの宝札』で俺の手札も補充したのは失敗だったな」
「ぬう、私はライフを５００支払い、『ディフェンス・ウォール』を守備表示で召喚。ターンエンドだ」

迷宮兄弟：ＬＰ　７４００→６９００

ディフェンス・ウォール（効果モンスター）（アニメオリジナル）
星４
地属性／戦士族
ＡＴＫ　１０００／ＤＥＦ　２１００
このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、相手はこのカード以外のモンスターを攻撃対象にすることはできない。

ディフェンス・ウォール：ＤＥＦ　２１００

迷宮兄弟（弟）：ＬＰ　６９００
手札：２枚
フィールド
：雷魔神－サンガ（ＡＴＫ　２６００）、風魔神－ヒューガ（ＡＴＫ　２５００）、水魔神－スーガ（ＡＴＫ　２４００）、ディフェンス・ウォール（ＤＥＦ　２１００）
：血の代償（永続罠）

ふぅ、ちょっとふざけ過ぎたか。最初から全力全開で行けばもうちっとやり易かったかな？
ま、今更過ぎた事を気にしても仕方無いし、今からでも遅くないっしょ！

「俺のターン！」

手札は６枚。ＯＫ！　十分逆転できる！

「魔法カード『ビッグバン・シュート』を『ゲート・ガーディアン』に装備！　このカードを装備したモンスターの攻撃力は４００ポイント上がり、更に貫通効果が付与される」

こいつは一見すれば中々のパワーカード。ただし、こいつは大きなデメリットを抱えている。

ゲート・ガーディアン：ＡＴＫ　３７５０→４１５０

『あいつバカじゃねぇの？　相手をワザワザ強くするなんてよ』
『やっぱりオシリスレッド、ですわ』

ひひひ、そう思うよな？　こいつのデメリットを知らない奴は誰だってそう言うもんさ。

「更に『ゴブリンドバーグ』を召喚！」

『へェへへへ～！』

ゴブリンドバーグ：ＡＴＫ　１４００

「モンスター効果発動！　発動後に守備表示になるが、手札のレベル４以下のモンスターを１体特殊召喚できる！　俺は『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』を選択！」

『ヌン！』

ゴブリンドバーグ：ＡＴＫ　１４００→ＤＥＦ　０
Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＤＥＦ　１５００

ゴブリンドバーグ（効果モンスター）
星４
地属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００／ＤＥＦ　０
このカードが召喚に成功した時、手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果を使用した場合、このカードは守備表示になる。

残念ながら『マグマドラゴン』の効果の特殊召喚は“場に出てす

ぐ”なので、『ゴブリンドバーグ』の“守備表示になる”という効果が挟まってしまい使えない。これが“タイミングを逃す”という奴だ。

「1枚カードを伏せて、ターンエンド！」

黎：ＬＰ　７５００
手札：２枚
フィールド
：ゴブリンドバーグ（ＤＥＦ　０）、Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（ＤＥＦ　１５００）
：伏せカード3枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）、ビッグバン・シュート（装備魔法・『ゲート・ガーディアン』に装備）

「私のターン、ドロー！　どういうつもりかは知らぬが、行くぞ！まずは『迷宮の魔戦車』で『マグマドラゴン』を攻撃！」

「『くず鉄のかかし』で防御させてもらう！」

真っ赤なドリルの進撃を金属の案山子が正面から受け止める。

「そして『ゲート・ガーディアン』で『ゴブリンドバーグ』を攻撃！“魔神衝撃波”？」

貫通効果を持つ水・風・雷が赤い飛行機に乗ったゴブリンを巻き

込み、吹き飛ばす。貫通ダメージとは名ばかりと言わんばかりのダイレクトアタック並みの威力がライフから差し引かれた。

迷宮兄弟：ＬＰ　６９００→２７５０

「な、何が起こった！？」
「我らのライフが減っただと！？」

黎：ＬＰ　７５００

『おい、バグか！？　あいつのライフ減ってねぇじゃんか！』
『きっと何かイカサマしやがったんだ！』
『卑怯ですわ！』
「何なの～ネ！？　何が起こっているの～ネ！？　ワタシには何がなんだかサッパリ分かりまセン、かっぱ○びせん！」

色々と言われているな。悪いがズルでも何でも無いぞ？
それとクロノス先生、貴方一応実技の最高責任者でしょうが、カードテキストぐらい把握しておこうぜ？　しかもかっぱえ○せんって……。

「『ビッグバン・シュート』は確かに貫通効果を発生させる。でも、その貫通ダメージを受けるのは『ビッグバン・シュート』をコントロールしているプレイヤーから見た相手だ。
つまり、今『ビッグバン・シュート』をコントロールしている俺の相手、アンタ達がダメージを受けるんだ」

これ、意外と間違えるらしい。
こういう貫通装備カードは相手に装備させて守備モンスターで場を固めると、相手の攻撃を止められる抑止力になる。自分のモンスターに装備するか相手モンスターにするかはその時の戦局次第なので、巧く使い分けるのが上級者への近道だ。

ビッグバン・シュート
【装備魔法】
装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

「なんと……！　くっ、私はこれでターンを終了する！」

迷宮兄弟（兄）：ＬＰ　２７５０
手札：５枚
フィールド

：ゲート・ガーディアン（ＡＴＫ　４１５０）、迷宮の魔戦車（ＡＴＫ　２４００）
：伏せカード１枚

「よもや『ゲート・ガーディアン』の攻撃を逆手に取るとは……！」
「中々やりおる……！」
「私のターン！」

ビッ！　と切られるカード。さて、ご自慢の攻撃、片方は封じた。もう片方はどう出てくる？

「私は『サンガ』で『マグマドラゴン』を攻撃する！」
「うわっ！」

黄金色の魔神が雷を放ち、灼熱の龍を攻撃する。その威力に『マグマドラゴン』は真っ黒な炭になってしまった。

「続いて『ヒューガ』で直接攻撃！」
「『くず鉄のかかし』！」

後続で放たれた突風を金属の案山子が作ったバリアで防御する。何の意味が？　すぐ分かる。

「『スーガ』で直接攻撃！」

最後に放たれた激流は『ウィスプ』自身の青白い炎の結界で防いでもらう。

「「何!?」」

「わざわざ防いだんだから突破できるとでも?　『スーガ』の攻撃に合わせて罠カード『線香花火』を発動した。デッキからレベル３以下の炎属性モンスターを特殊召喚できる。

『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』は１９００以上の攻撃力を持つモンスターとのバトルじゃ破壊されないんでね」

わざわざ防いだのは『スーガ』を守備表示にさせない為。次のターンに反撃しやすいような基盤作りだ。

線香花火（オリジナル）

【通常罠】

デッキまたは手札からレベル３以下の炎属性モンスターを１体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは相手の魔法・罠カードの効果では破壊されない。

この効果で特殊召喚されたモンスターはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　７００

「ならば私も『雷魔神ーサンガ』『風魔神ーヒューガ』『水魔神ー

スーガ』を生け贄に！」
「出でよ！　我らが守護神！」
「「『ゲート・ガーディアン』！」」

ゴゴゴ、という音と共に三魔神が縦に重なった巨大なモンスターが現れる。
２体目か。成程、これなら『スーガ』に攻撃させた意味が無くなっちまったな。

「カードを１枚セットし、ターンエンドだ」

迷宮兄弟（弟）
手札：０枚
ＬＰ　２７５０
フィールド
：ゲート・ガーディアン（ＡＴＫ　３７５０）、ディフェンス・ウォール（ＤＥＦ　２１００）
：伏せカード１枚、血の代償（永続罠）

「俺のターン！」

お、『強欲な壺』か。

「手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！」

引いたカードは『拘束解放波』と『Ｆ・Ｓ　エターナル・ランプ』だ。良し、これならあいつらを退場させられる！

「魔法カード『拘束解放波』を発動！　自分フィールド上の装備魔法１枚を墓地に送って相手の場の魔法・罠カードを全て破壊する。俺は『ビッグバン・シュート』を墓地に送る！

更に『ビッグバン・シュート』が装備モンスターより先に場を離れた時、装備モンスターをゲームから除外する！」

「な！　さ、させぬ！　リバースカード『神秘の中華なべ』を発動！『ゲート・ガーディアン』を墓地に送り、その攻撃力分だけライフを回復する！」

あらら、チェーンされたか。上手く通るとは思っていなかったが、ライフ回復をされるとはね。

拘束解放波
【通常魔法】
自分フィールド上に表側表示で存在する装備魔法カード１枚を選択して発動する。
選択した装備魔法カードと相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する。

神秘の中華なべ
【速攻魔法】
自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。
生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

迷宮兄弟：ＬＰ　２７５０→６９００

『ビッグバン・シュート』が破壊されると風が生まれ、その風は迷宮弟の場のリバースカード『ダメージ・コンデンサー』を破壊した。

「魔法カード発動、『魂霊の呼び声』！　デッキから『Ｓ（スピリッツ）』と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる！　俺は『Ｆ・Ｓバック・ドラフトマン』を手札に加える。
更に魔法カード『火炎の魅力』を発動！」

魂霊の呼び声（オリジナル）
【通常魔法】
デッキから「Ｓ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

火炎の魅力（オリジナル）
【通常魔法】
自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札の炎属性モンスター1体を墓地に送る。
手札に炎属性モンスターがない場合、手札を全てゲームから除外する。

「俺は手札の『バック・ドラフトマン』を墓地に送る。そして『バック・ドラフトマン』の効果で、こいつを手札に戻す」

F・S　バック・ドラフトマン（効果モンスター）（オリジナル）
星2
炎属性／炎族
ＡＴＫ　１３００／ＤＥＦ　１３００
このカードがデッキまたは手札から墓地に送られた時、以下の効果から1つを選択して発動する。「F・S　バック・ドラフトマン」の効果はデュエル中2回まで使用できる。
●このカードを手札に加える。
●ライフポイントを５００ポイント回復する。

『すごい……、ディスアドバンテージを回避した……』
『レッドのクセに、良い腕とカード持ってるじゃん』
『あいつ本当にレッドか……？』
『ってか、あいつこの前昇格蹴ったヤツじゃね？』

これで手札は４枚。ちゃちゃっと行くぜ？

「魔法カード『火炎融合－ファイア・フュージョン』を発動！こいつは『Ｆ・Ｓ』と名のついたモンスターを融合召喚する時、デッキから融合素材を選択して墓地に送る事ができる！　手札の『エターナル・ランプ』とデッキの『ボルカニック・ギア・ガイ』を融合！　全てを焼き斬れ、『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』！」
『はぁっ！』

火炎融合－ファイア・フュージョン（オリジナル）
【通常魔法】
「Ｆ・Ｓ」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。
この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

F・S　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００

今回も登場して頂きました、銀の甲冑の騎士。良い感じの効果があるから中々使いやすい。

「『バック・ドラフトマン』を通常召喚！」
『いきま～す！』

F・S　バック・ドラフトマン：ＤＥＦ　１３００

「魔法カード『種火』を発動。場の『F・S』と名のついたモンスター1体をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする。俺は『バック・ドラフトマン』をデッキに戻す！　そして2枚ドロー！

更に魔法カード『強欲な火山口』を発動。手札の炎属性モンスター『F・S　バーナーズ・キャノン』をデッキに戻して、追加でカードを2枚ドローする」

これで、手札（の内容）不足を解消。やっぱり2対1だとこうして手札不足を補っていかないと、戦術が詰まるからね。尤も、デッキ切れには注意だけど。

種火（オリジナル）
【通常魔法】
自分の場に表側表示で存在する「Ｆ・Ｓ」となのついたモンスター１体をデッキに戻して発動する。
デッキからカードを２枚ドローする。

「バトル！　『ブレイジング・ナイト』で『ディフェンス・ウォール』を攻撃！　『ブレイジング・ナイト』はモンスターを戦闘によって破壊した時、その攻守の合計の半分のダメージを与える！
対象の『ディフェンス・ウォール』の攻守の合計の半分は１５５０！　受けろ！“空破炎撃斬”？“ファイア・フォース”？」
「「ぬおぉおおおおおおおっ！」」

迷宮兄弟：ＬＰ　６９００→５３５０

「まだまだ！　メインフェイズ２に移行！」

このままじゃあ『ブレイジング・ナイト』がやられてダメージを受ける。今回のデッキは炎を基軸の１つとしたロックやパーミッションの性質を帯びたものだ。
行くぜ！　対『ゲート・ガーディアン』用（本当は面倒な敵対策）カード第２段！

「装備魔法『疫病ウィルス　ブラックダスト』を『ゲート・ガーディアン』に装備！　こいつを装備したモンスターは攻撃が出来ず、

相手の2回目のエンドフェイズ時に破壊される！」

疫病ウィルス　ブラックダスト
【装備魔法】
このカードの装備モンスターは攻撃できない。
装備モンスターのコントローラーの2回目のターン終了時に、装備モンスターを破壊する。
この効果が成功した場合、このカードは持ち主の手札に戻る。

ゴボゴボゴボゴボ……、と気色の悪い音を立て、『ゲート・ガーディアン』の体が変化していく。まるで腐食したかのように全身が青黒くなり、膨れ上がる。

「本来なら、こいつは2ターン待つ必要がある。だが、この変則式のデュエルでは……」
「くっ、私がエンド宣言をするのと同時に破壊される！」

弟が歯噛みする。正解だよ。

「リバースカードを1枚セットし、ターンエンド！」

黎：ＬＰ　７５００
手札：１枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　７００）、Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト（ＡＴＫ　２９００）
：伏せカード３枚（内１枚は『くず鉄のかかし』）、疫病ウィルス
ブラックダスト（装備魔法・『ゲート・ガーディアン』に装備）

「私のターン、ドロー！」

青ざめた顔でデッキトップからカードを引く迷宮兄。切り札である『ゲート・ガーディアン』が全く歯が立たない相手だ。よく分かる。

が、兄は引いたカードを見るとニヤリ、と笑った。む、あれを引いたか？

「永続魔法『魔力倹約術』を発動。これにより、魔法カード発動時のコストが消滅する！」

また微妙で一長一短なカードを……。

あえてライフコストを払うってのもできないから意外と使いづらいんだよな、アレ。魔法カード限定だから『神の宣告』のコストも無効にできないし……。

魔力倹約術

【永続魔法】
魔法カードを発動するために払うライフポイントが必要なくなる。

神の宣告
【カウンター罠】
ライフポイントを半分払って発動する。
魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

「ふふふふふ……。お主に最強の“ガーディアン”を見せてやろう！」
「！　来る！」
『また見れますか、あの闇の守護神が！』
『校長、席に戻って下さい～ノ……』
『大ピンチだ！』
『黎、頑張れぇ！』

迷宮兄がフィールドに出したのは黒い煙を発する、反転モンスターを出すあのカード。

「魔法カード『ダーク・エレメント』を発動！　本来ならライフを半分支払う必要があるが、『魔力倹約術』の効果で不必要となる！」

ダーク・エレメント（アニメオリジナル）
【通常魔法】
自分の墓地に「ゲート・ガーディアン」が存在する場合に発動する事ができる。
ライフを半分支払う事で自分のデッキから「闇の守護神－ダーク・ガーディアン」を特殊召喚する。
このカードを発動する場合、このターン他のモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

「出でよ！　『闇の守護神－ダーク・ガーディアン』？」
『ボワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

闇の守護神－ダーク・ガーディアン：ＡＴＫ　３８００

『おぉおお、また見れるとは感激です！』
『ですから席に戻って下さい～ノ！』
『こりゃヤバいぜ……！』
『お前も終わりだな！　遊馬崎　黎！』
『まだだ！　黎はまだ負けていない！』

蜘蛛のような下半身と足（ただし６本）、筋骨隆々の上半身。鈍く光る鋭い斧を装備した巨大な怪物が黒い瘴気と共にズシン、ズシ

ン！　と足音を立てて現れた。

「これぞ、我らの究極の僕(しもべ)！」

「『ダーク・ガーディアン』！」

「「さあ、どうする！」」

逐一ウザいなぁ、こいつら。いい歳したオッサン2人が声を合わせて大声出すなよ。

「良いから来い。そんなザコの『ゲート・ガーディアン』に毛が生えた程度のモンスター、俺の敵じゃ無いね」

ザワザワザワザワ……！

『ザコって、アイツ……』

『チョーシこいてんじゃネェぞ、クズレッド！』

『黎、君はそれほどまでに自信があるというのか……』

『何故かな？　黎だったらあのモンスターをすぐに片付けてしまいそうな気がするよ』

もちろん本心では無い。確かに『ゲート・ガーディアン』は重いが、その攻撃力は単体で十分に高い。要するに頭の使い方なのだ、こういう高レベルモンスターの召喚は。

「我らの守護神と究極モンスターを」

「ザコ扱いするとは！」

「言われても仕方ないとは思うが？　1体目は危うく除外されかけて回復の為に墓地行き。2体目だって『疫病ウィルス　ブラックダスト』の影響で動けない。

これをザコと呼ばぬのならば、あんたらの腕前が俺より下だとい

う事だわな？」
「「ぬぅ……！」」

俺のアレは挑発によるプレイングミスの誘発。実際あの兄弟は苛立ち、俺を睨みつけている。クールにならなければ、ミスを連発するのはどこに行っても常識だ。

「ならば受けよ！　『ダーク・ガーディアン』の攻撃、“ダーク・ショック・ウェーブ”？」
「リバースカード、オープン！　罠カード『くず鉄のかかし』！」

ブォン！　と斧の一振りで生まれた三日月状の衝撃波は金属製の案山子を立ててバリアを張り、防ぎ切る。
どうやら本当に冷静さを欠いているようだな。『くず鉄のかかし』がセットされているってのに。
ちなみに便利な『くず鉄のかかし』は再利用できるというお得な効果を持つが、逆にそれは相手に“場の特定の位置に『くず鉄のかかし』がある”という事を知らしめてしまう事につながる。
要するに『サイクロン』系で除去されやすいのだ。一長一短なのはどんなカードにも付き物だな。

「はっ、『くず鉄のかかし』がある事は前々から分かっていたはずだが？」
「ぬ、ぬぬぅ……！　『迷宮の魔戦車』を守備表示に変更！　カードを1枚伏せ、これでターンエンド！」

迷宮の魔戦車：ＡＴＫ　２４００→ＤＥＦ　２４００

迷宮兄弟（兄）：ＬＰ　５３５０
手札：３枚
フィールド
：闇の守護神－ダーク・ガーディアン（ＡＴＫ　３８００）、迷宮の魔戦車（ＤＥＦ　２４００）
：伏せカード１枚、魔力倹約術（永続魔法）

「私のターン！」

さて、好い加減に終わらせないと、読者の方々も飽きが回ってくるだろうね（メタは止めてよ～。　ｂｙ作者）。弟さんの手札は０だ。どう来るか見物だな。

「手札から魔法カード『アドバンスドロー』を発動！」

アドバンスドロー
【通常魔法】
自分フィールド上に表側表示で存在するレベル８以上のモンスター１体をリリースして発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「これで『ゲート・ガーディアン』を生け贄にカードを2枚ドロー！」
「チッ、これにより、『疫病ウィルス　ブラックダスト』は墓地に行く」

手札不足を補いつつ、カードの再利用を封じる。良い手だ。
にしても、やっぱり『ブラックダスト』は少々使い辛いかな？
今度別のカードに入れ替えてみよう。

「兄者、すまぬ。『ゲート・ガーディアン』を……」
「なに、あのままではマズい状況へと一直線だった。お前の判断は正しい」
「かたじけない。しかし、タダでは終わらせぬ！　手札から速攻魔法『サイクロン』を発動し『くず鉄のかかし』を破壊する！
そして私も『ダーク・エレメント』を発動！」

竜巻が突如としてフィールドを突き進み、金属製の案山子を吹き飛ばした。
あちゃ、破壊されたか。まあ、2回か3回使えれば良いって考えが普通だし、グダグダ考えていてもしょうがないか。

サイクロン
【速攻魔法】
フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

「さあ、出でよ我らが究極の僕！」
「『ダーク・ガーディアン』！」

ズモモモモモモモ、と2体目の『ダーク・ガーディアン』が登場。
いやはや、こういうデカブツが2体も並ぶと、流石に圧巻だねぇ。

「『ダーク・ガーディアン』が特殊召喚されたターンは他のモンスターを場に出す事はできぬが、今の私は手札が無い為、関係無い。行くぞ！　『ダーク・ガーディアン』で『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』を攻撃！“ダーク・ショック・ウェーブ”？」
「攻撃にチェーン！　速攻魔法『融合解除』を発動！　『ブレイジング・ナイト』の融合を解除し、『Ｆ・Ｓ　ボルカニック・ギア・ガイ』と『Ｆ・Ｓ　エターナル・ランプ』を墓地から特殊召喚する！」
『はぁっ！』
『ヘッヘヘヘヘ……！』

Ｆ・Ｓ　ボルカニック・ギア・ガイ：ＤＥＦ　１２００
Ｆ・Ｓ　エターナル・ランプ：ＤＥＦ　３００

肩に金属製の歯車を装着した男と、鎖に繋がった紫の目が点っているランプを持った男が防御態勢で復活する。

「ならば『エターナル・ランプ』を攻撃！」
『およよよよ！？　もしかして、闇？』

しめた、かかった！

「『エターナル・ランプ』のモンスター効果発動！　こいつが闇属性モンスターとバトルを行った時、ダメージ計算を行わずにそのバトルを終了し、更に相手に８００ポイントのダメージを与える！」

「なんと！？」

『ヘッヘヘヘヘ～！　ヘェ～～ッ！　暗闇を照らすのが、オレっちの仕事だ！』

『エターナル・ランプ』は三日月状の衝撃波をヒラリと躱すと、鎖をブンブンと振り回して投げつけ、先端のランプ（多分生きてる）を『ダーク・ガーディアン』に叩きつけた。その際、炎がランプから噴き出し、『ダーク・ガーディアン』ごと迷宮兄弟を焼いた。

赤紫の火炎の中から全身から黒煙を上げて『ダーク・ガーディアン』が復活する。

F・S　エターナル・ランプ（効果モンスター）（オリジナル）
星1
炎属性／天使族
ＡＴＫ　５００／ＤＥＦ　３００
このカードが闇属性モンスターとバトルを行った時、ダメージ計算を行わずにそのバトルを終了し、相手プレイヤーに８００ポイントのダメージを与える。
墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターンのエンドフェイズまで自分フィールド上のモンスターは永続魔法、永続罠の影響を受けない。

『エターナル・ランプ』は比較的採用率の高い闇属性モンスターとのバトルにおいてほぼ無敵を誇るモンスター。特にほぼ全員が闇属性である【ＢＦ（ブラックフェザー）】が相手なら無双といっても過言じゃないだろう。

ただし、破壊できないし、その能力値も低い。デュエリストとしての腕が試されるモンスターだと言える。

迷宮兄弟：ＬＰ　５３５０→４５５０

「くっ、これでターンを終了する！」

「だが、我らの前に！」

「敵は無し！」

「さっきは負けたクセに……」

「「うっ！」」

迷宮兄弟（弟）：ＬＰ　４５５０

手札：０枚

フィールド

：ダーク・ガーディアン（ＡＴＫ　３８００）

：血の代償（永続罠）

俺の手札は今1枚。勝利を収めるのにはちょいと心許無い。次のドローで何を引くか、だな。

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードの絵柄には、舌を出した壺が描かれていた。

ッケイ！

「魔法カード『貪欲な壺』を発動！　墓地のモンスター5体をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー！」

今回戻すのは『カゲトカゲ』『ゴゴゴゴーレム』『シールド・ウィング』『F・S　マグマドラゴン』『F・S　ヒート・スティンガー』だ。

引いた2枚のカードの内1枚は……、ドローソース！

「魔法カード『命削りの宝札』を発動！　5ターン後、手札を全て捨てる代わりに手札が5枚になるようにデッキからドロー！」

良し！　巡って来たカード達よ、感謝するぞ。これで行けるからな！

「チューナーモンスター、『F・S　グリル・ゴーレム』を召喚！」

『ゴォオオ～ッ！』

F・S　グリル・ゴーレム：ATK　1300

フシューッ！　と全身から蒸気を上げる赤い石像。腕はまるで象の足のように太い。
合計レベルは１＋２＋３＋４で１０。１つ多い。
だが、俺の手札の壊れカードを使えば、問題は無い。

「速攻魔法『レベル詐称』を発動！　自分の場の『S』と名のついたモンスター１体のレベルをエンドフェイズまで１から１２の中から好きな数字に変更できる！
ただし、この効果の対象になったモンスターがフィールドにエンドフェイズまで残っていた場合、ゲームから除外され、プレイヤーはその攻撃力分のダメージを受ける
『ボルカニック・ギア・ガイ』のレベルを４から３に変更！」

レベル詐称
【速攻魔法】
自分フィールド上に存在する「S」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターのレベルを１から１２の中から好きな数字に変更できる。
この効果を適用したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーは攻撃力分のダメージを受ける。

デメリットはあるが、中々の壊れカードだろう。一回フィールド

を離れちゃえばダメージを受ける心配は無いからデメリットはほぼ無いに等しい。

Ｆ・Ｓ　ボルカニック・ギア・ガイ：☆４↓３

「レベル３の『ボルカニック・ギア・ガイ』、レベル２の『鬼火のウィスプ』、レベル１『エターナル・ランプ』に、レベル３の『グリル・ゴーレム』をチューニング！」

『グリル・ゴーレム』が３つの緑の輪に光と共に変化し、残る３体が縦に並んだ緑の輪の中に飛び込む。輪郭線を残してその姿は透明になり、やがて全てが光りに変わった。

「燃え盛る煉獄が、邪を焼き世を焼き敵を焼く！　希望が溢れる明日となれ！」

☆１＋☆２＋☆３＋☆３＝☆９

「シンクロ召喚！　天堂の炎よ、虚無を焼け！　『Ｆ・Ｓ　ヴォルケーノ・セフィラム』？」

『ハァアアアアアアアアアアアッ、ハァアアアッ？？？』

Ｆ・Ｓ　ヴォルケーノ・セフィラム：ＡＴＫ　３１００

紅蓮の鎧を纏い、三対の翼を羽ばたかせ、優しくも厳しい表情で降臨する熾天使（してんし）―天使。両手には何も持っていないが、それが逆に彼が高位の天使である事を彷彿とさせる。

「『グリル・ゴーレム』の効果で墓地の『速攻のかかし』を手札に加える」

『出た！　シンクロ召喚！』
『『融合』を使わない融合召喚！』
『この前とは違う奴だ！』
「「な、なんなのだこの召喚は！」」

ふむ、良い機会だ。説明しておこう。

「説明がまだだったな。シンクロ召喚はレベルの足し算だ。チューナーとそれ以外のモンスターのレベルの合計と同じレベルのシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚する、それがシンクロ召喚。

対し、エクシーズ召喚は同じレベルを揃える方法。素材となったモンスターは墓地には送られずにエクシーズモンスターの下に置かれ、効果発動時なんかに初めて墓地に送られるんだ。

双方共に未来の召喚方法。だが、この間皆の前で使ってしまったんでね、躊躇はしないさ」

まあ、説明としてはこんなモンが妥当だろう。

「中々の攻撃力！　だがしかし！」
「我らの『ダーク・ガーディアン』には及ばぬ！」

相も変わらずバン！　とポージングを決めて（ポーズは変わってますよ？）セリフを吐く迷宮兄弟。

ふふふ、甘いな！

「ならばこれでどうだ！？　ＨＥＲＯにはＨＥＲＯの戦う場があるように精霊には精霊の戦う場所がある！

フィールド魔法『スピリッツ・ワールド』、発動！

そしてそこには俺の戦い方がある！　伏せていた速攻魔法『ディバイド・マニュファクチュア・パワー』を発動！

『スピリッツ・ワールド』が自分の場にある時、攻撃対象の攻撃力を半減させ、自身の『Ｓ』１体の攻撃力を１０００上げる！」

ディバイド・マニュファクチュア・パワー（オリジナル）

【速攻魔法】

フィールド魔法「スピリッツ・ワールド」が存在する時のみ発動可能。

発動ターン攻撃を行う「Ｓ」と名のついたモンスターが異なる種族・属性のモンスターとバトルを行う時、１度だけダメージステップ終了時まで相手モンスターの攻撃力は半分になり、攻撃を行う自分のモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。

Ｆ・Ｓ　ヴォルケーノ・セフィラム：ＡＴＫ　３１００→４１００

闇の守護神　ダーク・ガーディアン：ＡＴＫ　３８００→１９００

『『ダーク・ガーディアン』を上回った！』

「そしてモンスター効果発動！　『ヴォルケーノ・セフィラム』はシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材に使用したチューナー以外のモンスターの数が攻撃回数となる。つまり、こいつの1ターンの攻撃回数は3回！」

F・S　ヴォルケーノ・セフィラム（効果モンスター）（オリジナル）
星9
炎属性／天使族
ＡＴＫ　３１００／ＤＥＦ　２２５０
このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚できない。
このカードは、シンクロ素材に使用したチューナー以外のモンスターの数だけ攻撃できる。
1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で、自分の墓地から炎属性モンスター1体をモンスター効果を無効にして特殊召喚できる。

「「なぁにぃ！？」」
「これで、終わりだ！　行くぞ、『Ｆ・Ｓ　ヴォルケーノ・セフィラム』の攻撃！　“爆天掌煉砲撃（ばくてんしょうれんほうげき）・三連打”ァ？」

バサリ、と紅の翼を広げて大きく飛翔する『ヴォルケーノ・セフ

ィラム』。両掌に灼熱のエネルギーを籠めると、急降下で『ダーク・ガーディアン』に接近する。

「一！　俺は絶対に！」

右手を突き出し、業火の衝撃波を炸裂させる。

「二！　もう誰にも！」

左手を突き出し、紅蓮の太陽を叩き込む。

「三！　負けない！」

両手を突き出し、煉獄で全てを焼き払う！

「「ぬぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」」
「俺の、勝ちだぁあああっ！」

迷宮兄弟：ＬＰ　４５５０↓２３５０↓１５０↓０

黎：ＷＩＮ
迷宮兄弟：ＬＯＳＥ

『ワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

会場は大歓声に包まれている。オシリスレッドが2度も伝説（と謳われている）のデュエリスト相手に勝利を収めたのだからかな。やはり最下級という認識があり、負けるのが当然と思われていたのだろう、故にそのギャップがこの熱狂を呼んだ。

「ありえない～ノ、背中痒い～ノ、頭も痒い～ノ！」

「彼もまたここデュエルアカデミアの生徒であるという事ですかニャー、ファラオ？」

「ニャー……」

クロノス先生は2度の迷宮兄弟の敗北に頭をハゲなりそうな勢いで掻き毟り、大徳寺先生は愛猫のファラオと和んでいる。
というか、クロノス先生の言語センスは相変わらず独特だね。真似できねぇ。
そして未だ項垂れている迷宮兄弟に十代のように俺も一言言わせてもらう。

「礼を言う。御仁達のお陰で俺はまた一つ強くなれた。新たな扉を開く道が見えた気がしたよ」

ペコリと軽く会釈してからリングを飛び降りる。下で十代達と一緒に鮫島校長のところへ行く。

「3人とも勝利しました。退学は取り消しで良いですか？」
「はい、文句無い勝利でした。退学の件は取り消しとしましょう」
「「やった！」」

ここで俺は十代と翔の肩をグイ、と引っ張る。

（お前ら、ちょいと耳貸せ）
（（？））

ご丁寧に揃って疑問符を頭の上に浮かべる二人。おいおい、もちっと頭の回転早くしろよ……。

（このまま話を聞き続けたらレポート提出とかの話が出てくるぞ）
（うげ、マジ！？）
（に、逃げるッス、黎くん！）
（なら俺に任せろ！）

ガシッ、と二人の腰に腕を回す。これで問題無いだろう。

「では、校長先生、ここにもう用事はないので……、さようならっ！」

「あ……、逃げられましたか……」

ビュン！　と音を立てるくらいの速さで撤退する俺。このくらい造作も無い。ついでに言うとレポートは嫌いだ。

更にリングの去り際にフィオ、明日香、大地、隼人の傍を通って通告。音残しと名付けたこの技は、自分の声をその場に残し、メッセージを伝えるもの。“トリコ”のゼブラが使う音の鎧はその纏った人物の体に残り続けるが、あれを真似たものだと思ってくれれば良い。

尤も、鎧にはならないし、そんな遠くまで飛ばないけどね。

『レッド寮で打ち上げするから、俺の作った夕飯が食いたかったら来い』

きっとビックリしているけれど、俺だから有り得るとでも思ってくれるだろう。

『おお、黎は本当に何でもありだな』

『また黎のご飯が食べられるんだ、行こう明日香！』

『ええ、ジュンコやももえも誘いましょうか』

『オレ、もう腹が減ってきたんだな』

ま、何はともあれ一件落着。この後、俺は持てる技術と知識をフル動員して豪勢な晩御飯を作り、皆から大好評を貰ったのであった。

to be continued

ＳＴＯＲＹ１４：扉の先へ（後書き）

黎「見事に迷宮兄弟を撃破した俺。ブルーが巻き上げたカードを回収していると、とある男が因縁をつけて来た」

フィオ「黎、そんな奴ぶっ倒しちゃって！」

ところが、必死に戦うそいつの前に、黎は辛酸を舐める事に。

黎「まだまだ、終わって無いぜ！」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１５：底辺に生きる男と底辺へ落ちる男』！　お楽しみに」

フィオ「もうここが定位置だね」

黎「いっそ任せちまうか」

＜おまけ＞

黎「俺のフェイバリットをバラすなよ」

都「だってぇ……」

黎「だってじゃない」

都「でもぉ……」

黎「デモもストもねぇよ！」

フィオ「古っ！　黎、キミはいつの人間！？」

黎「うっせぇ！」

ＳＴＯＲＹ番外編：ＣＭとキャラ紹介とオープニング（前書き）

ちょっとしたエキストラです。
オープニングは文字の羅列である上に、ネタバレも含んでいますのでご注意を。

では、主人公達が来ない内にスタートです。

ＳＴＯＲＹ番外編：ＣＭとキャラ紹介とオープニング

もし、『精霊の抱擁』がＣＭ化したら……。

新番組予告（脚本風に）！

・神妙な表情の黎「俺は、義理の妹の都と共に、その命を落とした」

・夜の雨の中、血だらけで俯せに倒れている黎と都。

・横顔の黎「だが、ＧＸの世界で太古の邪神が目覚めかけ、俺達はそれを阻止する為に転生させられた」

・虹色の空間に光る体で浮く独りぼっちの黎。

・黒い背景に太い字でテロップ『だが、悪夢は既に始まっていた！』

・緊迫したＢＧＭ

・光る体で驚愕する黎「まさか、都は敵の手に落ちたのか！？」

・高らかに笑う『ヴォルカニック・デビル』「かっかっかっか！力だけが強さでは無い」

・炎の精霊達が黎の周りに現れる『イエス、マスター！』

・登場するボーイッシュな少女、フィオ「黎、キミはもしかして……」

・黒い瞳を持った、変わり果てた姿の都「あはははははっ！　寧ろ“昇った”というべきなんだよ！」

・黒いブレードと鋼の剣が交錯し、互いに睨みあう黎と都（何でだよ、何で俺達殺しあってるんだよ！　俺達、義理だけど兄妹じゃねぇか！）

・突如現れ、黎を斬り裂くプライド「消えなさい、不適合なる義兄よ」

・暗転。迫力あるＢＧＭに

・テロップ【邪神復活の危機！】画面暗転。黒い何かが姿を現し、その前に7人の影が。

・テロップ【８つの力、覚醒！】黎の周りに赤、青、黄、緑、茶、紫、白、黒の光る玉が浮かぶ

・テロップ【あまりにも強大なる敵！】水流で吹き飛ばされる黎。降り注ぐ光の槍に見舞われるフィオ

・テロップ【最強最悪の敵を前に！】吹き荒れる大雨、轟く雷鳴

・テロップ【絆の力が試される！】ディスクを構える黎とフィオ

・明るい感じのテーマソング（適当）

・不敵に笑う黎「化物を、ナメるなよ……！　シンクロ召喚！　そしてエクシーズ召喚！」
【心優しい鬼の騎士　遊馬崎　黎】

・赤面するフィオ「どうしてこんなに顔が熱いのさ！」
【器量良し、スタイル良しの天然天使　神山　フィオ】

・屋上で笑顔でドーナッツを頬張る都「信じなければ、絶対に道は開けないよ」
【鬼の義妹にて不死身の少女　遊馬崎　都】

・十代「ガッチャ！　楽しいデュエルだったぜ」【ＧＸ主人公のＨＥＲＯ使い　遊城　十代】

↓翔「『パワーボンド』を発動！」【気弱な十代の弟分　丸藤　翔】

↓明日香「面白い人達ね」【クールビューティなブルーのクイーン　天上院　明日香】

↓大地「また一つ、見聞が広がったよ」【博識なイエローの要　三沢　大地】

↓隼人「助かるんだな」【コアラ似のアーティスト　前田　隼人】

↓万丈目「万丈目さんだ！」【傲岸不遜なエリート　万丈目　準】

↓亮「“エターナル・エヴォリューション・バースト”！」【アカデミアの皇帝　丸藤　亮】

↓クロノス「パルメザンチ～ズ！」【由緒正しき血族の教師　クロノス・デ・メディチ】

・暗闇の中、何かを叫び続ける都

・一瞬だけ目配せして走り出す黎とフィオ

・都を背景に立ちはだかるプライドと6人の黒い人物。そしてそれを険しい顔で見上げる黎とフィオ

・テロップ【『遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁』！】

・真っ黒な場面の中、黎の言葉が響き渡る「待ってろ、今、義兄（にい）ちゃんが助けてやる！」

キャラクター紹介

遊馬崎　黎【ユマサキ　レイ】：主人公
身長：１８５？センチ　体重：？キログラム
性別：男　年齢：１５才（転生前：２１才）
一人称：俺
スリーサイズ：ｋ【張り倒すぞ！？　第一、男のスリーサイズなんざ要らんだろ！？】
髪：黒・ロング　瞳：黒・片目
【キャラクター説明】
今作の主人公。死亡による転生者。
やや博愛主義であり、贅沢が苦手。自らを“化物”と卑下するが、他人にその事をバカにされ、排除される事を嫌う。
炎の力を司り、万物を焼き払う。しかしプライド戦で実質的な敗北をし、新たな力を望むようになる。
“騎士”の魂を持つ。
とある一件より身体の中身を自在に組み替え、取り込んだ物を自由な形にする事ができる“生体還元術（バイオフィードバック）”の使い手となる。その為、身長・体重などの体格はあまり意味を持たない。その気になれば性別、人種といったものは彼の前では無に等しい。

基本的に体重は６８キロ程度だが、金属を取り込んでいるので最大で４００キロを超える。

神山　フィオ【カミヤマ　ふぃお】
身長：１６６センチ　体重：４７キロ
性別：女　年齢：１５才
一人称：わたし
スリーサイズ：ｋ【死ねぇえええええっ！】
髪：ライトブラウン・セミロング　瞳：ダークブルー
【キャラクター説明】
今作のヒロインその１であり、その正体は……。
モデル顔負けのナイスバディであり、若干の天然っ娘。
重量級の天使族デッキを操る。ボーイッシュなハーフ。
実は現在、デッキを改良中

遊馬崎　都【ユマサキ　ミヤコ】
身長：１５７センチ　体重：４７キロ
性別：女　年齢：１４才（転生前：２０才）
一人称：あたし
スリーサイズ：なｎ【地獄に堕ちろぉおおおおっ！】

髪：焦げ茶色・ロング　瞳：茶

【キャラクター説明】

今作のヒロインその2であり、黎の義理の妹。死亡による転生者。

ほっそりとしたスレンダー体系。

ＩＱ１５０をマークする天才児。愛情と独占欲が同じという感性の持ち主。

死亡後、転生しきる前に邪神に洗脳され、依り代として黎達の前に敵として現れる。邪神の護衛からは姫と呼ばれる。

とある一件より如何なるダメージも修復しきる事ができる“完全自己再生（パーフェクトリバイブ）”を身につける。

義兄とは違い自らを“化物”と称する事は無いが、その分“化物”呼ばわりには敏感。

怪我を気にする必要がないため、特攻型のリアルファイトを行う。

遊城　十代【ユウキ　ジュウダイ】

『遊戯王ＧＸ』の主人公。『Ｅ・ＨＥＲＯ』というカテゴリーのデッキを使う、明るい少年。

口癖は「ガッチャ！」

丸藤　翔【マルフジ　ショウ】

『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。『～ロイド』と名のついた機械族デッキの使い手で、丸メガネをした気弱な少年。兄とは髪の色が違う。

前田　隼人【マエダ　ハヤト】

『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。『コアラ』を中心にしたオーストラリアデッキの使い手。見た目が『デスコアラ』似ている。酒屋の息子で、絵が巧い。

天上院　明日香【テンジョウイン　アスカ】
『遊戯王ＧＸ』ヒロイン。『プリマ』や『サイバー』といった機械系やバレリーナ系のデッキの使い手。行方不明の兄を捜す、ブルー女子きってのクールな実力者。

万丈目　準【マンジョウメ　ジュン】
『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。『ヘル』と名のついた地獄デッキと機械族のユニオンデッキの使い手。呼び捨てにされると「万丈目さんだ！」と返す。

三沢　大地【ミサワ　ダイチ】
『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。６種類の属性ごとに分かれたデッキを使う。計算高く、様々な物事を計算に基づいて的確に当てる。

丸藤　亮【マルフジ　リョウ】
『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。『サイバー』と名のついたサイバーデッキを使うサイバー流の男。デュエルアカデミア最強であり、“カイザー”の異名を持つ。

クロノス・デ・メディチ【くろのす・で・めでぃち】
『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。アカデミアの教師であり、実技最高責任者。独特の喋り方をする。『古代の機械（アンティーク・ギア）』と名ついた機械族デッキを使う、エリート思考の持ち主。

鮫島校長【サマジマこうちょう】

『遊戯王ＧＸ』メインキャラクター。アカデミアの校長であり、サイバー流の師範。穏やかな気質であり、芯のある人徳者。

トメさん【とめサン】
『遊戯王ＧＸ』サブメインキャラクター。購買部のおばちゃんであり、デュエルは素人だが優しい人。ミス・アカデミアの称号を持つ。

セイコさん【せいこサン】
『遊戯王ＧＸ』サブメインキャラクター。購買部の店員である若い女性。出番はあまり無いようだ。

プライド【ぷらいど】
七つの大罪、“傲慢”を司る男。全身黒尽くめで、テンガロンハットを被りマントを羽織っている。二刀流で邪神の護衛。
慇懃な言葉遣いだが、フラストレーションが溜まると乱暴な言葉遣いになる。
メタを組むためにフィールド魔法『集中豪雨地帯』を中心とした水属性魚族デッキを構成。そのタクティクスは一流であるが、黎の土壇場での反撃に引き分ける。その後、黎の事を見下しているのか、情報を曝け出して姿を消す。

オープニング【ＢＧＭ『Ｌｉｔｔｌｅ　Ｂｕｓｔｅｒｓ！　－ｅｃｓｔａｓｙ　ｖｅｒ．－』】

・サビ【アンティークな背景の空】

・サビ【黎とフィオと都のそれぞれの写真が映し出される】

・サビ【黎が走り、大空へ向かってジャンプ。空にアングルが切り替わる】

・サビ【黎、フィオ、都、女騎士、サイレント・マジシャンＬｖ８、フレイヤが一斉に写っている写真】

・サビ【フィオ→都→少女→女騎士→サイレント・マジシャンＬｖ８→フレイヤが順番に映る】→ベージュ色の紙に線描きで五人の人が映りながらテロップ【遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁】

・（歌詞導入）

・防波堤に腰かけている黎【化物を、ナメるなよ……！】　↓　物憂げな黎のアップ【心優しい鬼の騎士　遊馬崎　黎】

・木陰で本を読むフィオ【だ、誰が美人か！？】　↓　笑顔のフィオのアップ【器量良し、スタイル良しの天然天使　神山　フィオ】

・黒い背景に悲しげな表情の都【ずっと、信じてた……】　↓　泣き笑いの都のアップ【鬼の義妹にて不死身の少女　遊馬崎　都】

・段ボールを運ぶガッシリした少年【覚悟しろ、貴様は俺を怒らせた】　↓　真剣な表情の少年のアップ【現在に残る最後の武士　？？？】

・蠱惑的な表情の少女【さあ、行くわよ？】　↓　傘を差した少女のアップ【誘惑の奥に何かを隠した妖艶な女　？？？】

・十代や翔達の立ち絵が次々と現れる。

・満開の桜の下で酒を飲む女騎士【何かを選んで後悔をしないのは、ただのバカだ】　↓　剣を前面に突き出した女騎士のアップ【剣を胸に秘める桜色の騎士　？？？】

・アップの澄まし顔の『サイレント・マジシャンＬｖ８』【……美しさなんて、幻想に過ぎない】　↓　八重歯を覗かせ、困ったように笑う『Ｌｖ８』【秘めたる力を嫌う孤高の猫　？？？】

・黎の立ち絵↓全身に炎を纏った黎の立ち絵

・空に羽ばたいていく白い鳥達

・少女を抱きかかえながら落下する少年

・プンプンした様子の明日香

・不満気なジュンコとももえ

・満面の笑みを浮かべる『勝利の導き手フレイヤ』【はい、マスター！】　↓　冷たい瞳で見下ろす『フレイヤ』【天使か悪魔か天然か　？？？】

・森をバックに振り向いた都

・考え事をする様子の『サイレント・マジシャンＬｖ８』

・曇天の屋外に立つフィオ

・黒い窓に手をつく『勝利の導き手フレイヤ』

・海をバックに立つピンクの長髪の女騎士→海だけに

・暗闇の先を見つめる黎→奥に皆が

・アカデミア　↓　誰かの首から下　↓　海

・ベージュ色の紙に線描きで五人の人が映る

・レトロな写真に写る黎、フィオ、都、少年、少女→カラー写真に

・空を飛ぶ白い鳥

・ペンを持ってこちらを見る少女　↓　優しい表情の『サイレント・マジシャンＬｖ８』　↓　挑発的な姿勢の女騎士　↓　フライパンを手に調理する都　↓　こちらを振り返る『フレイヤ』　↓　柵に腰掛けるフィオとその横で夕焼けを見つめる都　↓　二人のアップ

・波打つ水面にぼんやりと映る冷たい瞳の黎　↓　悲しそうに泣くフィオ　↓　ダーク化した都　↓　優しげに見つめる『Ｌｖ８』
↓　楽しそうに笑う少女　↓　虚ろな瞳の女騎士

・空に向かって元気一杯に跳ぶ都

・目を瞑って笑っている黎

・背中合わせで入浴する少年と頬を赤らめる少女

・花火を見上げるフィオの後ろ姿

・虚ろな瞳の『サイレント・マジシャンＬｖ８』

・流れ星を背景に満面の笑顔の女騎士

・携帯を手に取っている『勝利の導き手フレイヤ』

・無表情の少女　↓　僅かに笑顔に

・上裸で顔だけ振り返る都。背中には大きな傷

・アップで見下ろすフィオ

・青空の高原　↓　夕暮れの海岸沿い

・パフェに目を輝かせる『勝利の導き手フレイヤ』　↓　フォークを持つ笑顔の『サイレント・マジシャンＬｖ８』　↓　料理中の困ったような笑顔の女騎士

・黎に下からキスをしようとするフィオ　↓　黎に膝枕をしてあげる都　↓　後ろから黎に抱き締められる女騎士↓　本を運ぶ『Ｌｖ８』↓　湯に浸かる『フレイヤ』　↓　夕焼けの砂浜に立つ少女

・ベージュ色の紙に線描きで五人の人が映る　↓　画面が切り替わり、皆の楽しそうな集合写真に

・山や草原を背景にしたスタッフロール

・青空に弾ける形で表れる題名【遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁】　↓
空が白くフェードアウト

オープニング終了

ＳＴＯＲＹ番外編：ＣＭとキャラ紹介とオープニング（後書き）

お楽しみ頂けましたか？
では、次回からまた本編です。
お楽しみに（コソコソ、ササッ！）

＜おまけですよ～＞

黎「気付かれて無いとでも思ったのかねぇ？」

都「陰でコソコソ見守っていたあたし達の言えるセリフじゃないけどね」

フィオ「じゃ、戻ろうか、本編に」

じつは意外とバレていた事を知らないのは作者ばかり……。

ＳＴＯＲＹ１５：底辺に生きる男と底辺へ落ちる男（前書き）

見事に迷宮兄弟を撃破した黎！　ブルーに勝った時、とある人物が現れて……。

黎「ブルーの巻き上げたカードを回収していたんだが、どこに因縁つける要素があったんだ？」

それでは、ＶＳ原作キャラのデュエル、スタートです！

＜今回の注目カード＞

フィオ・都『な～にかな、なぁ～にかなっ！　今回は、コレ！』

ＶＷＸＹＺドラゴン・カタパルトキャノン
融合・効果モンスター
星８／光属性／機械族／攻３０００／守２８００
「ＶＷ－タイガー・カタパルト」＋「ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。
１ターンに１度、相手フィールド上のカード１枚をゲームから除外する。
このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を変更する事ができる。（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

フィオ「万丈目くんのカードだね」

都「1ターンに1度、ノーコストでカードを除外できるよ！」

フィオ「種類も選ばないから強力だけど、手間がかかり過ぎるよ……」

都「破壊に耐性も無いしね！　合体するかどうかは状況を見極めるのが大切なんだよ！」

ＳＴＯＲＹ１５：底辺に生きる男と底辺へ落ちる男

ＳＩＤＥ：黎

「俺は『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』で守備表示の『ハイパーハンマーヘッド』を攻撃！　“スピン・ファイア・キック”！　貫通ダメージでフィニッシュだ！」

ハイパーハンマーヘッド（効果モンスター）
星４
地属性／恐竜族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１２００
このモンスターとの戦闘で破壊されなかった相手モンスターは、ダメージステップ終了時に持ち主の手札に戻る。

「ぐぁあああああああああああっ！」

黎：ＬＰ　２９５０
ブルー生：ＬＰ　３００→０

黎：ＷＩＮ
ブルー生：ＬＯＳＥ

「約束通り、カードは返してもらうぞ」
「ぐ……」
「それとも、ブルーのエリートでありながら、自分も同意した約束を破る気か？　エリートなのに？」
「分かったよ！　ほら！」

迷宮兄弟との戦いから、俺の知名度がどうやら本格的に広まったらしい。クロノス先生を倒した十代と合わせて『オシリスレッドの双璧』なんて呼ばれる事もあるとか。
で、その腕を見込まれて今はカードをブルーから取り返してるところ。レッドが主な依頼主なのだが、たまにイエローも来るし、一度だけブルー女子も来た（明日香の辺りにでも頼めよ……）。

「はい、『サイコショッカー』のカード。これで当ってる？」
「ああ！　ありがとう！　父さんのくれた大切なカードなんだ！」
「ふふ、またいつでも来てくれ」

パタパタと手を振ってレッド生が走り去る。もう取られるなよ、と笑いながら俺も手を振って見送る。

「ところで、もう出てきたらどうだ？」

ジッ、と鋭い視線を廊下の角にくれてやると、一人のブルーの男子生徒が姿を現した。尖った鼻にトサカのようなヘアスタイル、一部では鳥頭と呼ばれる所以だ。

「やっぱお前か、万丈目」
「万丈目さんだ」
「これは失礼、万丈目スリー」
「そのサン（3）じゃ無い！」

はっはっは、と笑って俺は万丈目の抗議を受け流す。良いじゃん、お前三男坊だし。

それはさておき、だ。

「何の用だ？」
「遊馬崎　黎、あまり調子に乗るなよ……！」
「？」
「好い気になってヒーローやってると、足元を掬われると言っているんだ！」

は？

「そうやってレッドやイエローやブルー女子の人気を上げようとしているんだろう！」
「言いがかりだ。俺はただ単に、自分と同じような悲しみの人生を味わう人を少しでも減らしたいんだ。不幸と絶望の味を知り尽くすのは俺と都だけで十分だ」

これは本心だ。明日をも知らぬ身だった者として、誰かが悲しむ様子は昔の俺と重なってしまう。俺が手を貸すのは悲しんでいる人の為であり、ひいては自分自身の為でもあるのである。

どうやらこいつは俺が皆の注目の的であるのが気に食わないらしい。だからこうして俺に突っ掛かって来ているのだろう。

「第一、貴様とあのミヤコとかいう女との関係が本物かどうかは知らんが、邪神だと!?　御伽噺も大概にしろ！　悲劇のヒーロー気取りか！　そうやって皆の同情を引く作戦か!?」
「その辺にしろよ、エリート気取りの小僧が」
気がつくと、俺は万丈目の胸倉を掴み上げていた。自分では分からないが、きっと憤怒の形相をしている事だろう。
「お前に俺の何が分かるとは言わない。だがな、人の心の踏み込んではいけない部分をそうやって土足でズカズカ上がり込んで踏み荒らして行くのは我慢できねぇな！」
ブン、と万丈目を放り投げる。
ふぅ……、と息を吐いて自分を落ち着かせる。この間の査問委員会の女にしたみたいに血ダルマにしなくて良かったぜ。
と、後ろで誰かの靴の音が聞こえた。
「貴方達、何をしているの?」
「明日香!」「天上院くん!」
万丈目に気を取られて背後への配慮が足らなかったらしい。金髪でとても15才とは思えないプロポーションの彼女は、オベリスクブルーの女王（クィーン）と呼ばれる程の腕前の持ち主であり、その実力はブルー男子に引けを取らない。間違いなく男女問わずブルーの中でも屈指の実力者だ。
「別に、万丈目に因縁つけられただけだ」
「だけって……」
「この程度で悲観してしょぼくれるほどナイーブじゃ無いさ」

はぁ、と明日香が溜息を吐いた。ジトッ、とした目で俺を見る。
違う、視線の延長線上に俺がいない。彼女が見ているのは俺の後ろの万丈目だ。

「万丈目くん、貴方いくらなんでも八つ当たりはどうかと思うわよ」
「八つ当たり？　どういうこった、明日香？」
「や、八つ当たりなんかじゃ無い！」
「嘘ね。貴方が十代に月一試験で負けてから戦績が思うように振るわなくてイライラしていた事ぐらい知っているわ」

ああ、『ハネクリボー』が初めてパワーアップしたあれか。同時に都、プライドと戦った日でもあるな。

「それで苛立ちの矛先を俺に向けたと」
「ち、違う！　オレはただヒーロー気取りで有頂天になっているこいつに忠告しようとしただけで……」
「見苦しいわよ！」

明日香が万丈目を一喝する。どちらか言うと明日香は今俺の味方だし、普段の堂々としていたあいつと比べて言い訳だらけのこいつに怒ったのだろう。

「そんな建て前で私を納得させられるとでも思った！？　他のブルーみたいに恐喝紛いの事はしてないけど、それでもイチャモンつけてレッドやイエローの人達にデュエルけしかけて恥ずかしくないの！？」
「それは、ううう……」
「その辺にしてやんな、明日香」

流石に可哀想になってきたので、手で明日香を制して止めてやる。

「万丈目、要するにお前は最近負けが続いており、しかも気に食わない俺がいたからこうして苛立ちをぶつけて来たんだろ？」
「……」
恒例の『さんだ』が無いところを見ると、図星なんだな。
「なら、俺とデュエルだ。理屈は言わずしても分かるな？」
「ッ、良いだろう！　受けてやる！」

――デュエルリング

廊下のど真ん中でやるワケにはいかないので、俺達はリングに移動する事にした。
周囲には観客は疎らだが、明日香が呼んだのか十代やフィオといったメンツがいた。
「行くぞ、万丈目！」
「さんだ！　来い、ドロップアウト！」
『デュエル！』

黎ＶＳ万丈目
ＬＰ　４０００　ＶＳ　ＬＰ　４０００

「オレの先攻で行くぞドロップアウト！　ドロー！　魔法カード『天使の施し』を発動！そして『死者蘇生』で墓地に送った『Ｚ－メタル・キャタピラー』を特殊召喚！」

Ｚ－メタル・キャタピラー（ユニオンモンスター）
星４
光属性／機械族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１３００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「Ｘ－ヘッド・　キャノン」「Ｙ－ドラゴン・ヘッド」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は６００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

Ｚ－メタル・キャタピラー：ＡＴＫ　１５００

「続いて『Ｘ－ヘッド・キャノン』を召喚！」

Ｘ－ヘッド・キャノン（通常モンスター）
星４
光属性／機械族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１５００
強力なキャノン砲を装備した、合体能力を持つモンスター。
合体と分離を駆使して様々な攻撃を繰り出す。

Ｘ－ヘッド・キャノン：ＡＴＫ　１８００

黄色いキャタピラだけを取ったマシンに、肩に二門の砲身を装着した青い機体が現れる。て事は『ＶＷＸＹＺ（ヴィトウズィ）』のデッキか。は、『おジャマ』の入る前ならこいつを倒す事はそこまでの労は要さねぇよ。

「更に永続魔法『前線基地』を発動！　１ターンに１度、手札のユニオンモンスターを１体特殊召喚できる！　オレは『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』を呼ぶ！」

前線基地

【永続魔法】
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に手札からレベル４以下のユニオンモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

Ｙ－ドラゴン・ヘッド（ユニオンモンスター）
星４
光属性／機械族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１６００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「Ｘ－ヘッド・キャノン」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

Ｙ－ドラゴン・ヘッド：ＡＴＫ　１５００

お、早いな。もう合体できるのか。流石は原作キャラ、ドロー運も良い。

「そして合体！　来い、『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』！」

ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン（融合・効果モンスター）
星８
光属性／機械族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　２６００
「Ｘ－ヘッド・キャノン」＋「Ｙ－ドラゴン・ヘッド」＋「Ｚ－メタル・キャタピラー」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
このカードは墓地からの特殊召喚はできない。
手札のカードを１枚捨てる事で、相手フィールド上のカード１枚を破壊する。

ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン：ＡＴＫ　２８００

「これでターンエンドだ！」

万丈目：ＬＰ　４０００
手札：２枚

フィールド
：ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン（ＡＴＫ　２８００）
：前線基地（永続魔法）

合体と言っても縦に3体重なっただけなんだけどな。あー、でも『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』の翼は取れたし、一応合体になるのか？

「さあ、貴様のターンだ！」
「解ってるよ。俺のターン、ドロー」

怒りでか興奮状態にある万丈目に対し、俺は冷静さを保つ。今のこいつに熱さで立ち向かっても効果は薄い。戦意が薄れたタイミングで着火するのが正しいだろう。

「俺は『ゴゴゴゴーレム』を守備表示で召喚」

青い巨体が現れる。背中についているノズルから煙が噴き出すところを見ると機械仕掛けなのかも知れない。

『ゴゴゴ～！』

ゴゴゴゴーレム：ＤＥＦ　１５００

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

黎：ＬＰ　４０００
手札：３枚
フィールド
：ゴゴゴゴーレム（ＤＥＦ　１５００）
：伏せカード２枚

『黎くん落ち着いてるッスね』
『今の万丈目相手に熱くなってもムダさ。相手のプレイングミスを誘うつもりなのだろう』
『まあ、今の彼には良い薬だね』

上から順に翔、大地、明日香。二人の分析は正解。自分は必死に戦っているのに、相手が飄々としていれば怒り、焦るものだ。

「オレのターンだ！　『Ｖ－タイガー・ジェット』を召喚！」

Ｖ－タイガー・ジェット（通常モンスター）
星４
光属性／機械族
ＡＴＫ　１６００／ＤＥＦ　１８００
空中戦を得意とする、合体能力を持つモンスター。

合体と分離を駆使して立体的な攻撃を繰り出す。

Ｖ－タイガー・ジェット：ＡＴＫ　１６００

「更に『前線基地』の効果で『Ｗ（ダブル）－ウィング・カタパルト』を特殊召喚！」

Ｗ－ウィング・カタパルト（ユニオンモンスター）
星４
光属性／機械族
ＡＴＫ　１３００／ＤＥＦ　１５００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「Ｖ－タイガー・ジェット」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

Ｗ－ウィング・カタパルト：ＡＴＫ　１３００

虎の頭のジェット機と青い翼付きのカタパルトが現れる。おやおや、もう2体揃うのか。

「合体！　来い、『ＶＷ－タイガー・カタパルト』！」

ＶＷ－ウィング・カタパルト（融合・効果モンスター）
星6
光属性／機械族
ＡＴＫ　２０００／ＤＥＦ　２１００
「Ｖ－タイガー・ジェット」＋「Ｗ－ウィング・カタパルト」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。
手札を1枚捨てることで、相手フィールド上モンスター1体の表示形式を変更する。
（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

ＶＷ－タイガー・カタパルト：ＡＴＫ　２０００

それにしても、ユニオンした方が合体よりも攻撃力が高くなるのはどうなのだろうか。

「これでワンターンキル達成だ！　『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』

の効果発動！　手札を1枚墓地に送って『ゴゴゴゴーレム』を破壊する！」

「そうは行くか！　永続罠発動、『デモンズ・チェーン』！　モンスター1体の効果と攻撃を封印する！」

ガコン、と『ＸＹＺ』の砲身が『ゴゴゴゴーレム』に狙いを定めるが、表向きになったカードから伸びた赤黒い鎖に絡め取られて動きを封じられた。

デモンズ・チェーン
【永続罠】
フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化される。
選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

『グォオオオッ！？』

「ならば『ＶＷ－タイガー・カタパルト』の効果で攻撃表示なってもらう！　タイミングを間違えたな！　まだオレは手札を捨てて無い！」

しまった、早まったか。

ゴゴゴゴーレム：ＤＥＦ　１５００→ＡＴＫ　１８００

平たい戦闘機から放たれた光線を浴びたゴーレムが交差していた腕を解いて立ち上がった。いけない、守りの布陣が壊される。

「攻撃だ！」

「『くず鉄のかかし』を発動！　モンスター1体の戦闘を無効にする！」

危ないトコだった。実弾攻撃を金属製の案山子が張った防壁で弾き返す。

「ぐっ！　忌々しいカードを！」

「効果は解っているようだな。発動後、こいつは墓地には送られず、フィールドに再セットされる」

罠カードはセットしたターンには使えないので、要するにこのカードの効果は1ターンに1度攻撃を防ぐ永続罠みたいなものだと思ってくれれば良い。

「ならばメインフェイズ2に移り、更なる合体を行う！　出でよ『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』！」

今度は本格的な変形合体を行う。二足歩行の巨大ロボに変形し、『Ｚ－メタル・キャタピラー』の足が腕になったり、『Ｘ－ヘッド・キャノン』の砲身が胸部に移動したりとさっきまでの重なるだけとは違った本当の合体だ。

ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン（融合・効果モンスター）
星８
光属性／機械族
ＡＴＫ　３０００／ＤＥＦ　２８００
「ＶＷ－タイガー・カタパルト」＋「ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。
１ターンに１度、相手フィールド上のカード１枚をゲームから除外する。
このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を変更する事ができる。（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン：ＡＴＫ　３０００

「効果発動だ！　『ゴゴゴゴーレム』をゲームから除外！」
「ぬ！」

ズギャン！　と胸部の砲身からビームを放ち、青いゴーレムを焼き払う。あっちゃ、やられちまった。

「ターン終了だ！」

万丈目：ＬＰ　４０００
手札：０枚
フィールド
：ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン（ＡＴＫ　３０００）
：前線基地（永続魔法）

「サレンダーするなら今のうちだぞ、ドロップアウト！」
「悪いが断る。俺のターン、ドロー！」

さてと参った。合体前に倒しておくべきだったのに、合体されちまった。どうするべきか……。
引いたのは『融合解除』。今の状況じゃ役には立たないな……。

「俺は『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』を召喚し、その効果でデッキから『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』を特殊召喚」

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＤＥＦ　１５００
Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ：ＤＥＦ　７００

「ターンエンド」

黎：ＬＰ　４０００
手札：３枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン（ＤＥＦ　１５００）、Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ（ＤＥＦ　８００）
：伏せカード１枚（『くず鉄のかかし』）、デモンズ・チェーン（対象不在）

「オレのターンだ！　『ＶＷＸＹＺ』の効果でその仮面モンスターを除外！」
「く、『ウィスプ』！」
『ダンナァ～！』
「そして『ＶＷＸＹＺ』で攻撃！　“ＶＷＸＹＺ－アルティメット・デストラクション”！」
「させない、『くず鉄のかかし』を発動！」

『ＶＷＸＹＺ』の攻撃を通すワケにはいかない。通せば最大で３０００のダメージ、残りライフを１０００にまで削られてしまう。
あいつが『くず鉄のかかし』を除外しないのは『ウィスプ』の効果を知っているからだろう。あいつの能力は『くず鉄のかかし』より厄介だからな。

『にしても、厄介な効果だね。毎ターン除外効果が発生するなんて』
『十代、貴方彼に勝ったんでしょ？　何か攻略方法とか無いの？』

『いやー、あの時は『ハネクリボー』が頑張ってくれたから……』
『除外効果は『ＬＶ１０』に進化させて回避し、攻撃は自信の効果で反射させた。その両方を黎にやれというのは些か酷な話だ』
『万丈目さんの場にリバースカードはありませんから、せめてバトルで破壊か、相撃ちに持ち込めれば良いのですけれど……』

皆の言う事は最もだ。『スピリッツ・ワールド』か『レッド・シンボル』を引ければ戦局を覆せる可能性はあるが……。

「いつまでその場凌ぎが続くか、見物だな！　ターンエンド！」

万丈目：ＬＰ　４０００
手札：１枚
フィールド
：ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン（ＡＴＫ　３０００）
：前線基地（永続魔法）

確かに。今のままじゃその場凌ぎだ。このままじゃ確実にやられてしまう。
次のターン、万丈目が攻撃力１５００を超えるモンスターを出したら防御の布陣が崩される。そうなれば後はズルズルと敗北ルートだ。
手札は3枚、『緊急同調』、『融合解除』、『撲滅の使徒』。次のターン、モンスターを引けるかどうか、それがお互いに課せられ

た運だ。

「俺の、ターン！」

引いたカードは……！

「魔法カード『種火』を発動！　フィールドの『マグマドラゴン』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー！」

チラ、と引いたカードを見る。行ける！

「魔法カード『火炎融合－ファイア・フュージョン』を発動！　このカードは融合『F・S』を召喚し、更に融合素材にデッキのモンスターを使用できる！」

火炎融合－ファイア・フュージョン（オリジナル）
【通常魔法】
「F・S」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。
この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材の内の1体としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「俺はデッキの『Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ』と『Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール』を融合！　来い、『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』！」
『行くぞ！』

Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００

「ただし、この効果で手札か場のモンスターを融合素材に指定しなかった場合、このターンのエンドフェイズに『ブレイジング・ナイト』はゲームから除外され、俺は２９００ポイントのダメージを受ける事になる」
「フン、攻撃力は『ＶＷＸＹＺ』に劣り、エンドフェイズにダメージだと？　どこまでバカなのだ貴様は！」

慌てるなよ、万丈目。まだ俺は手の内を出し尽くして無いぜ？

「更に『融合解除』を発動！　この効果で墓地の『サニーハット・キティ』と『フレア・チアガール』を特殊召喚！」
『呼ばれて飛び出て！』
『参上でっす！』

Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ：ＡＴＫ　２０００
Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール：ＡＴＫ　３００

『わぁ！　可愛い女の子達ッス！』

いやいやいや。翔、キミはそういう反応なのか。
片やチアガール、片やネコ耳獣っ娘。確かに可愛いか否かで問われたら、可愛いの方だとは思うが。
それはさておき。

「『フレア・チアガール』の効果を発動。俺の場の『Ｆ・Ｓ』と名のついたモンスターの攻守を５００ポイントアップさせる」
『ファイト、オー！』

フレアスカートをはいたチアガールが手にしたボンボンを振って応援を開始すると、場に赤色の闘気が満ちる。闘気はオーラとなって『サニーハット・キティ』と『フレア・チアガール』に纏わりついた。

Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール（効果モンスター）（オリジナル）
星２
炎属性／天使族
ＡＴＫ　３００／ＤＥＦ　３００
このカードが場に表側表示で存在する限り、自分の場に存在する『Ｆ・Ｓ』と名のついたモンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントアップする。
１ターンに１度、このカードを対象とした戦闘を無効にする。

Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ：ＡＴＫ　２０００→２５００／ＤＥＦ　９００→１４００
Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール：ＡＴＫ　３００→８００／ＤＥＦ　３００→８００

「だから、それが何だと言うんだ！」
「フィールド魔法発動！　『スピリッツ・ワールド』！」
「！？　ここでだとぉ！？」

地面に六芒星の魔法陣が生まれ、フィールド中に温かな光の粒が地面から立ち上り始める。その光の玉は俺の場の『Ｆ・Ｓ』の体に吸収された。

しかし、俺にもディスティニードローってのがあんのかねぇ。『火炎融合』も『スピリッツ・ワールド』も『強欲な火山口』で引き当てたんだぜ？　普通にドローしてたらいい感じの巡りじゃ無いなんて感想抱くっつーのに。

「これで逆転だ！　『Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ』で『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』に攻撃！　“フレアカット・クロウ”！」
『燃えちゃえー！』
「そしてこの瞬間『スピリッツ・ワールド』の効果で『サニーハット・キティ』の攻撃力が１０００ポイントアップする！」

Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ：ＡＴＫ　２５００→３５００

赤く発光した爪がクロス、５つずつの平行した閃光が計１０本の

斬撃を生み出し巨大な機械を斬り裂き、焼き尽くした。

「ぐぉあああああっ！」

万丈目：ＬＰ　４０００→３５００

「更に『フレア・チアガール』でダイレクトアタック！“チアリング・スパーキング”！」

「うぉおおおっ！」

万丈目：ＬＰ　３５００→２７００

「これでターン終了だ」

黎：ＬＰ　４０００
手札：２枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ（ＡＴＫ　２５００）、Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール（ＡＴＫ　８００）
：伏せカード１枚（『くず鉄のかかし』）、スピリッツ・ワールド（フィールド魔法）、デモンズ・チェーン（対象不在）

「形勢逆転だな、万丈目」
「さん、だ！　ドロー！」

さて、『スピリッツ・ワールド』が場に存在する限り『サニーハット・キティ』の攻撃力は３５００、『フレア・チアガール』の攻撃力は１８００まで上がる。攻撃が来ても『くず鉄のかかし』で止められるし、今の所は安全だろうが……。油断はできないな。

「オレは魔法カード『命削りの宝札』を発動！　これで手札を補充だ！」
「この局面で……！」

命削りの宝札（未ＯＣＧカード）
【通常魔法】
手札が５枚になるようにドローする。
５ターン目の自分のスタンバイフェイズに、手札を全て捨てる。

原作キャラが手札を補充するのは危険のサインだ。強力な反撃、若しくはワンターンキルが達成する予兆だからだ。

「魔法カード『打ち出の小槌』を発動！　このカードと任意の枚数の手札をデッキに戻してシャッフルし、戻した枚数分カードをドロ

ーする！　俺は手札3枚をデッキに戻す！」

打ち出の小槌（アニメ効果）
【通常魔法】
発動しているこのカードと手札を任意の枚数選択し、デッキに戻しシャッフルする。
その後、デッキに加えた枚数分のカードをドローする。

ほぼ全てを……。

「魔法カード『大嵐』を発動！　全フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！」
「しまった！？」

大嵐
【通常魔法】
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

『ヤバい！　戦局が引っ繰り返される！』
『黎！』

マズい、『スピリッツ・ワールド』とくず鉄先生が破壊された！
ハリケーンが来たら『デモンズ・チェーン』も回収しようと思っていたのに！

「装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！　ライフを８００支払って『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』を特殊召喚！」

早すぎた埋葬
【装備魔法】
８００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。
このカードが破壊された時、装備モンスターを破壊する。

万丈目：ＬＰ　２７００→１９００
ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン：ＡＴＫ　３０００

「そして『ＶＷＸＹＺ』の効果で『フレア・チアガール』を除外する！　これでパワーアップ効果は無くなったぞ！」

『マスター、ごめんなさぁぁああい！』
「『フレア・チアガール』！」
ビーム砲がチアガールを消滅させる。

Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ：ＡＴＫ　２５００→２０００／ＤＥＦ　１４００→９００

「攻撃力が下がったな！　喰らえ！　『ＶＷＸＹＺ』で『サニーハット・キティ』を攻撃！　“ＶＷＸＹＺ－アルティメット・デストラクション”！」
『ミャアァアアア！』
「ぐっおおぉおおおおおおおっ！」

黎：ＬＰ　４０００→３０００

「ク、ククク！　カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

万丈目：ＬＰ　１９００
手札：１枚
フィールド
：ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン（ＡＴＫ　３０００）
：伏せカード1枚、早すぎた埋葬（装備魔法・『ＶＷＸＹＺ－ドラ

ゴン・カタパルトキャノン』に装備）

（伏せたカードの内の1枚は『魔法の筒（マジック・シリンダー）』。これなら奴が『ＶＷＸＹＺ』を倒せるカードを出してもオレの勝ちだ！）

「……、俺のターン！」

伏せカードを見てニヤニヤ笑う万丈目。攻撃や召喚に対する反応型と見るべきか。

厄介なのはあれが『奈落の落とし穴』や『魔法の筒』だった場合だ。折角『ＶＷＸＹＺ』を倒せるカードを召喚してもこちらを不利にしかねない。

魔法の筒
【通常罠】
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

奈落の落とし穴
【通常罠】
相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召

喚した時に発動する事ができる。
その攻撃力１５００以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

引いたカードは『火炎の魅力』か。これに賭けるしか無いな……。

「俺は手札から魔法カード『火炎の魅力』を発動。このカードはデッキからカードを3枚引いて手札の炎属性モンスターを1体墓地に送るカード。ただし、送らなかった場合俺の手札は全てゲームから除外される」

火炎の魅力（オリジナル）
【通常魔法】
自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札の炎属性モンスター1体を墓地に送る。
手札に炎属性モンスターがない場合、手札を全てゲームから除外する。

「1枚目、ドロー！」

最初は『天使の施し』！

「2枚目！」

次は『きつね火』！　これで手札を除外しなくて済む！

「ラスト、3枚目！」

最後は『ボルト・ヘッジホッグ』か！

「手札の『きつね火』を墓地へ送る！　更に『天使の施し』を発動！　デッキからカードを3枚引いて2枚捨てる！」

今回墓地に送るのは墓地で効果を発揮する『ボルト・ヘッジホッグ』と使い所の無い『撲滅の使徒』だ。

「まだまだ！　魔法カード『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを2枚ドロー！」

この罠カードは……！

「そして3枚カードをセットし、『F・S　グリル・ゴーレム』を守備表示で召喚！」

F・S　グリル・ゴーレム：DEF　1100

「更に『死者蘇生』を発動、墓地から『サニーハット・キティ』を特殊召喚。これでターンを終了する」

『復活ですミャー』

F・S　サニーハット・キティ：DEF　９００

黎：LP　３０００
手札：０枚
フィールド
：F・S　グリル・ゴーレム（DEF　１１００）、F・S　サニーハット・キティ（DEF　９００）
：伏せカード３枚

「オレのターンだ、ドロー！　ククク、ここまでのようだな！」
「何！？」
「オレは『メテオ・レイン』を発動！　このターン、オレのモンスターが守備モンスターを攻撃し、守備力を攻撃力が超えていればその分だけダメージを貴様に与える！　更に『巨大化』を発動！」
「！」

いかん、攻撃力が倍になるカードだ！

ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン：ＡＴＫ　３０００→６０００

「ハッハハハハハッ！　これでぇ、終わりだぁっ！　『ＶＷＸＹＺ』で『サニーハット・キティ』を攻撃だぁ！　“ＶＷＸＹＺ－アルティメット・デストラクション”！」

ガゴン、と巨大ロボの胸部の砲身がこちらへ向く。させねぇよ！

「罠カード『緊急同調』を発動！　このカードはバトルフェイズ中に１度だけ、シンクロ召喚の権利を与える！」

「何だと！？」

緊急同調
【通常罠】
このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。
シンクロモンスター１体をシンクロ召喚する。

「レベル４の『Ｆ・Ｓ　サニーハット・キティ』に、レベル３の『Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム』をチューニング！」

『グリル・ゴーレム』が３つの緑のリングに変わって一列に並び、その中を『サニーハット・キティ』がくぐる。

「燃え盛る焔、水面を斬り裂く剣とならん！　希望が溢れる明日となれ！」

☆３＋☆４＝☆７

「シンクロ召喚！　灰塵に帰せ、『Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ』？」

『はぁあああああああああっ、てやっ！』

Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ：ＡＴＫ　２８００

光の中から現れたのは、青い軽鎧に身を包んだ戦士。細く長い剣を両手で持っている。

「更に効果で墓地の『強欲な火山口』を手札に！」

「だが、それがどうした！　攻撃対象をそのモンスターに変更だ！」

『ダメだ！　止まらない！』

『ここまでかぁ……！』

確かに、攻撃力の差は６０００マイナス２８００で３２００と、俺の残りライフ３０００を削り切れる。だが、それならこれでどうだ！

「リバースカード、オープン！　罠カード『ハイ・アンド・ロー』！」

『『ハイ・アンド・ロー』！？』

『高いか低いか、というギャンブルの一種だが……』

「このカードは、自分の場の攻撃力２０００以上のモンスターが攻撃される時に発動できる。デッキからカードを引いて、それがモン

スターだった場合、そのモンスターの攻撃力分、自分のモンスターの攻撃力がアップする！
ただし、この効果は3回まで使用できるが、相手より攻撃力が高くなった時自分のモンスターは破壊される！」

これは最終回で『シューティング・スター・ドラゴン』と『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』が引き分けた印象深いカードだ。あの時、遊星は失敗率の高い状況で攻撃力が相手と同じになるカードを引き当てた。

ハイ・アンド・ロー（アニメオリジナル）
【通常罠】
自分フィールド上に攻撃表示で存在する攻撃力２０００以上のモンスターが攻撃対象に選択された時、相手攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象となったモンスターよりも高い場合、
攻撃対象となったモンスター１体を対象に以下の効果を発動する。
●デッキからカードを１枚めくり墓地へ送る。そのカードがモンスターだった場合、その攻撃力の数値分だけ対象モンスター１体の攻撃力をアップする。
この効果を3回まで任意でくり返す事ができる。
この効果によって対象モンスターの攻撃力が相手攻撃モンスターの攻撃力を超えた場合対象モンスターを破壊する。

俺にもし、ディスティニードローの才能があるのなら、力を貸し

てくれ！　あのバカに勝ちをくれてやる訳にはいかないんだ！
　これから底辺へと落ちて来るあいつには、何１つとして輝かしいものなど無いだろう。だからせめて、この底辺よりも暗い底に生きている身として、あいつにこの世界の苦しさと、勝ち上がった時の喜びを知ってもらわなくちゃいけない！　ここで負けたら、それも無くなる！

「行くぞ、１枚目！」

　引いたカードは、影の戦士！

「攻撃力１０００、『ドッペル・ウォリアー』！」
「ハハハハハッ！　それじゃあまだ届かない！」

Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ：ＡＴＫ　２８００→３８００

『クッ、でも後２回効果が使えるよ！』
『その２回で攻撃力の差を３０００ポイント未満に縮められれば、少なくとも敗北を免れる事ができる……』
『魔法や罠を引く可能性も看過できないわ。何にせよ、運の要素が強いわね』

　フィオの歯噛み、大地の冷静な分析、明日香の緊張が伝わる。それを聞きながら２枚目に俺は手をかけた。

「２枚目、ドロー！」

　引いたカードは、着物を羽織った赤色の少年！

「攻撃力１３００、『Ｆ・Ｓ　バック・ドラフトマン』！」

Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ：ＡＴＫ　３８００→５１００

「クッ、ここまで縮めただと！」

『ヤタ！　これならダメージも殆ど無いよ！』

『これならまだ希望はある！』

ああ、確かに。だが、ここで立ち止まっていては、俺もあいつも『この程度』止まりだ！

「俺は『ハイ・アンド・ロー』の３回目の効果を使用する！」

「何！？」

『攻撃力９００を超えたモンスターを引いたらアウトだぜ！？』

『賭けに出たな。ダメージが少なくなるか、それとも負けてしまうか……』

『危険だけど、黎ならきっと……！』

デッキトップのカードに手をかけ、ニヤリと万丈目に笑う。

「さあ、何が出て来るかな？　ここで攻撃力が９００ジャストのモンスターを引いたら引き分けになる。もしそうなったら面白いよな！」

「バカな！　そんな簡単に引けるものか！」

「じゃあ引くぜ？　３枚目、ドロー！」

ピッ！　と軌跡を描いてカードを引き抜く。これが攻撃力９００

オーバーのモンスターなら俺の負け。それ以外ならゲーム続行。さあ、来い！

チャッ、と表を向けたカードはモンスターカード。

そしてそこに描かれていたのは、クリーム色のアーマーを纏ったスピードの戦士！

「最後の1枚は『スピード・ウォリアー』！　攻撃力９００！」
「何だとぉ！？」
『ほ、本当に引き当てた……！』
『なんて運の良いヤツなの……！』
『すっげぇ、すっげぇぜ黎！』

Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ：ＡＴＫ　５１００→６０００

「行け！　『バーニング・ブレードガイ』！」
「む、迎え討て！　『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』！」

ゴゥッ！　と放たれた光線の中を突っ切り、『バーニング・ブレードガイ』はその長刀を巨大ロボの胸部に深々と突き刺した。ロボは爆発し、鎧剣士は力尽きて倒れる。
即ち、相撃ちだった。

「な、ぁ……！」
「どうする？　まだ何か手はあるか？」
「が、ぐ……っ！」

ギリリ、と歯を軋ませる万丈目。あの様子だと、手札には好ましいカードが無いようだな。

「オレはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！（大丈夫だ！　今

伏せたのは『攻撃の無力化』だ。さっきの『魔法の筒』と合わせて防御は問題無い！）」

デッキトップに手をかけて俺はニヤ、と笑う。大方、頭の中で説明でもしてるんだろうが、生憎とそれは敗北フラグだぜ？

「なぁ、万丈目」

「万丈目さん、だ。何だ一体」

「月一試験の時、お前は残りライフ１０００を丁度の攻撃力で削り切られたんだったな」

「ああそうだ！　それがどうした！」

「お前のライフは１９００フラット。ここで俺が１９００ジャストのモンスターを引いたら面白くないか？」

「ざ、戯言を……！　そんな偶然が何度もあって堪るか！」

「まあ確かに。俺のデッキに入っている攻撃力１９００のモンスターは記憶が正しければ『ヴォルカニック・ギア・ガイ』と『ブラッド・ヴォルス』の２枚。それを引ければ一気に俺の勝ちだ」

そう言って俺はデッキトップのカードに手をかけた。

万丈目：ＬＰ　１９００
手札：１枚
フィールド
：モンスター無し
：伏せカード２枚（『魔法の筒』・『攻撃の無力化』）

「行くぜ俺のターン！　ドロー！」

引いたカードを見て、俺はニヤリと笑う。

この勝負、俺の勝ちだ！

「俺は『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を召喚！」

『本当に引き当てた！？』

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００

「止めだ！　“スピン・ファイア・キック”！」

「させるかぁ！　『魔法の筒』を発動だぁあっ！」

『ああ！？』

『マズい！』

『この局面であのカードを……！』

ここでそのカードを出して来るとは恐れ入るよ。反撃の可能性も考えて伏せたのだろう。

だが、予測してないとでも思ったか！

「チェーンしてこっちも罠発動！　『トラップ・スタン』！」

ビキビキビキビキッ！

音を立てて万丈目の場の伏せカードが石化した。

「な、何だこれは！？」

「『トラップ・スタン』の効果だ。これでこのターンはエンドフェイズまで『トラップ・スタン』以外の全ての罠カードは効力を失う」

トラップ・スタン
【通常罠】
このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「もう、分かるよな？　攻撃は通る！」
「あ、あああああぁぁあああぁぁぁぁぁっ！」
『喰らいやがれぇ！』

炎を纏った廻脚が万丈目を蹴り飛ばす。そして数センチ吹っ飛んだところで大爆発を起こした。

「ぐぁあああああああああああああああああっ！」

万丈目：ＬＰ　１９００→０

黎：ＷＩＮ
万丈目：ＬＯＳＥ

「このオレが、また負けた……！　こんな、ドロップアウト如きに……！」

ズ～ン、と沈みながらブツブツ呟く万丈目。そのまま彼はどこかへとフラフラ歩いて行ってしまった。そんなにショックか。

「やったね、黎！」
「すげぇぜ！　あそこで攻撃力を揃えるなんて！」
「何、偶然さね」
「うむうむ、黎と十代、カイザークラスの人間がこの学校に二人もいるのか。凄いな」

止めてくれ大地。俺はそんな帝とか呼ばれるような実力じゃ無い。

『やったな、ダンナ！』
『勝ちました！』
『イェ～イ！』

大喜びする皆を尻目に、俺はちょっと考え事をしていた。

「（このままじゃ、やっぱダメだな。弄った所でやっぱり『F・S』、炎のデッキだ。今度はプライドに負けちまうな）」

その呟きを聞いていたのは、きっと俺だけだっただろう。

皆の勝利ムードに水を差したく無いので、俺も暗い考えを振り切ってその輪の中に加わる事にしたのだった。

to be continued

ＳＴＯＲＹ１５：底辺に生きる男と底辺へ落ちる男（後書き）

黎「無事に万丈目を撃破した俺は、前々から考えていた事を実行に移した」

フィオ「えーと、ここどこ？」

黎「フィオ！？　なんでお前がここに！？」

フィオ「黎のパワーアップに付き合う事になったんだけど……、何か様子が変！」

黎「嫌な予感がするぜ……！」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１６：水の強襲！』デュエル、スタンバイ！」

黎・フィオ「あ、懐かしい」

＜おまけですよ＞

黎「しかし、よく都合良くジャストの攻撃力になったモンだ」

都「それがディスティニードローじゃないの？」

フィオ「普通に引いたら悪ドローだもんね」

黎「そうじゃ無く、俺のデッキには確かに『ドッペル・ウォリアー』は入ってるんだが、今まで一度も出した事無いんだよ。大体デッキの下から2、3番目」

都「それはそれは……」

黎「しかも俺のデッキの攻撃力１０００のモンスターはあいつだけ」

フィオ「何とまぁ……」

黎「中にはデッキに入ってないカードも引いたりするからな。凄いよなぁ……」

都「お義兄ちゃん、自分がその一員だって自覚、ある？」

ちなみに黎が『ブレイジング・ナイト』がいる時に『スピリッツ・ワールド』を使わなかったのは、実はミスだったり。

ＳＴＯＲＹ１６：水の強襲！（前書き）

炎の力だけではプライドに勝利できないと思った黎。パワーアップの為に原点へと帰り、精霊界にワープしようとするが……。

黎「ざっと5話分、精霊界の話が続く事になるな」

精霊界でのパワーアップストーリー、スタートです。

＜今回の注目カード＞

フィオ・都『なーにかな、なーにかなっ！　今回は、コレ！』

マッシブ・ウォリアー
効果モンスター
星２／地属性／戦士族／攻６００／守１２００
このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
このカードは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。

フィオ「防御系のカードだね」

都「どれだけ殴られてもダメージが無いのは嬉しいかな。『ワンショット・ブースター』と組み合わせて相手の場のモンスターを蹴散らそう！」

フィオ「リクルーターに呼ばせて守りを固めよう！」

ＳＴＯＲＹ１６：水の強襲！

――レッド寮から約７００メートルの位置・ＰＭ　２０：３０

ＳＩＤＥ：黎

「これで大丈夫だろう」

俺が今いるのは森から二十歩程度、奥へ歩いた場所だ。冬が近い為既に外は真っ暗。大徳寺先生に許可を貰い、破損した材質集めと偽ってこの肌寒い中表に出ている。ボランティアもやると言ってあるので、明日の朝までに帰れば問題は無いだろう。

何故嘘を吐いてまで外出するのか。その理由は至極単純、人に見られる訳にはいかないからだ。

目的は精霊界へと行く事。先日のプライドとの戦いで力不足を実感した黎は精霊界で何か新しい力かヒントを得に行くのだ。

『ダンナ、いつでも行けるぜ？』

『精神同調、安定。世界位相、リンク完了』

『それじゃ、ゲートオープンですミャー』

順に『鬼火のウィスプ』、『ボルケーノ・セラフィム』、『サニーハットキティ』が言う。地面に赤い魔法陣が現れ、外周を縁とするように淡い光の柱が立つ。どうやらこの魔法陣全体が入口のようだ。

「それじゃ、行くぞ？」
『了解』

『バーナーズ・キャノン』の返答と共に皆がデッキに集まる。全員がデッキのカードの中に入ると、それを本来の姿に戻す。
キュワワワ、とデッキが光り、赤い宝玉へと姿を変えた。

「開け、精霊界の扉……！」

ヒュオン！　という音と共に俺は光に包まれた。

――精霊界

光が止むと、周囲は一変した。
転送前は森だったが、今は赤い岩の荒れ地だ。結構暑いのは、この岩の赤さが熱を持っている事による発熱反応だからだろうか（要するに岩が赤くなるくらい暑い）。

『ここはほのおのさとのはずれですね』
「炎の里？」
『はい、なのあるほのおけいモンスターのしゅうらくです』

額の汗を拭い、身体を耐熱式に組み替えていると、『バック・ドラフトマン』が辺りを見渡し、頷きながら説明する。

「名のある炎系……。なるほど」
『にしても、誰もいないな……』

『ヴォルカニック・ギア・ガイ』が首を傾げる。確かに、文字通り人（？）っ子一人いない。

近くには壊れた『ブレイズ・キャノン―トライデント』があった。こいつは『ヴォルカニック・デビル』を呼ぶのに必要なカード。つまり少なくともここに彼がいる事は確かなようだ。

……、壊れている？　いや、壊れているのは良いんだが……。

「何だ、この壊れ方……！」

通常の経年劣化によるものでは無い。これは何者かが外部から攻撃を加えた結果による損傷の破壊だ！

よく見ると、『キャノン―トライデント』が濡れていた。

「水……？」

『それは変だな』

手で触れ、その液体が純粋な水である事が分かった。それを不審がったのは『ブレイジング・ナイト』だ。

「どういう事だ？」

『この炎の里には少量だが確かに水はある。だが、『トライデント』は壊れても非常に高い熱を持つというのに主殿は“湯”では無く“水”と言った。つまり……』

「『ブレイズ・キャノン―トライデント』が冷め切ってしまう程の、本来は無い大量の水があった」

『左様』

奇妙な話だ。

そして、もう一つ気になった事がある。

「微弱だが、何で邪神の気配がするんだ？　まだ復活してないんだろ？」

『そのハズ、なのだがな……』

都、プライドとの戦い以降、黒い気配が感じ取れるようになった。

邪神の気配だと気付くには時間は要らなかった。

顎に右手を添えて考える。分かった事は3つ。

1、ここには無い筈の大量の水。

2、不自然な壊れ方をした『ブレイズ・キャノン－トライデント』。

3、邪神の微弱な気配

この3つが導き出せる結論はただ一つ。

「急ぐぞ、皆！　邪神が人間と精霊の世界の両方を進撃して来た！」

『了解！』

再び皆を宝玉に戻し、炎の力を纏う。周囲をサーチすると、邪神の僅かな気配がとある一方だけ僅かに強い。恐らく気配の主はそっちへ向かったのだろう。

足に点火してブースターの代わりにし、飛び出そうとした時だった。

「んー、黎はてっきり手品師かと思ったんだけど……、違ったみたいだね」

『「！？」』

聞き慣れた声。半実体化した精霊と一緒に思わず振り返ると、そこにいたのは……。

「フィオ、どうしてここに……！」

「やー、あはははは……」

後頭部を掻きながらバツが悪そうに苦笑いするオベリスクブルーの少女。汗を掻いているのは暑いせいだけでは無いだろう。

友人である神山　フィオは視線を逸らしていたが、観念したのか、事情を話し始めた。

「オベリスクブルーの門限ってさ、９時なんだよ」

「知っている。レッドが８時、イエローが８時半だって事も知っている」

不公平、とは言わない。成績が悪い奴が集うのがオシリスレッドだ。他より早いのは当然だろう。

にしても、女子までそんな遅くまで許して大丈夫なのだろうか？

島とは言え孤島では無い。現に影丸理事長は空から、サイキック流は海から島にやって来た。良からぬ目的で誰かがやって来ないとは限らないのだ。

「でさ、ちょっと散歩してたんだ。

その帰りに森の中から赤い光が漏れててさ、何だろうって思って近付いたら光に包まれて……。で、気が付いたらここにいたってワケ」

それは良いんだが……。気になる事が一つある。

「何故最初から声をかけなかった？　俺は転移してから殆ど場を動いてないし、足音も聞いていない。つまり俺とお前の転移後の初期位置は大して離れていない事になる。
　この辺りに障害物は無い。つまり最初から俺が見えていたハズだが？」
「えーと、ほら、手品とかドッキリを見る時ってさ、驚かないのが鉄則じゃん？　これもてっきりそういうのかと思って……」

　しどろもどろに言うが、怪しい。
　そもそも俺の感覚器官は転送前には目一杯広げておいた。可能な限り広げれば、その感覚は1キロ先の会話をクリアに聞き取る事ができる（尤も、他の器官は潰さなくてはいけないが）。
　だというのに、俺は彼女の存在を感知できなかった。どういう事なのか説明はつかないが、とにかく奇妙だ。

　まあ良いや。今は追及している時間は無い。

「良いや。元の世界に送るから、少し待ってろ」
「待った。わたしも行くよ」

　はい？

「何か大変な事が起きてるみたいだし、わたしだって多少腕に覚えはある。デュエルだって明日香程じゃ無いけど強いし、護身術ぐらいなら身につけてるよ」
「アマい。人間の体術で相手できるか怪しいし、デュエルでどこまで通じるかも疑問だ」
「でも」
「でもじゃねぇ。ゲート開くから帰んな」

冷たい言い方だが正直な話、俺一人では彼女と自分を守りきれないだろうし、帰すのが正しい選択肢だろう。こんな所で死なれても困るし悲しい。

『あー、ダンナ？』

「何さ『ウィスプ』？」

なんとかして説得を試みていたが、『ウィスプ』に肩を叩かれ、振り向く。

『時間が無い。その娘ごと連れて行って、誰かと一緒に避難してもらおうぜ？』

言われてハッとする。確かに、この事態が今も進行しているのならば余裕は一切無い。ゲートを開くとは言ったものの、すぐに開ける訳でも無い。

……、仕方ないか。

「分かった。ただし、良いって言うまで俺の傍を離れるなよ？」

「オッケー！」

「とりあえず、お前の体に簡易的な耐熱効果を持たせる」

「オッケー、え？」

同じ調子で返したフィオ。だが、直後にＯＫを出してはいけないと悟ったのか、サッ、と青ざめ距離を若干取る。

それに構わず俺は彼女に詰め寄り、爪と髪を可能な限り細く長く伸ばす。

「れ、黎！　ちょっとタンマ！」

「待った無しだ！　自家製耐熱型体組織変形ワクチン！　注・入！」

「ひぎゃぁ！？」

プスッ！　と小さな音を立ててフィオの全身という全身に爪と髪を突き刺す。蚊の針のように細いので痛みは無い、ハズ。

「れ、黎～ッ！」

「これで2、3日は暑さに強くなったハズだ」

「乙女の体を勝手に好き勝手すんなぁっ！」

「語弊のある言い方をするな！　ほら、行くんだろ、乗れ！」

不満そうだったが、観念したらしいフィオを背中に乗せると、足元に炎を逆噴射し、バーナーの形で推進力を得る。どこへ行くべきかはおおよそ分かっている。

「しっかり捕まってろ！」

「大丈夫！」

「よし来た！」

低空飛行で気配が濃い方へと向かう。何が待っているかは分からないが、きっとその先にこの一件の鍵がある筈だ。

そして、その先に邪神に繋がる手掛かりも。行くぞ、邪神！　首洗って待ってやがれ！

――炎の集落から西へ約３００メートルの地点

飛んでいる内にだんだんと見えて来た小さな集落。そこでは悪夢のような惨劇が巻き起こっていた。

『うわあぁあああっ！』

『キャァアアアッ！』

三々五々に逃げ惑う炎の里の皆。それを嘲笑うかのように追撃を仕掛けるのは水属性モンスターだった。

『ギャハハハ、逃げ惑え！　泣き叫べ！　もっと、もっと絶望を！』
『死ねぇ！　テメェら全員ぶっ殺してやるよぉ！』

先頭で指揮を執っているのは『半魚獣・フィッシャービースト』と『水陸の帝王』だ。片や剛腕を振り回し、片や太い尾を振り回している。その他には『軍隊ピラニア』や『海賊船スカルブラッド号』が逃げ遅れた精霊を襲っている。

今のところは『炎獄魔人ヘル・バーナー』や『絶対服従魔人』といった強豪が反撃したり攻撃を防いだりしているが、全員異常な程に弱っている。今も『タイラント・ドラゴン』が地にゆっくりと倒れ伏した。

水陸の帝王（通常モンスター）
星5
水属性／爬虫類族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１５００
大きな口から四方八方に炎をはく、爬虫類のばけもの。

半魚獣・フィッシャービースト（通常モンスター）

星６
水属性／魚族
ＡＴＫ　２４００／ＤＥＦ　２０００
陸では獣のように、海では魚のように素早く攻撃する。

軍隊ピラニア（効果モンスター）
星２
水属性／魚族
ＡＴＫ　８００ＤＥＦ　２００
このカードが相手プレイヤーへの直接攻撃で与える戦闘ダメージは倍になる。

海賊船スカルブラッド号（通常モンスター）
星４
水属性／戦士族
ＡＴＫ　１６００／ＤＥＦ　９００
船首に赤い骸骨をかたどった海賊船。
あらゆる海域に神出鬼没に現れ、旅客船や貨物船を襲撃する。

炎獄魔人ヘル・バーナー（効果モンスター）
星６

炎属性／悪魔族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　１８００
このカードを除く自分の手札を全て墓地に捨て、さらに自分フィールド上の攻撃力２０００以上のモンスター１体を生け贄に捧げなければ通常召喚できない。
相手フィールド上モンスター１体につきこのカードの攻撃力は２００ポイントアップする。
このカード以外の自分フィールド上のモンスター１体につき、このカードの攻撃力は５００ポイントダウンする。

タイラント・ドラゴン（効果モンスター）
星８
炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２９００／ＤＥＦ　２５００
相手フィールドにモンスターが存在する場合、このカードはバトルフェイズ中にもう１度だけ攻撃する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードを対象にする罠カードの効果を無効にし破壊する。
このカードを他のカードの効果によって墓地から特殊召喚する場合、そのプレイヤーは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター１体をリリースしなければならない。

絶対服従魔人（効果モンスター）
星１０

炎属性／悪魔族
ＡＴＫ　３５００／ＤＥＦ　３０００
自分フィールド上にこのカードだけしかなく、手札が０枚でなければこのカードは攻撃できない。
このカードが破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

「ヒドい……」

背中でフィオが呟く。まだあそこまで距離（ざっと３００メートル）があるのに、よく見えたな。

「うわっ！」
『ゲヒヒヒヒ！』

遠くで『逆巻く炎の精霊』が『レクンガ』の触手によって転ばされる。まずい、非力な攻撃力である彼には『レクンガ』のような下位中級アタッカーですら脅威だ。
あの『レクンガ』の振り上げた触手が、彼にとってどれ程の凶器か……！

逆巻く炎の精霊（効果モンスター）
星３
炎属性／炎族
ＡＴＫ　１００／ＤＥＦ　２００

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
直接攻撃に成功する度にこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。

レクンガ（効果モンスター）
星４
水属性／植物族
ＡＴＫ　１７００／ＤＥＦ　５００
自分の墓地の水属性モンスター２体をゲームから除外する度に、自分フィールド上に「レクンガトークン」（植物族・水・星２・攻／守７００）を１体攻撃表示で特殊召喚する。

『ギヘヘェエエエッ！』
「うわぁあああん！　パパ、ママァ！」

音を立てて振り下ろされる触手。泣き叫ぶ『逆巻く炎の精霊』。
させるか！

「『くず鉄のかかし』！」

ガギン！

間一髪、ディスクにセットした『くず鉄のかかし』が『レクンガ』の攻撃をガード。俺が到着するまで時間にして僅か数秒間に合わな

かったが、どうにかなったようだ。
　にしても、勘が当たって良かった。カードが全て実体化する世界だからこそ成し得た荒業だ。

「ぼうや、大丈夫かい！？」
「早く逃げた方が良いよ！」
「あ、はい！」

　ピューッ、と駆け足で逃げて行く。おお、早い。達者でなー。

「にしても、もう順応したのか、フィオ」
「否定していても仕方ないよ。非日常ってのは受け入れて乗り越えないと、あっと言う間に呑み込まれてジ・エンドさ」

　逞しいな。
　他の水属性モンスター達は俺の登場に警戒しているのか、炎の民への攻撃を中断。その隙に炎の民は逃げ切ったらしく、もう炎属性モンスターは殆ど見当たらない。
　倒れていた『タイラント・ドラゴン』は『絶対服従魔人』が運んだらしく、遠くに赤い巨体が巨竜を担いで走っているのが見えた。

『グルァアアアッ！』
「さぁ、お前の罪を数えろ……」

　フィオが背後で「それなんて仮面ラ〇ダー？」と言っていたが、気にしない。実際このセリフが合いそうなくらい俺は怒っている。

『ジェエイヤァアアアッ！』

　奇声と共に『レクンガ』が触手を俺に向けて伸ばす。

アマい。軌道ぐらい読めている。

（前方から2本、左右から1本ずつ、上から3本。だが本命は土の中を通る残る4本。

全て俺の今いる座標を目掛けて放たれている。ならば！）

触手の数ぐらい対面すれば分かる。真ん中を突っ切り、剥き出しの目玉に蹴りをプレゼントだ！

俺の蹴りにワンテンポ遅れて触手が俺が一秒前までいた場所を攻撃する。

「おらよっ！」

『ギギュウッ！』

派手に『レクンガ』は吹っ飛ばされ、地面に倒れてノビた。

「さて、次はどいつだ？」

「この小僧！」

「ブチ殺ス！」

「ザケんな！」

俺の挑発に青い熊の『グリズリーマザー』、槍を持った半魚人『ニードル・ギルマン』、骨っぽいどちらかと言うとマグロのような特徴の『深海王（しんかいおう）デビルシャーク』が乗り、憤りを露わに爪や牙で襲いかかって来た。

グリズリーマザー（効果モンスター）
星４
水属性／獣戦士族
ＡＴＫ　１４００／ＤＥＦ　１０００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスター１体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

ニードル・ギルマン（効果モンスター）
星３
水属性／海竜族
ＡＴＫ　１３００／ＤＥＦ　０
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する魚族・海竜族・水族モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。

深海王デビルシャーク（効果モンスター）
星４
水属性／魚族
ＡＴＫ　１７００／ＤＥＦ　６００
このカードは１ターンに１度だけ、対象を指定しないカードの効果では破壊されない。

ヒュッ、と息を吐き、迎撃の構えを取る。隙だらけだ。山で相対した熊の方がよっぽど強かったぜ？

「おらっ！」
「ぐあっ！」

一番手の『グリズリーマザー』は爪を潜って顎を殴り、

「はっ！」
「ゲブッ！」

二番手の『ギルマン』の槍を鋼質化した腕で受け止めて脇腹を蹴り飛ばし、

「せいやぁっ！」
「アブがっ！」

三番手の『デビルシャーク』は浮いている所を下から鉄の棍で突き上げる。

ちなみにコイツに見られる特徴はマグロのような遊泳魚に見られるモノらしく、鮫に近い特徴は見受けられないらしい。

ドサドサドサ、と急所を突かれて3体が倒れる。

「次は、どいつだ」

ザワ、と殺気立つ。数にして５０前後。俺の敵じゃない。

この程度、あのプロボクサー崩れ十人との地下デスマッチに比べたらなんて事無い。殺気も微風程度にしか思えないな。

ま、正直フィオの護身術も大したモンだ。飛びかかって来る敵を片っ端から投げて殴って絞めて蹴り飛ばしている。無駄な動きを削いだ良い動きだ。男子より体力面で劣り易い女子が戦う事を想定した戦い方であると言える。

ジャリ、と誰かが地を踏みしめた。来るか？

そう思った時だった。

「待てや」

「その場で待機だ」

奥からやって来たのは戦闘指揮を執っていた『フィッシャービースト』と『水陸の帝王』だ。

他のザコとは違ってしっかりとした気迫を感じる。

「へぇ、ようやくボスのお出ましか」

「ザコの相手も疲れたしね」

余裕の笑みを浮かべる俺。そして飄々とした物言いのフィオ。

「けっ、良い腕してんじゃねぇか」

「リアルファイト、デュエル。両方とも相当の使い手だとお見受けした」

キュイィィン、と『フィッシャービースト』の腕にディスクが装着された。『水陸の帝王』は腕が無いので装着できない。きっと半透明のカードが展開したり、石板が降って来たりして戦うのだろう。

「デュエル、か？」
「おーよ！　力在る者はデュエルも強いってのが精霊界（コッチ）の常識でな！」
「力と知能、双方を兼ね揃えてこそ、真の猛者なのだ」
ふーん、成程。そう言えば、随分と昔からデュエルモンスターズは存在していたらしいね。宇宙の始まりは1枚のカードだって、ダークネスも言っていたし。
どうやら精霊は人間よりも昔から生きていたのかも知れない。
それはさて置き。
「了解だ。だが、時間が無い。二人纏めて相手してや「待った！」る……、フィオ？」
ディスクを展開。時間短縮を目論んで2対1をやろうとした俺にストップをかけたフィオ。何を……？
「キミはこの後も戦うんだろう？　だったら少しでも体力を残した方が良い。
折角のボス戦も、ピンチのまま迎えたらボコられて終わりだよ」
例えがゲームっぽいが、どうやら片方を引き受けてくれるらしい。
成程、彼女の言う事も最もだ。ラストの相手はこいつらじゃ無い。
ここで体力使い切ったらアウト。
「分かった。片っぽ頼む」
「オッケイ！　『水陸の帝王』、アンタの相手はわたしだ！」
「てこたぁ、俺の相手はテメェか、『半魚獣・フィッシャービースト』！」

「少女とはいえ、容赦はせぬ！」
「叩き潰してやるよぉ！」

俺と『フィッシャービースト』が戦った後、フィオが『水陸の帝王』とやる事になった。あまり大きな通りがある村では無いし、まだ逃げ遅れた奴がいる可能性も考慮してこいつらから目を離すワケにもいかない。
ガシャン、とディスクをセットし、フィオと『水陸の帝王』から距離を取る。二人から十分に離れたら、スタートだ。

「行くぞ！」
「来いやぁ！」

『デュエル！』

黎ＶＳ半魚獣・フィッシャービースト
ＬＰ　４０００　ＶＳ　ＬＰ　４０００

「俺のターン、ドロー！」

手札は悪くない。次のターンの反撃で大きくライフを削れるか、否か。そこが最初の勝負だな。

「モンスターを守備表示で召喚！」

バチバチッ、と電子音と共に裏側表示でモンスターが現れる。

「更にカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

黎：：ＬＰ　４０００
手札：：３枚
フィールド
：：セットモンスター１体
：：伏せカード２枚

「おれのターン！　フン、いきなり3枚も伏せるとはな！」

うっせぇ、ほっとけ。
つーか、それはそれだけ警戒するべきカードが増えたって事だぞ？　分かってんのか、コイツ？

「魔法カード『強欲な壺』！　更に『古のルール』を発動！　おれは手札の『コスモクイーン』を特殊召喚！」
『はぁあああああっ！』

古のルール
【通常魔法】
自分の手札からレベル５以上の通常モンスター１体を特殊召喚する。

コスモクイーン（通常モンスター）
星８
闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２９００／ＤＥＦ　２４５０
宇宙に存在する、全ての星を統治しているという女王。

コスモクイーン：ＡＴＫ　２９００

む、良いモンスターだ。通常モンスターだが、闇属性で魔法使い族。サポートカードは豊富にある。

「更に、『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」
『グウェエエエアッ！』

ゴブリン突撃部隊（効果モンスター）
星４
地属性／戦士族
ＡＴＫ　２３００／ＤＥＦ　０
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示にな

り、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

ゴブリン突撃部隊：ＡＴＫ　２３００

次は初代デメリットアタッカーか。当時は革新的だーなんて騒いでたなぁ。

でも、毎度毎度カードのイラストじゃあロクな目に合って無いんだよな、こいつら。完全にやられ役ってヤツ。

「まずは、『ゴブリン突撃部隊』でセットモンスターを攻撃！　“パワーブロー”？」

ブンブンブン！　と三連続で鉄の棍棒が振るわれる。しかしそれは、ヘリポートによって受け止められた。

「生憎、『マッシブ・ウォリアー』はその程度じゃあやられないんでね！」

マッシブ・ウォリアー（効果モンスター）
星２
地属性／戦士族
ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　１２００

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。
このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

マッシブ・ウォリアー：ＤＥＦ　１２００

「更に攻撃を行った事で、『突撃部隊』は守備表示になる！」

元の場に戻った『突撃部隊』はそれぞれの武器を斜に構えて低姿勢になるように屈む。

ゴブリン突撃部隊：ＡＴＫ　２３００→ＤＥＦ　０

「破壊に耐性を持つモンスターか！　ならば『コスモクイーン』で追加攻撃！　“コズミック・ノヴァ”？」

ギュォオオオオオ！　と闇の粒子が集まり球体を作る。そしてそれは野球のボールのように放たれた。はっ、通すかよ、そんな攻撃！

「リバースカードオープン、『くず鉄のかかし』！　1度だけ相手の攻撃を防ぎ、フィールドに再度セットする！」

毎度御馴染みくず鉄先生のご登場です。今回もバリアを張ってエ

ネルギー弾を弾くという名に恥じぬ良い働きです。
ちなみに間違っても『突撃部隊』の方に『くず鉄のかかし』を使ってはいけない。攻撃そのものを無効化してしまうので、守備表示にならないのだ。
攻撃力２３００の壁は意外と七面倒臭い。相手にダメージを１ポイントでも多く与えたいのならともかく、基本この手のデメリットアタッカーの攻撃は受けて反撃に繋げるのが定石だ。

「チィッ！　１枚カードをセットし、ターン終了だ！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　４０００
手札：３枚
フィールド
：コスモクイーン（ＡＴＫ　２９００）、ゴブリン突撃部隊（ＡＴＫ　２３００）
：伏せカード１枚

「俺のターンだ。ドロー！」

さて、あの伏せカードは何だろうか。攻撃を封じたり、対象を変更したりするカードならまだしも、入学実技のあれだと厄介だ。今手札にいるこいつの攻撃力は奴のモンスターの攻撃力を下回る。
チッ、普段なら下位上級アタッカーとして活躍できるってのに。
ここは、もっと後で出す予定だったこいつに出てもらうか。

「俺は『マッド・デーモン』を召喚！」
『グルァアアアッ！』

マッド・デーモン（効果モンスター）
星４
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　０
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、このカードの表示形式を守備表示にする。

マッド・デーモン：ＡＴＫ　１８００

肩に牛の頭骨、腹に大きく開いた口を持つガリガリの悪魔がニヤニヤ笑いながら現れる。

「『マッド・デーモン』は貫通効果を持つ！
行くぞ！　『マッド・デーモン』で『ゴブリン突撃部隊』を攻撃！　“ボーン・スプラッシュ”？」
『グィイヤァアアアアアッ！』

腹の口で中の人間の頭蓋骨をバリバリと噛み砕き、その破片をバババッ！　と吐き出す。小さい子が見たら怖がりそうだな、この攻撃方法。

「永続罠発動！　『最終突撃命令』！」

「ッ、やはり伏せていたか！」

低レベルデメリットアタッカーの大抵は攻撃後に守備表示になる効果を持つ。逆を言うと守備表示を封じてやればデメリットは消滅する。

最終突撃命令
【永続罠】
このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

ゴブリン突撃部隊：ＤＥＦ　０→ＡＴＫ　２３００
マッシブ・ウォリアー：ＤＥＦ　１２００→ＡＴＫ　６００

「ならばチェーンして速攻魔法『突進』をオープン！　『マッド・デーモン』の攻撃力を７００ポイント上げる！」

「何！？」

突進
【速攻魔法】
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで７００ポイントアップする。

マッド・デーモン：ＡＴＫ　１８００→２５００

骨片を撃ち返そうとする『突撃部隊』だったが、欠片の量が突如として増加し、全員に突き刺さった。

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　４０００→３８００

「ぐぁあああっ！」
「やった！　黎が先制した！」
「1枚カードを伏せ、ターンエンドだ」

黎：ＬＰ　４０００
手札：２枚
フィールド
：マッド・デーモン（ＡＴＫ　１８００）、マッシブ・ウォリアー（ＡＴＫ　６００）
：伏せカード２枚（内１枚は『くず鉄のかかし』）

「ナメるな！　おれのターン！　『死者への供物』を発動！　次のドローフェイズをコストに『マッシブ・ウォリアー』を破壊！」

っちゃ、頼もしい壁モンスターが……。ダメージまで無くしてくれるから結構期待していたんだが……。

死者への供物
【速攻魔法】
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する。
次の自分のドローフェイズをスキップする。

さて、『マッド・デーモン』は自力で守備表示になれる攻防兼ね揃えた優秀な貫通アタッカーだ。だが、この状況下では守備表示になってもすぐに攻撃表示に戻されてしまう。さて、どう転ぶか……。

「『スピア・ドラゴン』を召喚！」
『クキョォオオオッ！』

スピア・ドラゴン（効果モンスター）
星４
風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１９００／ＤＥＦ　０
守備表示モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。
このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

スピア・ドラゴン：ＡＴＫ　１９００

またデメリットアタッカー！？
こいつのデッキはデメリットアタッカーのビートダウンか？　だが、それだと『コスモクイーン』は何なのだろうか？
……、ゴチャゴチャ考えていても仕方ないか。まだ始まってから４ターン目だ。

「『スピア・ドラゴン』で『マッド・デーモン』を攻撃ぃ！」
「悪いが読んでいる！　罠カード『ヘイト・バスター』を発動！

こいつは俺の場の攻撃対象となった悪魔族モンスターと攻撃を行う相手モンスターを破壊し、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「んだとぉ！？」

ヘイト・バスター

【通常罠】

自分フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。

相手の攻撃モンスター１体と、攻撃対象となった自分モンスター１体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

赤く発光した『マッド・デーモン』が『スピア・ドラゴン』を巻き込んで爆発。こちら側は『マッド・デーモン』の張ってくれたバリアのお陰で爆風に巻き込まれずに済んだが、当然相手はモロに喰らう。

「ぬぁあああああっ！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　３８００→１９００

「凄いじゃないか、黎！」
「ザマねぇなぁ！　もうライフが半分切ったぞ！」
「う、うるせぇ！　『コスモクイーン』でダイレクトアタックだ！」

ふふ、こいつは焦ってるな、確実に。
『マッド・デーモン』は必ず守備表示になってしまい、その守備力は0。だからこうして自分のモンスターごと破壊してしまう『ヘイト・バスター』と組み合わせる事で更なるダメージを相手に与える戦法が有効なのだ。
悪魔族に破壊のデメリットを回避できたり、破壊された方が好都合だったりするモンスターはそこまで多くない。自分のカードの方が相手より多く墓地に送られてしまうカードはデュエリストの腕が試される。

「『くず鉄のかかし』！」
「しまった、また……！」

再び闇のエネルギー弾を弾く金属製の案山子。やー優秀だね、本当に。
また俺のターンかと思った時だった。

バギィイイイイイイイン！

「は！？」

エネルギー弾の消滅と同時に案山子が砕け散ったのだ。一陣の旋風が後に残った土台を掻っ攫って行く。

「『サイクロン』！？」
「ハズレだァ！」

そう答える『半魚獣・フィッシャービースト』は先刻と比べて何か様子がおかしかった。
なんだ、あの黒い模様……？

「速攻魔法『邪神に渦巻く風』！　このターン、モンスターの攻撃を無効化された場合、カードを1枚破壊して攻撃を無効化されたモンスターはもう1度攻撃できる！」

邪神のカード！？　やはり、こいつらも何か持っているんじゃないかと薄々予想はしていたが……！

邪神に渦巻く風（オリジナル）
【速攻魔法】
自分フィールド上の攻撃が相手のカードによって無効にされたモンスター1体を指定して発動する。
相手の場のカードを1枚破壊する。
攻撃を無効にされたモンスターはこのターンもう1度バトルを行える。

「したがってもう1度攻撃！　“コズミック・ノヴァ”？」
「ぐぁあああああああああっ！」

黎：ＬＰ　４０００→１１００

「黎！」
「動くなァ！」

吹き飛ばされた俺に駆け寄ろうとしたフィオに、同じく様子の変化した『水陸の帝王』がグオン！　と尾を振り降ろす。くっ、吹っ飛んで距離が開いている所為で助けに行けない！

「フィオオオオオッ！」

『危ない、マスター！』

それを突き飛ばして回避させたのは、光と共に現れた一人の少女だった。

青いショートカット、チアガールのような衣装。小顔だが、整っている顔立ち。そうか、この少女は……！

「助けてくれてありがとう、なんだけど……、キミは……？」

「お前の精霊だよ、フィオ。『勝利の導き手フレイヤ』の、な」
「初めまして、マスター」

ニコッ、と笑う『フレイヤ』。

「うん、よろしく！」
「『フレイヤ』、フィオを頼む」
「はい！　マスターには傷一つ付けさせません！」

キュィイイイン、と青くマーブル模様に光る結界が張られる。
『水陸の帝王』はそれに噛み付いたり尾を叩きつけたりしているが、ビクともしない。やはり精霊の力は攻撃力が全てでは無いようだ。
ゴシッ、と口元の少量の血を拭う。
何故だか体の底から力が湧いてくる。これが何なのかは分からないが、今ならこの程度の奴に負ける気はしねぇ！

「続けようぜ、『フィッシャービースト』。全力で叩き潰してやる！」
「返り討ちだァ！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ１６：水の強襲！（後書き）

黎「半魚ヤロウとのデュエル、奇妙なカードで場の流れを変えられたが、その程度で揺らぐ程俺はヤワじゃない」

フィオ「反撃に使うのは……、機械族モンスター？」

黎「未完成だが、この程度のヤツには十分だ！」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１７：「我は未来を渇望せし者」』！　ヒントは対ワーム系のモンスター！」

黎「バレる……、かな？」

フィオ「さあ、どーだろ？」

＜おまけ劇場！＞

黎「汚名挽回、という風に間違った使い方をする輩がいる」

都「挽回しちゃダメだもんね。正しくは返上！」

フィオ「流石はＩＱ１４０とＩＱ２２０。この程度は役不足だね」

黎「役不足は自分の力量に対し、行う役の地位が低い場合を指す」

都「力不足と間違えないように！」

フィオ「じゃあ訂正するよ、この程度じゃ力不足だね！」

黎「いやそういう意味では……」

フィオ「ツーン。わたしは構ってくれない人には冷たくするんだ！」

黎・都『ごめんなさい……』

ＳＴＯＲＹ１７：「我は未来を渇望せし者」（前書き）

フィッシャービースト戦、決着！

黎「猛攻撃を耐え忍び、果たして俺は勝てるのか！」

フィオ「じゃ、スタート！」

＜今回の注目カード＞

都・フィオ『なっにかな～、なぁにかな～？　今回は、コレ！』

レアル・ジェネクス・クロキシアン
シンクロ・効果モンスター
星９／闇属性／機械族／攻２５００／守２０００
「ジェネクス」と名のついたチューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するレベルが一番高いモンスター１体のコントロールを得る。

都「コントロール奪取のシンクロモンスターだね！」

フィオ「縛りは辛いし能力も低めだね……」

都「その分効果は強力！　相手モンスターをガンガン奪っていこう！　『シンクロキャンセル』と組み合わせれば一気に場を制圧できたり！」

フィオ「何があってもコントロールが戻らないのも長所だね。裏側表示は対象にできないけど……。『レベル・スティーラー』や『A・ジェネクス・バードマン』と組み合わせて使うのがオススメ！」

ＳＴＯＲＹ１７：「我は未来を渇望せし者」

黎：ＬＰ　１１００
手札：２枚
フィールド
：モンスター無し
：魔法・罠無し

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１９００
手札：１枚
フィールド
：コスモクイーン（ＡＴＫ　２９００）
：最終突撃命令（永続罠）

ＳＩＤＥ：黎

さて、どうしたモンか。闘志はメラメラと燃えてはいるが、それでどうにかなるんだったらデュエルは苦労しない。ライフもフィールドもアドバンテージを取っているのは相手だ。手札は辛うじてこちらが上だが、それがたった１枚じゃあ雀の涙と形容されても文句の言いようも無い。

「おれの最後の手札はモンスターカードだ。ターン終了」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１９００
手札：１枚
フィールド
：コスモクイーン（ＡＴＫ　２９００）
：最終突撃命令（永続罠）

『最終突撃命令』をどうにかしたいが、まだ除去系のカードは来ていない。次のドローで何を引くかが勝負だ。

「俺のターン！」

引いたカードは……、『強欲な壺』！

「魔法カード『強欲な壺』を発動！　この効果でカードを2枚ドロー！」

お、良いカードが来た！
ダメージ防御とライフ回復か。

「俺は『ジェネクス・ニュートロン』を召喚！」

ジェネクス・ニュートロン：ＡＴＫ　１８００

「更にカードを2枚伏せ、このエンドフェイズに『ジェネクス・ニュートロン』の効果でデッキから機械族のチューナーを手札に加える」

ジェネクス・ニュートロン（効果モンスター）
星4
光属性／機械族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１２００
このカードが召喚に成功した場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分のデッキから機械族のチューナー1体を手札に加える事ができる。

「これでターンエンド」

黎：ＬＰ　１１００
手札：2枚

フィールド
‥ジェネクス・ニュートロン（ＡＴＫ　１８００）
‥伏せカード２枚

アニメなんかじゃライフが３ケタになると主人公勢は鉄壁のライフスキルを発動していたな。後少しなのにライフを削れなかったり、回復されたりといったものだ。
が、俺にそんな便利機能は無い。そもそも今の俺のライフは４ケタ、条件には合わない。

「おれのターン。『死者への供物』の効果でドローはできない」

にしても、さっきから『フィッシャービースト』と『水陸の帝王』の様子がおかしい。黒いオーラのようなものを出し、目も本来の色から漆黒の闇のような色になっている。おまけに体の黒い唐草模様。邪神の気配はしないし、あれは一体何なんだ……？

「『不屈闘士レイレイ』を召喚！」
『うぉおおおおおおっ！』

まだ出て来るのか、デメリットアタッカー。
この状況下では結構な脅威だな。

「『レイレイ』で『ジェネクス・ニュートロン』を攻撃！」
『ウホッ！　ウホウホウホ、ウッホーンッ！』

なんかあの声嫌だな。俺ＢＬは苦手なんだよ……。

って違う！　そんな事を言っている場合じゃ無い！

「罠発動『ガード・ブロック』！　発生した戦闘ダメージを1回だけ0にしてカードを1枚ドロー！」

『レイレイ』の張り手が黒いアンドロイドを破壊し、その破片が俺に降り注ぐ。が、バリアが現れてそれを防いだ。

ガード・ブロック
【通常罠】
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「『コスモクイーン』で直接攻撃！　“コズミック・ノヴァ”？」
「罠発動『レインボー・ライフ』！　手札を1枚捨て、このターンに発生するダメージを全て回復に変更する！」

黒いエネルギー弾が放たれると同時に虹色の障壁が出現。障壁を通過したエネルギー弾は虹色の粒子に変わり、俺の体を癒していった。

レインボー・ライフ
【通常罠】
手札を1枚捨てる。
このターンのエンドフェイズ時まで、自分が受けるダメージは無効になり、その数値分ライフポイントを回復する。

黎：ＬＰ　１１００→４０００

「くぐぅっ！　ターン終了！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１９００
手札：０枚
フィールド
：コスモクイーン（ＡＴＫ　２９００）、不屈闘士レイレイ（ＡＴＫ　２３００）
：最終突撃命令（永続罠）

「俺のターン！　『ロックストーン・ウォリアー』を召喚！」

大きな岩石が現れて浮かび上がると、腕、足、頭が生えて人型になった。四肢と頭を胴にめり込ませるように固まっていたのか。

ロックストーン・ウォリアー（効果モンスター）
星４
地属性／岩石族
ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　１６００
このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
このカードの攻撃によってこのカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上に「ロックストーン・トークン」（岩石族・地・星１・攻／守０）２体を特殊召喚する。
このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

「ターンエンド」

引いたカードはこの好カードだった。そして残った手札で考えれば、次のターンに引き当てるカードがモンスターなら形勢は逆転。魔法や罠なら大ピンチ。
……、なんか俺、こういった運任せ多くないか？　その内ズバッ！　とやられそうだ。

黎：ＬＰ　４０００
手札：２枚
フィールド
：ロックストーン・ウォリアー（ＡＴＫ　１８００）
：魔法・罠無し

「おれのターン！」

どう来る！？　さあどう来る！

「魔法カード『壺の中の魔術書』を発動！　互いにカードを３枚ドロー！」

奴の手札はこれで４枚。恐らく、相手にもアドバンテージを与える事を差し引いても手札の増強をしたいのだろう。
そして奴の表情……。来る、このターンに決めにかかりに！

壺の中の魔術書（マンガオリジナル）
【通常魔法】
お互いのプレイヤーはデッキからカードを３枚ドローする。

「永続魔法『絶対魔法禁止区域』を発動！
そして手札から2枚目の『古のルール』を発動！　今回はおれ自身を選択し、折角なのでおれが場に出よう！」

ザッザッ、と水かきのついた足で他のモンスターの横に並ぶ。
んー、ステータスはそこそこなんだが、イマイチなんだよなぁ、『フィッシャービースト』って。

半魚獣・フィッシャービースト：ＡＴＫ　２４００

「そして『ゴブリンエリート部隊』を召喚！」

ゴブリンエリート部隊（効果モンスター）
星４
地属性／悪魔族
ＡＴＫ　２２００／ＤＥＦ　１５００
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。
次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

ゴブリンエリート部隊：ＡＴＫ　２２００

絶対魔法禁止区域
【永続魔法】
フィールド上に表側表示で存在する全ての効果モンスター以外のモンスターは魔法の効果を受けない。

出たか、デメリットアタッカーのキーカード！　並みのモンスターやリクルーター、ガジェット系じゃ歯が立たない守備力という低デメリットを持つパワーアタッカー！

成程な。恐らくこいつのデッキはデメリットアタッカーと上級モンスターを組み合わせたハイパワーな混成式のビートダウン。デメリットアタッカーの守備表示は『最終突撃命令』で潰し、上級モンスターを通常モンスターで固めて『絶対魔法禁止区域』で魔法カードから守る。

召喚は『古のルール』のような補助カードで行い、恐らくいざとなれば『血の代償』のようなカードでサクリファイス・エスケープ（今はリリース・エスケープ）を行うのだろう。

血の代償
【永続罠】

５００ライフポイントを払う事で、モンスター１体を通常召喚する。
この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

「おら行くぞ！　『突撃部隊』でその岩の塊を攻撃！」

また振り上げられる鉄の棍棒。それは『ロックストーン・ウォリアー』を粉々に砕くと、そのまま俺に向けて投擲された。
が、それは届く事無く、無数に現れた岩の破片の壁が弾いた。

「『ロックストーン・ウォリアー』との戦闘では俺にダメージは発生しない！」
「ならばやれ、『コスモクイーン』！　“コズミック・ノヴァ”？」

そう、相手の場がガラ空きなら直接攻撃を仕掛ける。間違いじゃ無い。
でも、対策が場にあるとは限らないぜ！

「その攻撃、『速攻のかかし』で受け止める！」

速攻のかかし（効果モンスター）
星１
地属性／機械族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

手札の1枚を切って墓地に送ると、機械仕掛けの案山子がブースターを点火させて俺の前面に飛び出す。闇のエネルギー弾をその身で受け切って弾き飛ばすと、そのままフェードアウトした。

「ンギィッ！」

悔しそうに『フィッシャービースト』が地団太を踏む。
それを見て内心でほくそ笑む。あいつがデメリット覚悟で俺に引かせた3枚のカードはしっかりと俺に逆転の手を与えてくれたのだから。

『死者蘇生』
『早すぎた埋葬』
『パワー・ジャイアント』

「さあ、どうする？　手札はゼロ、もう攻撃もできないが？」
「クッ、ソォオオオオオオオオッ！　ターン終了だ！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１９００
手札：０枚

フィールド
：コスモクイーン（ＡＴＫ　２９００）、ゴブリンエリート部隊（ＡＴＫ　２２００）、半魚獣・フィッシャービースト（ＡＴＫ　２４００）、不屈闘士レイレイ（ＡＴＫ　２３００）
：最終突撃命令（永続罠）、絶対魔法禁止区域（永続魔法）

「だが、この状況を逆転できるものか！　貴様の場にはカードの１枚も無い！　上級モンスターを出そうとも、１ターンじゃゲームセットにはならねぇ！」
「それはどうかな。俺のターン、ドロー！」

『貪欲な壺』！　おっしゃ、最高の一手（ディスティニードロー）！

「相手の場にモンスターが存在し、自分の場には存在しない時、手札のチューナーモンスター『アンノウン・シンクロン』は特殊召喚できる！　ただし、この効果は１度しか使えない」
『ピピピピィ！』

機械の球体に赤い目、二本の触覚が生えた『シンクロン』が現れる。
こいつは『ジェネクス・ニュートロン』でサーチしたカードだ。

アンノウン・シンクロン（チューナー・効果モンスター）
星１

闇属性／機械族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
「アンノウン・シンクロン」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

アンノウン・シンクロン：ＡＴＫ　０

「魔法カード『死者蘇生』を発動！　甦れ、『マッド・デーモン』！」
『ゲェヤァアアアアアッ！』

マッド・デーモン：ＡＴＫ　１８００

さて、行くぜ！

「レベル４の『マッド・デーモン』にレベル１の『アンノウン・シンクロン』をチューニング！」

『アンノウン・シンクロン』が空中に飛び上がって光の星になると、その星は円を描いて緑の幾何学的なサークルを生み出した。
そしてそのサークルの中へ『マッド・デーモン』が入り、４つの

光る星になる。

「我は未来を渇望せし者！　巨蟲の進行阻みし戦士、闇の正義の威を示さん！　希望が溢れる明日となれ！」

サークルの内側を埋めるように光の柱が生まれ、そこから1体のモンスターが飛び出した。

☆4＋☆1＝☆5

「シンクロ召喚！　破滅の浄化、『A・O・J（アーリー・オブ・ジャスティス）カタストル』？」

『キィアアアアアアアアアアアアアッ！』

A・O・J　カタストル（シンクロ・効果モンスター）
星5
闇属性／機械族
ATK　2200／DEF　1200
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

A・O・J　カタストル：ATK　2200

白いボディ、カマキリのような出で立ち、節足動物のような足に頭の奇妙なモニュメント。使用頻度の高い【剣闘獣（グラディアルビースト）】や【ライトロード】相手に強い力を発揮するモンスターだ。

「それが噂のシンクロか……！」

「黎、そのデッキは炎の精霊のものじゃ無い？」

「今頃気がついたか」

そう、あれから色々とカードを工面したりして新しいデッキを作り上げたのだ。これは生前自分自身が使っていたデッキの内の1つ、【ジェネクス】にジャックや遊星のカードを加えたものだ。

「そして『貪欲な壺』を発動！　墓地のモンスター5体をデッキに戻し、カードを2枚ドロー！」

墓地に手をかざし、出て来た『マッド・デーモン』、『アンノウン・シンクロン』、『マッシブ・ウォリアー』、『ロックストーン・ウォリアー』、『速攻のかかし』を手に取ってデッキに混ぜる。

引いたカードは……。

『レベル・スティーラー』

『ジェネクス・コントローラー』

マジでディスティニー！

「『パワー・ジャイアント』は手札のレベル4以下のモンスターを墓地に送り、送ったモンスターのレベル分、自身のレベルを下げる

事で特殊召喚できる！
『レベル・スティーラー』を墓地に送って特殊召喚！」
『ゴォオオオオオオッ！』

パワー・ジャイアント（効果モンスター）
星６
地属性／岩石族
ＡＴＫ　２２００／ＤＥＦ　０
このカードは手札からレベル４以下のモンスター１体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚した場合、手札から墓地へ送ったモンスターのレベルの数だけこのカードのレベルを下げる。
また、このカードが戦闘を行う場合、そのダメージステップ終了時まで自分が受ける効果ダメージは０になる。

レベル・スティーラー：☆１
パワー・ジャイアント：☆６→５／ＡＴＫ　２２００

カラフルなクリスタルのゴーレムが飛び出す。赤色をベースに青や緑の水晶が体から突き出ている。

「墓地の『レベル・スティーラー』は、自分の場のレベル５以上のモンスターのレベルを１ダウンさせる事で特殊召喚できる！

『パワー・ジャイアント』のレベルを5から4に下げて特殊召喚！」

レベル・スティーラー（効果モンスター）
星1
闇属性／昆虫族
ＡＴＫ　６００／ＤＥＦ　０
このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。
このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

パワー・ジャイアント：☆5→4
レベル・スティーラー：ＡＴＫ　６００

『パワー・ジャイアント』の体をすり抜けて大きなテントウ虫が現れる。『パワー・ジャイアント』の星が『レベル・スティーラー』の中に溶け込み、その背中に星模様として浮き出た。

「そしてチューナーモンスター『ジェネクス・コントローラー』を通常召喚！」

ジェネクス・コントローラー（チューナー・通常モンスター）
星３
闇属性／機械族
ＡＴＫ　１４００／ＤＥＦ　１２００
仲間達と心を通わせる事ができる、数少ないジェネクスのひとり。
様々なエレメントの力をコントロールできるぞ。

ジェネクス・コントローラー：ＡＴＫ　１４００

「レベル５の『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』とレベル１の『レベル・スティーラー』にレベル３の『ジェネクス・コントローラー』をチューニング！」
「シンクロモンスターを！？」

驚愕するフィオ。まあ、折角出したシンクロモンスターをそのターンに内に次のシンクロ素材にするなんて、あまりやらない手法だからね。

「我は未来を渇望せし者！　巨蟲の進行阻みし戦士、輝く明日へのレールを敷かん！　希望が溢れる明日となれ！」

☆５＋☆１＋☆３＝☆９

「シンクロ召喚！　煙滅せよ、『レアル・ジェネクス・クロキシアン』？」
『ポォオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

レアル・ジェネクス・クロキシアン：ＡＴＫ　２５００

　警笛音と共に光の柱の中からレールが飛び出し、真っ黒な蒸気機関車がランプを照らしながら走って来た。モンスターゾーンに到着するとレールは消失し、ガシンガシン、と二足歩行のロボットに変形を遂げた。
　レベル９で攻撃力２５００、更にはシンクロ素材に縛りがあってはその能力値は低く感じるだろうが、その苦労に見合う良い能力を持っている。

「モンスター効果発動！　シンクロ召喚に成功した『クロキシアン』は相手の場の最もレベルの高いモンスター１体のコントロールを奪取できる！　『コスモクイーン』は貰ったぞ！」
「んだとぉ！？」

レアル・ジェネクス・クロキシアン（シンクロ・効果モンスター）
星９
闇属性／機械族
ＡＴＫ　２５００／ＤＥＦ　２０００
「ジェネクス」と名のついたチューナー＋チューナー以外の闇属性

モンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するレベルが一番高いモンスター1体のコントロールを得る。

ポォオオオオッ！　と再び警笛が鳴り響くと『クロキシアン』は機関車に変形。そのまま『コスモクイーン』の前へと走り、いつの間にか連結していた客車に『コスモクイーン』を乗せた。
そのままこちらへと走って戻り、『コスモクイーン』を降ろすと、またロボットの姿になった。
この能力は『クロキシアン』が場から離れても継続する上に、また『クロキシアン』をシンクロ召喚すれば更に奪えるというお得効果だ。ただし、効果の対象を選べないという欠点があるので注意。

「こ、『コスモクイーン』！」
「最後に魔法装備カード『早すぎた埋葬』を発動。ライフを８００支払って墓地の『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』を蘇らせる！　もう１度頼むぜ、『カトストル』！」
『キィヤァアアアアアアアッ！』

早すぎた埋葬
【装備魔法】
８００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するモンスター１体を選択して発動する。

選択したモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。
このカードが破壊された時、装備モンスターを破壊する。

黎：ＬＰ　４０００→３２００

Ａ・Ｏ・Ｊ　カトストル：ＡＴＫ　２２００

墓地が光を発してそこから飛び出す『カタストル』。一回登場しただけで墓地に送ってしまったせいか、活躍するんだという意気込みが感じられる。

「さぁて、これで布陣は整った……！」

黎のフィールド
：Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル（ＡＴＫ　２２００）、レアル・ジェネクス・クロキシアン（ＡＴＫ　２５００）、パワー・ジャイアント（ＡＴＫ　２２００）、コスモクイーン（ＡＴＫ　２９００）
：魔法・罠無し

『半魚獣・フィッシャービースト』のフィールド
：ゴブリンエリート部隊（ＡＴＫ　２２００）、不屈闘士レイレイ（ＡＴＫ　２３００）半魚獣・フィッシャービースト（ＡＴＫ　２４００）
：最終突撃命令（永続罠）、絶対魔法禁止区域（永続魔法）

「た、たった1ターンで、形勢を完全に逆転させた……」
「な、ここまで来て……」
「シンクロを、ナメるなよ……？　このターンで終わりだ、バトル！　『コスモクイーン』でお前自身を攻撃！　“コズミック・ノヴァ”？」
「グァアアアッ！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１９００→１４００

黒いエネルギー弾が筋骨隆々の半魚人を吹き飛ばす。ゴロゴロと転がり、プレイヤーが元々いた場所で止まった。

「次は『クロキシアン』で『エリート部隊』を攻撃！　“ＳＬナックル”？」
『ポォオオオオオオオオオオッ！』
「ぬぉおおおおおおおおっ！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１４００→１１００

黒煙を上げた『クロキシアン』が騎士装束のゴブリン達を纏めて殴り飛ばす。その余波が『フィッシャービースト』を襲っているハズなのに、『フィッシャービースト』はその土煙の中で笑っていた。

（しめた！　ヤツはミスを犯した！　残ったモンスターの攻撃力は両方とも２２００！　おれ自身には届かない！　このターンを凌げばまだ勝機は残っている！）

とか何とか考えているんだろうな、きっと。

悪いが、それはウチの切り札（カタストル）の力を知らないだけだ。このターンで終わる事に変わりは無い！

「更に『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』で『不屈闘士レイレイ』を攻撃！“ダーク・ポイント・レーザー”？」

「バカめ、返り討ちだ！　『不屈闘士レイレイ』、“パワー張り手”でぶちのめせ！」

『キィイイイイイイイイッ！』

『ウホァアアアアアアッ！』

黒いエネルギーを溜める『カタストル』に向けて『レイレイ』が両腕と両足を使って走り寄る。大きく空中に跳び上がってそのまま掌を叩きつけようとするが、チャージを完了させた『カタストル』がレーザーを放って『レイレイ』を撃ち抜いた。

レーザーが貫通した胸部から『レイレイ』は黒い粒子となり、消滅した。

「なんだと！？」

「悪いな、『カタストル』は闇属性以外のモンスターと殴り合った時、相手だけを破壊する効果があるんだ」
「す、すごいインチキ効果……」
「ま、負けるのか……？　このおれが……、このおれがぁ！」
「ああそうだとも！　最後だ！　『パワー・ジャイアント』でダイレクトアタック！　“クリスタル・ダスト・パンチ”？」
『ゴォオオオオオオオオオオオッ！』
「ギィヤァアアアアアアアアアッ！」

半魚獣・フィッシャービースト：ＬＰ　１１００→０

キラキラと輝きながら鉱石の拳が『フィッシャービースト』をぶっ飛ばす。派手に錐揉みしながら真上に飛ばされ、垂直に地面に落下した。
そして勝敗が決した。

黎：ＷＩＮ
半魚獣・フィッシャービースト：ＬＯＳＥ

「あれは……」

突然、倒れて動かなくなった『フィッシャービースト』の体から黒い霧が立ち上って行った。

「これは！」
「ああ！？」

そしてそれはまた『フィッシャービースト』の中に入り込もうとしている。

「させるか！」

咄嗟の判断で炎の力を行使して黒い霧を焼き払う。一瞬で霧は灰も炭も残さずに消滅した。

「黎さん、あれって……」
「分かってる」

どうやらフレイも気がついたようだ。これで、パズルのピースが1つ埋まった……。

「まさか、『フィッシャービースト』が敗れるとはな」
「黎、お疲れ様！」

白目を剥いて気絶している『半魚獣・フィッシャービースト』を端に部下に運ばせる『水陸の帝王』。
一方で解除された結界から出て来て俺に駆け寄るフィオと『フレイヤ』。ケガは無いようで何よりだ。
「フレイ、ありがとう。助かったよ」
「いーえ、これがわたくしのやるべき事ですから」

フレイ、というのは恐らく『フレイヤ』の名前だろう。安直かも知れないが、覚えやすくて助かる。

「やー、シンクロモンスターもシンクロの素材になるんだね。初めて知ったよ」
「基本、レベルの存在するモンスターなら、効果で制約がついていない限り何だって大丈夫だからな」

そっか、とフィオは納得の表情を浮かべる。うむ、理解が早くて助かる。
ザッ、と大地を踏み締めてフィオは『水陸の帝王』に向き合った。

「さて、わたしの準備は良いよ、『水陸の帝王』。次はわたし達のデュエルだ！　新しく改良したデッキの力を見せてやる！」
「良かろう！　容易く倒せるとは思わぬ事だ！」

ＳＩＤＥ：フィオ

ガシン！　とデッキをセットしたディスクが展開する。『水陸の帝王』は石板を自分の前に5枚展開した。多分あれが手札なんだろう。

デッキは見当たら無いが、こちらがデッキ切れを起こす前に勝敗を決すれば問題無い。

心臓が早鐘を打っている。緊張している……。

ふふ、わたしが緊張だなんて、珍しい。この人外のわたしが！

「フィオ」

精神を落ちつけていると、黎が話しかけてきた。

「何？　言っておくけど、わたしは引き下がるつもりは無いよ」

「違う。さっき俺のデュエルを見ていたから分かるとは思うが、このデュエルではダメージや衝撃が現実のものとなる」

それは分かっている。『コスモクイーン』の攻撃で黎は派手に吹っ飛ばされ、地面を転がった。口からは僅かだけど血を流していた。最初から普通のソリッド・ヴィジョンのデュエルだとは思っていない。

「残念ながら一対一だから助太刀はできない。だが、こいつを受け取ってくれ」

そういって黎が差し出したのは1枚の罠カードだった。

驚いた事に、今回組み直したわたしのデッキのコンセプトにピッタリのカードだった。

「良いの？」
「構わない。まだ持っているからね」
これ以上持っていても腐ってしまうだけだよ、と黎は苦笑いした。
その困ったような笑い顔にちょっぴりトキめいてしまったのは内緒だよ？
さあ、余談はこれくらいにしようか。
始めようか、決闘（デュエル）を！
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ１７：「我は未来を渇望せし者」（後書き）

無事にフィッシャービーストに勝利した黎。
続いてフィオが『水陸の帝王』に挑む！

黎「巧く使えよ……」

フィオ「大丈夫！　わたしのデッキはただの天使族デッキじゃないから！」

黎「果たして勝算はいかに！？」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１８：太陽光線』！　あれ、ネタバレ？　ま、いいや。お楽しみに！」

＜おぉぉぉぉぉぉぉぉ、まけっ＞

黎「どうでもいいが、ナシっていう方針にできねぇかね」

都「いきなりやる気ナシの宣言！？　もちょっと何かないの！？」

黎「じゃあ……、今回はお休みという方針にさせて頂けないでしょうか？」

フィオ「丁寧に言ってもダメなものはダメだよ……」

黎「どーでもいいが、もう収録終わるぞ？」

フィオ「あ、マジ？　えーと、じゃあ次回！　フィオちゃんのかちゅやくにご期待くでゃしゃい！」

都「……、後2分あるよ？」

フィオ「図ったなぁ！」

黎「ハハハハハ！　いやー、噛むとは思わなかったよ」

フィオ「うっきゃあああああっ！」

ＳＴＯＲＹ１８：太陽光線（前書き）

『フィッシャービースト』を無事に倒した黎。今度はフィオの番！

フィオ「ちょ、何この恥ずかしい役回り！」

都「役があるだけありがたいと思わないと。あたしなんて当分出番無いんだから……」

フィオ「あ、ごめ……」

＜今回の注目カード＞

黎・都『な～にかな、なーにかな？　今回はこれ！』

アテナ
効果モンスター
星７／光属性／天使族／攻２６００／守　８００
１ターンに１度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター１体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター１体を選択して特殊召喚する。
フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚され

た時、相手ライフに６００ポイントダメージを与える。

黎「天使族の主軸カードの１枚だ。蘇生とバーンを兼ね揃えた強力な１枚」

都「手札と墓地に召喚可能な天使族がいれば少なくとも１ターンに１２００ダメージが！　能力も高めなのでお得！」

黎「守備力が低い事に注意してくれ。『攻撃封じ』や『デーモン・カオス・キング』が苦手な相手だな」

都「ところでお義兄ちゃん、何でここに？」

黎「本編で戦ってるヤツは出さないんだと」

ＳＴＯＲＹ１８：太陽光線

ＳＩＤＥ：フィオ

＜神山　フィオの荒筋っ！＞

いつの間にかデュエルモンスターズの精霊界にまでやって来てしまったわたし。でもでも、そんな事を悩むより前に炎属性のモンスター達が水属性のモンスター達に襲われていた。しかもこいつら、途中から何か様子がおかしくなった。

更に更になんかわたしの精霊まで出て来ちゃった。うーん、わたしが普通の人間だったら確実に頭パンクしてたね。

あ、勿論デュエルで決着をつける事になったよ。結果はまず黎の勝利。だから次はわたしの番。さあ、行くよ！

「マスター、頑張って下さい！　わたくしは先にデッキに戻ってます！」

「うん、また後で」

『勝利の導き手フレイヤ』ことフレイ（あれ、逆？）が声援をくれて、姿が消える。きっとデッキの中のカードに戻ったんだろう。

このデッキは以前、黎と戦った時は全くの別物。元々持っていた微調整用のカードも片っ端から詰め込んで、友人の明日香達との実戦で完成したものだ。回らない時は本格的に回らないけれど、回ればどんな奴だって怖くない！

「行くぞ、『水陸の帝王』！」
「来い、少女よ！」

『デュエル！』

フィオＶＳ水陸の帝王
ＬＰ　４０００　ＶＳ　ＬＰ　４０００

「先攻は貰うよ！　わたしのターン、ドロー！」

来た来た。今回の回し方はこうなるのか。

「わたしは『豊穣のアルテミス』を守備表示で召喚！」

豊穣のアルテミス：ＤＥＦ　１７００

光の中から仮面を被った白い天使が降臨する。
え？　『アルテミス』が出て来たんだから【エンジェルパーミッション】以外に無いだろうって？

豊穣のアルテミス（効果モンスター）

星４
光属性／天使族
ＡＴＫ　１６００／ＤＥＦ　１７００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分のデッキからカードを１枚ドローする。

ふふ、アマいよ。そんな連撃で潰されやすい上に決定打に欠き易く、更にはデッキ切れを起こすかもしれないデッキじゃ無いよ。

「更にカードを3枚伏せ、ターン終了」

言ってる割には3枚も伏せているじゃないかって？　仕方ないじゃんか。

最初の手札は『アルテミス』と今伏せた罠カード3枚、残りは上級モンスターと永続魔法なんだよ。これ以外打てる手はないの。

フィオ：ＬＰ　４０００
手札：2枚
フィールド
：豊穣のアルテミス（ＤＥＦ　１７００）
：伏せカード3枚

「こちらターンだ！　ドロー！」

ドシーン！　と石板が落ちて来た。び、ビックリしたなあ。あれがドローか……。

じゃ、まずは1枚目、行きますか！

「カウンター罠『強烈なはたき落とし』を発動！　いかなる形でも相手がカードをドローした場合、引いたカード1枚を墓地に送らせる！」

「ぬっ！」

ガラガラ、と石板が崩れる。あれで墓地に送った事になるんだね。

崩れたカードは……、『ブルーサンダーT45』か。

強烈なはたき落とし
【カウンター罠】
相手がデッキからカードを手札に加えた時に発動する事ができる。
相手は手札に加えたカード1枚をそのまま墓地へ捨てる。

「更に『アルテミス』の効果でカードを1枚ドロー！」

「ならばこちらは魔法カード『二重召喚』を発動！」

石板の1枚がグルン、とこちらを向いた。石でできてはいたけれど、確かにわたしのよく知っている『二重召喚』のイラストだった。

「まずは『レッド・ガジェット』を召喚！　その効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える！」

レッド・ガジェット（効果モンスター）
星4
地属性／機械族
ＡＴＫ　１３００／ＤＥＦ　１５００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

イエロー・ガジェット（効果モンスター）
星4
地属性／機械族
ＡＴＫ　１２００／ＤＥＦ　１２００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

グリーン・ガジェット（効果モンスター）

星４
地属性／機械族
ＡＴＫ　１４００／ＤＥＦ　６００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

レッド・ガジェット：ＤＥＦ　１５００

石板から赤い歯車に手足の生えたモンスターが現れる。色違いの歯車をサーチするモンスターだ。

「そして『レッド・ガジェット』を生け贄に、『機械王』を召喚！『機械王』は自身を含めた自分の場の機械族モンスターの数１体につき攻撃力が１００ポイント上昇する！」
『ギギギギギギギギ……』

機械王（効果モンスター）
星６
地属性／機械族
ＡＴＫ　２２００／ＤＥＦ　２０００
フィールド上に表側表示で存在する機械族モンスター１体につき、このカードの攻撃力は１００ポイントアップする。

機械王：ＡＴＫ　２２００→２３００

「そして手札の『マシンナーズ・フォートレス』と『イエロー・ガジェット』を墓地に送り、今墓地に送った『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚！　機械族が増えた事で『機械王』の攻撃力が更に上がる！」

マシンナーズ・フォートレス（効果モンスター）
星７
地属性／機械族
ＡＴＫ　２５００／ＤＥＦ　１６００
このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が８以上になるように捨てて、
手札または墓地から特殊召喚する事ができる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。
また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して１枚捨てる。

マシンナーズ・フォートレス：ＡＴＫ　２５００
機械王：ＡＴＫ　２３００→２４００

く、なるほど。こいつのデッキは【ガジェット】か。３種類あるガジェットがそれぞれをリクルートし、それを使って手札コストや壁モンスターを補ったりするデッキ！

しかも、機械族で固めてあるから恐らく『リミッター解除』みたいな豊富にあるサポートカードも手札にある可能性が高い！

ついでに言えば『マシンナーズ・フォートレス』は破壊された時に場のカードを１枚破壊する道連れ効果がある。これで迂闊に踏み込めなくなったね……。

「カードを１枚伏せて、バトル！　『機械王』で『アルテミス』を攻撃！　“ロケット・パンチ”？」

「くっ！」

その攻撃名はどうかと。

バシュッ！　と飛んで来た腕が『アルテミス』を殴り飛ばした。

余波が風となってわたしを襲う。

「そして『マシンナーズ・フォートレス』でダイレクトアタック！」

ギリギリギリ、と戦車の砲台がこちらを向く。ちょ、冗談じゃないよ！　黎みたいに超人的な体じゃないんだから、あんなの喰らったら怪我じゃ済まないっての！

「リバースカードオープン！　罠カード『ガード・ブロック』！　１度だけ戦闘ダメージを０にできる！　更にカードを１枚ドロー！」

これは以前、黎が余ったと言って渡してくれたカードだ。防御が若干手薄になってしまう私としては、ドローも兼ねてくれるので頼もしい。

「むむむ、こちらにはもう手札は無い。ターンエンドだ」

水陸の帝王：ＬＰ　４０００
手札：０枚
フィールド
：機械王（ＡＴＫ　２４００）、マシンナーズ・フォートレス（ＡＴＫ　２５００）
：伏せカード１枚

「わたしのターン！」

さて、状況ははっきり言って非常にマズい。今のわたしの手札は永続魔法１枚に上級モンスター２体。そして罠カード１枚

『アテナ』
『光神機（ライトニングギアごうりゅう）一轟龍』
『コート・オブ・ジャスティス』
『魔宮の賄賂』

このドローで通常召喚できるモンスターを引き当てないと、次の

ターンに直接攻撃を喰らってお終い。
それに仮に召喚できたとしても相手がリクルータークラスのモンスターを出した時点で終了。呆気無さ過ぎる。
さあ、デッキよ、応えて！　無残に倒れていく炎の里の皆を守りたいんだ！

「ドロー！」

これは……。

「手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！　カードを2枚、ドロー！

……、！」

来た！
ありがとう、皆。信じてたよ！

「このデュエル、わたしの勝ちだ！」
「何だと！？」
「私は永続魔法『神の居城－ヴァルハラ』を発動！　『ヴァルハラ』はわたしの場にモンスターがいない時、1ターンに1度手札の天使族モンスターを特殊召喚できる！」

神の居城－ヴァルハラ
【永続魔法】
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「手札から『アテナ』を特殊召喚！」
『はぁっ！』

アテナ：ＡＴＫ　２６００

槍と盾を持った女神が君臨する。戦の女神らしく、毅然とした表情だ。

「更に『勝利の導き手フレイヤ』を攻撃表示で召喚！　行くよ、フレイ！」
『行っきま～す！』

勝利の導き手フレイヤ：ＡＴＫ　１００

光の中からチアガール天使が飛び出す。フレイとはあの結界の中ですっかり意気投合した間柄だ。

「その効果でわたしの場の天使族モンスターの攻撃力と守備力は４００ポイントアップ！」

アテナ：ＡＴＫ　２６００→３０００／ＤＥＦ　８００→１２００
勝利の導き手フレイヤ：ＡＴＫ　１００→５００／ＤＥＦ　１００
→５００

まだまだ行くよ！

「『アテナ』のモンスター効果発動！　わたしの場に天使族モンスターが現れる度に相手に６００ポイントのダメージを与える！　“ホーリー・ジャッジ”？」

アテナ（効果モンスター）
星7
光属性／天使族
ＡＴＫ　２６００／ＤＥＦ　８００
１ターンに１度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター１体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する
天使族モンスター１体を選択して特殊召喚する。
フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに６００ポイントダメージを与える。

「ぐおっ！？」

水陸の帝王：ＬＰ　４０００→３４００

「永続魔法発動！　『コート・オブ・ジャスティス』！　自分の場にレベル１の天使族モンスターが存在する時、１ターンに１度、手札の天使族モンスターを無条件で特殊召喚できる。手札の『光神機－轟龍』を選択！」

コート・オブ・ジャスティス
【永続魔法】
自分フィールド上にレベル１の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
「コート・オブ・ジャスティス」の効果は１ターンに１度しか使用できない。

光神機－轟龍：ＡＴＫ　２９００→３３００

光のドラゴンが飛び出す。見た目はドラゴン族っぽいけど天使族だ。

「『アテナ』の効果ダメージを受けて貰います！」

「ぬあっ！」

水陸の帝王：ＬＰ　３４００→２８００

もう気が付いた人もいるんじゃないだろうか？　主流な天使族デッキは大きく3種類に分かれる。

１つ目はこれまでわたしがやっていた、重量級天使族モンスターで回す【重量ビートダウン】。

２つ目は『アルテミス』とカウンター罠を主軸に置く【エンジェルパーミッション】。

３つ目は『アテナ』の効果ダメージを利用する【エンジェルバーン】。

でもわたしの今のデッキはこれらを混ぜ合わせたものだ。何を馬鹿な、なんて思うかも知れない。でも、これが思ったよりも回る回る。

例えば『アテナ』はビートで戦えるくらいの戦力はあるし、『アルテミス』の蘇生にも役立つ。

それからカウンター罠はあって困るものは少ないし、『アルテミス』は2枚あれば大丈夫。いざとなれば壁にできるし、『轟龍』とかの召喚時に生け贄に捧げても良い。

『フレイヤ』は天使族デッキでは汎用性がある。『アルテミス』と一緒に場に出せば下級アタッカーじゃあ越えられない壁になる（『フレイヤ』を2体出してもロックを掛けられないのは残念だけど）。

ただし、カードの配分を少しでも間違えると大事故に繋がる。正直な話、このデッキは1枚でもカードが変わったら確実に戦えない程、緻密な構築が必要なんだ。だから今も微調整中。

「行きます！　『轟龍』で『機械王』を攻撃！　“シャイニング・キャノン”！」
「ぬぐうっ！」

水陸の帝王：ＬＰ　２８００→１９００

光の砲弾がロボットを木端微塵にする。うーん、なんか無慈悲。『轟龍』って本当に天使なの？

「追撃はしません。『フォートレス』を破壊したらこちらのモンスターが破壊される。九分九厘、こういう場合は『アテナ』を破壊する、でしょう？」
「その通り。そちらが『フォートレス』を破壊したら『アテナ』の破壊を目論んでいた」

だが、と『水陸の帝王』は続ける。

「それでは倒せまい？　次のこちらのターンでどんでん返しが起こるかも知れんぞ？」

それに対し、わたしは余裕の笑みで返す。
ディスクの魔法・罠カードを発動させるスイッチに手をかけながら。

「いいえ、言った筈。わたしの勝ちだ、ってね」

ピッ！　とボタンを押し、さっき黎から貰ったカードがオープンする。緻密な構築を必要とするわたしのデッキに入れてしまった事にちょっと不安を感じていたが、こうなったんだから問題無いのかな？

「罠カード『ソーラーレイ』を発動！　わたしの場の光属性モンスター1体につき、相手プレイヤーに６００ポイントのダメージを与える！」

「なぁんだとぉ！？」

ソーラーレイ
【通常罠】
自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターの数×６００ポイントダメージを相手に与える。

天空に１８の光の球が浮かぶ。一発につき１００ダメージという事なのだろう。

んー、『ソーラー「レイ」』と彼の名前、『遊馬崎　「黎」』がかかっているから渡してくれたのかな。

違うよね、きっと。

「わたしの場の光属性モンスターは『アテナ』、フレイ、『轟龍』

の3体！　したがって……！」
「１８００ダメージだとぉ！？」
「行っっっけぇえええええええええええっ！」
ズガガガガガガガガガガァンッ！
「ぬぁあああああああああああっ！」
水陸の帝王：ＬＰ　１９００→１００
「これでラスト！　『アテナ』の効果発動！　１ターンに１度、自分の場の天使族モンスターを１体墓地に送り、墓地から天使族モンスターを１体復活させる！　『轟龍』を墓地に送り、『アルテミス』を復活！」
豊穣のアルテミス：ＤＥＦ　１７００→２１００
「そんなモンスターを……、はっ！」
「そう、天使族モンスターが増えた事で、更に６００ポイントダメージです」
「ば、馬鹿な！　ワンターンキルだとぉ！」
“ファイナル・アサルト・シャイン”！」
水陸の帝王：ＬＰ　１００→０

光の槍が『水陸の帝王』を貫通し、煙を上げて吹き飛ばした。

「バカなぁあああああああああああああああっ！」

フィオ：ＷＩＮ
水陸の帝王：ＬＯＳＥ

「さて、吐いてもらうぞ。テメェら、何の目的でこんな事してやが

る！」

真っ黒に変色した腕で『ソーラーレイ』で黒焦げになった『水陸の帝王』を締め上げる黎。きっとパワーアップした姿なんだろう。あの大きな『水陸の帝王』を軽々と持ち上げるなんて、プロレスラーやプロのボディビルダーでも無理だろう。

にしても、勝ったら吐くなんて約束してたっけ？

「ぐぐぐ、良かろう。その様な契りを交わした覚えは無いが、吐こう……。だから下ろせ、正直な話、窒息しそうだ」

確かに、黎が右手で握りしめているのは首だ。とんでもない握力で締めたら呼吸が苦しくもなるだろう。

ドサッ！　と黎が手を離したせいで『水陸の帝王』が落ちる。ゲホゲホと咳き込みながら、彼は事情を話し始めた。

「自分とて、詳しい事は分からん。ただ」

「ただ？」

「水の里の長である『超古深海王シーラカンス』殿がどこからか引き連れて来た『ウォーター・ドラゴン』殿と共に急に炎の里に進撃すると言い出したのだ。

あの方は普段は温厚で、眠っておられる事が殆ど。しかも『ウォーター・ドラゴン』殿とは不仲であった。

抵抗しようと思ったが、何か邪悪なモノに邪魔され意思に自由がきかなかったのだ」

んー、と考える。それってやっぱりあの黒い模様が何か関係しているのかな？　『水陸の帝王』からも倒れた後、黒い何かが空に昇

って消えて行ったし。

「それも分からん。だが、もう消滅したあの黒い何かは確実に皆の中に入り込み、この侵略に駆りたてたものだという事は確かだ」

「「その二人は今どっちに？」」

考え事をしていた黎とフレイが口を開く。

「『ヴォルカニック・デビル』殿を仕留めに行くと、ここから、西の方角に……」

「それだけ聞ければ十分だ」

「マスター、黎さん、早く行きましょう！」

え？　ええ？

何？　何が分かったの？

「ね、ねぇ黎。ちゃんとわたしにも分かるように説明して！　何が何だか分からないよ！」

「説明は移動しながらする。フレイはカードの中に戻ってくれ。フィオを背負って移動するから」

「はい」

ヒュン、とフレイが消える。

もー、ワケ分かんないよぉー！

ＳＩＤＥ：黎

現在、背中にフィオを背負い、足のブースターを噴出させて移動中。

襲撃に出ていた部隊は『フィッシャービースト』と『水陸の帝王』以外が率いていたのは全滅したらしく、残った連中が撤退と後片付けに追われているようだ。

「ねぇねぇ、どういう事なのか教えてよぉ！」

「背中を叩くな、バランス崩れて落ちるぞ」

ポコポコと可愛く叩いてくるフィオがいじらしい。しかし、あれだけ情報があってまだ分からないのか？

「しゃーないな。良いか、良く聞けよ？」

「うん」

ここから解説タイムです。

「まず十中八九、『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』を操っているのは邪神だ」

「え、でも邪神の気配はしないんでしょ？」

「そうです。そこが1つのポイントなのです」

半実体化したフレイが俺達の近くを飛びながら言う。実際はカードから遠く離れられないという特性を利用して引っ張られているのだろうけど。

俺はプライド戦で邪神の気配を知った。それを頼りに里にまで行ったが、気配を放っている者は一人もいなかった。

そこで前にプライドが言っていた事を思い出して欲しい。『邪神

は人の負の感情を食い物にする』という言葉を。

「彼らは心の中にある闇を利用されたんだ」

「闇？」

「心の中が清い事だけで構成されているヤツはどこを探してもいない。必ず劣等感や嫉妬なんかを抱えている。

そしてもし、邪神がそれに干渉できるとして、それを増幅したら？　そしてそれに使われていたのがあの黒い模様だったとしたら？」

「！」

「気配が無いのは当然。黒い模様の気配は残り香程度の痕跡だったんだからな」

デュエルに勝った後、『水陸の帝王』から黒い何かが霧状になって空へ向かって行き、空中に霧散して消えた。

『フィッシャービースト』に勝った時、あの黒い霧に注意していなければ、きっと残り香の気配には気付けなかっただろう。

「恐らく、邪神は『シーラカンス』か『ウォーター・ドラゴン』のどちらか、或いは両方を洗脳した。更にそこから間接的に水の民を操っていたんだ。

大元なら比較的強く残っているだろうが、そこから枝分かれした先には痕跡が殆ど残っていない。だから気が付けなかったんだ」

「辛うじてわたくしと黎さんが気付けなかったら、無策で戦う事になっていました」

「黎は1度戦った事があるから、フレイは精霊だから気が付いたんだね」

そういう事。そしてもう一つ。

「推測だが、最初から邪神は水の民を襲うつもりだったんだ」

「「え？」」

「理由は2つある。『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』の不仲さ、つまりそこにあるマイナスの感情を利用して洗脳する為。もう1つは、『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』のモンスター効果を利用する事だ。2体の効果は知っているか？」

えーと、とフィオとフレイが頭を掻く。おいおい、『シーラカンス』はこの間その目で見ただろうが。

「『シーラカンス』は手札コスト1枚でデッキから条件付きで可能な限り魚族モンスターを呼び出す能力。『ウォーター・ドラゴン』は敵味方問わず炎系モンスターの攻撃力を0にする能力だ」

「そ、それって！」

「『シーラカンス』で兵力を補給し、『ウォーター・ドラゴン』で強い炎系モンスターを制圧する。この組み合わせは炎系モンスター相手には余りにも有効だ」

そう、この能力と二人の不仲を知っていれば、炎の里を襲うのは理に叶い過ぎている。

この他にも『せいなるあかり』みたいな特定の属性を封じるモンスターが存在する。

仮に俺がそういう立場なら、絶対にそういう奴を押さえて優位を確保。そこからメタの上にメタを張りまくって進撃する。これなら反撃を許さずに征服できる。

「邪神の気配が強くなって来ました……」

フレイが前方をキッと見据えながら呟く。ああ、俺にも分かるぜ

？　このまるで粘土質の泥に浸かったかのような感覚。背中に走る悪寒や殺気とはまた異なる真っ黒な何か。吐き気を催しそうになるくらいの気持ち悪い感触。

本格的に間違いない。かなり近い！

頼むから無事でいてくれよ、『ヴォルカニック・デビル』……！

to be continued

ＳＴＯＲＹ１８：太陽光線（後書き）

邪神の目的が分かった黎達。急いで気配の方向へと向かう！

黎「そしてそこで見たものは……！」

フィオ「ちょ、何あのインチキカード軍団！」

黎「大丈夫だ、ルールに則っている以上、スキは必ずある！」

都「次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ１９：水の龍と炎の巨人』！　カットビングだよ、皆！」

黎「流行……？」

＜おまけだったり……＞

黎「さて、俺も何か面白いカードを考えてみた」

都「おー」

黎「『アイテムなど使うな！』　お互いのプレイヤーはカードを場

に出せない」

フィオ「バ○バトス！？」

黎「『侵略できないカエル』　自分は攻撃できない」

フィオ「ぐんそぉぉぉぉぉっ！」

黎「『実は漬物石である指輪』　装備モンスターは除外される」

フィオ「重っ！？　どんだけ重いのその指輪！」

都「ってか、効果の方にツッコもうよ……」

ＳＴＯＲＹ１９：水の龍と炎の巨人（前書き）

今回登場するのは敵側のオリカ！

黎「おめぇ、チートって言葉知ってるか？」

乳製品？

都「それはチーズ。苦しいからね？」

フィオ「でもこれくらいでどうこう言ってたらダメらしいよ。後続で更に凄いのが出て来るらしいから」

黎「基本的に戦うのは俺なんだが……？」

まあまあ、主人公なんだから勝てるって。

都「作者がソレ言うのもどうかと……。それでは精霊界での戦闘も今回が最後！　少し長いけど見ていって下さい！　スタート！」

フィオ「セリフ奪うのが定位置になってない？」

都「ウソォ！？」

＜今回の注目カード＞

都・フィオ『なーにかな、なーにかなぁ？　今回は、これ！』

ミラクルシンクロフュージョン
通常魔法
自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

フィオ「シンクロモンスター版の『ミラクル・フュージョン』だね」

都「セット状態の効果は期待しない方が良いかも。『ドラゴエクティス』や『アーカナイト』なんかを出して戦局をひっくり返そう！」

ＳＴＯＲＹ１９：水の龍と炎の巨人

ＳＩＤＥ：無し

「ぜぇ、ぜぇ……」

灯った炎の勢いも弱く、『ヴォルカニック・デビル』が音を立てて倒れ伏した。

その眼前には真っ黒に変色した『超古深海王シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』がいた。

火山の近くだというのに、その周囲は大量の水がぶち撒けられていた。

「ぐ、何故、このような事をする……！　民は、無関係のはずだあっ！　何故、何故このような殺生な事ができるのだぁ！」

瞳の光は、死にかけであっても強い。血を吐きながらも気高に吼えるその姿は数日前にプライドと戦っていた黎の姿を彷彿とさせる。

「答える義理は無いな」

「耳障りだ老人（ロートル）」

それを軽く一蹴する水の里の長と龍。双方共に口内に大量の水を溜める。あれが放たれ、直撃したら、最早立つ事すらできない『ヴォルカニック・デビル』は確実に死んでしまうだろう。

「「死ね！」」

同時に放たれる水の巨柱。水圧も滝とは比較にならないだろう。

（ここまでか……。済まない皆……、ワシは、炎の長失格だな……）

目を静かに閉じ、最期の時を受け入れる。心の中で、走馬灯の中で自分と関わり合った全ての人に謝りながら。

「“フォビドゥン・ゴスペル”！」
「“カメリア・ストーム”！」
「“マグネット・ソード”！」

突如として思わぬ援軍がやって来た。
光り輝く歌が、椿の花の嵐が、磁力の斬撃が飛来し、水の柱を防ぎ切ったのだ。
ゆっくりと『ヴォルカニック・デビル』が首だけ動かして後ろを見ると、そこには三人の精霊が、里の長がいた。

一人は、アメリカの先住民のような格好をし、白い鳥の被り物をした女性。
一人は、椿の大輪の下半身を持つ、美しい女性。
一人は、三体の磁石の戦士（マグネット・ウォリアー）が変形合体した岩の剣士。

弱々しい声で『ヴォルカニック・デビル』が彼らの名を一人ずつ

呼ぶ。

「『ガーディアン・エアトス』殿……」
「大丈夫ですか？　不穏な気配を察知して来たのですが」

「『椿姫（つばき）ティタニアル』殿……」
「どういう事なのか、彼らには説明してもらいたいわねぇ」

「『マグネット・バルキリオン』殿……」
「間に合って何よりでござる。某、恩義を返せないのはお断りでござるからな」

「ザコがまた集まって来やがったか」
「構わん。今の我らに敵は無い」

三対二という状況で感情一つ揺れ動かない『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』。

一方で三人は走り寄って『ヴォルカニック・デビル』を近くの岩陰に寝かせると、己の剣を引き抜いて対面した。
『エアトス』は神秘的な片刃の細身（レイピア）の剣を。
『ティタニアル』は柄に椿の柄をあしらった日本刀を。
『バルキリオン』は磁力を帯びたやや短い（グラディウス）剣を。

「余す事なく、全部吐いてもらいます」
「さてと、覚悟は良いかしら？」
「汝ら、神妙に致せ！」

それを見て水の長と龍も構えなおす。

「もののついでだ。貴様らも葬って風、木、地の里も攻め入ってくれる！」
「俺様達に刃向った事を後悔して死ねぇ！」
剣と水が交錯し、戦いの火花が散り始めた。

ヴォルカニック・デビル（効果モンスター）
星８
炎属性／炎族
ＡＴＫ　３０００／ＤＥＦ　１８００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に表側表示で存在する「ブレイズ・キャノン－トライデント」を墓地に送った場合に特殊召喚する事ができる。
相手ターンのバトルフェイズ中に相手フィールド上に攻撃表示モンスターが存在する場合、
相手プレイヤーはこのカードに攻撃をしなければならない。
このカードがモンスターを破壊し墓地へ送った時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊し、相手ライフに１体につき５００ポイントダメージを与える。

超古深海王シーラカンス（効果モンスター）
星７
水属性／魚族

ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　２２００
手札を１枚捨てる。
１ターンに１度だけ、デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができず、効果は無効化される。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になった場合、自分フィールド上の魚族モンスター１体を生け贄に捧げる事でその効果を無効にし破壊する。

ウォーター・ドラゴン（効果モンスター）
星８
水属性／海竜族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　２６００
このカードは通常召喚できない。
「ボンディング－Ｈ２Ｏ」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、炎属性と炎族モンスターの攻撃力は０になる。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「ハイドロゲドン」２体と「オキシゲドン」１体を特殊召喚する事ができる。

ガーディアン・エアトス（効果モンスター）
星８

風属性／天使族
ＡＴＫ　２５００／ＤＥＦ　２０００
自分の墓地にモンスターカードが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを３枚まで選択し、ゲームから除外する。
この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

椿姫ティタニアル（効果モンスター）
星８
風属性／植物族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　２６００
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリリースして発動する。
フィールド上に存在するカードを対象にする魔法・罠・効果モンスターの発動を無効にし破壊する。

磁石の戦士マグネット・バルキリオン（効果モンスター）
星８
地属性／岩石族
ＡＴＫ　３５００／ＤＥＦ　３８５０
このカードは通常召喚できない。

自分の手札・フィールド上から、「磁石の戦士α」「磁石の戦士β」「磁石の戦士γ」をそれぞれ1体ずつリリースした場合に特殊召喚する事ができる。
また、自分フィールド上に存在するこのカードをリリースする事で、自分の墓地に存在する「磁石の戦士α」「磁石の戦士β」「磁石の戦士γ」をそれぞれ1体ずつ選択して特殊召喚する。

SIDE：黎

スラスターを最大限に吹かして、つまり全速力で前進しているというのに、『シーラカンス』も『ウォーター・ドラゴン』も全く見えてこない。

「ちっ、これ以上はスピード出ねぇぞ……」

無茶な加速は制御が利かなくなり、逆に到着を遅くしかねない。と、少し距離のある火山の向こう側で大きな爆発があった。途端に周囲に水が飛び散り、赤い椿の花が飛んで来たり、突風が吹いたりした。

「わわ、わわわわっ！」
「フィオ、手ぇ離すなよ！」

更にはバランスや方向の感覚もおかしい。どうやら磁力も発生しているみたいだ。

「れ、黎！　もしかしてあそこに……！」
「言われずしても！」

何故花や風が飛んで来たのかは分からないが、少なくともあそこで戦いが起こっているのは確か。しかもかなりハッキリと邪神の気配がする。

一度空中で停止を掛けて方向転換すると、俺は一気にそちらへ向

かって加速した。

――火山の麓

「これは……」

その状況はまさに惨劇と呼ぶに相応しかった。

岩陰では『ヴォルカニック・デビル』がグッタリした様子で横になっており、少々遠くには三本の剣が突き刺さった『超古深海王シーラカンス』が倒れている。

そして何故か炎の里にいないハズの属性、地属性の『マグネット・バルキリオン』、風属性の『ガーディアン・エアトス』と『椿姫ティタニアル』が血だらけで『ウォーター・ドラゴン』と対峙していた。

そして感覚に間違いは無かったようで、『シーラカンス』はもう残り香程度だが、『ウォーター・ドラゴン』からはハッキリと邪神の気配を感じた。

「「「はぁ……、はぁ……、はぁ……っ！」」」

「ふん、長といっても所詮はこの程度か」

息も絶え絶えの三人に対し、『ウォーター・ドラゴン』には目立った傷（水の体なので見えないだけかも知れないが）は無い。

「おぷっ……！」

「大丈夫か？」

隣でフィオが口元を押さえる。無理も無ぇだろうな、あまりにも

血の臭いが濃過ぎる。血腥（ちなまぐさ）いなんて言葉では言い表しえない程だ。
血の臭いに慣れた筈の俺だってこれはキツい。しかも一人では無く複数人分の血だから余計タチが悪い。

「フィオはここで待ってろ。俺はあの惨状を止めに行く！」
「う、ぷっ！　ゴメン……」

近くの岩陰にフィオを隠すと、俺は『エアトス』達と『ウォーター・ドラゴン』の間に割り込んだ。
丁度水の塊を吐き出そうとしていたところで、『ウォーター・ドラゴン』は俺の姿を認めると水塊を飲み込んだ。

「そこまでにしてもらおうか？」
「ほぅ、“騎士”の魂か」
「「「！」」」

『ウォーター・ドラゴン』の問いに答える代わりに炎の力を体に纏う。これで返事になるハズだ。

「クククククク、まさかそちらからやって来るたぁな。手間が省けたぞ！　ゴァァッ！」
「知るか。何をしたのかはさて置き、キッチリ罪は清算してもらう」

セリフの最後で吐き出された水をタングステン合金のシールドで受け流しながら宣言する。

「第一、最初から俺を狙っていたなら何故炎の里を狙った。あそこは関係無い筈だ」
「はっ！　知らねぇのか、テメェ」
「あ？」

「あの宝玉の力ってのはなぁ、それぞれの里をエネルギーの媒体にしてるんだよ。つまり、里を潰すと力の供給が止まり、宝玉の力が極端に弱くなる。
そこを叩けば楽に殺せるだろ？　何か間違ってるか？」

ギリ……、と歯を軋ませる。邪神に取り憑かれると都みてぇに性格が変わっちまうみたいだな。いや、捻くれると言うべきか。

黙って俺は変身を解除して宝玉をカードに変えると、ガシャリ！とディスクに差し込んだ。

「肉弾戦も吝かじゃあ無ぇが、ここはデュエルで決着をつけようじゃねえか」
「くかかか！　ここでのデュエルは肉体にもダメージが通るというのにか？　良いだろう！」

『デュエル！』

黎ＶＳウォーター・ドラゴン
ＬＰ　４０００　ＶＳ　ＬＰ　４０００

俺がデッキからカードを5枚手札に加えたのに対し、『ウォーター・ドラゴン』は自分の前に浮いている半透明のカードを5枚揃えた。こいつは『水陸の帝王』みたいな紅蓮の悪魔のしもべタイプでは無く、『サイコ・ショッカー』タイプか。

「俺様のターンだ！　出でよ、『オキシゲドン』！」

『ビギャァアアアアアッ！』

オキシゲドン：ＡＴＫ　１８００

半透明のカードが表側に引っ繰り返り、発せられた光から緑の大気の翼竜が現れる。一見するとドラゴン族だが、実は恐竜族だ。

さて、必要経費と割り切るか、別の手を探すか。

「更にリバースカードを2枚セットし、ターンエンド！」

ウォーター・ドラゴン：ＡＴＫ　４０００
手札：３枚
フィールド
：オキシゲドン（ＡＴＫ　１８００）
：伏せカード2枚

「俺のターン！　良し、『Ｆ・Ｓ（ファイアスピリッツ）　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃表示で召喚！」

『先陣行くぞ！』

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ：ＡＴＫ　１９００

ここは必要経費として割り切る！

「バトル！　『ヴォルカニック・ギア・ガイ』で『オキシゲドン』を攻撃！　“スピン・ファイア・キック”！」

『てぇいやぁ！』

炎の廻脚が空気の翼竜に炸裂。いつも以上の大爆発を巻き起こした。

「『オキシゲドン』は炎属性モンスターとの戦闘で敗れた時、お互いのプレイヤーに８００ポイントのダメージを与える！」

「こっちも『ヴォルカニック・ギア・ガイ』の効果ダメージを受けてもらう！」

まずは爆発。両者を巻き込む大爆発が襲いかかる。

「くっ！」

「むっ！」

オキシゲドン（アニメ効果）

星４

風属性／恐竜族

ＡＴＫ　１８００／ＤＥＦ　８００

このカードが炎属性モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、お互いのライフに８００ポイントダメージを与える。

黎＆ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　４０００→３２００

「『ヴォルカニック・ギア・ガイ』の効果で超過ダメージ１００ポイントに『オキシゲドン』の元々の攻撃力の半分の９００ポイント分のダメージが加算される！」
「ぬぁああっ！」

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　３２００→２２００

残念ながらジャスト１０００なので更なる追加ダメージは無い。
ちょっと残念。

Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（効果モンスター）（オリジナル）
星４
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　１９００／ＤＥＦ　１２００
このカードがバトルを行い、相手に与えたダメージが１０００ポイント未満の時、相手プレイヤーは自分の手札１枚につき４００ポイントのダメージを受ける。また、このカードが相手モンスターを戦

闘で破壊した時、そのモンスターの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示なら、破壊した相手モンスターの元々の攻撃力の半分の数値分のダメージを与える。
●守備表示なら、相手の守備力をこのカードの攻撃力が上回った分だけ相手プレイヤーにダメージを与える。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

黎：ＬＰ　３２００
手札：４枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ（ＡＴＫ　１９００）
：伏せカード１枚

「俺様のターン、ドロー！」

こいつのデッキは『オキシゲドン』を召喚した所を考えれば十中八九【ウォーター・ドラゴン】だ。『ハイドロゲドン』や『オキシゲドン』が分類される恐竜族を強化しても、『ウォーター・ドラゴン』は海竜族だから旨味は薄い。その逆もまた然りだ。

来い！　今の俺に『ウォーター・ドラゴン』なんざ敵では無い！

「フィールド魔法『ウォーターワールド』を発動！」

しまった！　水属性強化系の魔法カード！

「そして『ハイドロゲドン』を召喚！」

ウォーターワールド
【フィールド魔法】
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、守備力は４００ポイントダウンする。

ハイドロゲドン（効果モンスター）
星４
水属性／恐竜族
ＡＴＫ　１６００／ＤＥＦ　１０００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから「ハイドロゲドン」１体を特殊召喚する事ができる。

ハイドロゲドン：ＡＴＫ　１６００→２１００／ＤＥＦ　１０００→６００

「今度は俺様の番だ！　『ハイドロゲドン』で『Ｆ・Ｓ　ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃！　“ハイドロ・バズーカ”？」

「！　通せば二体目が来る！　罠カード発動、『くず鉄のかかし』！」

バズゥウウウン！　と金属製の案山子が水を弾き飛ばす。ギシギシ鳴りながらも大して堪えてはいないようだ。

「ならばリバースカードを１枚セットし、ターン終了！」

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　２２００
手札：１枚
フィールド
：ハイドロゲドン（ＡＴＫ　２１００）
：伏せカード３枚、ウォーターワールド（フィールド魔法）

「俺のターン！」

ピッ！　とカードを引き抜く。この世界のカードは紙ではあるが、特殊な材質も使っているらしく、多少荒事に使っても全く痛まない。

「魔法カード『種火』を発動。『ヴォルカニック・ギア・ガイ』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー！」

引き当てたのは『融合』と『ミッド・ピース・ゴーレム』！

「相手の場にのみモンスターが存在する時、『バイス・ドラゴン』はリリース無しで手札から特殊召喚できる！　ただし、この時のその能力値は半分になる！　攻撃表示で特殊召喚だ！」

『グォオオオオッ！』

バイス・ドラゴン（効果モンスター）
星5
闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２０００／ＤＥＦ　２４００
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

バイス・ドラゴン：ＡＴＫ　２０００→１０００／ＤＥＦ　２４００→１２００

「更に魔法カード『融合』を発動。手札の『ビッグ・ピース・ゴーレム』と『ミッド・ピース・ゴーレム』、『スモール・ピース・ゴーレム』を融合！　来い、『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』！」
『ヌゥゥゥウウウアッ！』

ヴァラエティ・ピース・ゴーレム（融合・効果モンスター）（オリジナル）
星８
地属性／岩石族
ＡＴＫ　３０００／ＤＥＦ　２３００
「ビッグ・ピース・ゴーレム」＋「ミッド・ピース・ゴーレム」＋「スモール・ピース・ゴーレム」
このカードは上記のカード以外で融合できない。
自分のターンの終了時、このカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地から融合素材となったモンスターをフィールド上に特殊召喚できる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。
このカードは魔法・罠カードの効果では破壊されない。

ヴァラエティ・ピース・ゴーレム：ＡＴＫ　３０００

現れたのは『マルチ・ピース・ゴーレム』より更に一回り大きなゴーレム。４本の腕を持ち、頭頂部には短い角が生えている。

「行くぞ！　まずは『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』で『ハイドロゲドン』を攻撃！　“オールサイズ・プレッシャー”？」

「リバースカード、オープン！　『聖なるバリア―ミラーフォース―』！　これで貴様のモンスターは全滅だ！」

聖なるバリア―ミラーフォース―

【通常罠】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「無駄だ！　『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』は魔法・罠カードでは破壊されない！」

「だが『バイス・ドラゴン』は破壊させてもらう！」

『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』が大きな腕を振りかぶって殴りかかると、白い障壁が現れその衝撃を流す。『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』には傷一つ付かないが、後方で待機していた『バイス・ドラゴン』は爆発し、やられてしまった。

済まない、『バイス・ドラゴン』。

「『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』の攻撃は通るぞ！」

「かっ！　ならば『ガード・ブロック』を発動！　ダメージを無効化し、１枚ドローを行う！」

……おかしい。

あいつが使ったリバースカードは１番左とその隣のカード。その２枚は最初のターン　に伏せられたものだ。

何故『ヴォルカニック・ギア・ガイ』の攻撃時に使わなかった？

そうすれば、ダメージはもっと少なかったはずだ。

「……ターンエンド」

黎：ＬＰ　３２００
手札：０枚
フィールド
：ヴァラエティ・ピース・ゴーレム（ＡＴＫ　３０００）
：伏せカード１枚（『くず鉄のかかし』）

兎に角、あのデッキの主戦力が『ウォーター・ドラゴン』だと仮定するなら、しばらくは問題無い筈だ。『ゲート・ガーディアン』ほどじゃ無いが、あれも呼び出すのに中々手間の掛かるモンスターだ。この状況で出て来るとは思えない。

「俺様のタァーン！　魔法カード『強欲な壺』を発動！　カードを２枚ドロー！　更に『天使の施し』を発動！　そして今捨てた『暗

黒界の狩人ブラウ』の効果で1枚ドロー！」

暗黒界の狩人ブラウ（効果モンスター）
星3
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　１４００／ＤＥＦ　８００
このカードがカードの効果によって手札から墓地へ捨てられた場合、自分のデッキからカードを1枚ドローする。
相手のカードの効果によって捨てられた場合、さらにもう1枚ドローする。

早い、なんて高速のドロー加速……！
ククク、と『ウォーター・ドラゴン』が笑う。……何だ？

「永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動！　墓地の『オキシゲドン』を特殊召喚！」
『クォオオオオオッ！』

オキシゲドン：ＡＴＫ　１８００

お、おいちょっと待て！　まさか、呼び出すのか！？

「更に二体目の『ハイドロゲドン』を召喚！　そして『死者蘇生』で最初の『ハイドロゲドン』を特殊召喚！　この状況が何を意味するのか、分かるよなあ、小僧？」
「アンタの手札にはもう『ボンディング－Ｈ２Ｏ』がある、違うか？」
「その通りよ！　『ボンディング－Ｈ２Ｏ』、発動！　俺様の場の『オキシゲドン』と2体の『ハイドロゲドン』を墓地に送り、『ウォーター・ドラゴン』、俺様自身を特殊召喚！」

ボンディング－Ｈ２Ｏ
【通常魔法】
自分フィールド上に存在する「ハイドロゲドン」2体と「オキシゲドン」1体を生け贄に捧げる。
自分の手札・デッキ・墓地から「ウォーター・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

ウォーター・ドラゴン：ＡＴＫ　２８００→３３００／ＤＥＦ　２６００→２２００

どうやらこの世界では自分と同じモンスターが召喚された時は自分自身が場に出るものらしく、『ウォーター・ドラゴン』もそうやって場に出て来た。
おいおいおい、マジで召喚してきやがった！

「行くぞ！　俺様自身で『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』を攻撃！　“アクア・パニッシャー”！」
「く、『くず鉄のかかし』ぃ！」

バッシャァアアアアアアアン！

金属製、否、最早それは金属装甲の案山子と言えるだろう。バリアを張った案山子が激流を弾き、俺を守る。ザァアアア、と水飛沫が雨と呼べる程の量と強さで降って来た。
こんなの真面に喰らったらと思うと、背筋が寒くなるな。思わずあのプライド戦の『深海の超水圧』で内臓も骨も破壊された事を回顧する。

「ターンエンドだ！」

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　２２００
手札：０枚
フィールド
：ウォーター・ドラゴン（ＡＴＫ　３３００）
：ウォーターワールド（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！」

マズいなぁ。『ウォーター・ドラゴン』は全フィールド上の炎属

性と炎族モンスターの攻撃力を0にする効果がある。しかも、戦闘破壊された時に墓地の元となった水素2体と酸素1体を復活させる効果があり、壁には事欠かない。

そして『ボンディング－H2O』は墓地の『ウォーター・ドラゴン』も対象にできる。つまり、『ウォーター・ドラゴン』は高い再生能力を持ったモンスターという訳だ。

しかもレベル8だから『カード・トレーダー』にも活用できる。改めて考えると恐ろしいモンスターだ。

「俺は『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』を守備表示に変更！」

ヴァラエティ・ピース・ゴーレム：ＡＴＫ　３０００→ＤＥＦ　２３００

「そして『ネクロ・ガードナー』を守備表示で召喚し、『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』の効果発動！　このカードをエクストラデッキに戻し、墓地の融合素材を特殊召喚する。

これでターンエンド」

ネクロ・ガードナー：ＤＥＦ　１３００
ビッグ・ピース・ゴーレム：ＤＥＦ　０
ミッド・ピース・ゴーレム：ＤＥＦ　０
スモール・ピース・ゴーレム：ＤＥＦ　０

ここは持ち堪えるしか無い。『ネクロ・ガードナー』が来てくれたのは幸いだった。これなら『くず鉄のかかし』と併用して、後６

回まで攻撃に耐えられる。

黎：ＬＰ　３２００
手札：０枚
フィールド
：ネクロ・ガードナー（ＤＥＦ　１３００）、ビッグ・ピース・ゴーレム（ＤＥＦ　０）、ミッド・ピース・ゴーレム（ＤＥＦ　０）、スモール・ピース・ゴーレム（ＤＥＦ　０）
：伏せカード１枚（『くず鉄のかかし』）

「俺様のターンだ！　魔法カード『邪天使の施し』を発動！　このカードは互いのプレイヤーはカードを３枚ドローし、相手だけが手札を２枚捨てる！」
「ハァ！？　何だそりゃ！？」

邪天使の施し（オリジナル）
【通常魔法】
お互いのプレイヤーはデッキからカードを３枚ドローする。
その後、相手プレイヤーは手札を２枚墓地に送る。

くそっ！　あれも邪神の作り出したオリジナルカードか……。

「更に速攻魔法『邪神の頭脳戦』を発動！　貴様の場の裏側表示の魔法か罠カードを１枚、種類を選択して破壊し、正解なら相手に５００ダメージ、不正解なら俺様のライフが５００回復する！」

「またメリット尽くしのカード！？」

邪神の頭脳戦（オリジナル）

【速攻魔法】

相手フィールド上の魔法・罠ゾーンに存在する裏側表示のカードを１枚選択する。

選択したカードが魔法カードか罠カードかを宣言し、当たった場合はそのカードを破壊して相手に５００ポイントのダメージを与え、外れた場合は自分のライフポイントを５００回復する。

「選択するのは罠カード、『くず鉄のかかし』だぁ！」

しまった！？　『くず鉄のかかし』のメリットを完全に利用された！？

黒い雷が伏せカード『くず鉄のかかし』を焼き尽くし、別の雷が俺に当たった。

素早く絶縁体を体の表面に回して感電を防がなかったら命が危険だったかも知れない。

「ぐぁあああああああっ！」

黎：ＬＰ　３２００→２７００

「れ、黎……！」

ようやく回復したフィオがヨタヨタと歩きながら俺の名を弱々しく呼ぶ。俺は痺れる手を何とか伸ばして彼女に制止をかける。

「だ、い、じょう、ぶだ！」

「で、でも……」

「そんな、フラフラの状態で来られても困るよ。俺は、大丈夫だから、もう少し待っていろ……！」

まだ血の臭いは辺りに強く充満している。密閉空間じゃ無いどころか完全に開けたこの火山の麓で臭いが残っているのは、風が吹かないだけでは無く、地面に血が染み込んでしまっている事もあるのだろう。

「そして自分の場にレベル７以上の水属性モンスターが存在する事により、『イーヴィル・マリントルーパー』を特殊召喚！」

『デアッ！』

イーヴィル・マリントルーパー：ＤＥＦ　６００

「効果発動！　このカードを生け贄に捧げる事で、生け贄に捧げた時のこのカードと同じ表示形式のモンスターを全てゲームから除外する！」
「あぁ！？」

め、滅茶苦茶だ！　守備モンスター全滅！？

イーヴィル・マリントルーパー（効果モンスター）（オリジナル）
星５
水属性／悪魔族
ＡＴＫ　４００／ＤＥＦ　６００
自分フィールド上にレベル７以上の水属性モンスターが存在する時、このカードはリリース無しで特殊召喚できる。
自分フィールド上のこのカードをリリースする事で、その時のこのカードと同じ表示形式の相手フィールド上のモンスターを全てゲームから除外する。
その後、お互いのプレイヤーはデッキからカードを１枚ドローする。

真っ黒な海難救助隊員が消滅し、俺の場のモンスターが次元の歪みに捕まった。そのまま歪みに取り込まれ、こちらも消滅した。
クソッ！　これじゃ『ネクロ・ガードナー』の効果が使えない！

「そして、互いにカードを1枚ドローだ」
「くっ！」
！
「止めだ！　俺様自身で直接攻撃！　“アクア・パニッシャー”！」
激流が放たれる。俺に向かって放たれたそれはもう柱とか壁とか、そんな次元のものでは無く、一種の巨大な生き物のように見えた。
「危ない、黎……ッ！」
辛うじて振り絞ってくれたフィオの声が聞こえなければ、圧巻されたまま馬鹿正直に喰らっていただろう。
心配してくれてありがとよ、フィオ！
「手札から『速攻のかかし』を墓地に送り、その攻撃を無効にする！」
登場するのは御馴染になって来た機械仕掛けの案山子。毎度毎度、お世話になります。
「『速攻のかかし』のモンスター効果で、バトルフェイズは強制終了される」
「ぬぬぬ、ならばメインフィズ2に移るまでだ。俺様は墓地の『イーヴィル・マリントルーパー』をゲームから除外し、『邪神教徒の鏡』を召喚！」
次元に亀裂が走り、黒い海難救助隊員がその亀裂に飲み込まれたかと思うと、その亀裂は、ヒビの入った鏡だった。

黒く縁取られ、入ったヒビが不気味だ。禍々しい装飾が邪神を崇めるものだという事を宣言しているように見える。悪魔崇拝（サタニズム）とどちらがマシか、思わず考えてしまう。

邪神教徒の鏡：ＡＴＫ　？

「こいつは墓地の攻撃力１０００以下のモンスターを1体、ゲームから除外しなければ召喚できねぇ。そしてこいつは除外したモンスターのレベル×１０００の攻撃力と守備力を得る」

「！　レベル5を除外したって事は……」

「こいつの攻守は５０００だ！」

『Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブゴッド　ドラゴン）』クラスだと！？

邪神教徒の鏡：ＡＴＫ　？→５０００／ＤＥＦ　？→５０００

邪神教徒の鏡（効果モンスター）（オリジナル）
星４
闇属性／機械族
ＡＴＫ　？／ＤＥＦ　？
このカードは墓地の攻撃力１０００以下のモンスターを1体ゲームから除外しなければ召喚できない。
このカードの攻撃力と守備力はこの効果で除外したモンスターのレベル×１０００となる。

壊れ過ぎだろう、邪神カード……。どうやれば良いんだっての！

「ターンエンド」

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　２２００
手札：１枚
フィールド
：ウォーター・ドラゴン（ＡＴＫ　３３００）、邪神教徒の鏡（ＡＴＫ　５０００）
：ウォーターワールド（フィールド魔法）

「頑張って、黎……」

「まだだ……！　まだ終わっていない！　俺のターン、ドロー！」

なんて意気込んでみたものの、手札のカードじゃ太刀打ちできない。『巨大化』や『収縮』でもあれば『邪神教徒の鏡』だけでも無力化できるんだが……（元々の攻撃力に関係した効果を持ち、“？”も０として扱うので、パワーアップがリセットされる）。

賭けるか……。

「俺は『Ｆ・Ｓ　スチーム・エクスプローダー』を守備表示で召喚」
『チッ、初陣が壁役かよ』
「俺様自身の効果で攻撃力は０になる」
「解っている」

Ｆ・Ｓ　スチーム・エクスプローダー：ＡＴＫ　１７００→０／ＤＥＦ　１３００

「『スチーム・エクスプローダー』は自分の場にモンスターが存在しない時に召喚された時、手札を１枚デッキに戻し、デッキからカードを１枚ドローできる」
『蒸気ナメんなや！』
ピィイイイイイッ！

背中に蒸気機関を背負った男は、汽笛を鳴らしながらその煙突から蒸気を大量に吹き出し、カード１枚をその中から俺に授けた。代わりに俺の手札がいつの間にか光に変わって消えていた。

「！」

良いカードだ。取り敢えず、急場は凌げそうだ。

「１枚カードを伏せて、ターンエンド」

黎：ＬＰ　２７００
手札：０枚
フィールド
：Ｆ・Ｓ　スチーム・エクスプローダー（ＤＥＦ　１３００）
：伏せカード１枚

さあ来い！　踏み込んで来た時が勝負だ！

「俺様のターン、ドロー！」

何のカードを引いた。それで勝敗を決する事ができる！

「行くぞ！　まずは俺様自身で『スチーム・エクスプローダー』を攻撃！“アクア・パニッシャー”！」

「リバースカード、オープン！　罠カード『火炎バリア』！」

ゴウッ！　と炎の壁が立ち塞がり、押し寄せる水が蒸発する。

「相手が炎属性以外のモンスターで攻撃し、俺の場の攻撃対象となったのが炎属性モンスターの時、このターンのみ俺の場の炎属性モンスターは破壊されない！」

「チッ！」

火炎バリア（オリジナル）

【通常罠】
自分の場の炎属性モンスターが攻撃の対象となった時に発動できる。
相手の攻撃を行うモンスターが炎属性以外の時、発動ターン自分の場の炎属性モンスターは破壊されない。

「ならば俺様は手札の『ニードル・ギルマン』を墓地に送り、『イーヴィル・デスタートル』を召喚！
こいつは手札の水属性モンスターを墓地に送る事で、攻撃力を１５００上げて召喚できる！」

真っ黒な甲羅の紫のカメが地中から飛び出す。口には『ニードル・ギルマン』が咥えられていて、完全に召喚しきるとバリバリと食われてしまった。
うぇ……。ちっちゃい子には見せらんねぇな。

イーヴィル・デスタートル（効果モンスター）（オリジナル）
星３
水属性／魚族
ＡＴＫ　１４００／ＤＥＦ　３００
このカードは手札の水属性モンスターを１体墓地に送らないと召喚できない。
この効果で召喚された時、このカードの攻撃力は１５００ポイントアップする。
１ターンに１度、自分の場の水属性モンスター１体のレベル－４だ

けデッキからカードをドローできる。

イーヴィル・デスタートル：ＡＴＫ　１４００→２９００→３４００／ＤＥＦ　３００→０

「そして効果発動！　１ターンに１度、場の１体の水属性モンスターのレベルマイナス４枚、デッキからカードをドロー！　選択するのは当然俺様だぁ！」

ほっんとにデタラメな効果持ちのモンスターばっかりだ！

『ウォーター・ドラゴン』のレベルは８、つまり４枚のドロー！

ウォーター・ドラゴン：☆８

「ククククク、更にこのカードは自分の場に闇属性モンスターと水属性モンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる！　出でよ、『ダークシー・アルガー』！」

アルガー、海藻か！

成程確かに真っ黒な海藻でできた怪人だ。

ダークシー・アルガー（効果モンスター）（オリジナル）
星４
水属性／植物族
ＡＴＫ　１０００／ＤＥＦ　１２００
自分の場に水属性モンスターと闇属性モンスターが存在する時、このカードは手札から特殊召喚できる。

ダークシー・アルガー：ＡＴＫ　１０００→１５００／ＤＥＦ　１２００→８００

「そして手札の『カオスホーン・ホエール』をゲームから除外して効果発動！　ライフを５００払い、『ダークシー・アルガー』の攻守は４倍になる！」
「はぁあああああっ！？　４倍って、デタラメにも程があるだろ！」

今更ながら、こんな怪物相手に戦っていた四人の長を尊敬する。

カオスホーン・ホエール（効果モンスター）（オリジナル）
星６
闇属性／魚族
ＡＴＫ　０／ＤＥＦ　０
このカードは戦闘では破壊されない。
このカードが守備表示になった時このカードを破壊し、コントロー

ラーは８００ポイントのダメージを受ける。
手札に存在するこのカードをゲームから除外し、ライフを５００ポイント支払う。
自分フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスター1体の攻撃力・守備力は4倍になる。

ダークシー・アルガー：ＡＴＫ　１５００→６０００／ＤＥＦ　８００→３２００
ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　２２００→１７００

「リバースカードを2枚セットし、ターンエンドだ」

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　１７００
手札：０枚
フィールド
：ウォーター・ドラゴン（ＡＴＫ　３３００）、邪神教徒の鏡（ＡＴＫ　５０００）、イーヴィル・デスタートル（ＡＴＫ　３４００）、ダークシー・アルガー（ＡＴＫ　６０００）
：伏せカード2枚、ウォーターワールド（フィールド魔法）

「う、わ……！」
「どこの地獄絵図だよ……！」

相手モンスター全員が攻撃力３０００オーバー。しかもその内２体は５０００と６０００という普通に考えても殴り勝つ事が不可能な相手。

そして相手の場には伏せカードが2枚。こんなピンチなんて、元いた世界でもあり得るのだろうか……。

「でも……」

静かに視線を背後に移す。

片膝をついた『ガーディアン・エアトス』が、自分がボロボロなのにも関わらず『ヴォルカニック・デビル』の治療をしている。

その横で『椿姫ティタニアル』がフィオの背中を優しく擦っている。横で剣を構えて余波に備えているのは『マグネット・バルキリオン』だ。

全員、俺の事を見守っている。俺の勝利を信じている。

目を閉じる。瞼の裏には炎の里の皆が浮かび上がった。無事に撤退できただろうか。

それからアカデミアの皆の姿が。アニメのキャラクターとかそんなの関係無い。彼らはあそこで確実に生きている。二次元上の登場人物では無い。

そして、大切な友人のフィオと、最愛の義妹の都。

『黎！』

『お義兄ちゃん！』
『『頑張って！』』

……、ああ！

「俺は、諦めない」

皆が俺を信じていてくれるから！　化物だけど、心があるから！

「ふん、気に食わねぇな、その俺様に勝てる気でいるその目はよぉ！」
「だったら、どうにかしてみな！」

デッキトップのカードに、全てが懸かっている。

【ＢＧＭ：遊星のテーマ】

「俺の、ターン！」

！

「手札から魔法カード『物語の始まり』を発動！　手札の残り枚数に応じて、このカードは効果が変化する！
０枚なら場のカード１枚をデッキボトムに戻してカードを５枚ドロー。１枚から３枚なら墓地のカードをデッキに戻して、その枚数×１００ライフを回復。４枚以上ならデッキから好きなカードを１枚手札に加える！」

物語の始まり（オリジナル）
【通常魔法】
このカードの効果はこのカード以外の手札の枚数によって、以下のように変わる。
●0枚：自分の場に存在するカード1枚をデッキの1番下に戻し、カードを5枚ドローする。
●1枚以上3枚以下：自分の墓地のカードを任意の枚数デッキに戻し、戻した枚数1枚につきライフを100ポイント回復する。
●4枚以上：デッキからカードを1枚選択して手札に加える。

「今の俺の手札は0枚！　これにより、『スチーム・エクスプローダー』をデッキボトムに戻してカードを5枚ドロー！」
『出番これだけかよ。まあ、やられるよりかマシか』
引いたカードは、まさに逆転を導くためのカード達だった。
皆が俺を信じている。俺もデッキを信じている。それが、この結果を呼んだのか！

「魔法カード『ハリケーン』を発動！　フィールド上の全ての魔法・罠カードは手札に戻る！」
「な！？（しまった、これじゃ『魔法の筒』も『デモンズ・チェーン』も使えない！）」
「『ウォーターワールド』が手札に戻った事で、フィールド上のモンスターの能力値が変化する！」

ウォーター・ドラゴン：ＡＴＫ　３３００→２８００／ＤＥＦ　２２００→２６００
ダークシー・アルガー：ＡＴＫ　６０００→５５００／ＤＥＦ　３２００→３６００

「『Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン』を召喚し、効果でデッキからチューナーモンスター『Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム』を特殊召喚！」
『ハァアアアァッ！』
『ゴォオオオオオッ！』

Ｆ・Ｓ　マグマドラゴン：ＡＴＫ　１８００→０
Ｆ・Ｓ　グリル・ゴーレム：ＡＴＫ　１３００→０

「レベル４の『マグマドラゴン』にレベル３の『グリル・ゴーレム』をチューニング！
　燃え盛る焔、水面を斬り裂く剣とならん！　希望が溢れる明日となれ！」

☆４＋☆３＝☆７

「シンクロ召喚！　灰燼に帰せ！　『Ｆ・Ｓ　バーニング・ブレードガイ』！」
『はぁっ！』

F・S　バーニング・ブレードガイ（シンクロ・効果モンスター）
（オリジナル）
星7
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　２８００／ＤＥＦ　１７００
「Ｆ・Ｓ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター
１体以上
このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。

F・S　バーニング・ブレードガイ：ＡＴＫ　２８００→０

「ムダだ！　炎は俺様の前に無力と化す！」
「黎……！」
「まあ安心して見てな！　『グリル・ゴーレム』の効果で墓地の『F・S　バーナーズ・キャノン』を手札に加える！　そして『スチーム・エクスプローダー』の効果で特殊召喚！」

F・S　スチーム・エクスプローダー（効果モンスター）（オリジナル）

星４
炎属性／機械族
ＡＴＫ　１７００／ＤＥＦ　１３００
このカードの召喚に成功した時、この自分の場にカード以外にモンスターが存在しなければ、手札を１枚デッキに戻し、カードを１枚ドローできる。
このカードは水属性モンスターと戦闘を行った時、このカードは破壊されず、戦闘を行った水属性モンスターをゲームから除外し、相手プレイヤーにそのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを与える。
このカードが魔法カードの効果でフィールドを離れたターン、１度だけモンスターを特殊召喚扱いとして召喚できる。

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン（効果モンスター）（オリジナル）
星４
炎属性／戦士族
ＡＴＫ　１５００／ＤＥＦ　１２００
１ターンに１度、相手フィールド上の魔法・罠カードを１枚破壊できる。この時、相手プレイヤーに３００ポイントのダメージを与える。

Ｆ・Ｓ　バーナーズ・キャノン：ＡＴＫ　１５００→０

「更に魔法カード『火炎融合－ファイア・フュージョン』を発動！
デッキの『Ｆ・Ｓ　鬼火のウィスプ』と『Ｆ・Ｓ　フレア・チアガール』を融合素材にし、『Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト』を融合召喚！」
『てやぁっ！』

火炎融合－ファイア・フュージョン（オリジナル）
【通常魔法】
「Ｆ・Ｓ」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。
この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材の内の１体としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

Ｆ・Ｓ　ブレイジング・ナイト：ＡＴＫ　２９００→０

「行くぞ！　魔法カード『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！　俺の場の『バーナーズ・キャノン』と『バーニング・ブレードガイ』、『ブレイジング・ナイト』を除外融合！」

ミラクルシンクロフュージョン
【通常魔法】
自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「出でよ、炎帝の巨人兵！　『F・S　覇炎巨剣士（はえんきょけんし）　ルージュ・グラン・サーブル』！」
『ウォオオオオオオオオオッ！』

次元が捩じ曲がって『バーニング・ブレードガイ』と『バーナーズ・キャノン』、『ブレイジング・ナイト』が1つになる。そして爆炎が燃え盛り、その中から出て来たのは斬馬刀を携えた巨人。地縛神や三幻神ほどでは無いが、十分に大きい。

F・S　覇炎巨剣士　ルージュ・グラン・サーブル（融合・効果モンスター）（オリジナル）
星10

炎属性／戦士族
ＡＴＫ　３２００／ＤＥＦ　３０００
「Ｆ・Ｓ」と名のついたレベル７以上のシンクロモンスター＋「Ｆ・Ｓ」と名のついたレベル７以上の融合モンスター＋炎属性戦士族モンスター
このカードは融合召喚以外の方法で特殊召喚できない。
このカードは「ミラクルシンクロフュージョン」の効果でのみ融合召喚できる。
このカードが場に存在する限り、自分フィールド上のモンスターは相手フィールド上の表側表示でいる効果モンスターの効果を受けない。
このカードは相手のコントロールする魔法・罠の影響を受けない。

「でけぇ！」
「大きい……！」

Ｆ・Ｓ　覇炎巨剣士　ルージュ・グラン・サーブル：ＡＴＫ　３２００

「俺様の能力が通用してない！？」
「『ルージュ・グラン・サーブル』は表側表示でいる限り、相手モンスターの効果を全て遮断するんでね」
「くっ！」
「装備魔法『ジャンク・アタック』を装備して、バトル！　『ウォーター・ドラゴン』に攻撃！　“赤色の剣舞踊（ダンセ・ド・ルージュ）”！」

『テェヤアアアアアアアアアッ！』
「ギィイイイイイイイイヤアアアアアアアアアアッ！」

赤色超えた赤色、最早橙や白とも見れるその爆炎を纏った剣で『ルージュ・グラン・サーブル』は『ウォーター・ドラゴン』を斬り裂く。水の体だというのに『ウォーター・ドラゴン』は激しく燃え上がり、悶え苦しんだ。

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　１７００→１３００

「最後に『ジャンク・アタック』の効果で『ウォーター・ドラゴン』の元々の攻撃力の半分、１４００ポイントのダメージだ！」

『ルージュ・グラン・サーブル』が剣を一振りすると、火の玉が無数に放たれ、『ウォーター・ドラゴン』に追撃の炎を喰らわせた。

「ぐぁあああああああっ！」

ウォーター・ドラゴン：ＬＰ　１３００→０

黎：ＷＩＮ
ウォーター・ドラゴン：ＬＯＳＥ

デュエルに勝利し、ソリッド・ヴィジョンがスゥ――、と消えていく。
静かに『ウォーター・ドラゴン』が倒れ、黒いオーラがしぼんでいった。

【ギギギギギギギギギギィ……ッ！】
「あれは！？」

と、しぼんだオーラが一点に集まると、黒い『何か』に変わった。
その『何か』は邪神の気配を濃く放ちながら上空へと去り、どこかへと逃げだし始めた。
既にボロボロで、自然消滅も時間の問題だが、その間に誰かに憑いたりしたら大問題だ。

「逃がすか！」

素早く炎の力を体に流し込み、火の砲弾を放つ。ギシギシと体中が痛いが、気にしない！
砲弾は過たず『何か』に命中し、断末魔も無しに焼却した。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＳＴＯＲＹ１９：水の龍と炎の巨人（後書き）

『ウォータードラゴン』に勝利した黎は、早速長達から新しい力を受け取る。
しかし、帰還した彼の目の前に新たな刺客が登場した。

黎「お前は何者だ！」

？？？「答えが欲しいのならば、私に勝ってみろ！」

フィオ「この人、強い……！」

都「果たして刺客の正体は！　次回、遊戯王ＧＸ　精霊の抱擁『ＳＴＯＲＹ２０：桜色の女性』！　ライディングデュエル、アクセラレーション！」

黎「今回も次回も普通のスタンディングだけどな？」

＜おまけなんです＞

黎「そう言えばこの間、俺に負けたブルー男子が俺に黒魔術をかけようとしたらしい」

フィオ「あぁ、あの三日三晩不眠不休でってヤツ？」

都「け、結果は？」

黎「ものもらいができた。半日で消えたけどな」

フィオ・都『ヘボッ！？』

黎「あいつは『オレの黒魔術の成果だぁー！』って言ってぶっ倒れたが……。まあどう考えても偶然だよな」

フィオ「というか、７２時間かけてものもらいじゃあ割に合わないよ」

都「効率悪……」

ちなみに後で更にヒドい効果のカードも出て来ますが、主人公は立ち向かいます。

それにしても、ああ、感想が欲しい……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3162t/

遊戯王GX　精霊の抱擁

2011年10月12日11時55分発行